

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第390集

山根館跡発掘調査報告書

主要地方道久慈岩泉線改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

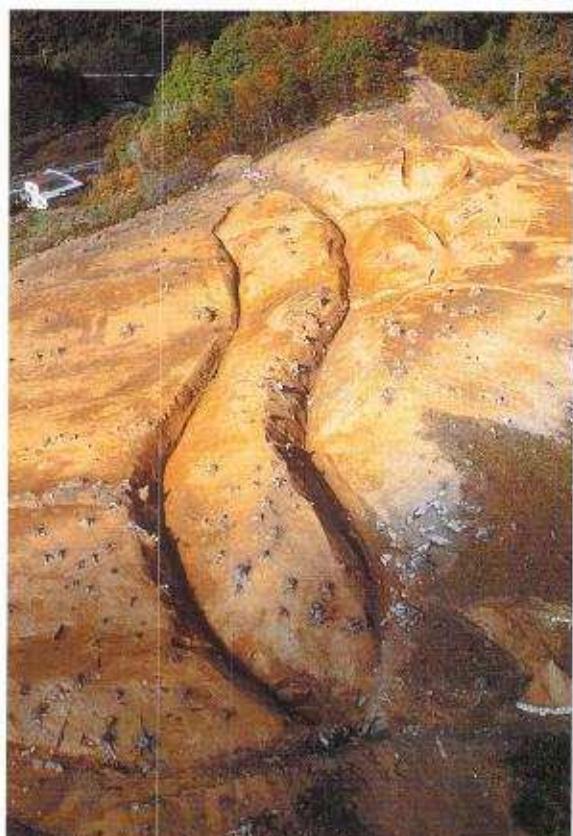
やま ね だて あと

山根館跡発掘調査報告書

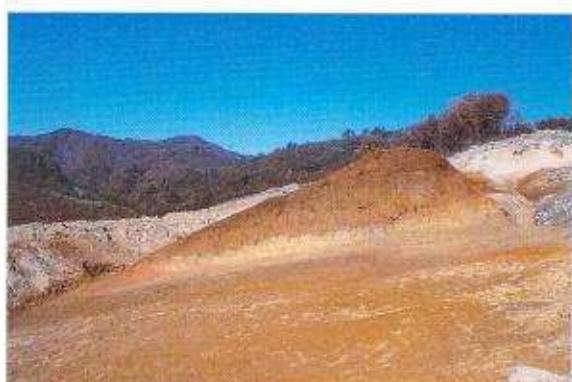
主要地方道久慈岩泉線改良工事関連遺跡発掘調査



二重の空堀と土壘（北から）



二重の空堀と土壘（南から）



土壘 断面



3号堀跡 断面

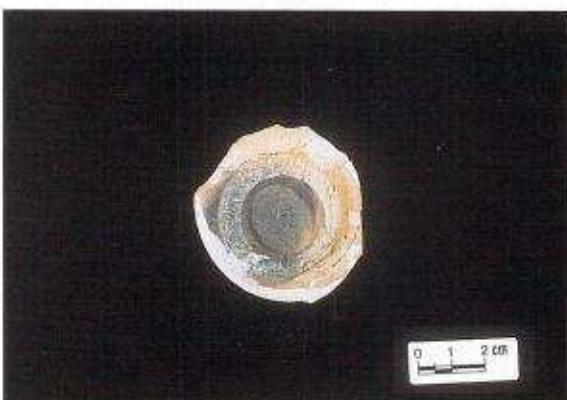
巻頭カラー1：空堀と土壘



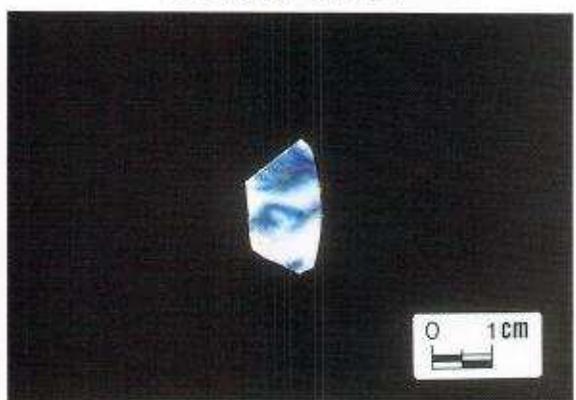
調査前全景（南から）



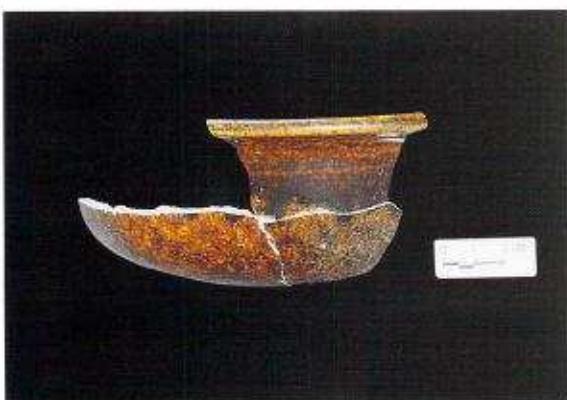
調査後全景（南から）



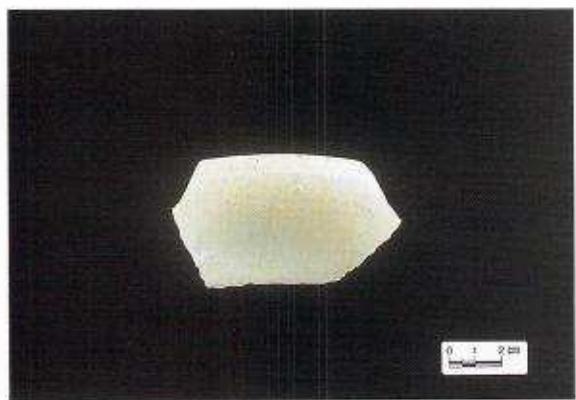
白 磁



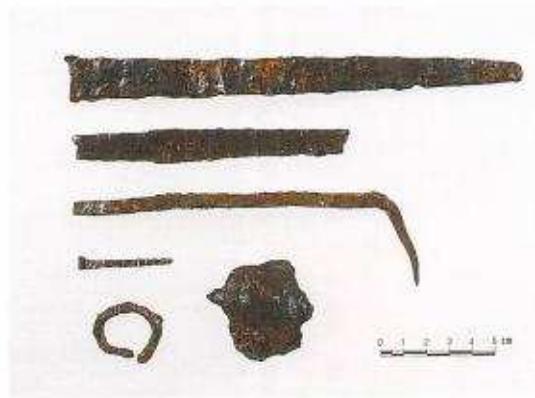
染 付



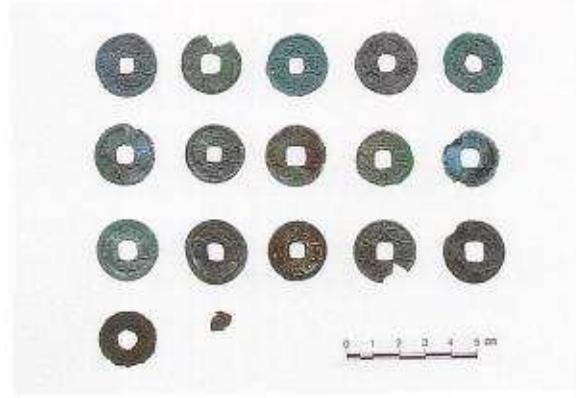
小久慈焼



小久慈焼



金属製品



錢 貨

卷頭カラー 2：館跡全景と出土遺物

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、縄文時代をはじめとする数多くの遺跡や重要な文化財が残されております。これら多くの先人達の創造してきた文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。発掘調査により遺跡が消滅することはまことに惜しいことではあります、その反面それまで闇に包まれていた先人達の営みに光明があたるのも事実であります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的な課題であり、財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道久慈岩泉線改良工事の実施に伴い、平成12年度に発掘調査を行った久慈市山根町字下戸鎖に位置する山根館跡の調査結果をまとめたものであります。

山根館跡は、久慈市を北流する長内川右岸の低地に張り出した丘陵尾根の先端に立地しており、調査の結果、大規模な普請（土木工事）と作事（建築工事）の跡が確認され、中世後期に築城された山城として、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助・御協力を賜りました久慈地方振興局、久慈市教育委員会・山形村教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より謝意を表します。

平成14年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 村上勝治

例 言

1. 本報告書は岩手県久慈市山根町字下戸鎖第6地割97番地11ほかに所在する山根館跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、主要地方道久慈岩泉線改良工事に関わる事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と久慈地方振興局土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
3. 本遺跡の調査成果は、先に、『現地説明会資料』(平成12年10月14日)、『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成12年度分)』(岩文埋第370集)及び平成12年度公開講座・遺跡報告会(平成13年2月11日)において発表しているが、本書の内容が優先するものである。
4. 岩手県遺跡台帳に登録される山根館跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。

遺跡番号 JF68-2228、遺跡略号 YND-00

5. 野外調査の面積・期間・担当者及び室内整理の期間・担当者は次のとおりである。
調査面積：9,000m²、期間：平成12年4月17日～11月2日、担当者：阿部勝則・岩渕 計・江藤 敦。
整理期間：平成12年11月1日～平成13年3月30日、担当者：阿部勝則・江藤 敦。
6. 遺物の鑑定にあたっては次の方々に依頼した。

石材鑑定：花崗岩研究会(代表矢内桂三)。炭化材樹種鑑定：早坂松次郎(岩手県木炭協会)。
鉄製品の分析・保存処理：岩手県立博物館。¹⁴C年代測定：バリノ・サーヴェイ。

動物遺存体の鑑定：佐々木務(岩手県教育委員会)。

7. 基準点測量は有限会社共栄測量に委託した。現況地形測量及び航空写真撮影は株式会社ハイマーテックに委託した。
8. 発掘調査・整理にあたっては次の方々に御協力・御指導をいただいた(順不同・敬称略)。

中村英俊・日下和寿・戸根貴之(文化課)、佐藤嘉広(岩手県立博物館)、千葉啓歲・工藤 仁(久慈市教育委員会)、井上雅孝(滝沢村教育委員会)、東本茂樹(安代町教育委員会)、本澤慎輔・八重樫忠郎(平泉町教育委員会)、室野秀文(盛岡市教育委員会)、中村 裕(浄法寺町教育委員会)、本堂寿一(北上市立博物館)、工藤清泰(浪岡町教育委員会)、小野正敏(国立歴史民俗博物館)、下竹嶽芳(株小久慈焼陶芸園)、佐々木健(岩手県教育委員会文化財保護員)、伊藤光次郎、円鏡節子、伊藤孝一、畠山信一郎。

9. 野外作業は次の方々が従事した。
伊藤正巳、伊藤光子、伊藤義光、高橋茂義、高橋アキ、根井正幸、伊藤 伸、関口一郎、関口 栄、畠山善次郎、遠川晴子、繁田リク、伊藤シモ、伊藤サカエ、堇山 良、畠山ヨシ子、松野下サト、林下里加、天麻美喜子、佐藤裕子、城内るみ子、上神田美幸、下山栄子、伊藤マリ子、浜道美代子、松ヶ瀬みどり、間木平保助、間木平タマ、川原サヌ、蒲田富郎、西米由己、西米ツタ、三上ツギノ、韭沢トミ、清水ツタ、沼袋サカエ、沼袋タキ、沼袋タマエ、土橋キクエ、滝山順子。

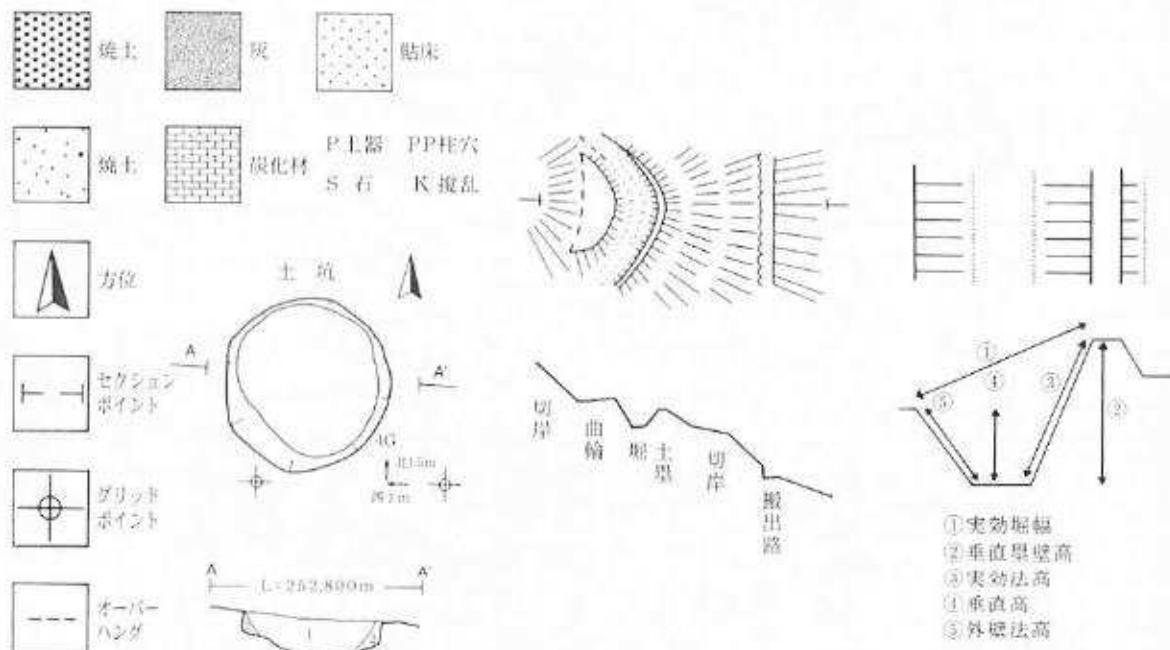
10. 室内整理は次の方々が従事した。

武田和子、松本留美子、千葉圭子。

11. 本報告書はⅠ章 調査に至る経過は久慈地方振興局に原稿を依頼し、Ⅱ～Ⅹ章は阿部勝則が執筆した。Ⅸ章は、各分析の担当者が原稿を執筆した。報告書の編集・校正は阿部が行った。
12. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

凡 例

1. 國版構成は遺構・遺物に分け、遺構図版は遺構の種類毎、遺物図版は各種遺物を出土地点別に掲載した。
2. 掲載図版の縮尺は以下のとおりである。
 - a. 遺構図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。
縦穴建物跡の平・断面図：1/50、炉跡・焼土遺構の平・断面図：1/25、土坑・陥し穴状遺構の平・断面図：1/40、掘立柱建物跡・溝状遺構・炭窯跡の平・断面図：1/60。
 - b. 遺物図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。
土器・陶磁器：1/3、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、金属製品：1/2、錢貨：1/1。
3. 写真図版の縮尺については、遺構写真図版の縮尺は不定とした。遺物写真図版の縮尺は、概ね図版と同じ縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。
4. 遺物図版の掲載番号は出土地点ごとに連番とし、写真図版における掲載番号も図版と同一番号とした。
5. 掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（ ）内数値は残存値、〈 〉内数値は推定値である。
6. 層名は遺跡の基本土層をローマ数字（I・II・III）、遺構内埋土を算用数字（1・2・3）で表した。
7. 土層の色調観察、土器の色調観察は『新版標準土色帖』1990年版（小山正忠・竹原秀雄編・著：1990）に基づいて行った。
8. 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
 - a. 建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岩瀬張」(NK-54-18-8-1)・「端神」(NK-54-18-8-2)。同5万分の1地形図「陵中間」(NK-54-18-8)。
 - b. 久慈市発行の1万分の1「久慈市道路現況図6」
9. 繩張り図における堀跡・土塁の表記と呼称・計測位置は下記に示したとおりとした。
10. 遺構図版・遺物図版において使用した記号・スクリーントーンの凡例は下記に示したとおりである。



凡 例

目 次

序

例言

凡例

本 文

I. 調査に至る経過	1	VI. 近現代の検出遺構	80
II. 遺跡の位置と立地	1	1. 採掘坑	80
1. 遺跡の位置と地理的環境	1	2. 炭窯跡	85
2. 遺跡の立地と周辺の地形・地質	1	3. 集石・配石遺構	87
3. 基本土層	6	4. 柱穴群	87
4. 周辺の遺跡	6	VII. 出土遺物	89
III. 調査・整理の方法	15	1. 土器	89
1. 野外調査	15	2. 土製品	89
2. 室内整理	17	3. 石器	89
IV. 縄文時代の検出遺構	20	4. 陶磁器	89
1. 陥し穴状遺構	20	5. 金属製品	89
V. 中世の検出遺構	28	6. 銭貨	89
1. 山根館跡の概要	28	7. 動物遺存体	90
2. 曲輪	33	8. 炭化材	90
3. 堀跡・土塁	33	VI. まとめ	99
4. 虎口	45	1. 遺構	99
5. 桁立柱建物跡	48	2. 遺物	100
6. 積穴建物跡	48	3. 総括	100
7. 燃土遺構	59	VII. 分析・鑑定	102
8. 土坑	59	1. 放射性炭素年代測定	102
9. 溝状遺構	59	2. 銭貨	105
10. 柱穴群	72	3. 鉄挺	111
抄録			154
職員名簿			155

表

第1表 周辺の遺跡(1)：城館跡	8	第9表 採掘坑観察表	81
第2表 周辺の遺跡(2)：久慈市山根町の遺跡	9	第10表 上器観察表	90
第3表 周辺の文化財		第11表 上製品観察表	90
久慈市山根町の中近世	9	第12表 石器観察表	90
第4表 山根館跡遺構名変更表	15	第13表 陶磁器観察表	90
第5表 陥し穴状遺構観察表	20	第14表 金属製品観察表	91
第6表 竪穴建物跡観察表	52	第15表 錢貨観察表	91
第7表 焼土遺構観察表	60	第16表 動物遺存体観察表	91
第8表 土坑観察表	62		

図 版

第1図 岩手県における遺跡位置図	2	第25図 堀跡(4)	40
第2図 遺跡位置図	3	第26図 堀跡(5)	41
第3図 遺跡周辺の地形図	4	第27図 堀跡(6)	42
第4図 遺跡周辺の地形分類図	5	第28図 堀跡(7)	43
第5図 遺跡周辺の傾斜分類図	5	第29図 堀跡(8)	44
第6図 周辺の遺跡(1)：城館跡	10	第30図 土壘	46
第7図 周辺の遺跡(2)：山根町	11	第31図 虎II	47
第8図 細野館跡の縄張り図	12	第32図 1号掘立柱建物跡	49
第9図 周辺の文化財：山根町の中近世	13	第33図 1号竪穴建物跡	53
第10図 山根館跡周辺の地名	14	第34図 2号竪穴建物跡	54
第11図 山根館跡遺構配置図	19	第35図 3号竪穴建物跡	55
第12図 陥し穴状遺構(1)	23	第36図 4・6号竪穴建物跡	56
第13図 陥し穴状遺構(2)	24	第37図 5号竪穴建物跡	57
第14図 陥し穴状遺構(3)	25	第38図 7号竪穴建物跡	58
第15図 陥し穴状遺構(4)	26	第39図 焼土遺構	61
第16図 陥し穴状遺構(5)	27	第40図 上坑(1)	66
第17図 山根館跡の縄張り図・遺構配置図	29	第41図 土坑(2)	67
第18図 山根館跡周辺の地籍図	30	第42図 土坑(3)	68
第19図 館跡地形断面(1)	31	第43図 上坑(4)	69
第20図 館跡地形断面(2)	32	第44図 上坑(5)	70
第21図 曲輪3西側の整地層	36	第45図 溝状遺構(1)	73
第22図 堀跡(1)	37	第46図 溝状遺構(2)	74
第23図 堀跡(2)	38	第47図 溝状遺構(3)	75
第24図 堀跡(3)	39	第48図 柱穴群(1)	76

第49図 柱穴群(2)	77
第50図 柱穴群(3)	78
第51図 柱穴群(4)	79
第52図 採掘坑(1)	82
第53図 採掘坑(2)	83
第54図 採掘坑(3)	84
第55図 1号炭窯跡・2号炭窯跡	86
第56図 集石・配石遺構	88
第57図 遺構内出土遺物集成図	92
第58図 土器・土製品・石器	93
第59図 陶磁器・窓痕	94
第60図 金属製品(鉄製品・銅製品)	95
第61図 銭貨(1)	96
第62図 銭貨(2)	97
第63図 銭貨(3)	98
附 図 山根館跡現況地形図	

写 真 図 版

卷頭カラー1 空堀と土塁	
卷頭カラー2 館跡全景と出土遺物	
写真図版1 調査区全景	119
写真図版2 調査区近景	120
写真図版3 館跡と周辺地域	121
写真図版4 調査前現況	122
写真図版5 跌し穴状遺構(1)	123
写真図版6 跌し穴状遺構(2)	124
写真図版7 跌し穴状遺構(3)	125
写真図版8 曲輪・土塁	126
写真図版9 虎口	127
写真図版10 堀跡(1)	128
写真図版11 堀跡(2)	129
写真図版12 堀跡(3)	130
写真図版13 堀跡(4)	131
写真図版14 1号獨立柱建物跡 遺物出土状況	132
写真図版15 1号竪穴建物跡	133
写真図版16 2号竪穴建物跡	134
写真図版17 3号・5号竪穴建物跡	135
写真図版18 4号・6号竪穴建物跡	136
写真図版19 7号竪穴建物跡	137
写真図版20 焼土遺構(1)	138
写真図版21 焼土遺構(2)	139
写真図版22 土坑(1)	140
写真図版23 土坑(2)	141
写真図版24 土坑(3)	142
写真図版25 溝状遺構	143
写真図版26 採掘坑(1)	144
写真図版27 採掘坑(2)	145
写真図版28 炭窯跡	146
写真図版29 集石・配石遺構・柱穴群	147
写真図版30 上器・土製品・石器	148
写真図版31 陶磁器・窓痕	149
写真図版32 金属製品(鉄製品・銅製品)	150
写真図版33 銭貨(1)	151
写真図版34 銭貨(2)	152
写真図版35 銭貨(3)	153

I. 調査に至る経過

山根館跡は、主要地方道久慈岩泉線、緊急地方道整備事業の実施に伴い、その事業区域内に存在することから、発掘調査を実施することとなったものである。

本業務は、久慈市と岩泉町を結ぶ重要路線である。しかし、現況の道路状況は幅員4～5m程度であり、かつバス路線であるため車両のすれ違い等に大きく支障を来たしている陥路区間をバイパスにより解消し、また、その効果として一般国道45号線を補完する路線としての機能を持たせるものであり、平成8年度より業務を執行中である。

本地区は、岩手県教育委員会が既に山根館跡として確認しているため、岩手県教育委員会は、久慈地方振興局と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とした。

II. 遺跡の位置と立地

1. 遺跡の位置と地理的環境（第1・2図）

本遺跡の所在する久慈市は、岩手県沿岸北部に位置し、北は岩手県種市町と大野村、東は山形村、南は野田村、岩泉町と接し、東は太平洋を望む面積約327.62km²、人口約36,853人の県北沿岸地域における拠点的な街として、「海洋にひらかれた都市」づくりを目指している。日本を代表する琥珀の産地として知られており、久慈琥珀博物館では琥珀原石・装飾品や坑道跡などが見学できる。また、小久慈焼や小袖の「北限の海女」なども全国的に知られ、「海女と焼物と琥珀」が市の代表的な観光となっている（註1）。

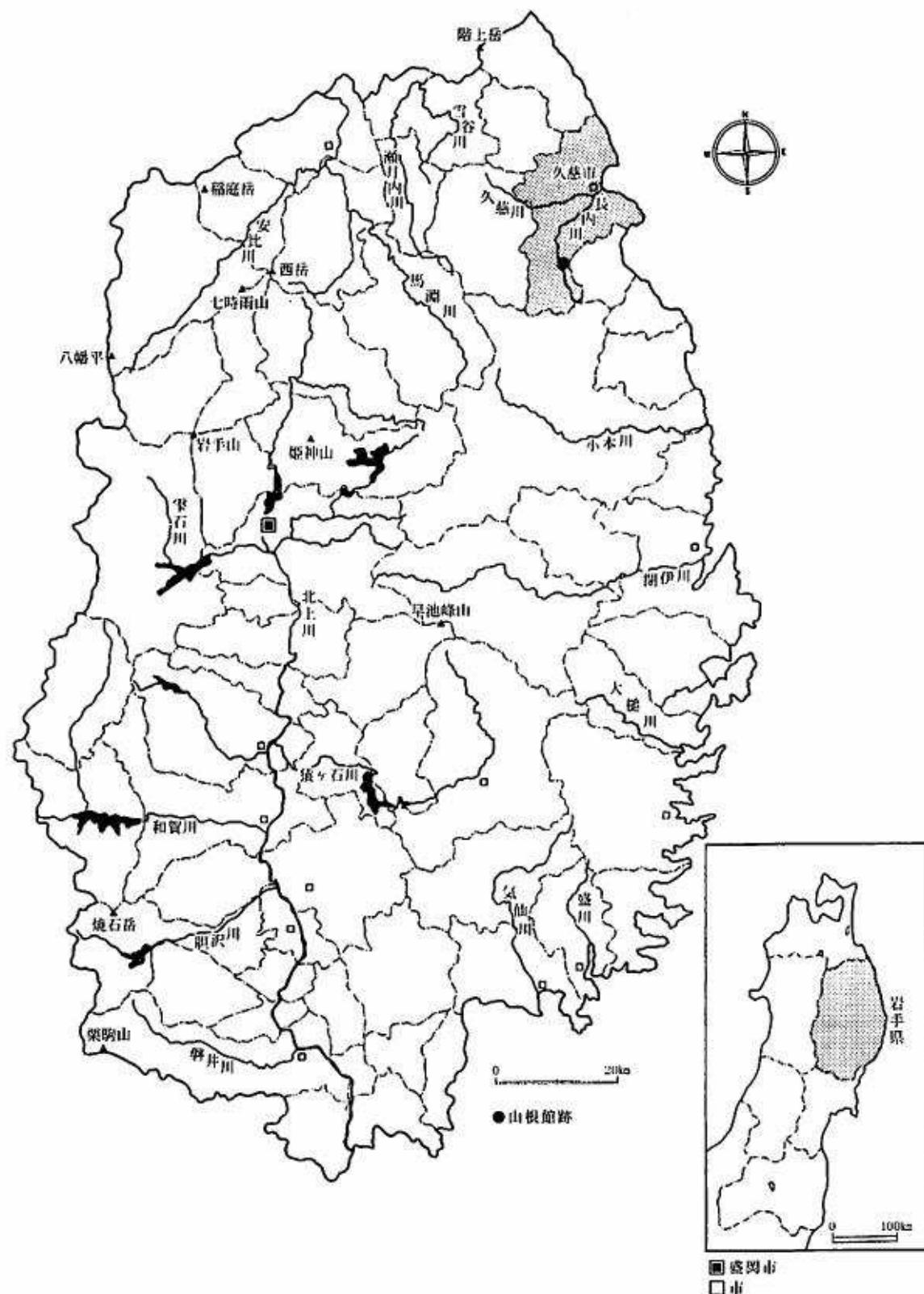
山根館跡は、久慈市山根町字下戸領第6地割97番地11他に所在し、久慈市の市街地から南西方向に約15km、下戸領集落内にある山根中学校の北約200mに位置する。同地点は、北緯40度5分3秒、東經141度42分41秒付近に位置し、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岩瀬張」「端神」、同5万分の1地形図「陸中関」の図幅に属する。

2. 遺跡の立地と周辺の地形・地質（第3・4・5図）

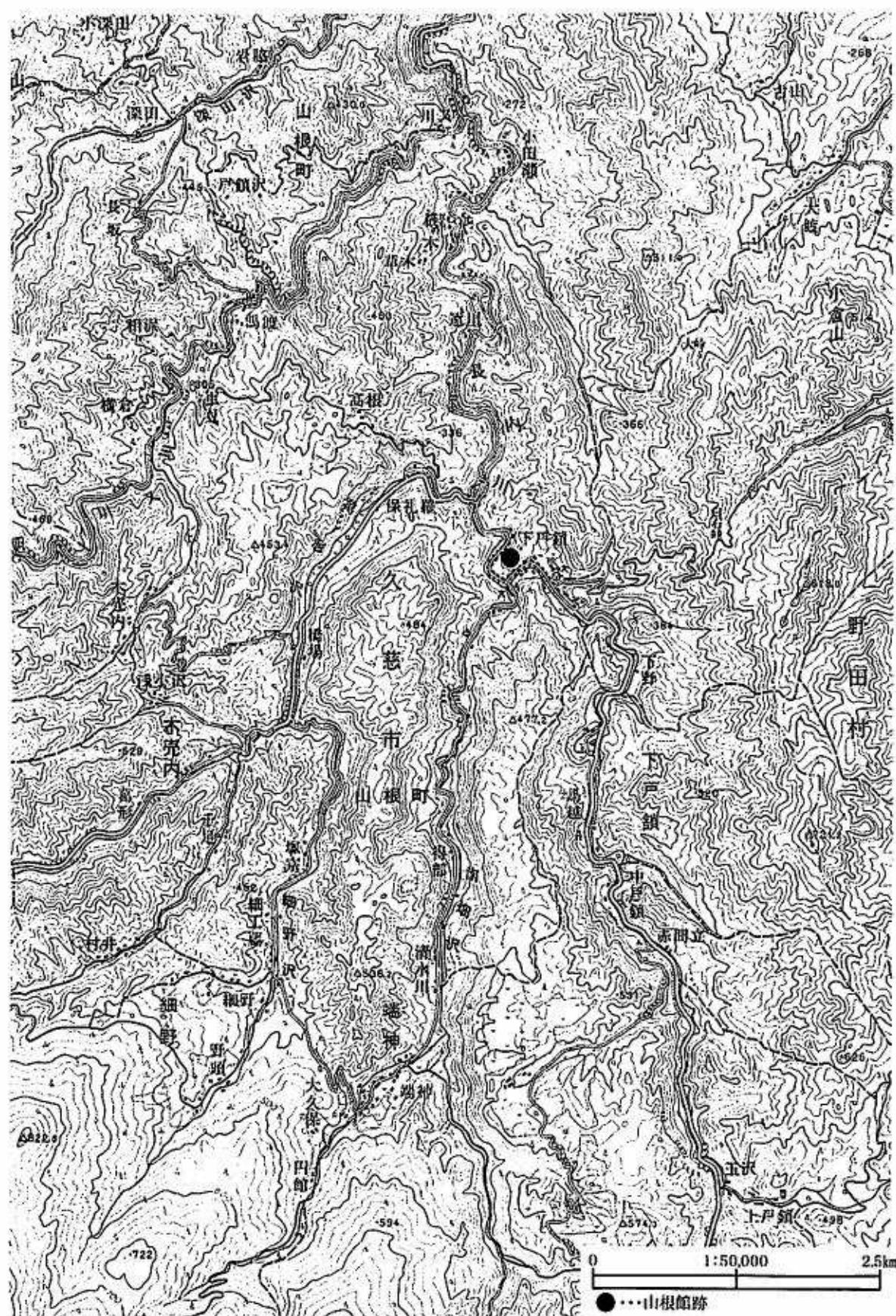
久慈市は、岩手県沿岸北部及び北上山地の北東部に位置し、高峰が重疊して地形が複雑かつ峻険で、平坦地は少ない。太平洋に面する市域の東側を除いて概ね山地丘陵に覆われており、市域の約80%が山林・原野である。それらの山地に源を発して久慈湾に注ぐ久慈川・長内川・夏井川などの河川流域と下流域に開けた低地、野田湾に注ぐ宇部川流域にわずかに低地が広がり、耕地や居住域として利用されている。耕地面積は約8%で、そのうち水田の割合は約30%であり、典型的な山間畑作地帯となっている。

山根町は、久慈市域の南西側にあり、北上山地の北東端に位置する。山根館跡は、久慈市域を蛇行しながら北流する長内川右岸で、南畑沢が合流する地点にあり、長内川によって形成された低地に向かって南西側に張り出す丘陵尾根の先端に立地している。遺跡の所在地の地形区分は小起伏山地に属し、表層地質は石灰岩（固結堆積物）である。傾斜率は15°以上20°未満で、長内川に面する南側を除いては、周囲（20°以上30°未満）より緩い傾斜となっている（註2）。標高は約240～270mで、下を流れる長内川との比高は約40～70mある。遺跡の現況は山林で、かつて（戦後）は畠地として利用されていた時期がある。現在は、伐採林の運搬のために使用された林道が至るところに走っている。

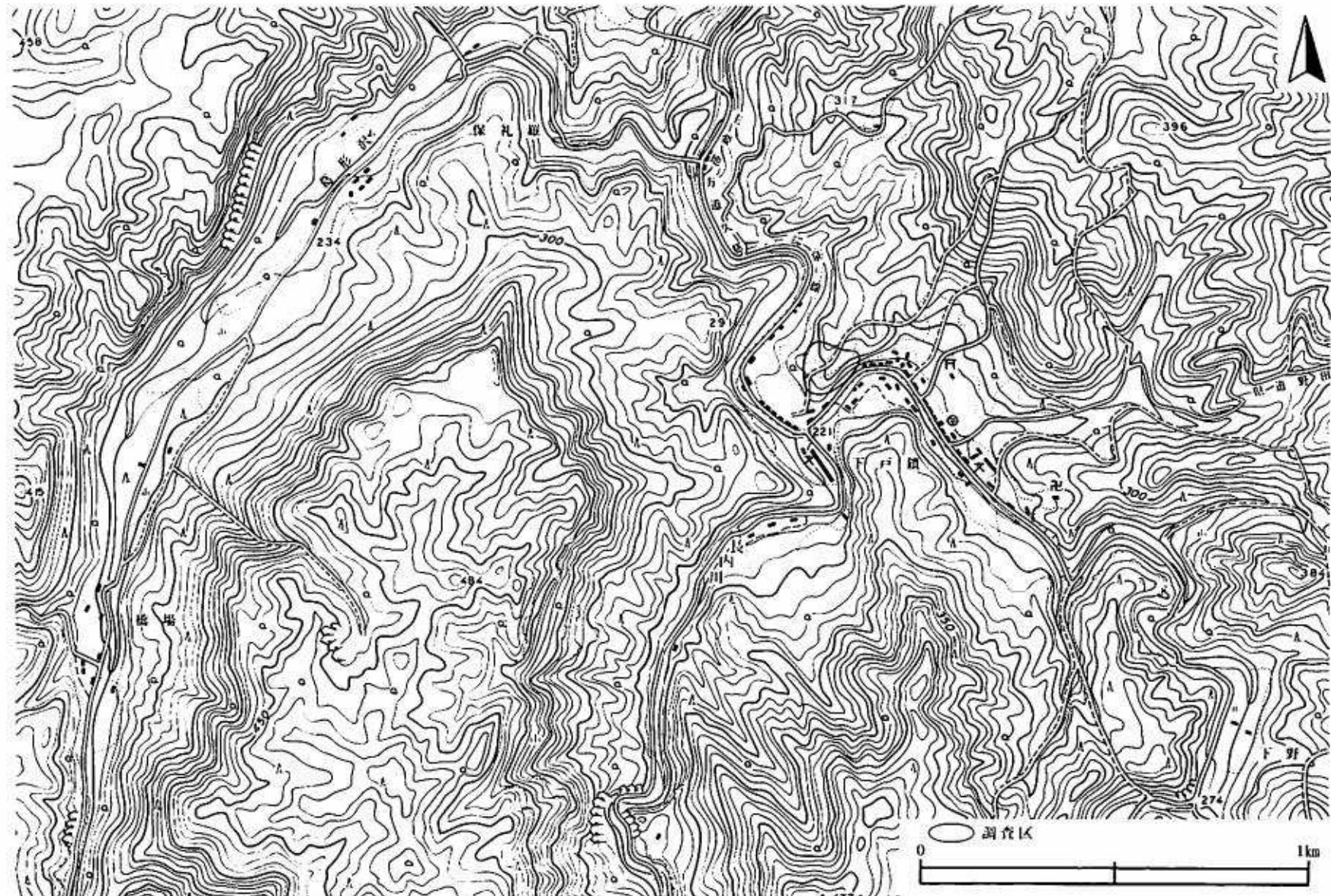
館跡の範囲は、東西約200m、南北約150m、面積約30,000m²に及ぶ。今回の調査区は、主要地方道久慈岩泉線の改良工事に伴う建設道路路線部分で、東西約100m、南北約90m、面積約9,000m²である。



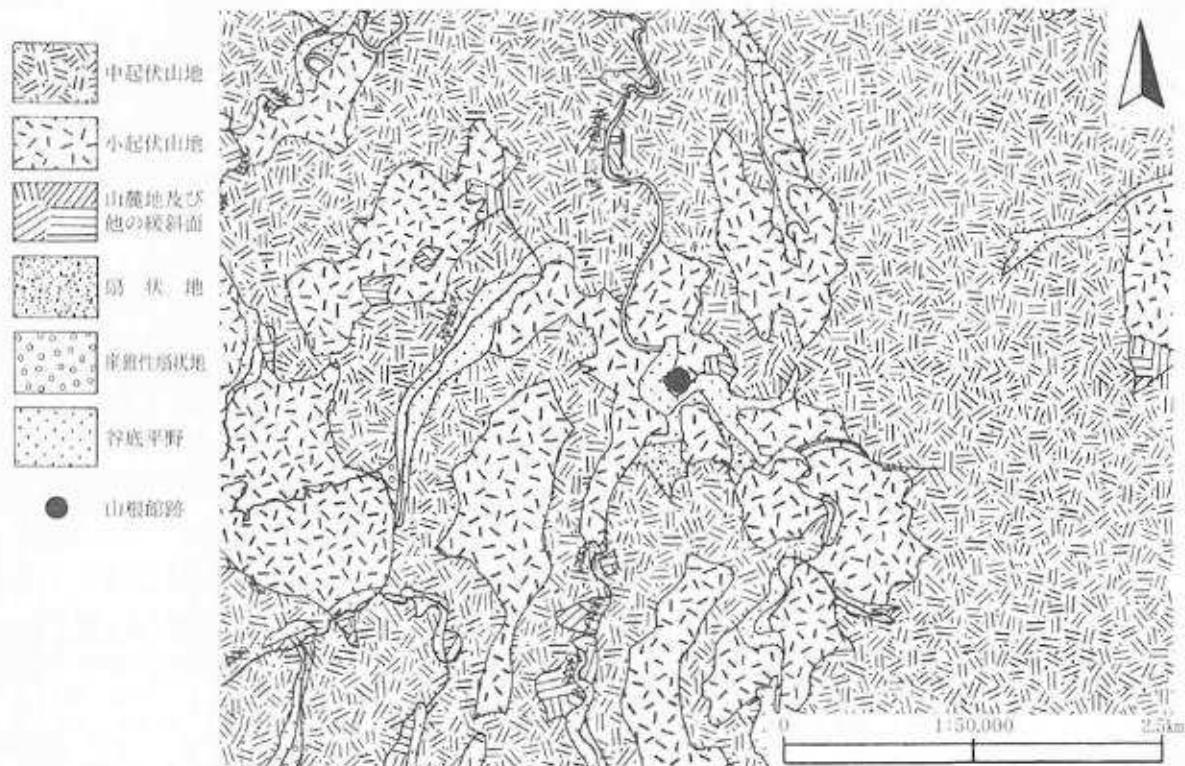
第1図 岩手県における遺跡位置図



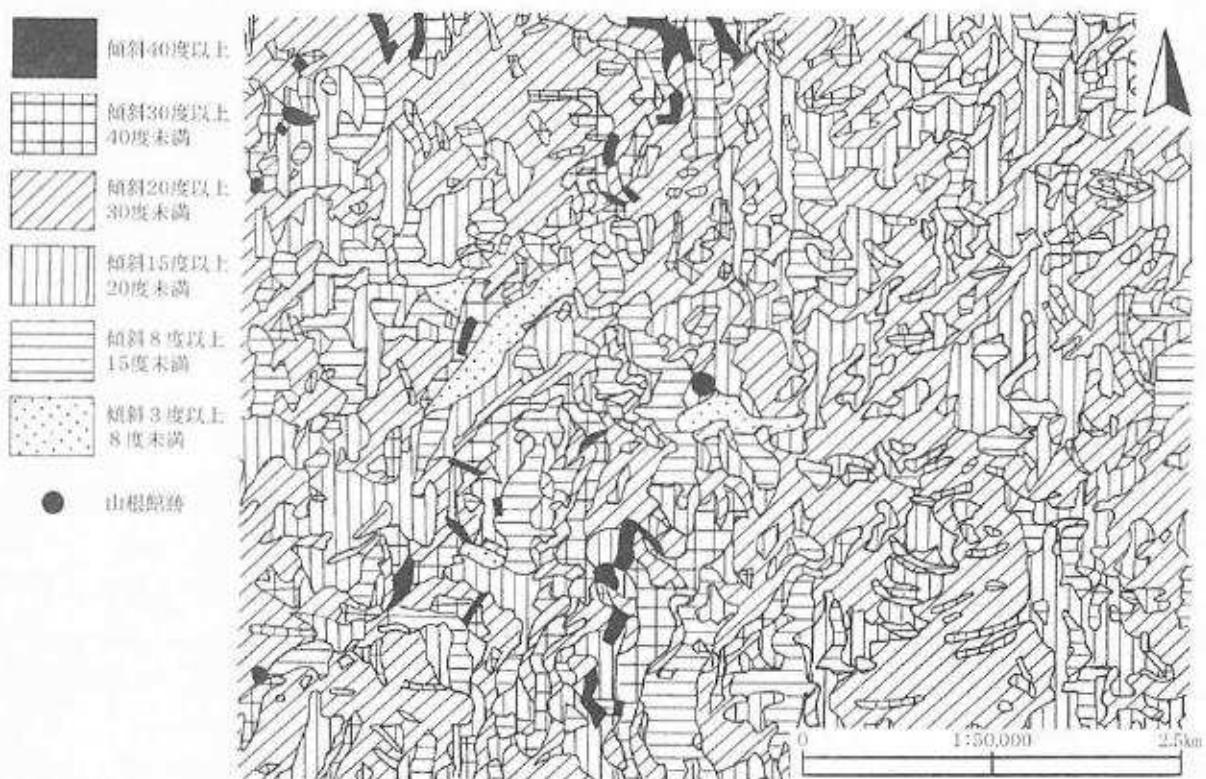
第2図 遺跡位置図



第3図 追跡周辺の地形図



第4図 遺跡周辺の地形分類図



第5図 遺跡周辺の傾斜分類図

3. 基本土層

調査区が広範囲であることから数地点で基本土層の確認を行った。地点によっては後世の改変を受けており、堆積状況に若干の差がみられるが、基盤が石灰岩層であることは共通している。

I 層 10YR 2/3 黒褐色 層厚10~30cm 締まり疎 現表土で耕作土である。

II a 層 10YR 3/4 暗褐色と10YR 5/6 黄褐色の混土 層厚30~50cm 締まりやや密 整地層で曲輪内に部分的に残る。

II b 層 10YR 2/1 黒 色 層厚0~10cm 締まり中 旧表土で曲輪内に部分的に残る。

III 層 10YR 5/6 黄褐色 層厚10~30cm 締まり密 地山である。

IV 層 10BG 4/1 暗青灰色 層厚10~40cm 締まり密 基盤に続く石灰岩の風化礫層である。

V 層 10BG 4/1 暗青灰色 層厚不明 石灰岩の礫層で基盤である。

遺跡の現況は山林で、かつて（戦後）は畑地として利用された時期がある。調査区は、大きく西側の城域外と東側の城域内に分かれるが、城域外はIII層まで削平されていた。城域内では、空堀・土塁や曲輪を現況で確認することができた。ただし、旧表土は確認できなかったところが多く、III・IV層が露出していたことから、後世に削平を受けているものと判断された。当時の生活面である旧表土層は、曲輪内の4Fグリッド付近で確認されたのみである。

4. 周辺の遺跡（第6・7・8・9・10図）

平成10年4月の時点で、久慈市では184遺跡、野田村では94遺跡が確認されている（註3）。

周辺地域の遺跡の概要については、『平沢I遺跡発掘調査報告書』（岩文埋第264集）・『大芦I遺跡発掘調査報告書』（岩文埋第306集）に詳しいので、参照していただきたい。ここでは、本遺跡に関わって、(1)久慈・野田における城館跡、(2)山根町の遺跡、(3)山根町の歴史、(4)九戸地域における歴史的環境について概観し、本報告の参考としたい。

(1) 久慈・野田における城館跡（第6図）

久慈市・野田村では、現在21の城館跡が確認されている。久慈市内では、夏井城跡・館の平館跡・大久保館跡・鼻館跡・鳥谷館跡・閉伊ノ口館跡・新城館跡・左岸館跡・高館跡・小久慈館跡・館の台館跡・久慈城跡・三日館跡・宇部館跡・山根館跡・細野館跡の16の館跡がある。これらの館跡はその立地と分布からみると大きく三つに大別できる。ひとつは、久慈湾及び現久慈市街地の周辺に立地している13の館跡で、いずれも低地より一段を高い面にあって眺望が利き、河川流域にあって、水系あるいは旧道を抑えていたものと思われる。二つめは宇部川上流域にある宇部城跡で、十府ヶ浦及び周辺の低地より一段高い面にあり、周囲に眺望の利く地点に立地している。そして、奥深い山中でありながら、交通の要衝に築かれたと考えられる山根町の山根館跡と細野館跡である。

野田村では、新館跡・伏津館跡・野田城跡・古館跡・玉川館跡の5つの館跡が確認されている。いずれも港湾沿いにあり、かつ野田湾に向かって流れる河川の下流域にあって眺望の利く、高台に立地している。

これらの館跡の築城主や築城時期及び使用年代については、詳らかでない部分が多いが、豊臣秀吉の諸城破却令（天正18年7月28日付豊臣秀吉朱印状・天正18年7月27日付「南部大膳太夫分国之内諸城破却共書上之事」）により、南部信直は領内10郡のうち、12城を存地し、36城を破却している。当地域（久慈周辺）では、種市城（久慈孫三郎分）・久慈城（代官久慈修理）・野田城（一戸掃部助持分）いずれも「山城」を破却している。久慈城と野田城が久慈・野田それぞれの地域において、中心的な館跡（常の居城）とし

ての役割を果たしていたものと思われる。

(2) 山根町の遺跡（第7・8図）

山根町では、現在37遺跡が確認されている（註4）。時代別では、縄文時代～古代の遺跡27、中世の城館跡2、鉄山6、塚跡2である。山根町は、南西にある遠島山（1,263m）を頂点として、北東方向に広がる山地形の裾野であり、低地は長内川及びその支流の河川流域に僅かに広がるだけである。そのため立地条件から大規模な集落遺跡の存在は想定し難い。その中にあって、現下戸鎖にある下戸鎖I遺跡や端神にある端神遺跡は、推定される遺跡範囲も広く、比較的大きな集落遺跡の可能性がある。

城館跡には山根館跡と細野館跡がある。山根館跡は報告遺跡であるが、細野館跡については、第8図に縦張り図を示した。北流する細野沢左岸の丘陵に立地し、標高370～378mで、現況は山林である。南北に長い丘陵尾根を利用し、南北約140m、東西約60mの範囲に及ぶ小規模な館跡である。頂部にある大きな曲輪を空堀と土塁で囲んでいる。曲輪は大きく南側の高位と北側の低位に分けられる。北側は二重の空堀と土塁、西側は一重の空堀と土塁に加えて堅堀を設けている。東側は急斜面の自然地形に帯曲輪を設けて、防御としている。現在、丘陵頂部には愛宕山神社があり、館跡の東側に登り口がある。

鉄山6は、近世以降のものである。塚2は、塩の道と呼ばれる野田街道中にある一里塚で、山根と野田の分水嶺となっている白石峠付近にあって道の左右に現存する西塚・東塚である。

なお、山根館跡のある山根町ではこれまで発掘調査は行われておらず、今回の山根館跡の調査が当地域における初めての発掘調査となる。

(3) 山根町の歴史（第9・10図）

中世に遡る確かな文献資料は確認できていない。近世には、上戸鎖・下戸鎖・端神・木壳内・細野・深田の六村の名が見え、宇都村とともに南部藩野田通に属した。他の久慈市域は八戸藩に属している。現在の山根町は、上記の6ヶ村が明治22年（1889）の町村制施行時に合併して山根村となったのを発祥としており、昭和29年（1954）他の2町4村と合併して久慈市に編入され、現在に至っている（註5）。

館跡以外に、中世に遡る資料としては、深田に現存する「宝篋印塔2基付相輪2基」があり、室町時代末期のものとされている。また、下戸鎖の熊野神社にある樟は樹齢710年前後とされ、鎌倉時代にまで遡るものとされている（註6）。

近世の下戸鎖村は、「高廿三石斗余、民戸三十六軒、此内二軒多茂木、二軒竹倉」（『邦内郷村誌』）である。また、各所に野田街道の宿駅に関する資料が残っている。奥州街道中の沼宮内から分岐して、八戸藩領の関（山形村）、大川口（久慈市）を経て野田に至る「久慈街道」から、関で分岐して下戸鎖経由で野田に向かう沼宮内廻野田街道（野田・白石峠・下戸鎖・山形村の関・平庭峠・葛巻・沼宮内・盛岡）における郷村として、下戸鎖村は、木壳内村とともに「駅場」「馬廬所」として記録が残されており、内陸と沿岸を結んで野田塙を運んだ「塙の道」の中継点であった（註7）。現在においても下戸鎖は、野田・山形線（県道29号線）と久慈・岩泉線（県道7号線）の東西道・南北道の交差する交通の要衝としての位置を占めている。このことは、古くからの同地点における地理的な位置、歴史的な役割を考えるうえで重要である。

(4) 久戸地域における歴史的環境

久慈郡・糠部郡は、鎌倉時代には鎌倉御家人の久慈氏の支配地であった。南北朝時代になり、陸奥国司として北畠頼家が赴任し、八戸南部守行が国代になると、糠部及びその周辺地域は、南部一族の支配するところとなった。室町時代以降、三戸南部の力が大きくなり、当地域でも南部一族である種市氏・久慈氏・三上氏・一戸南部の分族である野田氏が、それぞれ種市城・久慈城・野田城・普代城を居城とし、周辺

地域を支配していたようである。

戦国時代末に勃発した三戸南部一族の領主権をめぐる争いは、南部信直と九戸政実の確執から旧南部領における一族を二分する争いに発展した。九戸政実の乱では、当地域でも敵味方に分かれて争っている。九戸の乱の後、南部信直は、秀吉による諸城破却令により、領内の城館のうち10郡に12城を残し、残る36城を廃棄した。当地域では、前述した年来の一族の居城であった種市城・久慈城・野田城が廃棄されている。

註

- (1) 岩手日報社 2000「久慈市」「岩手年鑑 平成12年度版」。
- (2) 岩手県企画部北上山系開拓調査室 1972「北上山系開拓地域 土地分類調査 陸中閑」。
- (3) 岩手県教育委員会 2000「久慈市」「野田村」「H12.4遺跡台帳」。
- (4) 岩手県教育委員会 2000.久慈市教育委員会1997、同1999。
- (5) 「角川日本地名大辞典」3 岩手県 1985。
- (6) 大矢邦宣・青原亀悦監修1994「久慈市の指定文化財」久慈市教育委員会。
- (8) 他に野田と盛岡を結ぶ街道として「本野田街道」(野田・上戸町・安家・門・早坂峠・蔵川・盛岡)がある。岩手県教育委員会1982。

参考文献

- 岩手県教育委員会 2000「久慈市」「野田村」「H12.4遺跡台帳」。
岩手日報社 2000「久慈市」「岩手年鑑 平成12年度版」。
岩手県教育委員会 1982「岩手県『歴史の道』調査報告久慈・野田街道」岩手県文化財調査報告書第77集。
岩手県教育委員会 1986「岩手県中世城館分布調査報告書」岩手県文化財調査報告書第82集。
岩手県企画部北上山系開拓調査室 1972「北上山系開拓地域 土地分類調査 陸中閑」。
久慈市教育委員会 1997「久慈市遺跡地図」久慈市埋蔵文化財調査報告書第24集。
久慈市教育委員会 1990~1996「久慈市遺跡分布調査報告書Ⅰ~Ⅵ」久慈市埋蔵文化財調査報告書
第12~15・17・19・20集。
「角川日本地名大辞典」3 岩手県 1985。
大矢邦宣・青原亀悦監修 1994「久慈市の指定文化財」久慈市教育委員会。
山根六郷研究会調査・編集発行 1994「山根六郷自然・文化景観等調査報告書『山根風土記』(2001改訂)」。
御岩手県文化振興事業團理蔵文化財センター 1992「鼻頭遺跡発掘調査報告書」岩文理第171集。
御岩手県文化振興事業團理蔵文化財センター 1997「平沢1遺跡発掘調査報告書」岩文理第264集。
御岩手県文化振興事業團理蔵文化財センター 1999「大芦1遺跡発掘調査報告書」岩文理第306集。

第1表 周辺の遺跡(1) 城館跡

No	道路コード	市町村	道路名	種別	時代	標高(m)	別称	館主	遺構・遺物	所在地
1	JG10-0092	久慈市	鳥谷鉢路	城館跡	中世	30~95		鳥谷大炊	空堀、郭	夏井町字鳥谷3
2	JG10-2103	久慈市	鶴岡鉢路	城館跡	中世・近世	35	H12中閑	久慈氏	堀、里郭	夏井町字鶴岡113-32
3	JG10-2010	久慈市	大久保鉢路	城館跡	中世・近世	30		大久保氏	門塀	夏井町字大久保5-67-7
4	JG10-2182	久慈市	鼻頭跡	城館跡・集落跡	縄文・古代・中世・近代	200~310			里郭、縄文土器、土師器、陶器、塙	夏井町字鳥谷
5	JF19-2222	久慈市	夏井鉢路	城館跡	中世~近世	50		夏井勘解由	空堀、里郭	夏井町字夏井2-43
6	JF19-2278	久慈市	脇の平鉢路	城館跡	中世・近世	40~90		大崎館	空堀、土塁、里郭、縄文土器、土師器、陶器、塙	夏井町字平坂1-105-3
7	JG20-0096	久慈市	新城鉢路	城館跡	縄文・中世・近世	100~110		夏井氏又は大崎氏	空堀、郭、帯郭、縄文土器(前・中・後期)	夏井町字大崎3
8	JG20-1123	久慈市	左門鉢路	城館跡	中世・近世	50~70		久慈守備前守居裏	三重塁、土塁、郭	国道13-1-53
9	JF28-2258	久慈市	久慈城跡	城館跡	中世	81	新町館・八日館	久慈氏	空堀、主郭、借郭、馬廻跡他	大川町25
10	JF39-1010	久慈市	三日角鉢路	城館跡	中世	90			空堀、土塁、單郭	大川町5
11	JF29-2371	久慈市	高畠鉢路	城館跡	中世	85		高畠四幡	空堀、土塁	八日町4
12	JF39-2163	久慈市	小久慈鉢路	城館跡・集落跡	縄文・古代・中世・近代	50~100	H12中閑	日下平猪 南部十郎	空堀、土塁、複郭、縄文土器(晚期)、土師器、中世陶器	小久慈町11
13	JF39-2285	久慈市	館の台鉢路	城館跡	縄文・中世・近世	40~50		館條ノ守	空堀、土塁、複郭、縄文土器	小久慈町50
14	JF68-2228	久慈市	山根鉢路	城館跡	縄文・中世・近世	32~270		伊藤館 伊藤氏	空堀、土塁、主郭、縄文土器(前・中・後期)	山根町字下戸越6
15	JF88-0017	久慈市	細野鉢路	城館跡	中世	350~355		八屋氏	空堀、土塁、主郭	山根町字細野2
16	JG50-0028	久慈市	宇都鉢路	城館跡	中世・近世	40~60	八幡館	野田氏	二重堀切、土塁、单郭、腰郭	宇都町3
17	JG50-2327	野田村	新館路	城館跡	中世	43	野田城?	野田氏	空堀、里郭	大字野田字城内
18	JG50-2353	野田村	伏津鉢路	城館跡	中世	55		伏津新九郎忠信	空堀、土塁、二郭	大字野田字伏津4
19	JG50-2366	野田村	野田城跡	城館跡	中世	10~30			郭	大字野田字伏津4
20	JG61-0033	野田村	古館路	城館跡	中世	30	野田城?	小吉ヶ森正吉祖 野田義茂守義義	空堀	大字野田字三日市場
21	JG71-0112	野田村	玉川鉢路	城館跡・集落跡	縄文・中世	40~60		玉川河内秀定	空堀、縄文土器(?)	大字玉川字船山

参考文献
・岩手県教育委員会 2000.4 「H12遺跡台帳」
・岩手県教育委員会 1986.3 「岩手県中世城跡分布調査報告書」 岩手県文化財調査報告書第82集
・久慈市教育委員会 1997.3 「久慈市遺跡地図」 久慈市埋蔵文化財調査報告書第24集

第2表 周辺の遺跡(2):久慈市山根町の遺跡

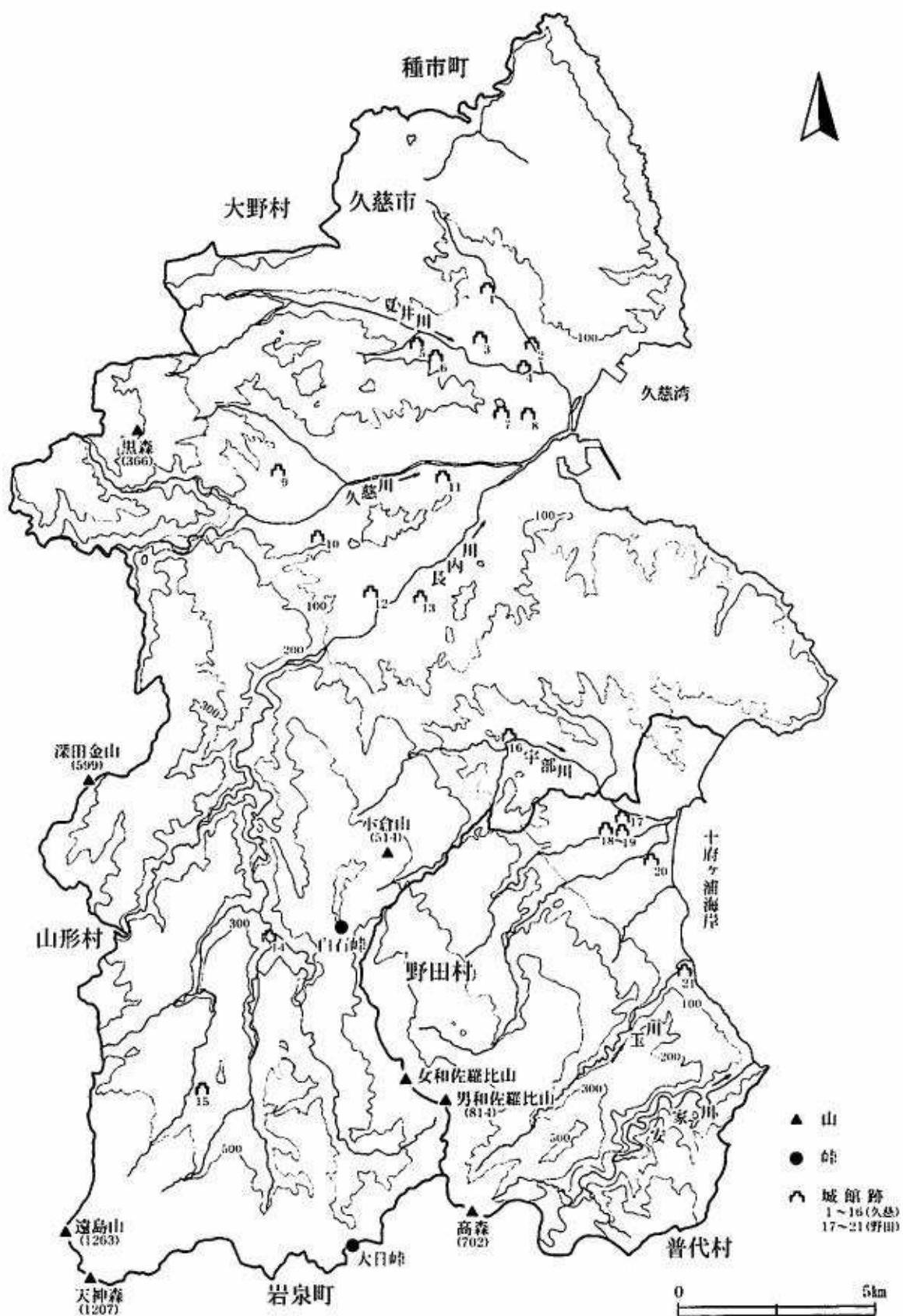
No	遺跡コード	市町村	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物・備考	所在地
1	JF58-0091	久慈市	岩駒遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器	山根町字深田6
2	JF57-1337	久慈市	深田Ⅰ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前期)	山根町字深田6
3	JF57-1345	久慈市	深田Ⅱ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前期)	山根町字深田5
4	JF57-2312	久慈市	長坂Ⅰ遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器、石株	山根町字深田6
5	JF57-2322	久慈市	長坂Ⅱ遺跡	散布地	古代	土師器	山根町字深田4
6	JF57-2263	久慈市	上平鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町字深田6
7	JF57-1338	久慈市	下平鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町字深田6
8	JF67-0393	久慈市	横倉Ⅰ遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器	山根町字深田1
9	JF67-1314	久慈市	横倉Ⅱ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前・後期)	山根町字深田1
10	JF58-2231	久慈市	たもの木遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器、石槍	山根町字深田12
11	JF68-0166	久慈市	高根遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、土師器	山根町字深田14
12	JF68-1156	久慈市	保礼羅Ⅰ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前期)	山根町字木壳内10
13	JF68-1173	久慈市	保礼羅Ⅱ遺跡	散布地	縄文、弥生	縄文土器(前・後・晚期)、弥生	山根町字木壳内10
14	JF68-2087	久慈市	橋場遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	山根町字木壳内9
15	JF78-0084	久慈市	年越遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	山根町字木壳内3
16	JF78-1080	久慈市	千足遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	山根町字木壳内3
17	JF78-2035	久慈市	細工藤遺跡	散布地	縄文	縄文土器	山根町字細野4
18	JF88-0017	久慈市	細野館跡	城館跡	中世～近世	空堀、土塁、主郭	山根町字細野2
19	JF88-0081	久慈市	野煩Ⅰ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石瓶、石斧	山根町字細野1
20	JF87-1317	久慈市	野煩Ⅱ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晚期)	山根町字細野1-93
21	JF68-2228	久慈市	山根館跡	城館跡	縄文、中世～近世	空堀、土塁、主郭、櫓郭、縄文土器(前・中・後期)	山根町字下戸鏡6
22	JF68-2236	久慈市	下戸鏡Ⅰ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後・晚期)	山根町字下戸鏡
23	JF68-2238	久慈市	下戸鏡Ⅱ遺跡	散布地	縄文	縄文土器(晚期)	山根町字下戸鏡
24	JF78-2270	久慈市	清水川遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)	山根町字端神5
25	JF88-1126	久慈市	端神遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器(後期)、石瓶、石斧、石臼、土師器	山根町字端神2-65
26	JF88-0089	久慈市	大久保鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町字端神1
27	JF88-1110	久慈市	大久保遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	山根町字端神1
28	JF88-1015	久慈市	円鏡遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)	山根町字端神1
29	JF78-0382	久慈市	下馬越遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石斧、石器	山根町字下戸鏡3
30	JF78-1374	久慈市	上馬越遺跡	散布地	縄文	縄文土器(前期)	山根町字下戸鏡2
31	JF79-2028	久慈市	赤馬立遺跡	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石斧	山根町字上戸鏡2
32	JF89-1163	久慈市	上戸鏡遺跡	散布地	縄文	縄文土器	山根町字上戸鏡1
33	JF89-1176	久慈市	船沢鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町字上戸鏡1
34	JF79-2133	久慈市	木古地鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町国育林
35	JF79-0070	久慈市	鹿ごめ鉄山	製鉄跡	近世～近代	鉄滓	山根町国育林
36	JF69-2066	久慈市	白石塚一里塚東塚	一里塚	近世	塚、野田街道	山根町国育林
37	JF69-2066	久慈市	白石塚一里塚西塚	一里塚	近世	塚、野田街道	山根町国育林

参考文献
 ・岩手県教育委員会 2000.4 「日立遺跡台帳」
 ・岩手県教育委員会 1982.3 岩手県「歴史の道」調査報告 「久慈・野田街道」 岩手県文化財調査報告書第77集
 ・久慈市教育委員会 1997.3 「久慈市遺跡地図」 久慈市埋蔵文化財調査報告書第24集

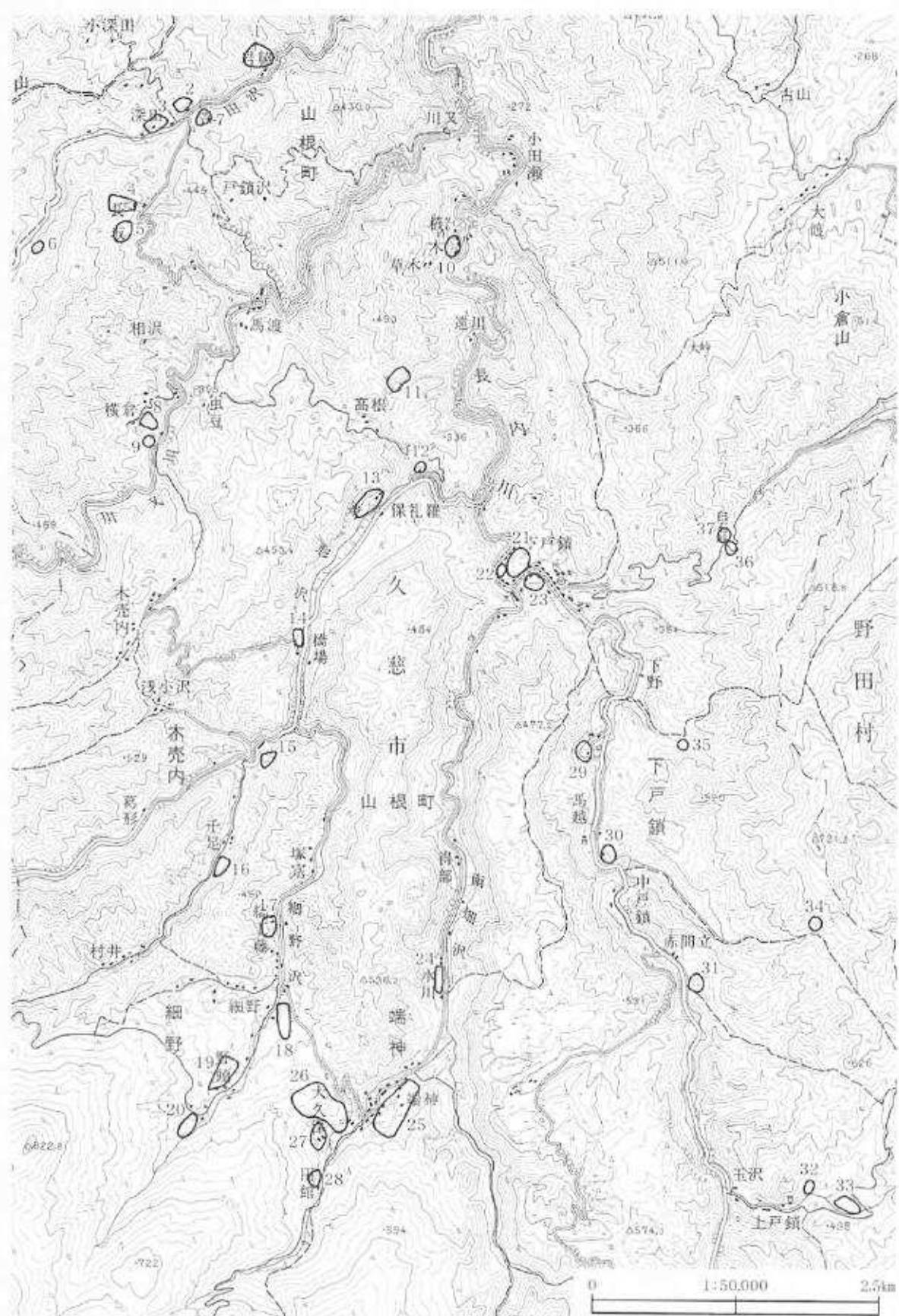
第3表 周辺の文化財:久慈市山根町の中近世

No	名 称	年 代	種 别	所 在 地	指 定 年 月 日
1	深田の宝鏡印塔2基 附相輪2基	中世	史跡	山根町字深田5-38	平成5年4月28日
2	山根館跡	中世	館	山根町字下戸鏡6	-
3	熊野神社のイチイ	中世	天然記念物	山根町字下戸鏡5-38 熊野神社	平成5年4月28日
4	F戸鏡の櫛	中世	天然記念物	山根町字下戸鏡5-38 熊野神社	昭和55年11月1日
5	塙の道 蔽形(荷交換場)	近世		山根町字蔽形	-
6	塙の道 木壳内	近世		山根町字木壳内	-
7	木壳内の三界萬惣追分碑	近世	史跡	山根町字木壳内7-93	昭和60年8月1日
8	馬糞所印 附入馬断立判跡	近世	古文書	山根町字木壳内8-125	平成5年4月28日
9	塙の道 柄塙	近世		山根町字柄塙	-
10	塙の道 下戸鏡	近世		山根町字下戸鏡	-
11	白石塚の一里塚 北塚	近世	塚	山根町字下戸鏡白石塚	-
12	白石塚の一里塚 南塚	近世	塚	山根町字下戸鏡白石塚	-
13	塙の道 中沢	近世		山根町字下戸鏡	-
14	塙の道 上戸鏡	近世		山根町字上戸鏡	-

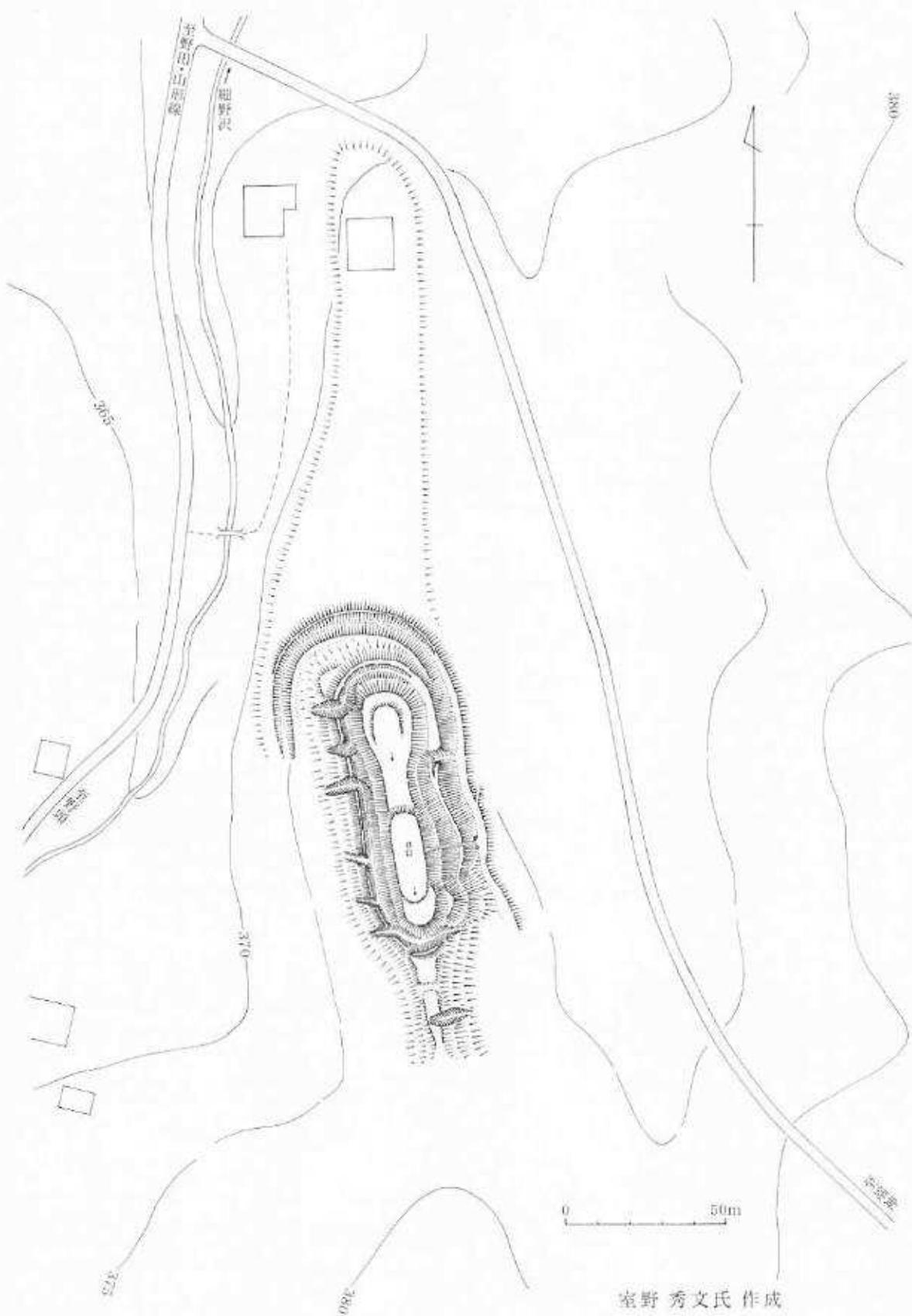
参考文献
 ・久慈市教育委員会 1994.3 「久慈市指定文化財」
 ・岩手県教育委員会 1982.3 岩手県「歴史の道」調査報告 「久慈・野田街道」 岩手県文化財調査報告書第77集
 第3表周辺の文化財の白石塚の一里塚北塚は、第2表久慈市山根町の道路のNo37西塚、No36東塚に対応する。



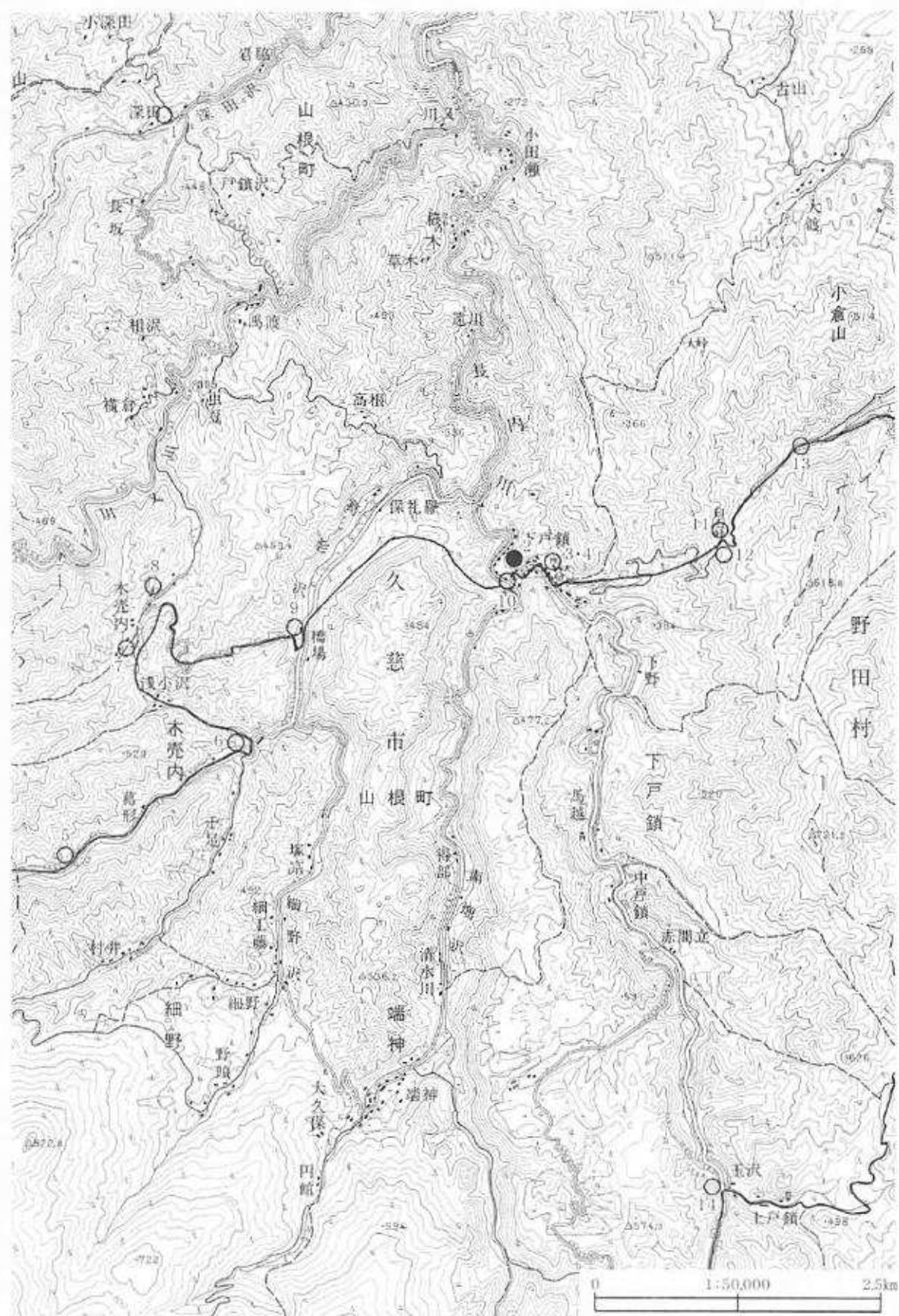
第6図 周辺の遺跡(1): 城館跡



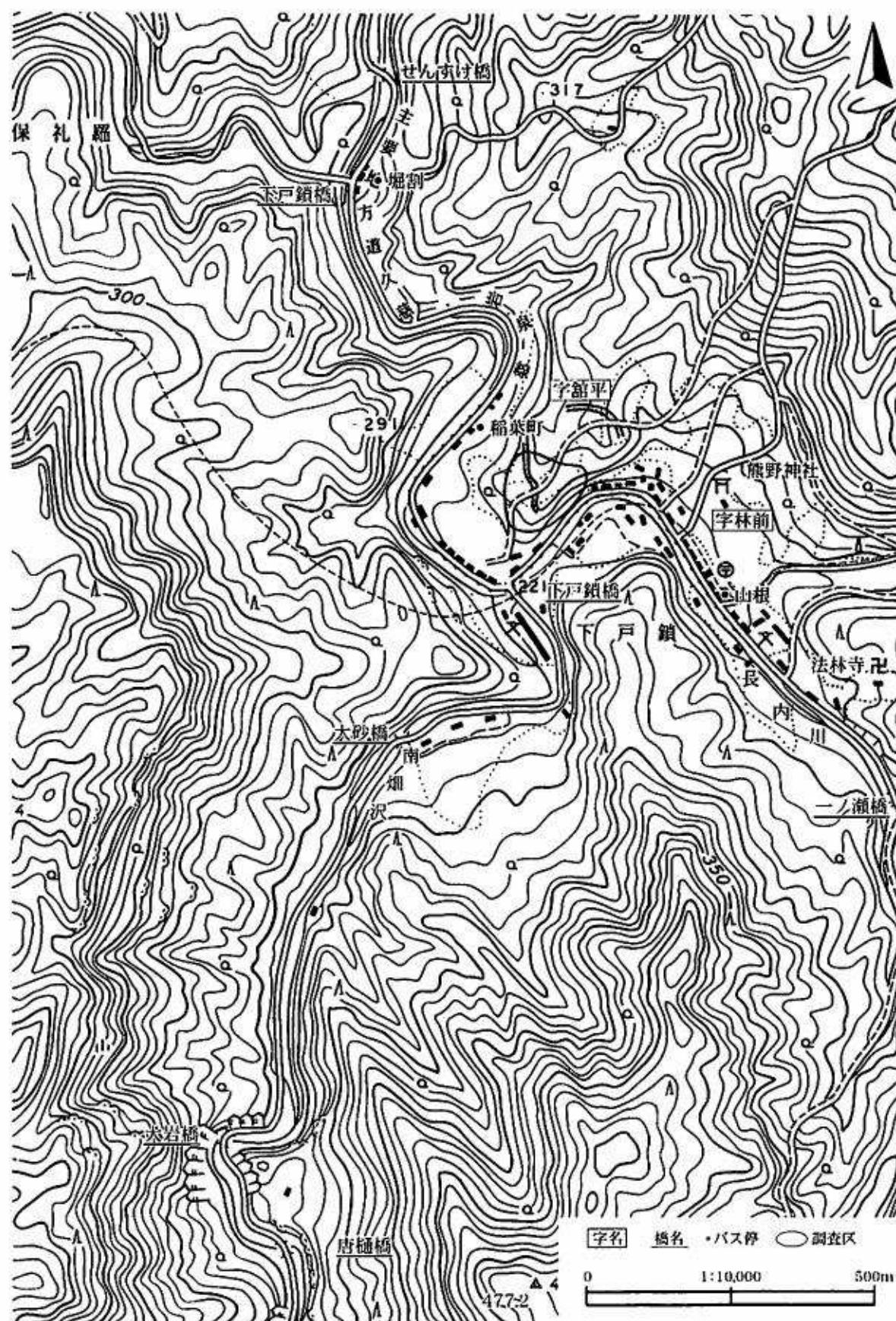
第7図 周辺の遺跡[2]: 山根町



第8図 細野館跡の縄張り図



第9図 周辺の文化財：山根町の中近世



第10図 山根館跡周辺の地名

III. 調査・整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割りにあたっては、平面直角座標（第X系）に合わせ基準点1・2、補点10点を設定し、これを基準として、調査区に直交するメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点の座標（X・Y）、標高値（H）は以下のとおりである。

基1 X=9,720,000m Y=74,880,000m H=254,667m

基2 X=9,700,000m Y=74,880,000m H=252,328m

上記の基準点2点と補点10点を基準として、グリッドの設定を行った。グリッドの設定に際しては、原点（1A）を北東側隅にして、20m四方のグリッドに分割した。グリッド名は西から東に向かってA・B・C…（アルファベット大文字）、北から東に向かって1・2・3…（算用数字）とし、それぞれの組み合わせで1A・1Bグリッドと区画名を付し、区画左上の杭をもって、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、堀跡・土塁・曲輪等の数グリッドに跨がる大型遺構を除いた遺構：掘立柱建物跡・竪穴建物跡・焼土遺構・土坑・陥し穴状遺構・溝状遺構・採掘坑・炭窯跡・集石・配石遺構については、3F-1号住居跡・3F-2号住居跡などと、グリッド毎に検出順に名称を付した。

なお、報告に際して遺構ごとに連番で名称を変更している。旧遺構名と本報告での遺構名の対応関係は、第4表 山根館跡遺構名変更表のとおりである。

第4表 山根館跡遺構名変更表

No	旧 遺 構 名	新 遺 構 名	No	旧 遺 構 名	新 遺 構 名	No	旧 遺 構 名	新 遺 構 名
1	3E-1号陥し穴状遺構	1号陥し穴状遺構	26	3F-2号住居跡	2号竪穴建物跡	51	5C-1号土坑	13号土坑
2	3F-3号陥し穴状遺構	2号陥し穴状遺構	27	3F-3号住居跡	3号竪穴建物跡	52	5C-2号土坑	14号土坑
3	3F-4号陥し穴状遺構	3号陥し穴状遺構	28	3G-1号住居跡	4号竪穴建物跡	53	5F-1号土坑	15号土坑
4	3F-5号陥し穴状遺構	4号陥し穴状遺構	29	4F-1号住居跡	5号竪穴建物跡	54	5F-2号土坑	16号土坑
5	3G-1号陥し穴状遺構	5号陥し穴状遺構	30	4G-1号住居跡	6号竪穴建物跡	55	5F-3号土坑	17号土坑
6	3G-2号陥し穴状遺構	6号陥し穴状遺構	31	7D-1号住居跡	7号竪穴建物跡	56	6C-1号土坑	18号土坑
7	3H-1号陥し穴状遺構	7号陥し穴状遺構	32	4E-1号焼土遺構	1号焼土遺構	57	7D-1号土坑	19号土坑
8	3H-2号土坑	8号陥し穴状遺構	33	4G-3号焼土遺構	2号焼土遺構	58	7D-2号土坑	20号土坑
9	4D-1号陥し穴状遺構	9号陥し穴状遺構	34	5E-1号焼土遺構	3号焼土遺構	59	2E-1号溝跡	1号溝状遺構
10	4D-2号陥し穴状遺構	10号陥し穴状遺構	35	5F-1号焼土遺構	4号焼土遺構	60	3E-1号溝跡	2号溝状遺構
11	4E-1号陥し穴状遺構	11号陥し穴状遺構	36	6D-1号焼土遺構	5号焼土遺構	61	3E-2号溝跡	3号溝状遺構
12	4E-2号陥し穴状遺構	12号陥し穴状遺構	37	7D-1号焼土遺構	6号焼土遺構	62	3F-1号溝跡	4号溝状遺構
13	4F-1号陥し穴状遺構	13号陥し穴状遺構	38	7D-2号焼土遺構	7号焼土遺構	63	3F-2号溝跡	5号溝状遺構
14	曲輪3	曲輪3	39	2E-1号土坑	1号土坑	64	3H-1号溝跡	6号溝状遺構
15	1号空堀	1号堀跡	40	3F-9号土坑	2号土坑	65	4F-1号溝跡	7号溝状遺構
16	2号空堀	2号堀跡	41	3G-1号土坑	3号土坑	66	4B-1号土坑	1号採掘坑
17	3号空堀	3号堀跡	42	4B-2号土坑	4号土坑	67	5A-1号土坑	2号採掘坑
18	4号空堀	4号堀跡	43	4B-3号土坑	5号土坑	68	6B-1号土坑	3号採掘坑
19	5号空堀	5号堀跡	44	4E-1号土坑	6号土坑	69	6B-2号土坑	4号採掘坑
20	6号空堀	6号堀跡	45	4F-1号土坑	7号土坑	70	6B-3号土坑	5号採掘坑
21	1号土塁	1号土塁	46	4F-3号土坑	8号土坑	71	6C-2号土坑	6号採掘坑
22	2号土塁	2号土塁	47	4G-1号土坑	9号土坑	72	3B-1号炭窯跡	1号炭窯跡
23	虎口	虎口	48	4G-2号土坑	10号土坑	73	7E-2号炭窯跡	2号炭窯跡
24	3F-1号建物跡	1号掘立柱建物跡	49	4G-3号土坑	11号土坑	74	5D-1号集石遺構	1号集石遺構
25	3F-1号住居跡	1号竪穴建物跡	50	4G-4号土坑	12号土坑	75	7D-1号集石遺構	2号配石遺構

また、今回の調査で検出され、調査した遺構数は次のとおりである。堀跡6条、土塁2基、曲輪1箇所、虎口1箇所、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡7棟、焼土遺構7基、土坑20基、溝状遺構5基、陥し穴状遺構13基、採掘坑6基、炭窯跡2基、集石・配石遺構2基、柱穴状土坑205基。

(3) 調査の体制

調査員は常時2名の体制で、3名による交代制で行った。各月の配置は、4～6月：阿部・江藤、7～9月：岩渕・江藤、10・11月：阿部・江藤である。阿部・岩渕がそれぞれの期間において、現場の運営・精査に至る一切を総括している。

(4) 調査の経過

調査期間は、4月17日～11月2日であり、作業実働日数は117日である。作業員の登録人数は当初24人で、一日平均の稼動日数は19人である。9月から11名増員して、登録人数35人、1日平均の稼動日数24人となつた。以下に調査経過を簡単に記す。

- 4月17日（月） 午後1時、資材搬入、調査開始。調査員2名（阿部・江藤）作業員登録24名。
4月18日（火） 雑物撤去開始（～5月1日）。基準点測量（共栄測量）。
5月2日（火） 現況地形測量・写真撮影：11:00～14:00（ハイマーテック）。
5月9日（火） 試掘・掘削開始。
5月25日（木） 南側急斜面に防護フェンス設置（北星鉱業）～6月1日。
5月27日（土） 調査指導（盛岡市教育委員会：室野秀文氏）。
6月29日（木） 部分終了確認：16:00～17:00。調査区西側3,000m²。
7月3日（月） 調査員異動（阿部→岩渕）。
7月11日（火） 台風3号被害（排水の県道7号への流出）への対応（久慈地方振興局・北星鉱業）。
8月9日（水） 遺跡見学：長内公民館主催の遺跡探訪、引率6名、小学生15名。
9月4日（水） 作業員11名増、登録35名。
10月2日（月） 調査員異動（岩渕→阿部）。
10月5日（水） 遺跡見学：中央公民館主催の中央生き生き学園、60才以上24名、引率1名。
10月14日（土） 現地説明会：13:30～15:00。見学者76名。
10月17日（火） 遺跡見学：山根中学校、教諭2名、生徒14名。
10月24日（火） 写真測量・空撮：12:00～14:30（ハイマーテック）。
10月25日（水） 終了確認：11:00～12:00。
10月26日（木） 埋戻し開始（～11月2日）。
10月30日（月） 遺跡見学：山根小学校、教諭3名、生徒17名。
11月2日（木） 調査終了、12:00資材搬出、撤収。

具体的な調査の進行状況を記す。調査開始前に現地確認を行ったところ、雑物が撤去されていないことを確認した。業者に見積もりを依頼したところ、その量10t・トラック100台分に及び、調査区内に運び出すことは、諸々の制約から実行できない可能性が高かった。そのため調査開始後に一部業者に依頼して調査区周辺への雑物撤去を行った。併行して、館跡の踏査を行い、現況の把握に努めた。縄張図を作成した結果、調査区は、館跡の西側部分に相当し、現況で曲輪、二重の空堀と土塁が調査区内に含まれることを確認した。

雑物撤去終了後、5月2日に地形測量を行った。5月9日から試掘を行い、調査区西側の堀外部地区の精査を行った。この区域は、概ね削平を受けており、遺構として近現代の採掘坑・炭窯跡・集石遺構・柱穴状

土坑など検出されたが、館跡に関連する遺構は確認できていない。6月は、これらの遺構の精査と堀跡及び曲輪の表土剥ぎを行っている。調査区西側の堀外部地区3,000m²は6月で調査終了の目処がついたことから部分終了確認を受け、以後の調査において土捨場とすることとした。

7月に調査員が異動し、調査区東側の堀内部地区の精査に入ったが、猛暑と掘削土量の多さから、進捗状況に遅れが見え始めたため、9月に作業員を増員している。10月に再び調査員が異動した。10月上旬で空堀と土星の検出が終わり、曲輪及び曲輪にある遺構の検出作業も終えたことから、10月14日に現地説明会を行い、遺跡を公開した。24日に空堀・写真測量を行い、25日に堀内部地区を中心とする6,000m²の終了確認を受けた。その後、土星の精査・断ち割り・測量を行った。精査終了後は埋め戻しを行い、現況に復旧して11月2日に撤収し、調査を終了した。

(5) 粗掘と遺構検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

当初、2m幅のトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、遺跡の状況を把握した。その結果、館跡の西側ではⅢ層まで削平されていた。曲輪内においては、一部で整地層や旧表土層が確認されていたが、表土除去後、Ⅲ～Ⅳ・V層が確認できる状況であった。現表土には遺物が含まれしないことを確認し、重機により表土除去を行い、遺構検出は人力でおこなった。基本的には遺構の時期差にかかわらず、Ⅲ層上面（地山）が遺構検出面である。

検出された遺構は、原則として住居跡の場合は4分法、土坑類は2分法で行ったが、必要に応じて他の方法も併用した。住居跡については4分割をした後Q1・2…と各エリアに名称をつけた。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行っている。

遺構内出土の遺物は、埋土で可能なかぎり分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜写真撮影・図面作成をしている。

(6) 実測・写真撮影

平面実測はグリッドに合わせた1mメッシュを基本とした。平面・断面図の縮尺は住居跡・土坑類・掘立柱建物跡は1/20、炭窯跡・溝跡は1/40を基本とした。レベルは、基準点をもとに絶対高で測った。

館跡の縄張図については、踏査により1:1,000縮尺の図を作成した。調査開始前に現況地形測量図を1:200縮尺で作成し、調査終了段階で写真測量を行い、1:80縮尺の測量図を作成した。堀・土塁などの大型の遺構についてはこれをもって図化作業とした。

写真撮影は35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台を使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを利用した。実際の撮影は各種の埋土堆積状況や遺物の出土状況、完掘状況、全景などについて行った。また、調査開始時に現況地形測量、終了段階で写真測量と併せて、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。

2. 室内整理

室内整理の期間は、平成12年11月1日～平成13年3月31日で、整理に従事した作業員は3名である。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は、室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を図った。

(1) 遺構に関する記録

実測図を遺構種別に分類し、図面は点検のうえ、必要なものについては第二原図を作成し、トレースを行

った。撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一緒にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

(2) 遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、遺跡略号・出土地点・層位等を全破片について注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、出土地点別（遺構・グリッドごと）に接合・復元作業を実施した。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮尺して図化した。石材・炭化材・動物遺存体の鑑定・放射性炭素年代測定・金属製品の成分分析・保存処理は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師2名（村田臺灣・福士昭夫）が撮影を行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告に当たっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した全てではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に資料の選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

a. 土器（縄文土器・弥生土器）

はじめに出土地点別に重量計測を行い、接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、少量であること、復元率が悪かったことから、径3cm以上の破片を図化し、掲載した。

b. 土製品

円盤状土製品がある。掲載した。

c. 石器

石器については個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、すべての石器に写真・観察表を付し、一部の製品については図化を行った。

d. 陶磁器

陶磁器類は全点を登録した。破片資料が多いことから、残存率は無視して、中世・近世に属する破片すべてについて実測図・写真・観察表を付し、掲載した。出土品全体では近現代に属するものが多くなったが、小久慈焼については掲載し、他は削愛した。

e. 金属製品

図化に耐えない破片資料を削愛し、形状が分かる製品については図化し、掲載した。一部資料については、成分分析及び保存処理を行った。

f. 銭貨

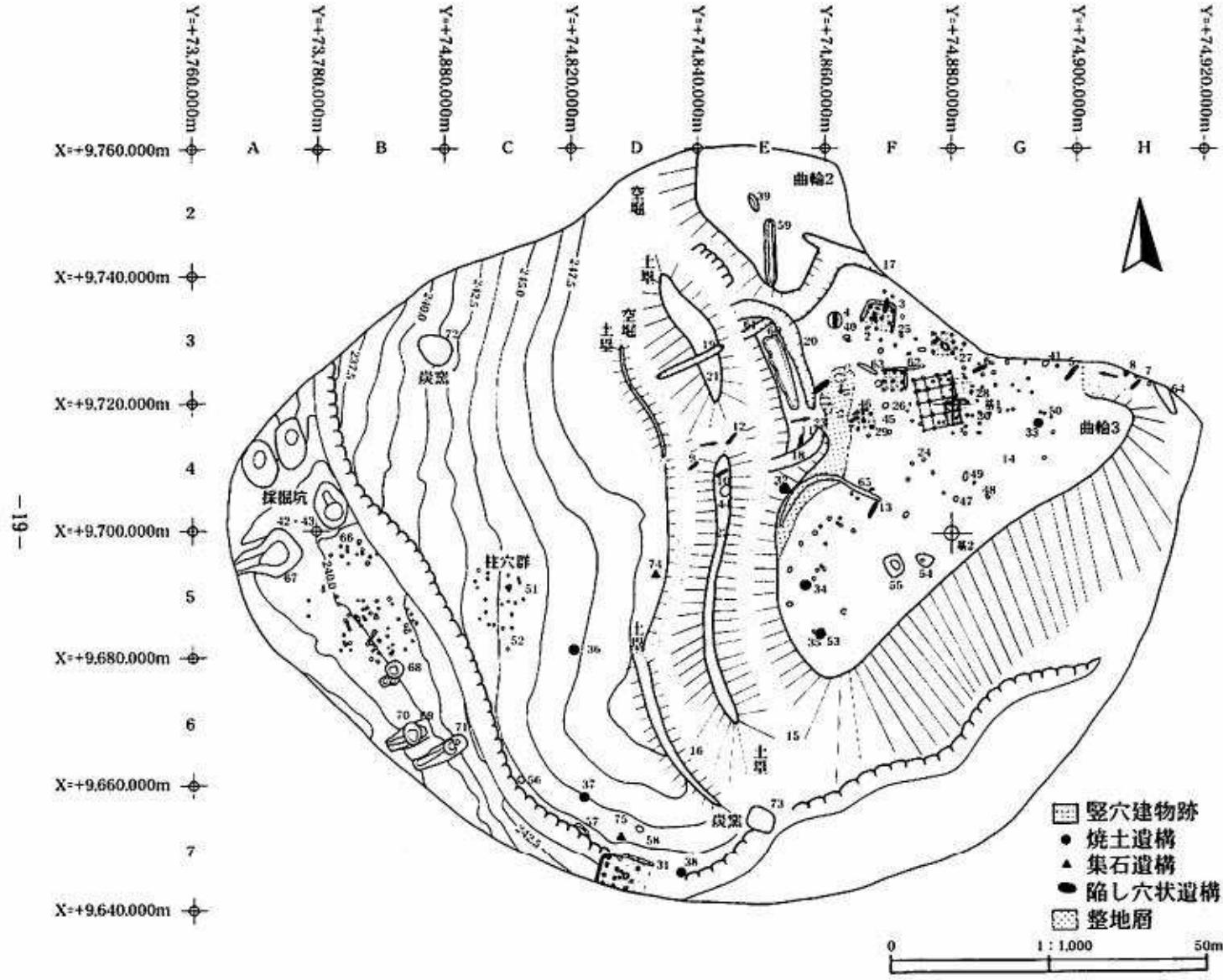
現在使用されている貨幣以前の銭貨については登録し、拓影図・写真・観察表を掲載した。現代の貨幣については、分類・計測のみとした。中世に属する銭貨については成分分析を行っている。

g. 動物遺存体

動物遺存体の残存状況及び出土状況から現代のものと判断されたため、観察表に種名を記すに留めた。

h. 炭化材

一部について、放射性炭素年代測定を行い、他は樹種名を掲載するに留めた。



第11図 山根館跡遺構配置図

山根館跡遺構一覧表

No	遺構名	No	遺構名
1	1号陥し穴状遺構	39	1号土坑
2	2号陥し穴状遺構	40	2号土坑
3	3号陥し穴状遺構	41	3号土坑
4	4号陥し穴状遺構	42	4号土坑
5	5号陥し穴状遺構	43	5号土坑
6	6号陥し穴状遺構	44	6号土坑
7	7号陥し穴状遺構	45	7号土坑
8	8号陥し穴状遺構	46	8号土坑
9	9号陥し穴状遺構	47	9号土坑
10	10号陥し穴状遺構	48	10号土坑
11	11号陥し穴状遺構	49	11号土坑
12	12号陥し穴状遺構	50	12号土坑
13	13号陥し穴状遺構	51	13号土坑
14	曲輪3	52	14号土坑
15	1号堀跡	53	15号土坑
16	2号堀跡	54	16号土坑
17	3号堀跡	55	17号土坑
18	4号堀跡	56	18号土坑
19	5号堀跡	57	19号土坑
20	6号堀跡	58	20号土坑
21	1号土塁	59	1号溝状遺構
22	2号土塁	60	2号溝状遺構
23	虎口	61	3号溝状遺構
24	1号掘立柱建物跡	62	4号溝状遺構
25	1号竪穴建物跡	63	5号溝状遺構
26	2号竪穴建物跡	64	6号溝状遺構
27	3号竪穴建物跡	65	7号溝状遺構
28	4号竪穴建物跡	66	1号採掘坑
29	5号竪穴建物跡	67	2号採掘坑
30	6号竪穴建物跡	68	3号採掘坑
31	7号竪穴建物跡	69	4号採掘坑
32	1号焼土遺構	70	5号採掘坑
33	2号焼土遺構	71	6号採掘坑
34	3号焼土遺構	72	1号炭窯跡
35	4号焼土遺構	73	2号炭窯跡
36	5号焼土遺構	74	1号集石遺構
37	6号焼土遺構	75	2号配石遺構
38	7号焼土遺構		

V. 縄文時代の検出遺構

検出された遺構について（第11図）

今回検出された縄文時代の遺構は、陥し穴状遺構13基である。占地は、調査区東側の高位面に位置する。出土遺物は無く、詳細な時期決定はできないが、遺構の形状から、縄文時代遺跡の調査において多数検出されている陥し穴状遺構に類似するものと判断した。概要は以下のとおりである。なお、個々の陥し穴状遺構の規模・形状や特長などについては第5表 陥し穴状遺構観察表に示した。以下に概要を記す。

1. 陥し穴状遺構（第12～16図、写真図版5～7）

遺構（第12～16図、写真図版5～7）

〈位置・検出状況〉 調査区東側の堀内部地区で斜面の上位に位置し、Ⅲ層ないしⅣ層で検出された。

〈重複関係〉 いくつかの陥し穴状遺構が中世段階の造構と重複し、いずれも陥し穴状遺構が切られている（旧→新）。1号陥し穴状遺構→6号堀跡、2号陥し穴状遺構・3号陥し穴状遺構→1号竪穴建物跡、9号陥し穴状遺構→通路、10号陥し穴状遺構→土塁、11号陥し穴状遺構→4号堀跡、12号陥し穴状遺構→通路

〈規模・平面形〉 大きさは、開口部の長軸3～1.8m、幅0.8～0.2mでばらつきがある。多くは上部を削平されており、本来の規模は、現状より大きかったものと推定されるに過ぎない。平面形は溝状を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 上位は黒褐色土から暗褐色土・下位は黄褐色土が主体で、下位では穴の底面直上に旧表土と思われる黒色土が入る。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・底面〉 壁はほぼ垂直に立ちあがる。深さは50cm～160cmと差がある。底面の幅は10～30cmで、開口部に比して狭く造られており、凹凸は少ない。底面の深さは、斜面に沿って掘り込まれており、斜面の上位でも下位でも一定の深さを保っている。

〈その他の付属施設〉 逆茂木を立てた痕跡などは確認できていない。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代と思われるが、出土遺物はなく、詳細な時期については不明である。

第5表 陥し穴状遺構観察表

() 数値：残存値

遺構名		1号陥し穴状遺構		
図版	遺構	12	遺物	-
写真図版	遺構	5	遺物	-
位置	3F			
検出状況	II層			
重複関係	1号陥し穴→6号堀跡			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	V字状		
	開口部	354×75cm		
	底部	284×24cm		
	深さ	136cm		
埋土	暗褐色土が主体			
	底面	北東から南西に傾斜		
壁	V字形			
出土遺物	なし			
時期	縄文時代			

() 数値：残存値

遺構名	2号陥し穴状遺構			
図版	遺構	12	遺物	-
写真図版	遺構	5	遺物	-
位置	3F			
検出状況	1号竪穴建物跡の床面			
重複関係	2号陥し穴→1号竪穴建物跡			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	V字状		
	開口部	182×66cm		
	底部	138×28cm		
埋土	深さ	75cm		
	底面	不明		
	壁	北から南への傾斜		
	出土遺物	ほぼ直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

遺構名	3号陥し穴状遺構			
図版	遺構	13	遺物	-
写真図版	遺構	5	遺物	-
位置	3F			
検出状況	1号竪穴建物跡の床面			
重複関係	3号陥し穴→1号竪穴建物跡			
形状・規模	平面	溝状でややいびつ		
	断面	箱形		
	開口部	265×75cm		
	底部	258×32cm		
埋土	深さ	66cm		
	底面	暗褐色土と褐色土が主体		
	壁	北から南への傾斜		
	出土遺物	ほぼ直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

遺構名	4号陥し穴状遺構			
図版	遺構	13	遺物	-
写真図版	遺構	5	遺物	-
位置	3F			
検出状況	II層			
重複関係	4号陥し穴→2号土坑			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	箱形		
	開口部	195×80cm		
	底部	85×40cm		
埋土	深さ	160cm		
	底面	上位：暗褐色土 中位：褐色土 下位：黒褐色土		
	壁	北から南へ傾斜		
	出土遺物	ほぼ直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

遺構名	5号陥し穴状遺構			
図版	遺構	14	遺物	-
写真図版	遺構	6	遺物	-
位置	3G			
検出状況	III層			
重複関係	なし			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	柱状		
	開口部	290×35cm		
	底部	280×8cm		
埋土	深さ	80cm		
	底面	黒褐色土が主体		
	壁	南から北へ傾斜		
	出土遺物	直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

遺構名	6号陥し穴状遺構			
図版	遺構	14	遺物	-
写真図版	遺構	6	遺物	-
位置	3G			
検出状況	III層			
重複関係	なし			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	柱状		
	開口部	270×25cm		
	底部	254×10cm		
埋土	深さ	65cm		
	底面	明褐色土が主体		
	壁	南西から北東に傾斜		
	出土遺物	直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

遺構名	7号陥し穴状遺構			
図版	遺構	14	遺物	-
写真図版	遺構	6	遺物	-
位置	3H			
検出状況	III層			
重複関係	なし			
形状・規模	平面	溝状		
	断面	T字状		
	開口部	(285)×92cm		
	底部	290×12cm		
埋土	深さ	120cm		
	底面	暗褐色土が主体		
	壁	やや凹凸をもつ		
	出土遺物	直立		
時期	出土遺物	なし		
	時代	縄文時代		

() 数値：現存値

遺構名	8号陥し穴状遺構						
図版	遺構	15	遺物	-			
写真図版	遺構	-	遺物	-			
位置	3H						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	溝状?					
	断面	V字状?					
	開口部	(80)×90cm					
	底部	(45)×18cm					
	深さ	100cm					
埋土	上位:暗褐色土						
底面	ほぼ平坦						
壁	ほぼ直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

遺構名	9号陥し穴状遺構						
図版	遺構	15	遺物	-			
写真図版	遺構	6	遺物	-			
位置	4D						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	9号陥し穴→通路						
形状・規模	平面	溝状					
	断面	V字状					
	開口部	364×15cm					
	底部	360×10cm					
	深さ	65cm					
埋土	暗褐色土が主体						
底面	北東から南西に傾斜						
壁	直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

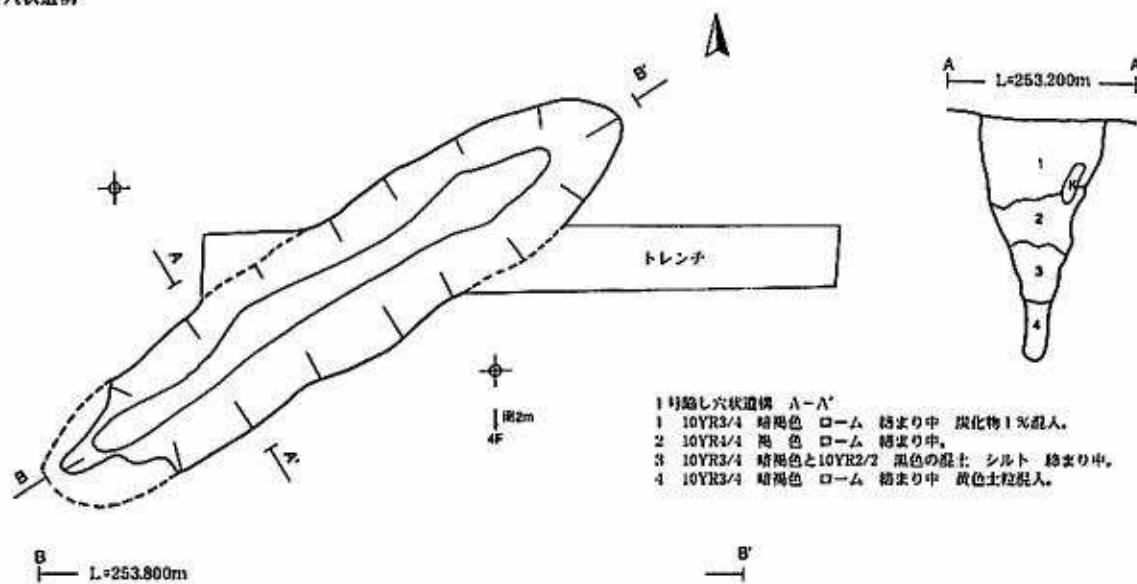
遺構名	10号陥し穴状遺構						
図版	遺構	15	遺物	-			
写真図版	遺構	7	遺物	-			
位置	4D						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	10号陥し穴→土壤						
形状・規模	平面	溝状					
	断面	柱状					
	開口部	284×25cm					
	底部	254×8cm					
	深さ	50cm					
埋土	上位:暗褐色土 下位:黒褐色土						
底面	北東から南西に傾斜						
壁	直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

遺構名	11号陥し穴状遺構						
図版	遺構	16	遺物	-			
写真図版	遺構	7	遺物	-			
位置	4E						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	11号陥し穴→4号堀跡						
形状・規模	平面	溝状					
	断面	V字状					
	開口部	(240)×40cm					
	底部	210×10cm					
	深さ	54cm					
埋土	上位:黒褐色土 中位:褐色土 下位:暗褐色土						
底面	北から南へ傾斜						
壁	ほぼ直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

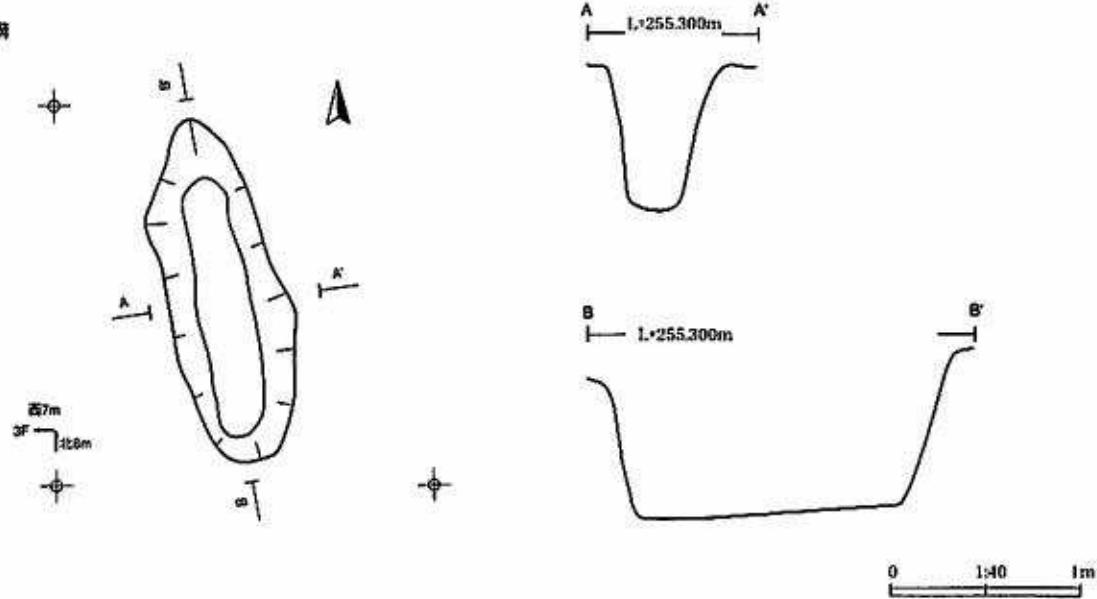
遺構名	12号陥し穴状遺構						
図版	遺構	16	遺物	-			
写真図版	遺構	7	遺物	-			
位置	4E						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	12号陥し穴→通路						
形状・規模	平面	溝状					
	断面	V字状					
	開口部	308×38cm					
	底部	300×10cm					
	深さ	40cm					
埋土	暗褐色土と褐色土 下位: 黒褐色土						
底面	北東から南西に傾斜						
壁	直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

遺構名	13号陥し穴状遺構						
図版	遺構	16	遺物	-			
写真図版	遺構	7	遺物	-			
位置	4F						
検出状況	IV層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	溝状					
	断面	V字状					
	開口部	292×56cm					
	底部	254×10cm					
	深さ	45cm					
埋土	暗褐色土と褐色土が主体						
底面	北から南に傾斜						
壁	ほぼ直立						
出土遺物	なし						
時期	縄文時代						

1号陥し穴状造構

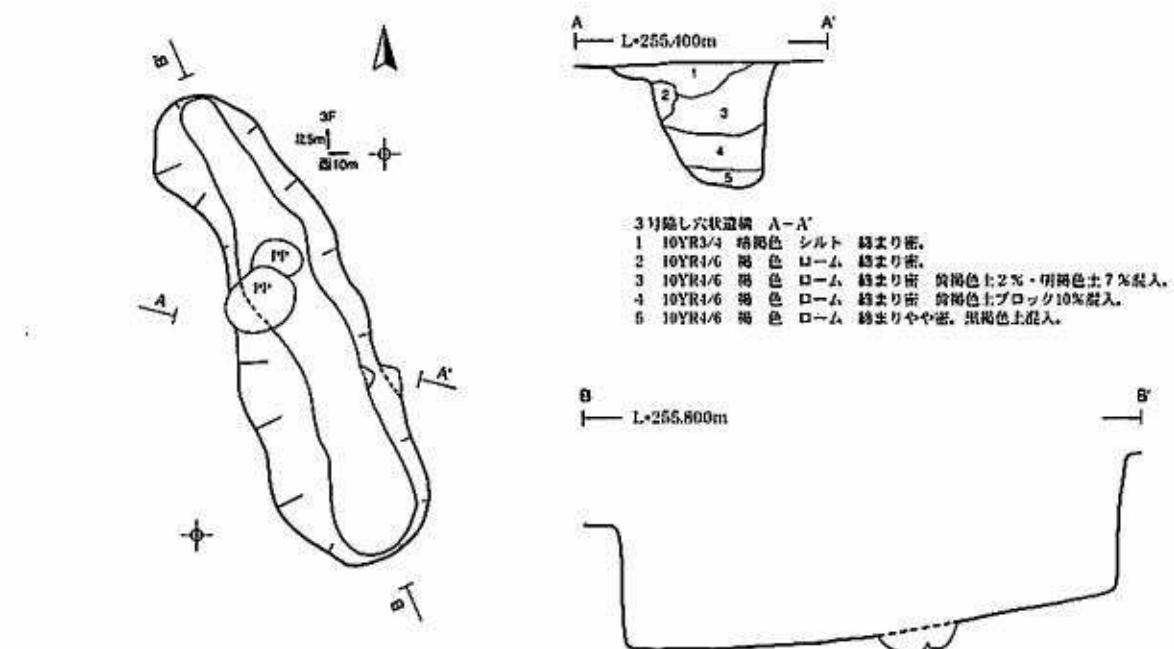


2号陥し穴状造構

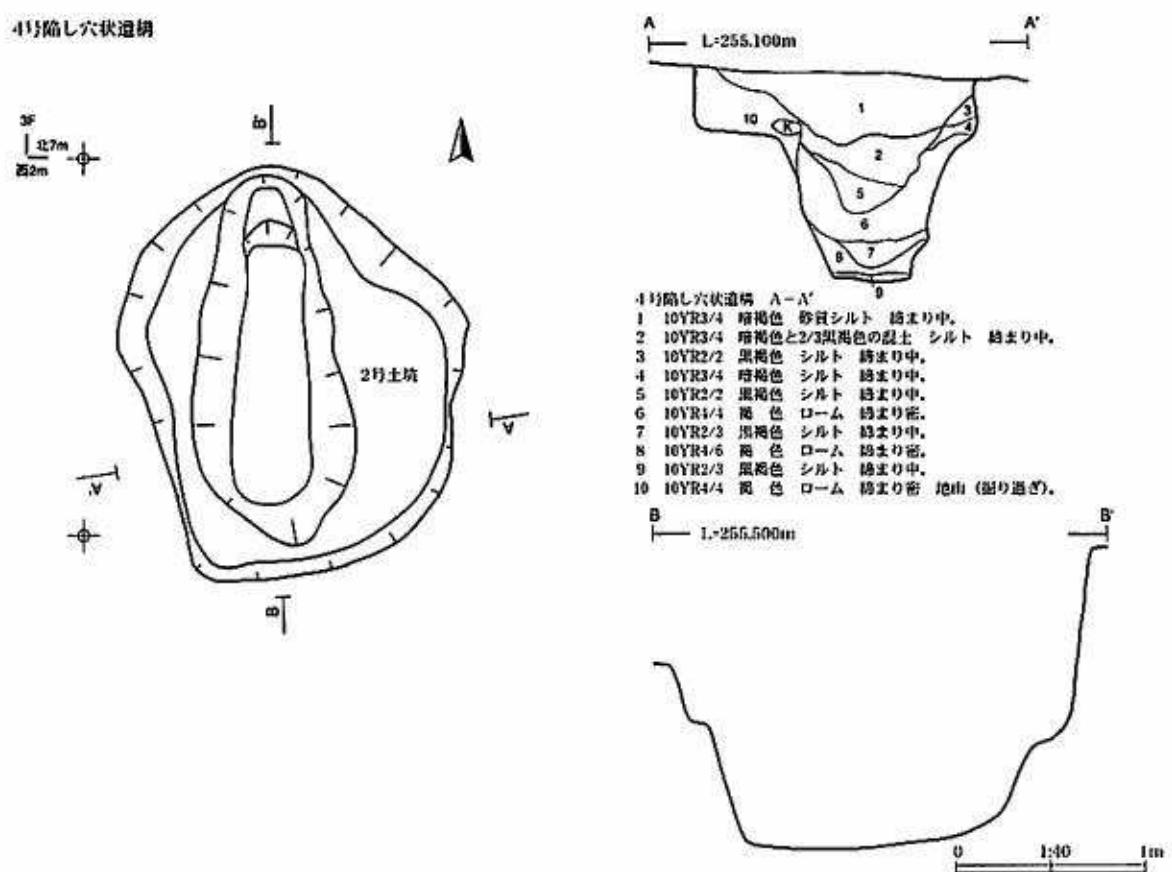


第12図 陥し穴状造構(1)

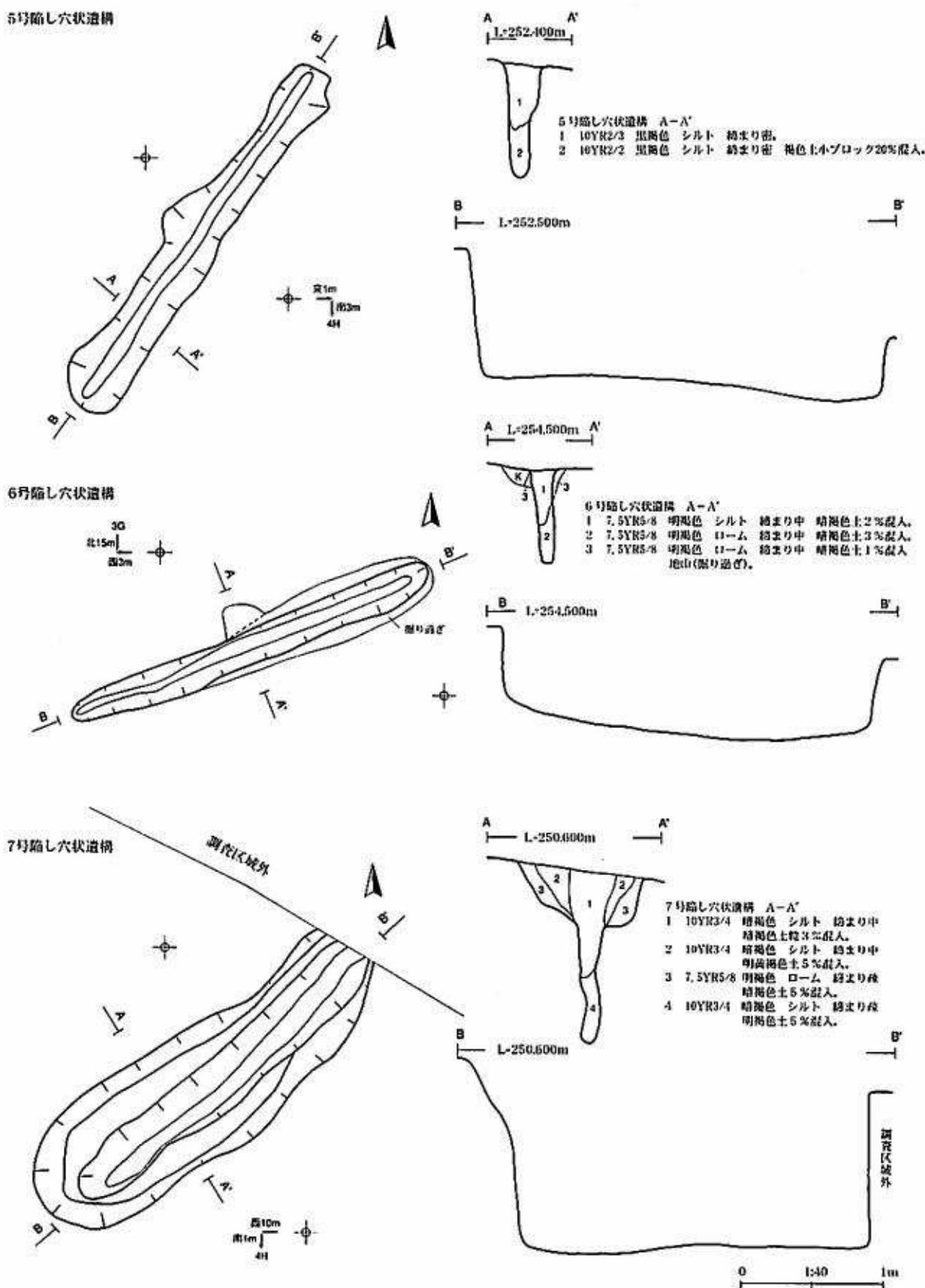
3号陥し穴状造構



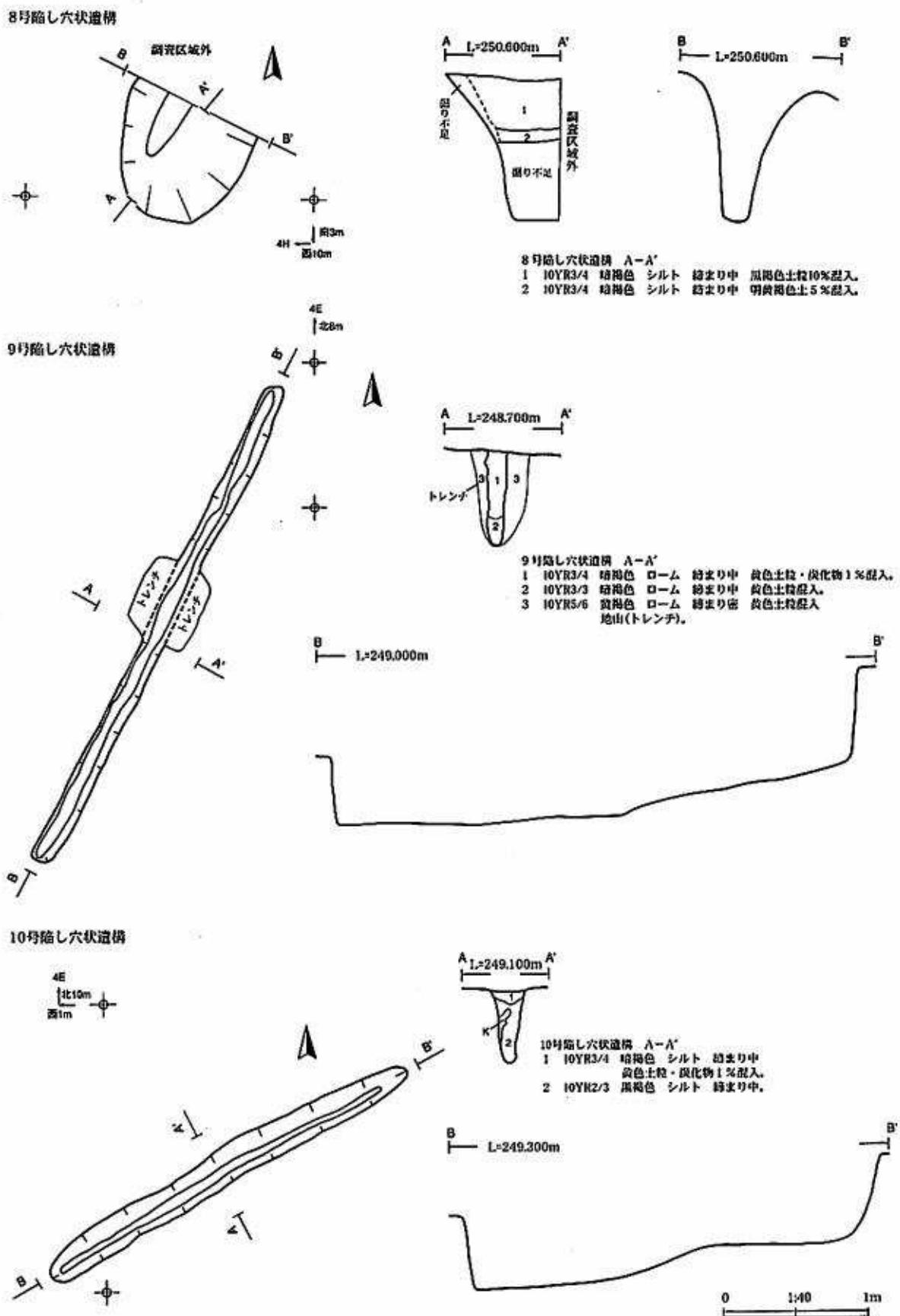
4号陥し穴状造構



第13図 陥し穴状造構(2)

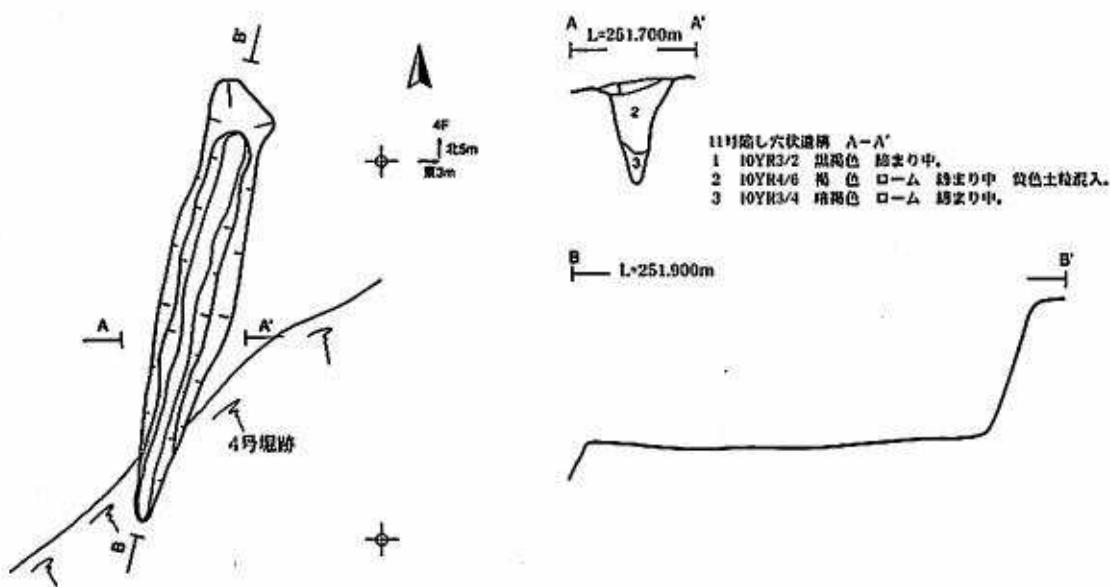


第14図 陥し穴状造構(3)

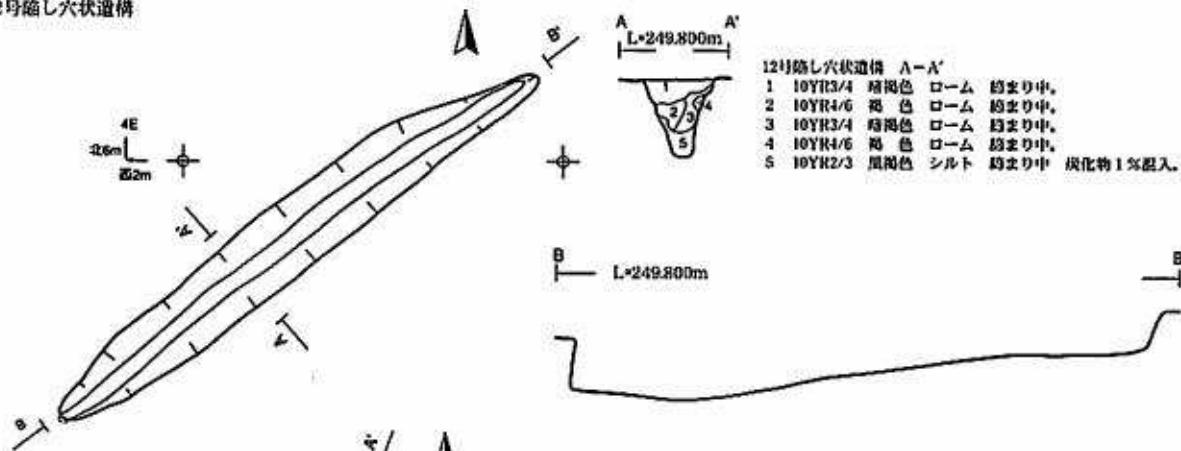


第15図 陥し穴状造構(4)

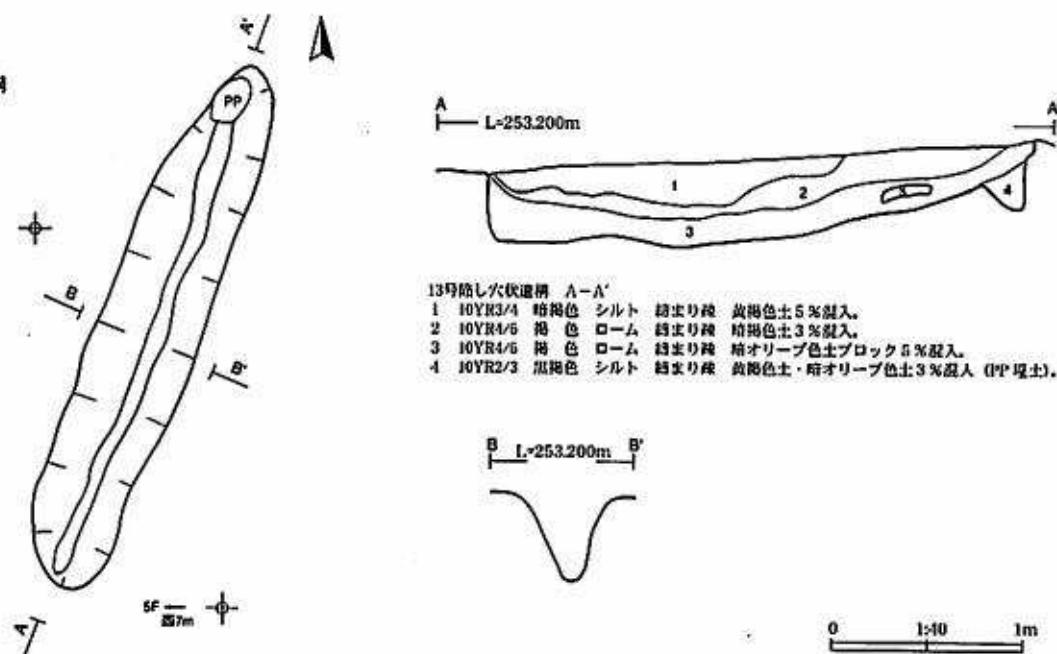
11号陥し穴状造構



12号陥し穴状造構



13号陥し穴状造構



第16図 陥し穴状造構(5)

V. 中世の検出遺構

1. 山根館跡の概要

(1) 縄張り（第17・19・20図）

山根館跡は、蛇行しながら久慈湾に向って北流する長内川右岸の低地に対して、南西方向に張り出した丘陵尾根の先端に立地している。館跡は、南側は断崖、北側は急斜面の自然地形を利用し、尾根の裾にあたる西側に二重の空堀と土塁（A）、後背となる東側に空堀と土塁（B）を廻らし、2箇所で尾根を切って館跡としている。城域の面積は約30,000m²である。堀・土塁に囲まれた城域内には、北東から南西方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して造られた曲輪が確認できるが、普請の痕跡（切り盛り）は最小限度に留まっている。曲輪は、大きく三つに分けられ、高いほうから南側に見通しの利く曲輪1・北側に見通しの利く曲輪2・西側に見通しの利く曲輪3と、周囲への眺望を考慮して造られたように思われる。このうち曲輪3が平場として最も大きく、他の曲輪に比して、比較的堅固に造られている（註1）。

虎口として想定される箇所は2箇所ある。ひとつは、曲輪3の西側中央付近で周囲より落ち込む箇所である。その延長上にある西側の地点では、南北に走る土塁が途切れているのが確認できる。もうひとつは、曲輪3の東側にあり、南東方向にある下戸領集落に下りる道となっている。いずれも地元の人々に現在も使われており、山道として今に痕跡を残している。

今回の調査区は、館跡の西側部分が含まれ、普請跡としては、館跡西側の二重の空堀と土塁・虎口・曲輪3が調査対象となった。

(2) 地割（第18図）

現在の地割（平成12年）と旧い地割（作成時期不詳）を確認することができた。館跡の縄張りと地割の関係を確認しておきたい。縄張りの境界が地割に表れている箇所は、東側の土塁・空堀（B）部分で、尾根における西側（城域）と東側が地割りされている。また、山根館跡を北東ー南西方向に横断する旧道の北側と南側が地割りされている。この道は、かつて下戸領集落から山奥にある竹倉部の集落に至る道で、往時は人々が行き來したといわれている。また、曲輪3に相当する部分が区画されているように見える。地割りがそれほど細分されていないのは、館跡の大まかな縄張り（普請）と対応しているように思われる。なお、館跡西側の境界となる二重の空堀・土塁（A）部分は地割では地境として表れていないようである。

(3) 伝承

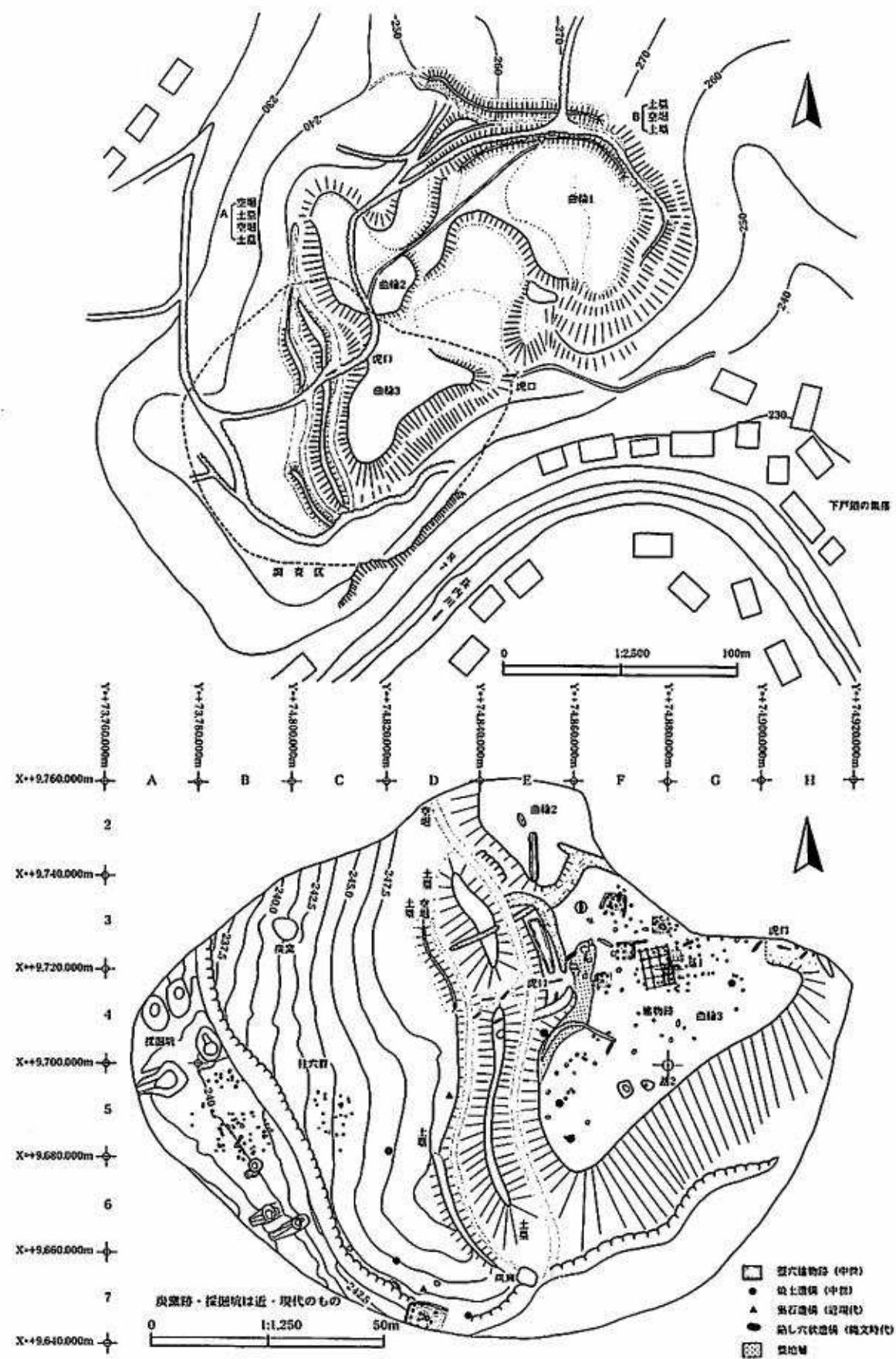
地元では、館跡のある地点を通称「館平（たてびら）」といい、別称「伊藤館」とも言われている。地元下戸領の集落には、伊藤氏（本家伊藤光次郎氏宅）があり、伊藤氏の出自は、「伊豆式部大夫行光の孫左衛門尉景又、其の兄とともに承久の乱に功あり、伊豆四郡を領し、其の孫久蔵光春戸領の地に住めるなり」（『九戸郡誌』）とある。「伊藤某の居館として伝える」（『二戸郡・九戸郡古城館跡考』）とする記事もあるが、確証はない。伊藤氏に関する文献資料でも遡れるのは近世までのように、中世以前に遡る資料は確認できていない。

註

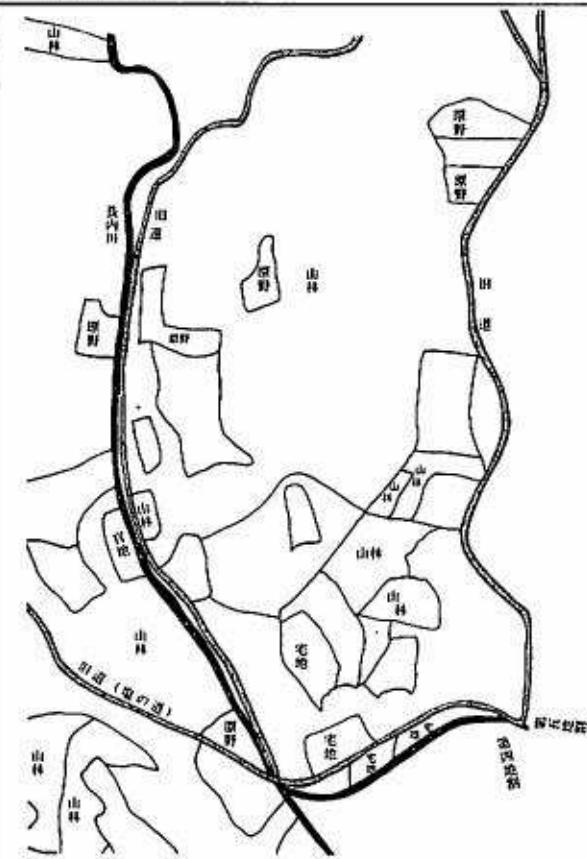
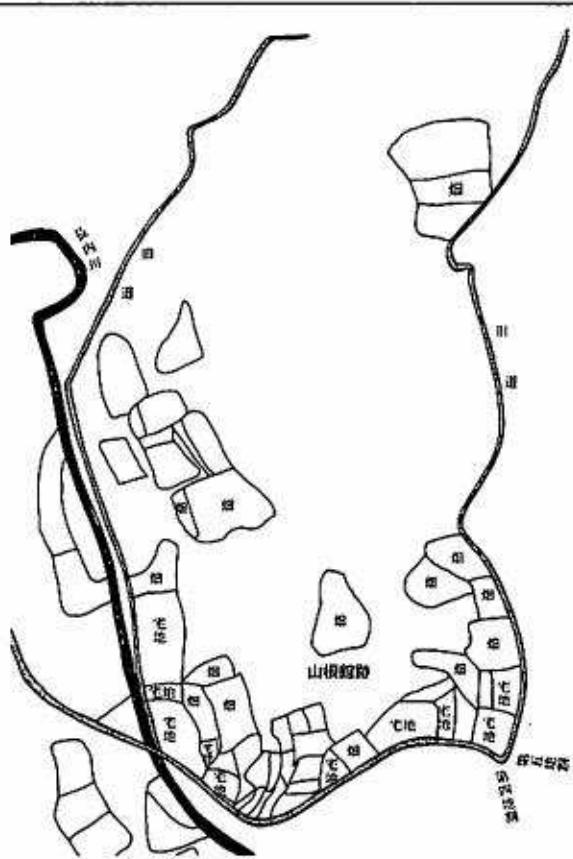
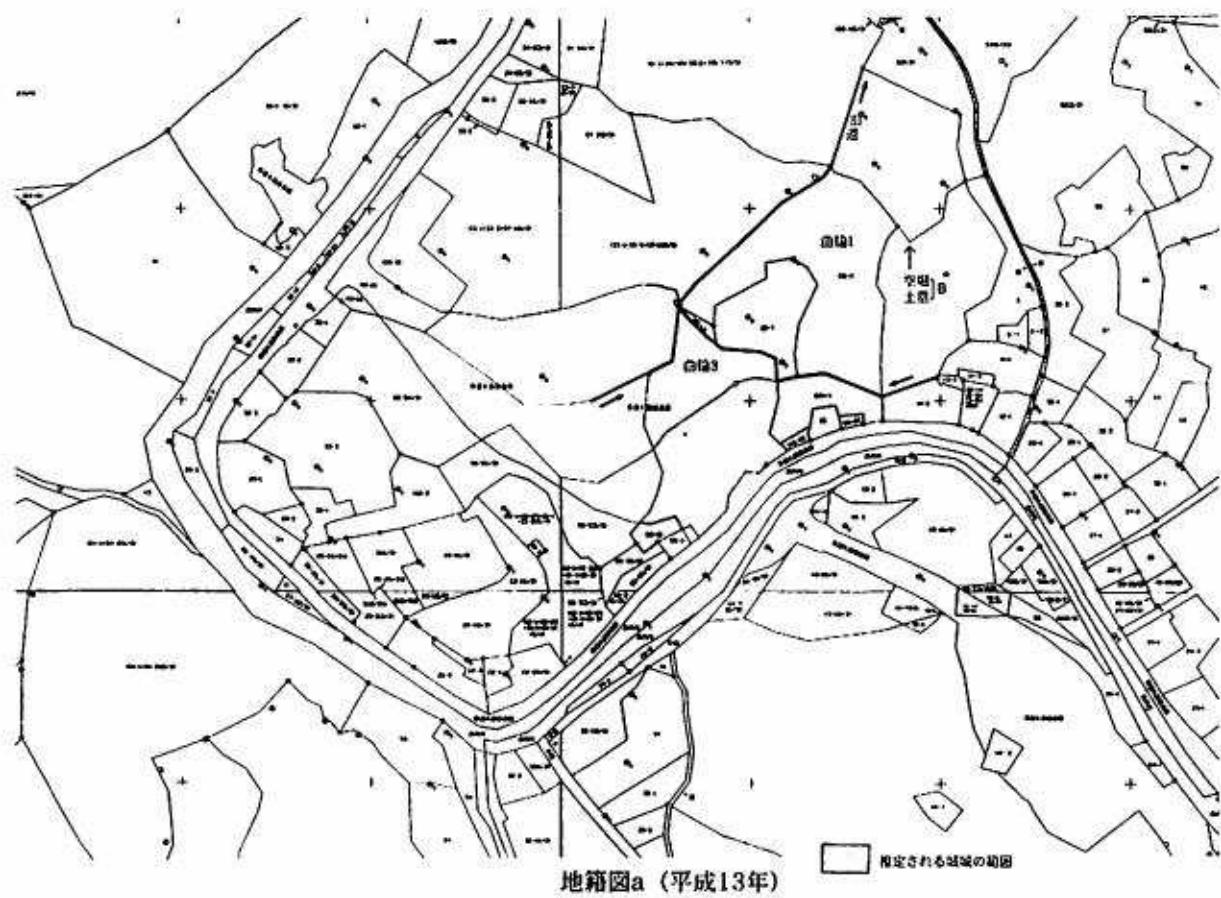
- (1) 従来の山根館跡の縄張りは、曲輪1～3をひとつの主郭とし、東側と西側に空堀と土塁をそれぞれ一重に巡らせているものと把握されていた（久慈市教育委員会1994）。なお、各曲輪の面積は、曲輪1:2,240m²、曲輪2:1,350m²、曲輪3:1,460m²である。ただし地表面観察によれば曲輪1の平坦地は1,000m²、曲輪2の平坦地は600m²ほどである。いずれの曲輪も帶曲輪等を伴ってさらに小規模に区画されている可能性があり、また普請途中であった可能性も考えられる。

参考文献

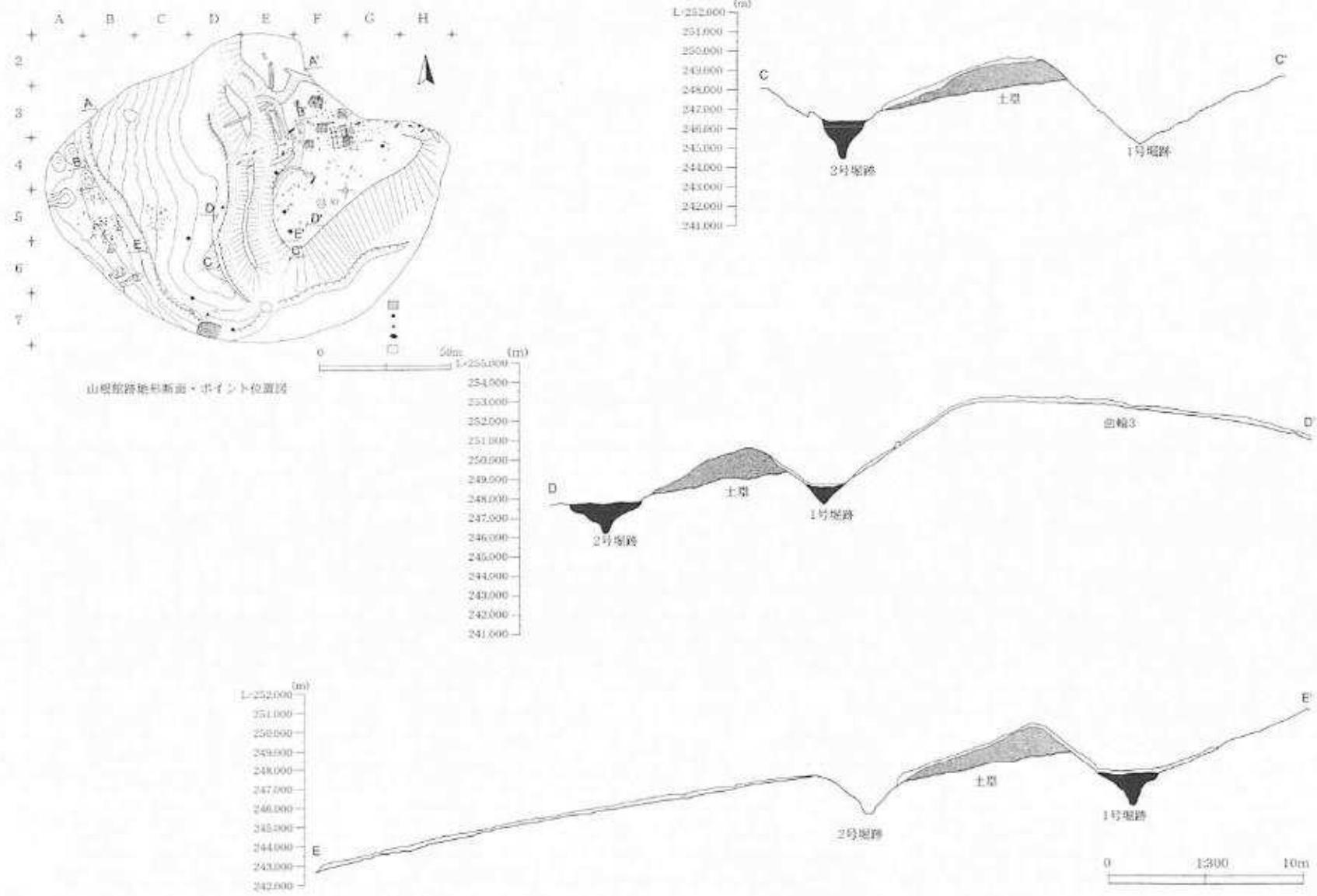
- 岩手県教育委員会九戸郡部会編 1986『九戸郡誌』復刻版。
梁部善次郎 1971『二戸郡・九戸郡古城館跡考』東北民俗研究会。



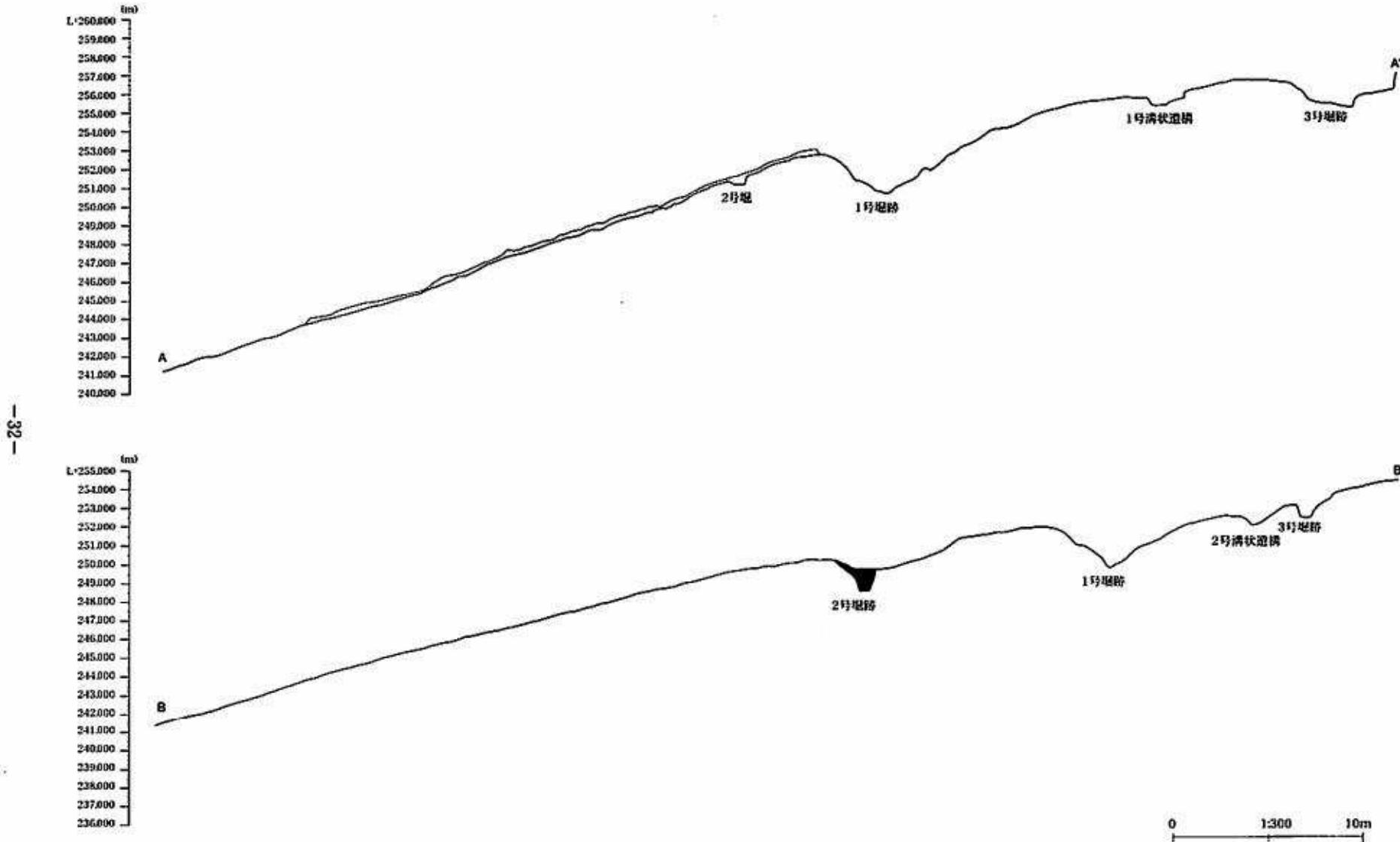
第17図 山根館跡の網張り図・造構配置図



第18図 山根館跡周辺の地籍図



第19図 館跡地形断面(1)



第20圖 館跡地形断面(2)

検出された遺構について（第17図）

今回検出された遺構は、普請の跡として、曲輪1箇所、堀跡6条、土塁2箇所、虎口1箇所があり、作事の跡として、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡7棟、焼土遺構7基、土坑20基、溝状遺構5条、柱穴状土坑81基がある。このうち土坑については、すべてが中世では無く、縄文時代の可能性があるものや近現代のものも含まれるが、まとめて本章で扱うこととする。

2. 曲輪（第17・21図、写真図版8）

曲輪3

遺構（第17・21図、写真図版8）

〈位置・検出状況〉 3F～5F・4Gグリッド付近に位置する。西側は1・2号堀跡、北側は3号堀跡が走り、南側は長内川に面する急斜面により画されている。現況は荒地・竹林で、曲輪の北側は表土直下Ⅲ層、南側と東側はⅣ層で、旧表土は曲輪西側の4Fグリッド付近で確認できたのみである。標高252～255mである。

〈規模・形態・機能〉 東西60m×南北60m、面積約1,460m²で、南側と東側に大きく張り出す三角形状である。館跡の縄張りから、高位面から3番目の曲輪と判断された。

〈普請・作事〉 本来の尾根の先端を切土して、平坦面を造っている。曲輪3における作事の痕跡としては、掘立柱建物跡・竪穴建物跡・焼土遺構・土坑・溝状遺構・柱穴群・整地層等が確認されている。整地層は、曲輪3の西側、虎口からの入口となる上橋付近を中心とする南北35m、東西5mに及び、曲輪3の端部に施されている。厚さは、35～50cm程あり、暗褐色～明褐色土層が堆積していた。整地層の北側において、整地層を切る柱穴群を検出しているが、門跡等を確認するには至らなかった。

〈埋土〉 虎口のある西側で整地層が確認されており、その下位に旧表土である黒色土が確認されている。

遺物 なし。

時期 中世後期15～16世紀代と考えられる。

3. 堀跡・土塁（第22～30図、写真図版8～13）

堀跡6条が確認されている。いずれも空堀で、薬研堀を基本的な形態としているが、作事の痕跡としては、それほど丁寧な造りではない。城域を区画する1・2号堀跡、曲輪2と曲輪3を区画する3号堀跡、虎口を画する4・6号堀跡があり、目的に応じた規模と形態を留めている。これら堀跡は、他の普請の痕跡と重複関係があることから、すべての堀跡が一時期に築かれたものではなく、堀の構築と館跡の規模には変遷が認められるようである。

土塁は2基確認されている。1・2号堀跡の間に築かれた土塁で、虎口を挟んで、北側は地山の削出し、南側は盛土によって造り出されている。2号堀跡の外側にも地山削り出しによる土塁があったようであるが、過半は失われている。

1号堀跡

遺構（第22・24図、写真図版10・11）

〈位置・検出状況〉 2E～6Eグリッドに位置する。曲輪3と土塁に挟まれた状態で、溝状の凹地として検出された。埋没しきらずに現在に至る。旧道として地元の住民に使用されていた。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・形態・方向〉 やや蛇行するが、ほぼ南北方向に最大長100m以上、実効幅20m、実効法高15mである。断面形状は薬研堀である。

〈普請〉 III層～IV・V層の基盤層を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は暗褐色土、下位は黄褐色土が主体である。自然堆積の様相を示す。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

2号堀跡

遺構 (第23・24図、写真図版10・11)

〈位置・検出状況〉 2D～7Eグリッドに位置する。城城の西側、土壁の外側に位置する。中央より北側は完全に埋没しきった状態で、南側の斜面に係る部分では若干の凹地として確認された。

〈重複関係〉 時期が異なるが、中央付近で1号集石遺構、南端で2号炭窯跡と重複する。いずれも2号堀跡が切られている。

〈規模・形態・方向〉 やや蛇行するが、ほぼ南北方向に最大長90m、実効堀幅12m、実効法高10mである。断面形状は薬研堀である。

〈普請〉 III層～IV・V層の基盤層を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は暗褐色土、下位は黄褐色土が主体である。自然堆積の様相を示す。

遺物 (第57・61図、写真図版33)

埴跡の中央付近、4Dグリッド、堀底の直上から銭貨10枚が出土している。

〈銭貨〉 10枚(61～70) 出土している。内訳は、開元通寶2枚(61・62)・皇宋通寶1枚(63)・治平元寶1枚(64)・熙寧元寶1枚(65)・元祐通寶1枚(66)・淳熙元寶1枚(67)・洪武通寶1枚(68)・永樂通寶2枚(69・70)である。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

3号堀跡

遺構 (第25・26図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉 2E・2F～3Eグリッドに位置する。曲輪3の北側に位置し、曲輪3と曲輪2を区画する堀跡である。現況では、完全に埋没しており、確認することはできなかった。

〈重複関係〉 6号堀跡と重複する。3号堀跡が切られている。

〈規模・形態・方向〉 調査区内で屈曲部が確認された。曲輪2・3を区切って南西方向に走る堀跡は、屈曲して、南東方向に走る。延長部が何処に走るかは不明であるが、東側の虎口に廻り込む可能性がある。検出した範囲では、長さ20m、実効堀幅3.5m、実効法高2.5mである。断面形状は薬研堀～箱薬研である。北端部の屈曲部に張り出し状になった部分がある。堀をつくった際の時間差を示すものかもしれない。

なお、調査範囲内においては、橋脚等を想定できる柱穴は周間に確認できていない。

〈普請〉 III層の基盤層を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は暗褐色土、中位・下位は黄褐色土が主体である。人為的に埋められた可能性もある。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

4号堀跡

遺構 (第27図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 4Eグリッドに位置する。虎口の南側に位置し、曲輪3と虎口を区画する。現況では、完全に埋没しており、確認することはできなかった。

〈重複関係〉 時期は異なるが、11号陥し穴状遺構と重複し、11号陥し穴状遺構を切っている。

〈規模・形態・方向〉 ほぼ東西方向に走る。最大長12m、実効堀幅2.8m、実効法高2mである。断面形状は楕円状を示す丸堀りである。斜面上位の堀幅が広く、斜面下位の堀幅が狭まる。

〈普請〉 Ⅲ層の地山を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は黒褐色土、中位・下位は褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

5号堀跡

遺構 (第29図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 3Dグリッドに位置する。土塁を横切るように東西方向に走る。現況では、若干の溝状の凹地として確認している。

〈重複関係〉 土塁と重複する。5号堀跡が古い可能性がある。

〈規模・形態・方向〉 ほぼ東西方向に走る。最大長さ4.5m、実効堀幅0.7m、実効法高1mである。断面形状は薬研堀を示す。

〈普請〉 Ⅲ層の地山を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は黒褐色土、下位は褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

6号堀跡

遺構 (第27・28図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉 3Eグリッドに位置する。虎口の北側から東側に廻る堀跡で、虎口と曲輪3を区画する。現況では、完全に埋没しており、確認することはできなかかった。

〈重複関係〉 3号堀跡と重複する。6号堀跡が新しい可能性がある。

〈規模・形態・方向〉 北側で東西方向に走り、北東端で屈曲し、南北に走る。最大長さ12m、実効堀幅2.5m、実効法高2mである。断面形状は、南側では薬研堀を示すが、北に行くほど鈍角になる。また、土橋と接する南端では、端に向かって少しずつ掘り方が緩い斜面状となり土橋へと続く。したがって、土橋の北側では6号堀跡との比高はほとんどない。

〈普請〉 Ⅲ層の地山を掘り込んで構築している。

〈埋土〉 上位は暗褐色土、下位は褐色土と黄褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

1号土塁 (北側)

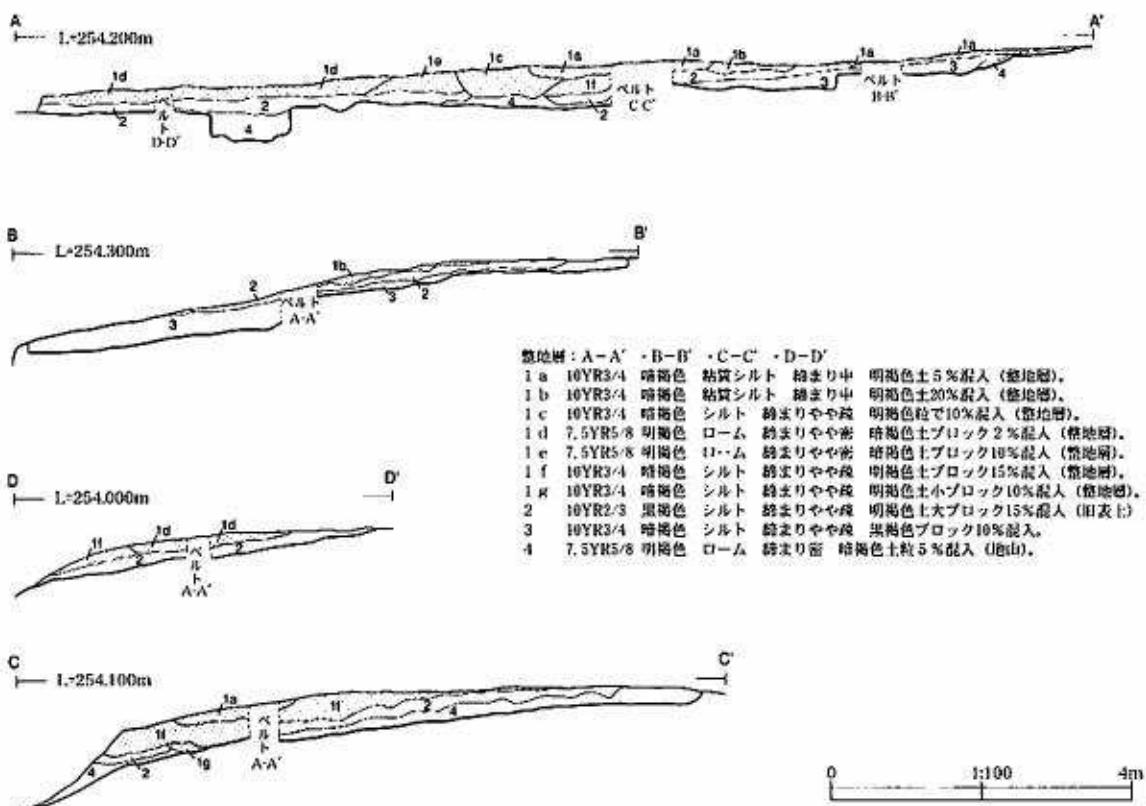
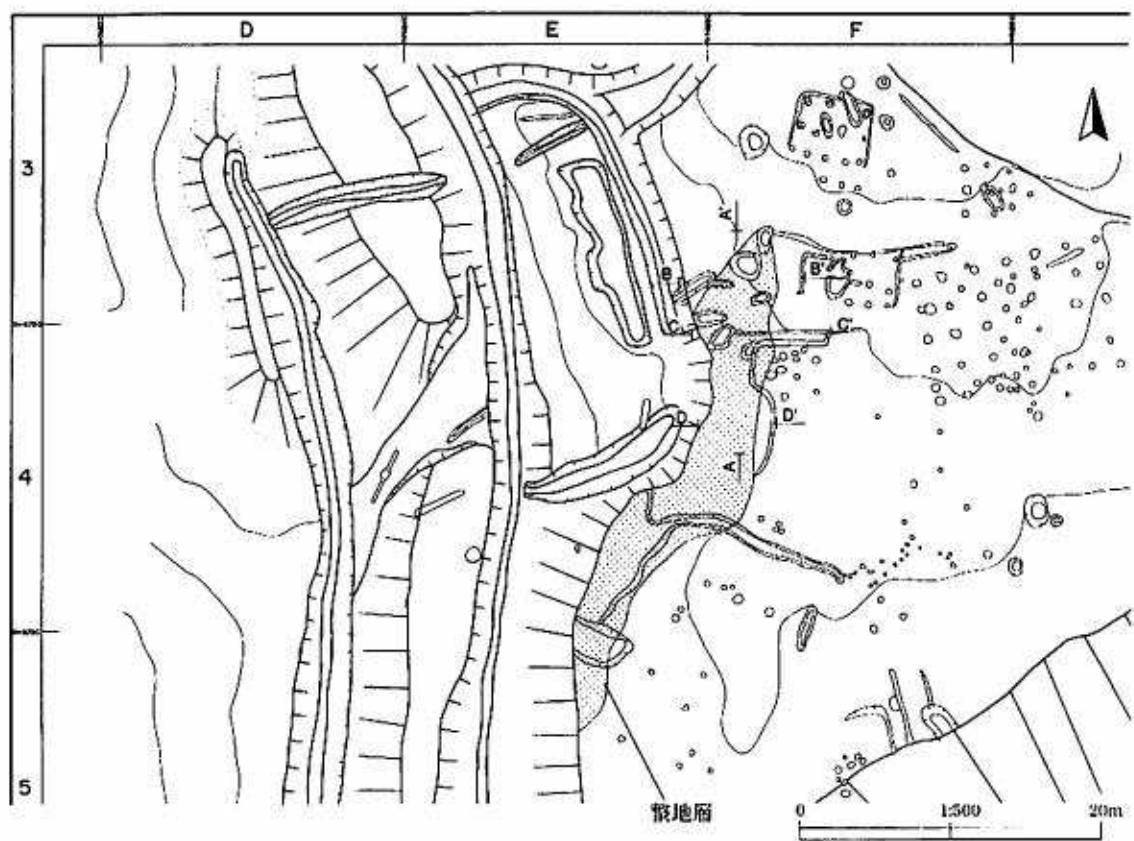
遺構 (第30図、写真図版8)

〈位置・検出状況〉 3D・3Eグリッド付近。現況で1・2号堀跡に挟まれた高まりとして確認された。

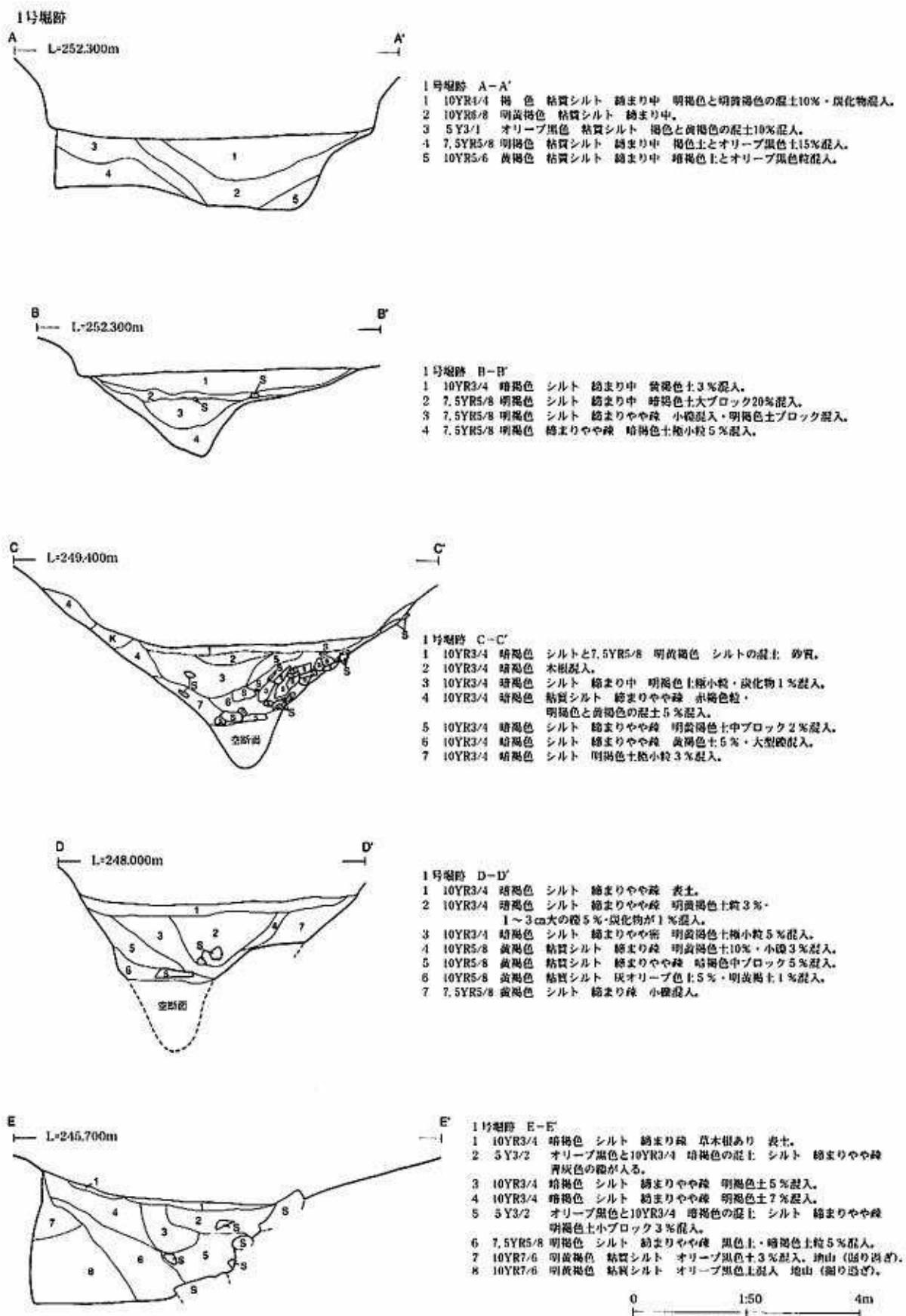
〈重複関係〉 5号堀跡と重複する。土塁が新しい可能性がある。

〈規模・形態・方向〉 最大長40m、最大幅10m、最大高2.5mである。ほぼ南北に走り、北側は1・2号堀跡が合流する箇所で自然に消滅する。南側は虎口からの通路を設けることにより切土されている。

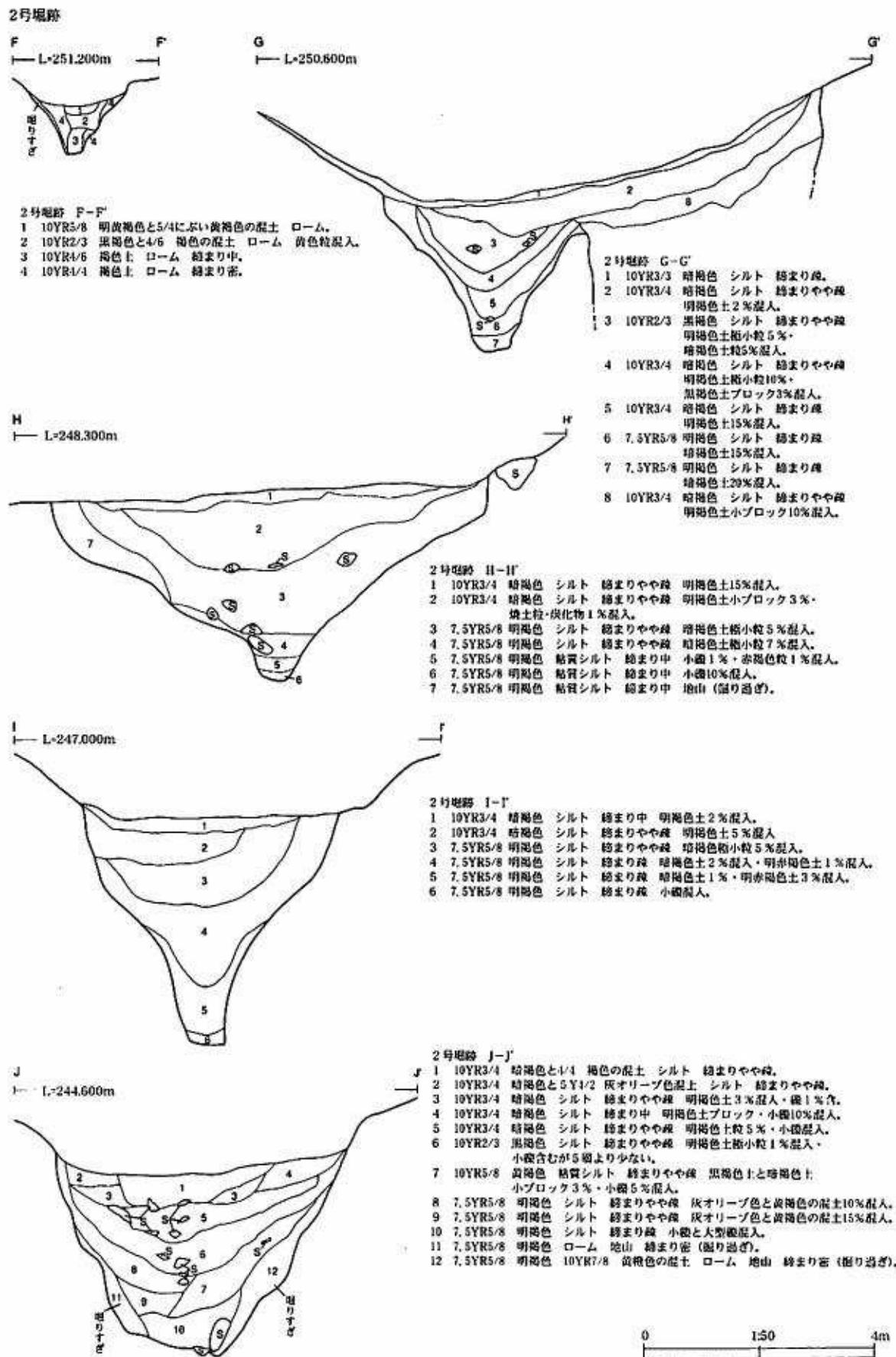
〈普請・埋土〉 Ⅲ層の地山を削り出して造られている。



第21図 曲輪3西側の整地層



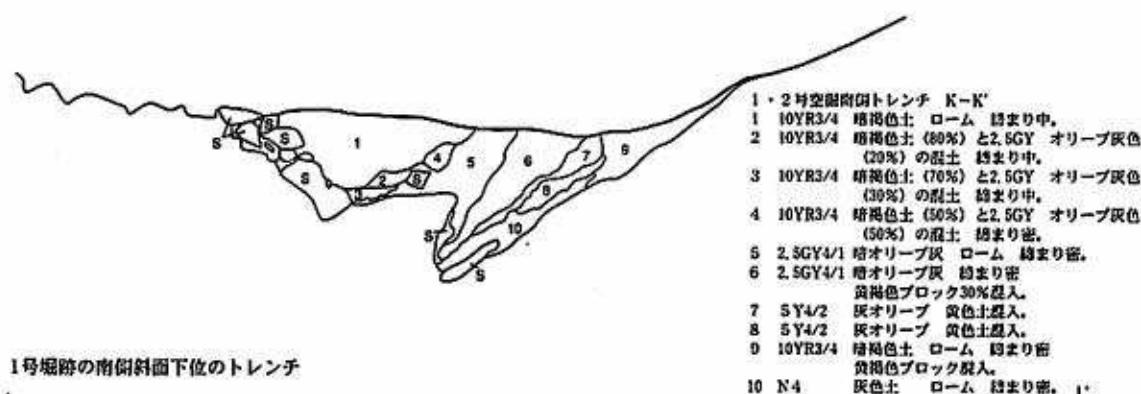
第22図 堀跡(1)



第23図 堀跡(2)

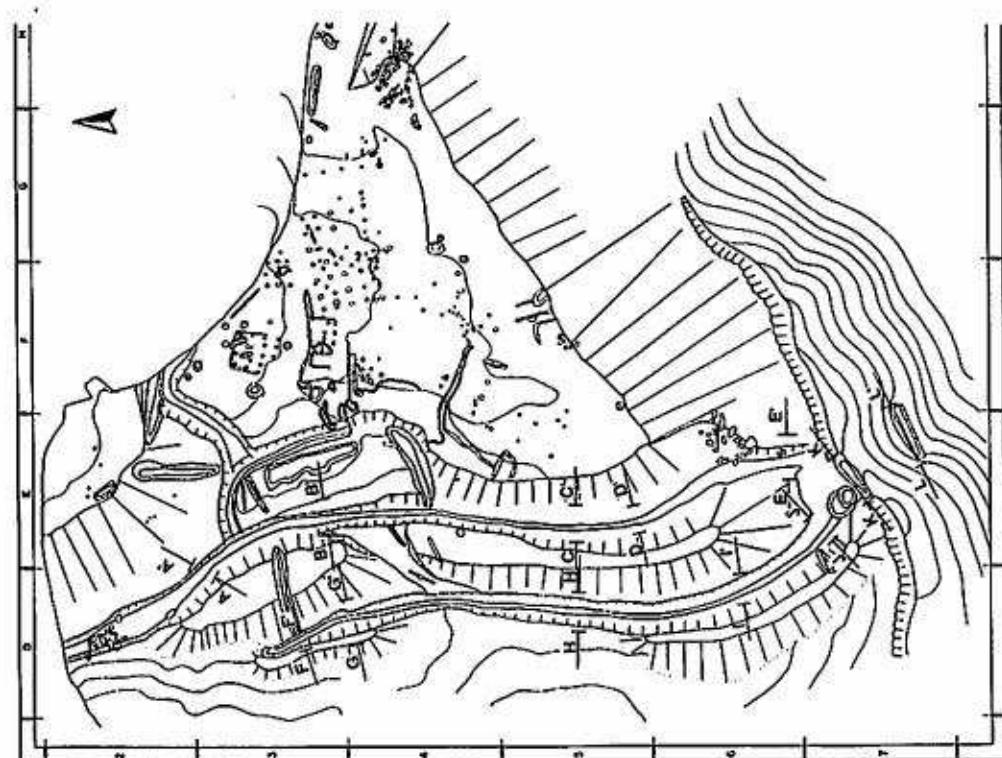
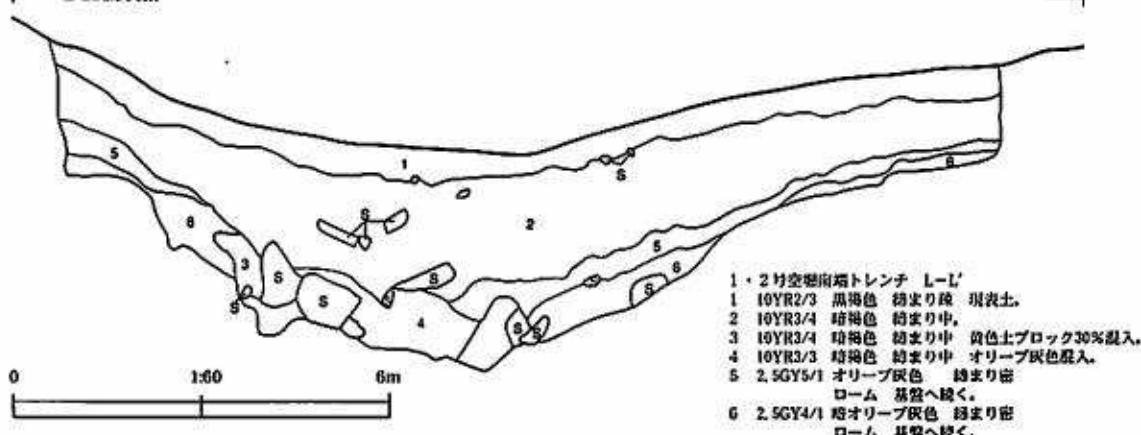
1号堀跡の南側斜面上位のトレンチ

K
L=243.000m



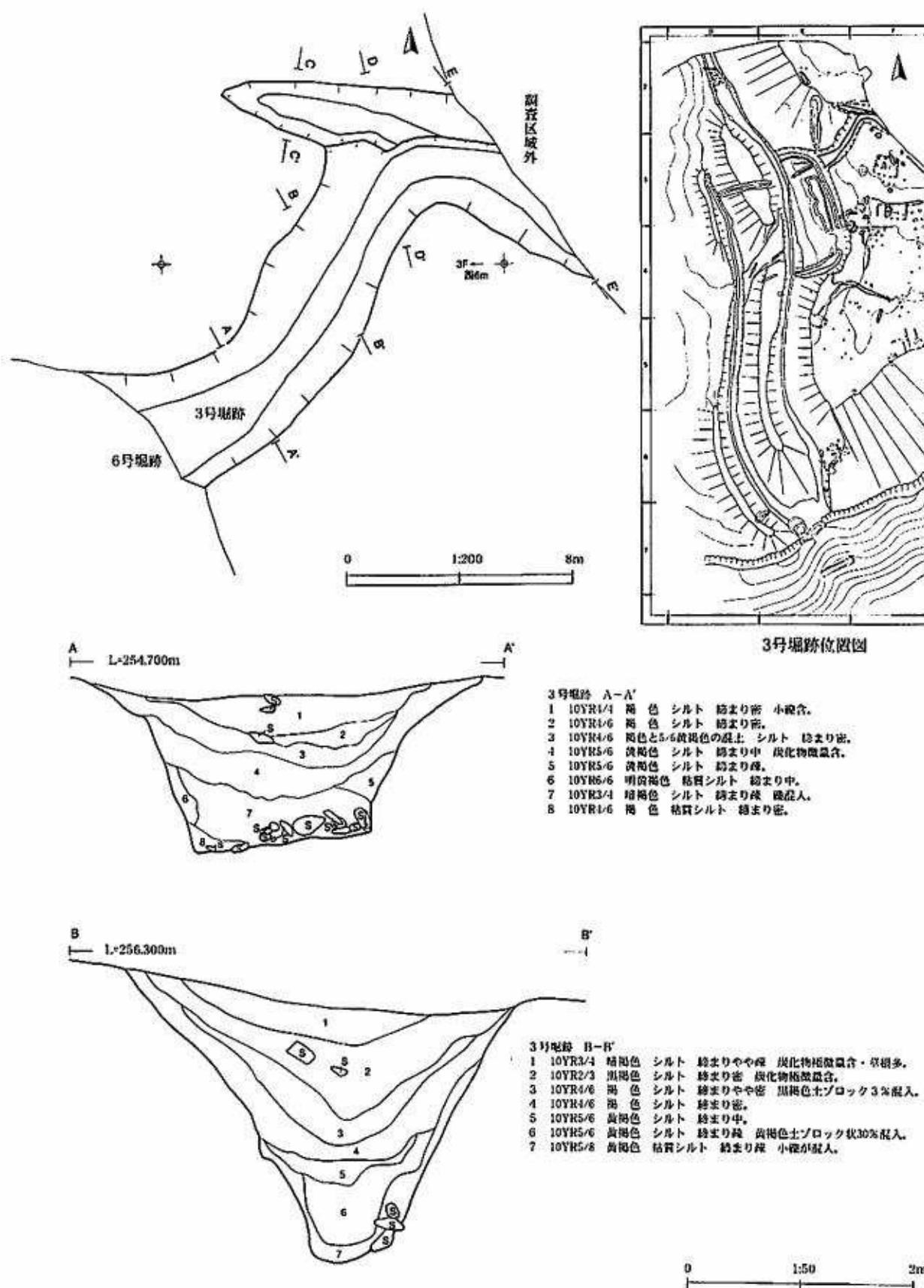
1号堀跡の南側斜面下位のトレンチ

L
L=238.500m



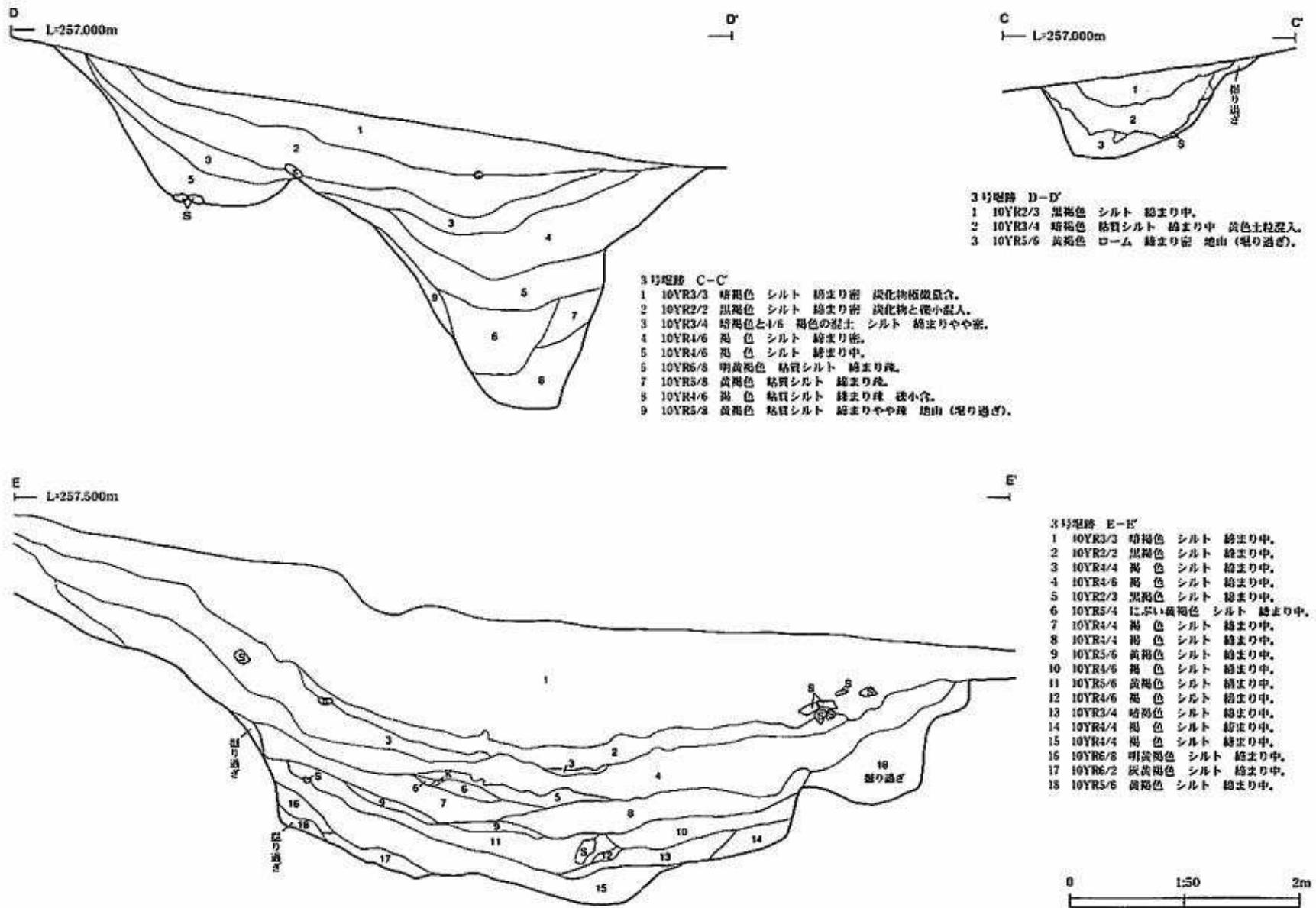
1号・2号堀跡の位置図

第24図 堀跡(3)

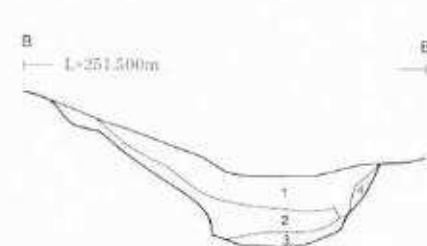
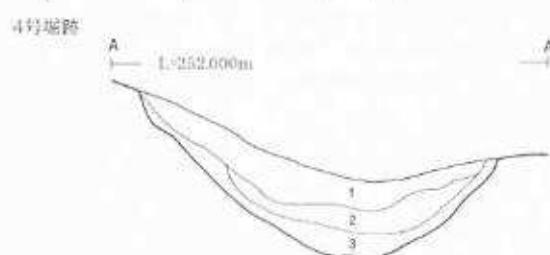
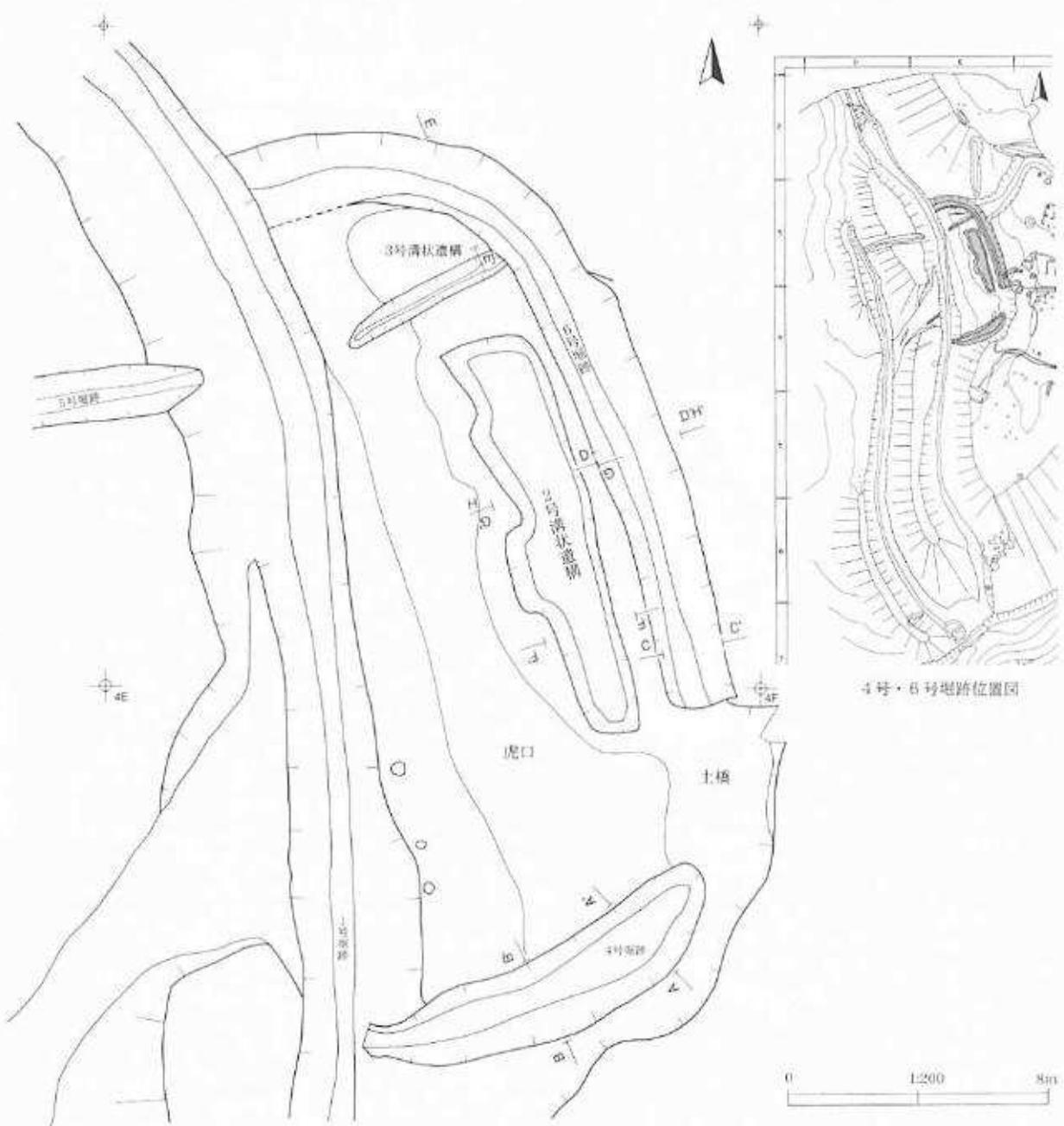


第25図 堀跡(4)

3号堀跡



第26図 堀跡(5)



4号堀跡 A-A'

1 10YR2/3 黒褐色 シルト 粘土りやや面 黄褐色土ブロック30%混入、炭化物が確認量少。
 2 10YR4/4 黒 色 シルト 粘土り密 黄褐色土ブロック25%混入。
 3 10YR4/6 黒色と4/4 黑色の混土ローム 粘土り密 黄褐色土ブロック10%混入。

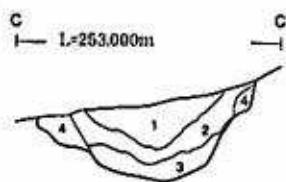
4号堀跡 B-B'

1 10YR3/4 増褐色 シルト 粘土り密 黃褐色ブロック20%混入。
 2 10YR4/4 黒 色 ローム 粘土り密 黄褐色土ブロック30%混入。
 3 10YR1/0 黒 色 ローム 粘土り密。
 4 10YR4/6 黄褐色 ローム 粘土り中 地山(断り過ぎ)。

0 150 2m

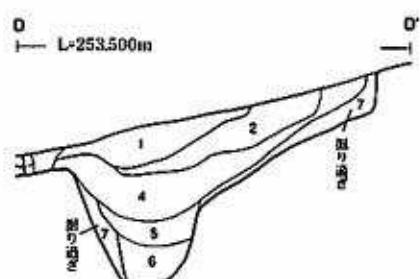
第27図 堀跡(6)

6号堤跡



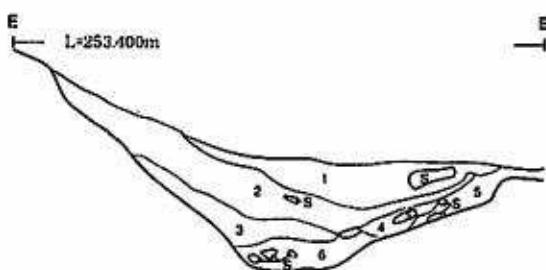
6号堤跡 C-C'

- 1 10YR3/4 喀褐色 シルト 黄褐色・黒褐色土ブロック3%混入。
- 2 10YR3/3 喀褐色 シルト 黄色土ブロック3%混入。
- 3 10YR3/2 喀褐色 シルト 黑褐色・黄色土粒3%混入。
- 4 10YR5/6 黄褐色 シルト 黄色土粒混入 地山(盛り過ぎ)。



6号堤跡 D-D'

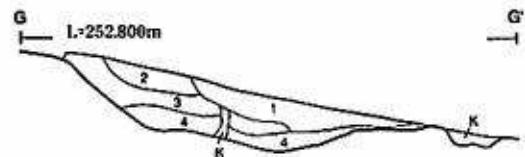
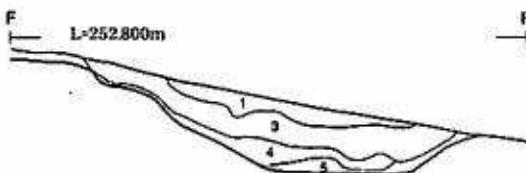
- 1 10YR3/3 喀褐色 シルト 細まり密 塗化物微量混合。
- 2 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まり密 黑褐色土ブロック3%混入。
- 3 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まりやや密 明褐色土板小ブロック10%・炭化物1%混入。
- 4 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まり中。
- 5 10YR4/4 暗褐色 シルト 細まり中。
- 6 10YR4/4 暗褐色 シルト 細まりやや密 黑褐色と褐色ブロック混入。
- 7 10YR4/6 暗褐色 ローム 細まり密 地山(盛り過ぎ)。



6号堤跡 E-E'

- 1 10YR3/4 喀褐色と2/3 黑褐色の混土 シルト 細まりやや密 褐色土ブロック20%・炭化物微量混入。
- 2 10YR5/8 黄褐色 シルト 細まり密。
- 3 10YR4/6 暗褐色 シルト 細まり密。
- 4 10YR5/6 喀褐色 シルト 細まり密 小石を多數含。
- 5 10YR1/6 暗褐色 粘質シルト 細まり密。
- 6 10YR5/8 喀褐色 粘質シルト 細まり密。

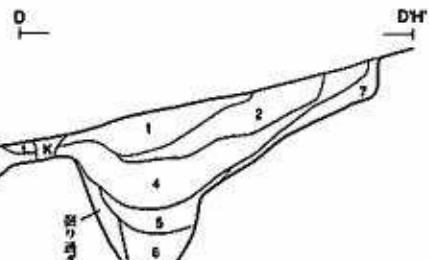
2号溝状造構



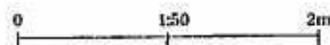
2号溝状造構 F-F'・G-G'

- 1 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まりやや密 明褐色土板小粒10%・黒褐色土板小粒2%混入。
- 2 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まりやや密 明褐色土板小粒10%混入。
- 3 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まりやや密 明褐色土ブロック10%・炭化物1%混入。
- 4 10YR3/4 喀褐色 シルト 細まりやや密 明褐色中～大ブロック20%混入。
- 5 10YR5/8 明褐色 粘質シルト 細まり中 精緻化土板小粒2%混入。

H L=253.500m

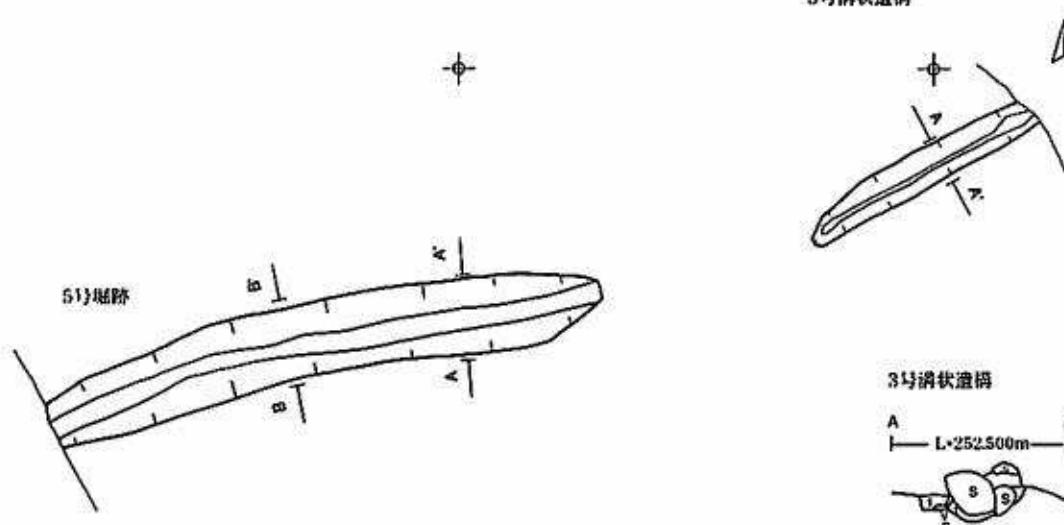


堆上層はD-D'と共に

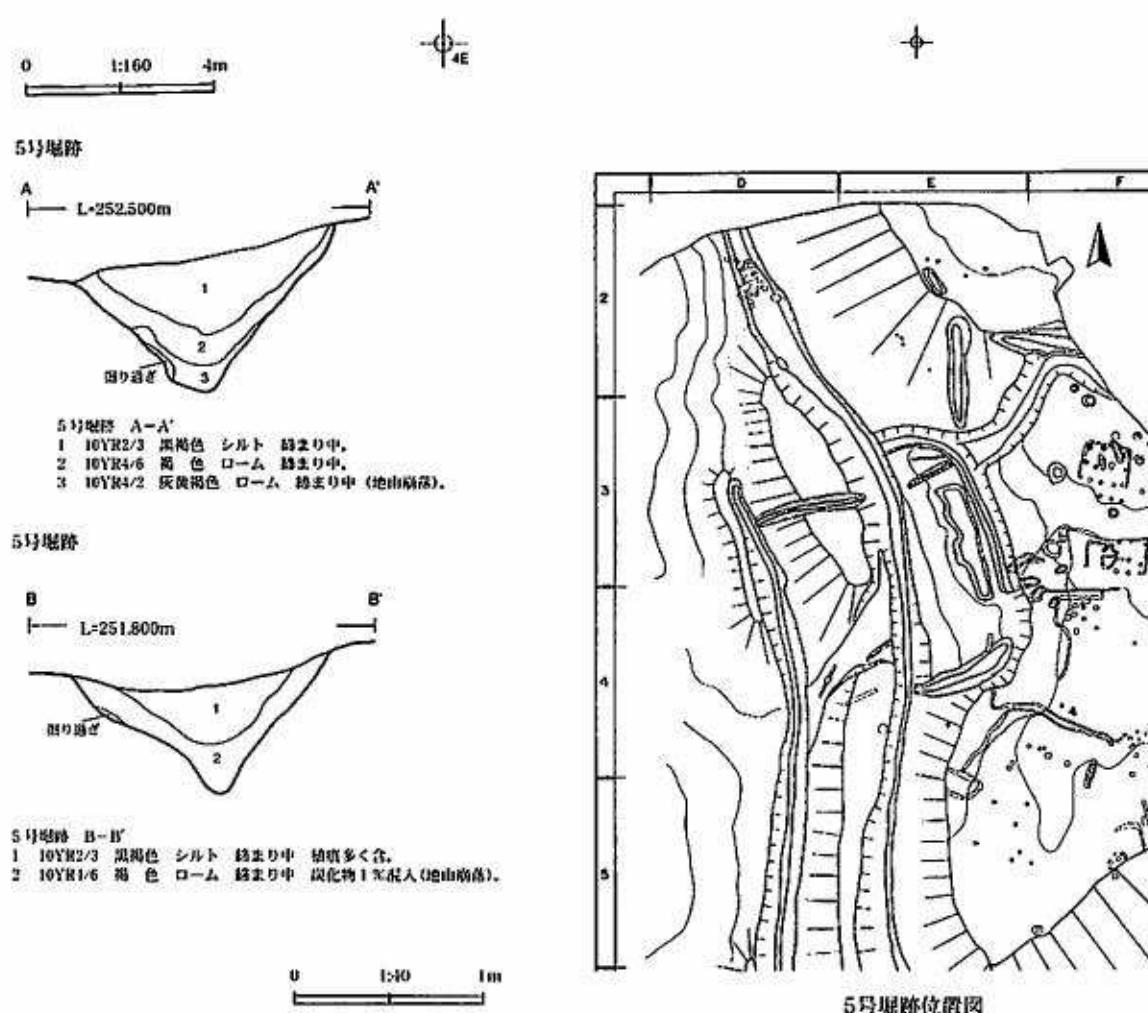


第28図 堤跡(7)

3号溝状造構



3号溝状造構 A-A'
1 10YR3/3 基褐色 シルト 粒より中 塩化物極微量含。



5号堀跡位置図

第29図 堀跡(8)

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と考えられる。1・2号堀跡と同時期である。

2号土塁（南側）

遺構（第30図、写真図版8）

（位置・検出状況）4E～6Eグリッド付近。現況で、1・2号堀跡に挟まれた高まりとして検出された。

（重複関係）12号陥し穴状遺構、6号土坑を切る。

（規模・形態・方向）最大長60m、最大幅10m、ほぼ南北方向に走る。北側は虎口で切土され、南側は1・2号堀跡が合流する付近で消滅する。

（普請）盛土して築かれている。盛土の高さは1.5～2.5mで、南側ほど高くなる。標高の低い南側により多くの盛土が施されたと考えられる。盛土は褐色～黄褐色土が主体でⅢ層起源の地山土であり、堀を掘り上げた残土を盛ったと考えられる。なお、断面観察によると、盛土は地山直上に施されており、旧表土を確認することができなかった。盛土する際に土塁を構築する箇所を一度地山まで削り、整地した後に盛土している可能性が高い。

遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と考えられる。1・2号堀跡と同時期である。

4. 虎口（第31図、写真図版9）

曲輪3の西側で1箇所検出された。

虎口

遺構（第31図、写真図版9）

（位置・検出状況）3E・4Eグリッド付近。現況で曲輪3の西側にある凹地として確認され、奥の山林に至る旧道上に位置していた。なお、虎口を囲む4号・6号堀跡は埋没しきっていた。

（重複関係）なし。

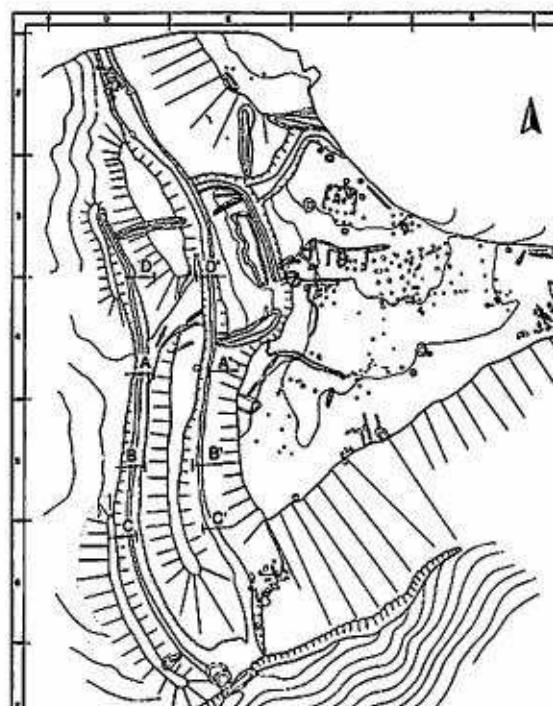
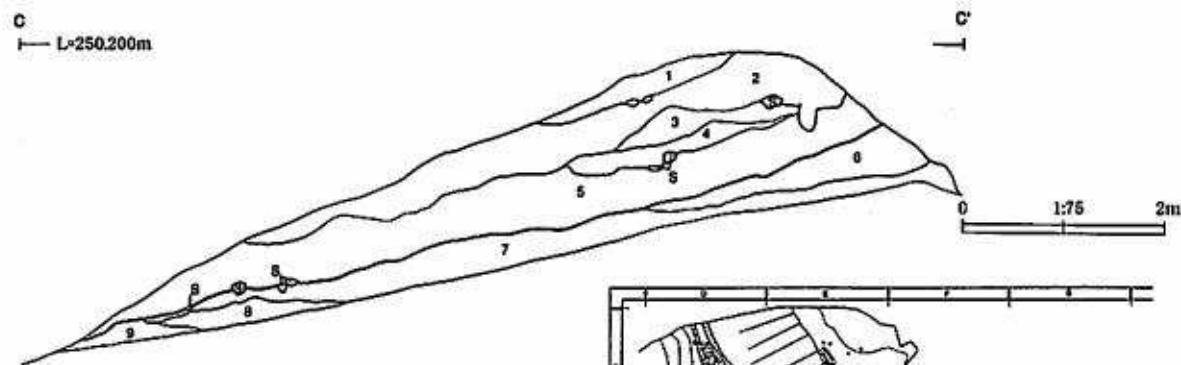
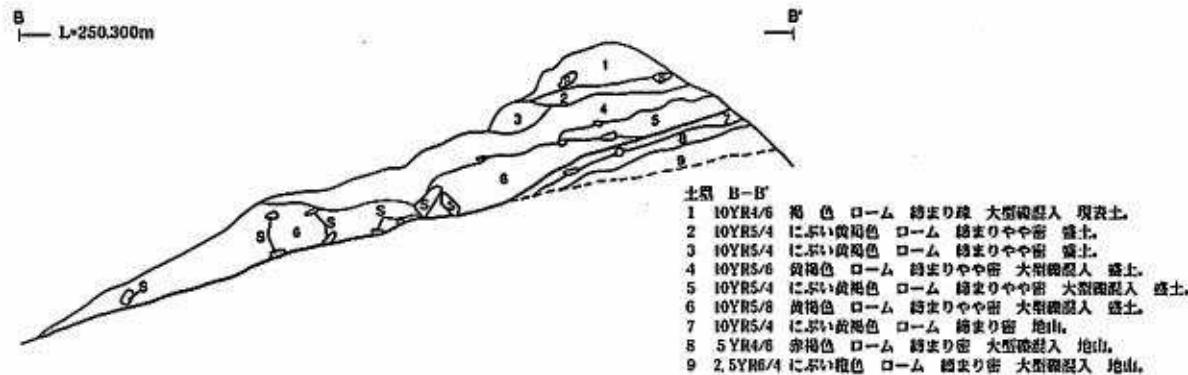
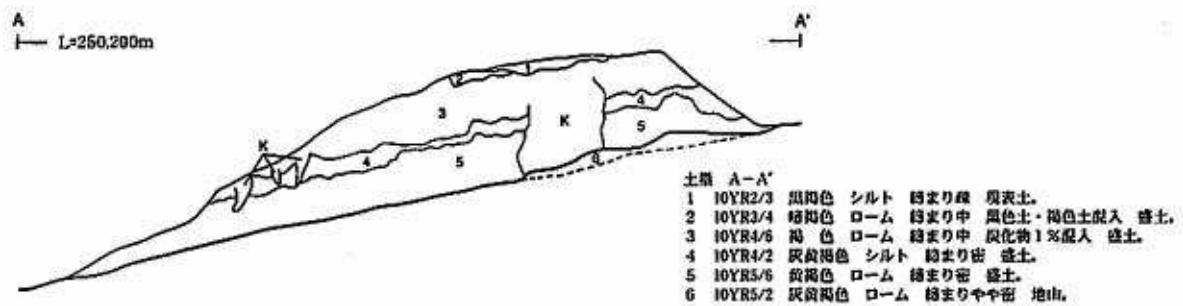
（規模・形態・方向）南北23m、東西8mで、西側にやや開く台形状を呈する。面積180m²である。曲輪3の西側にあり、西側の二重の堀（1・2号堀跡）への出入り口である。虎口の北側は曲輪2が比高4m、南側は曲輪3が比高2mで位置し、上位の曲輪から虎口に進入してきた敵に対して横矢掛けを意図した造りとなっている。

（普請・作事）Ⅲ層を削って造られている。虎口と曲輪3は、4・6号堀跡で仕切られているが、虎口の南東端において土橋で結ばれている。土橋の長さは約2m、幅は約4.6mほどである。この地点において虎口側と曲輪3の比高は2mほどであるが、階段状の施設は確認されていない。また、西側の1号堀跡に面して柱穴3基が検出されている。目隠し塙の痕跡の可能性がある。また、2号溝状遺構が虎口内に造られている。進入路は、塙・土堀に対して斜位に築かれている通路から、北側を迂回して南東端の土橋に至る経路が想定される。虎口そのものは、曲輪3に食い込むように位置どりされており、いわゆる内耕形の形態を取っている。

（埋土・堆積状況）黒褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

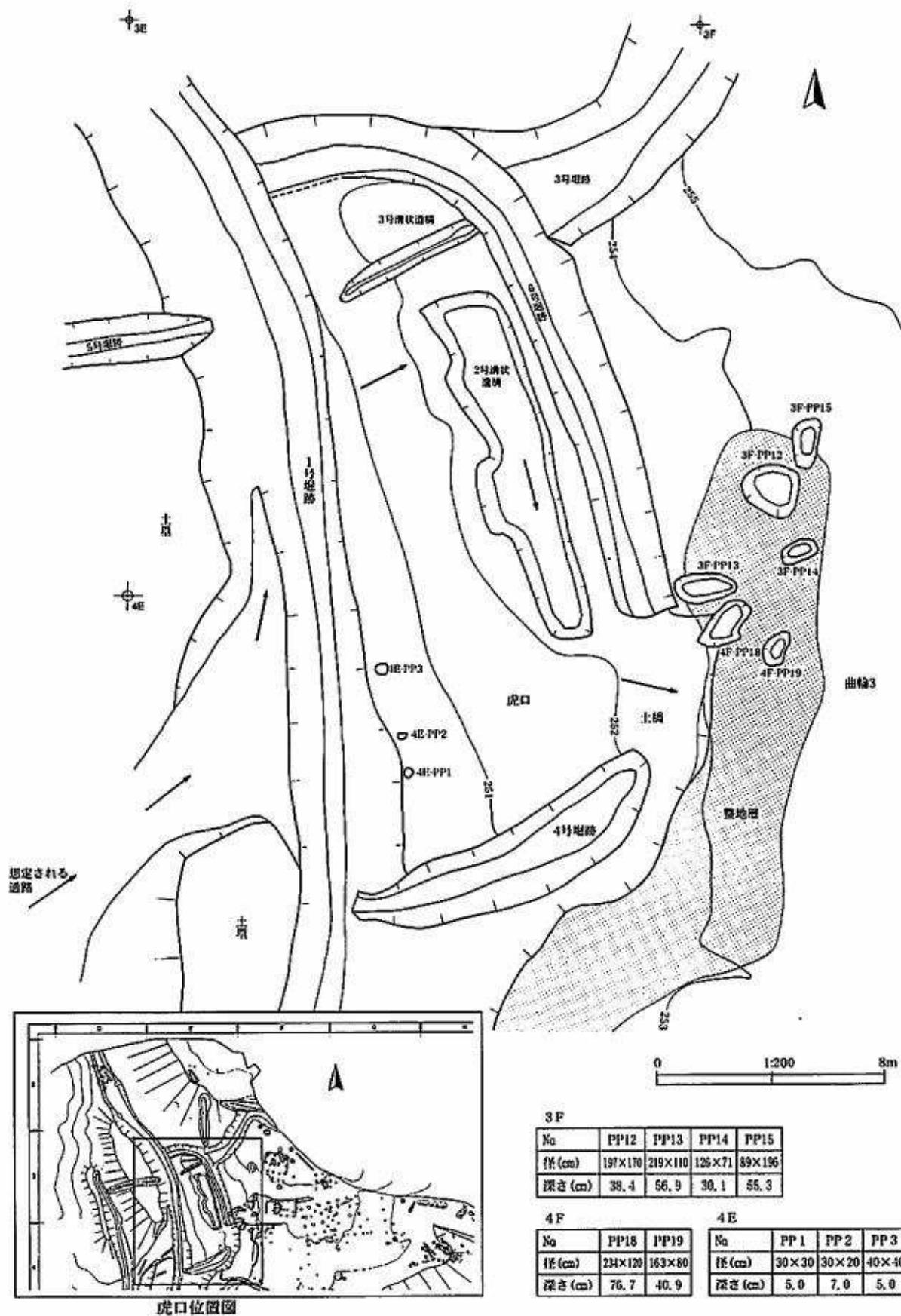
遺物 なし。

時期 中世後期16世紀代と思われる。



土壤位置図 ※D-D'は写真のみ

第30図 土 垠



第31図 虎 口

5. 掘立柱建物跡（第32図、写真図版14）

堀立柱建物跡が1棟検出されている。曲輪3のほぼ中央に位置し、倉庫あるいは物見櫓などの用途が考えられるもので、館跡に伴うものである。

1号掘立柱建物跡

遺構（第32図、写真図版14）

〈位置・検出状況〉 3F・4FLグリッド付近。曲輪3のほぼ中央付近に位置する。個々の柱穴は、Ⅲ層上面で黒色～黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉 PP16が6号竪穴建物跡の2号炉跡と重複する。PP16が切られており、旧い。

〈平面型式・規模〉 総柱の建物跡で、桁行4間×梁間3間である。桁行き方向は8.0m、梁間は6.2mである。

〈建物方位〉 桁行き方向はN-12°-Eで、大局的には南北棟である。

〈柱間寸法〉 PP1～PP20の20基が検出された。規模は径36～65cm、深さ37～90cmである。柱間は、180(6尺)～210(7尺)で、平均すると、200cm(6尺3寸)である。

〈付属施設〉 なし。

〈建物の性格〉 物見櫓あるいは倉庫等の用途が考えられる。

遺物（第57・61図、写真図版33）

〈出土状況〉 PP11埋土から砥石、PP16埋土から銭貨が出土している。

〈石器〉 砥石(71)。

〈銭貨〉 大觀通寶(71)。

時期 中世後期に属するものと思われる。

6. 竪穴建物跡（第33～38図、写真図版15～19）

竪穴建物跡が7棟検出されている。うち6棟は曲輪3にあり、1棟は城域外の調査区南西側に位置している。なお、曲輪3にある6棟は、いずれも館跡に伴うものである。ただし、6棟中4棟は当初、焼土遺構として処理していたが再精査を行い、周辺に柱穴状土坑を確認できたことから、竪穴建物跡として報告するものである。調査区西側の1棟については、近世以降の可能性もある。以下、個々に詳述するが、個々の建物跡の規模・形状などの特徴については、第6表 竪穴建物跡観察表を参照されたい。

1号竪穴建物跡

遺構（第33図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉 3Fグリッドに位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりとして検出した。曲輪3の北側に位置する。

〈重複関係〉 2号陥し穴状遺構・3号陥し穴状遺構と重複し、1号竪穴建物跡が切っている。

〈規模・平面形〉 5.15×4.55m。平面形は方形である。斜面下位にあたる南側は甃を確認できていない。

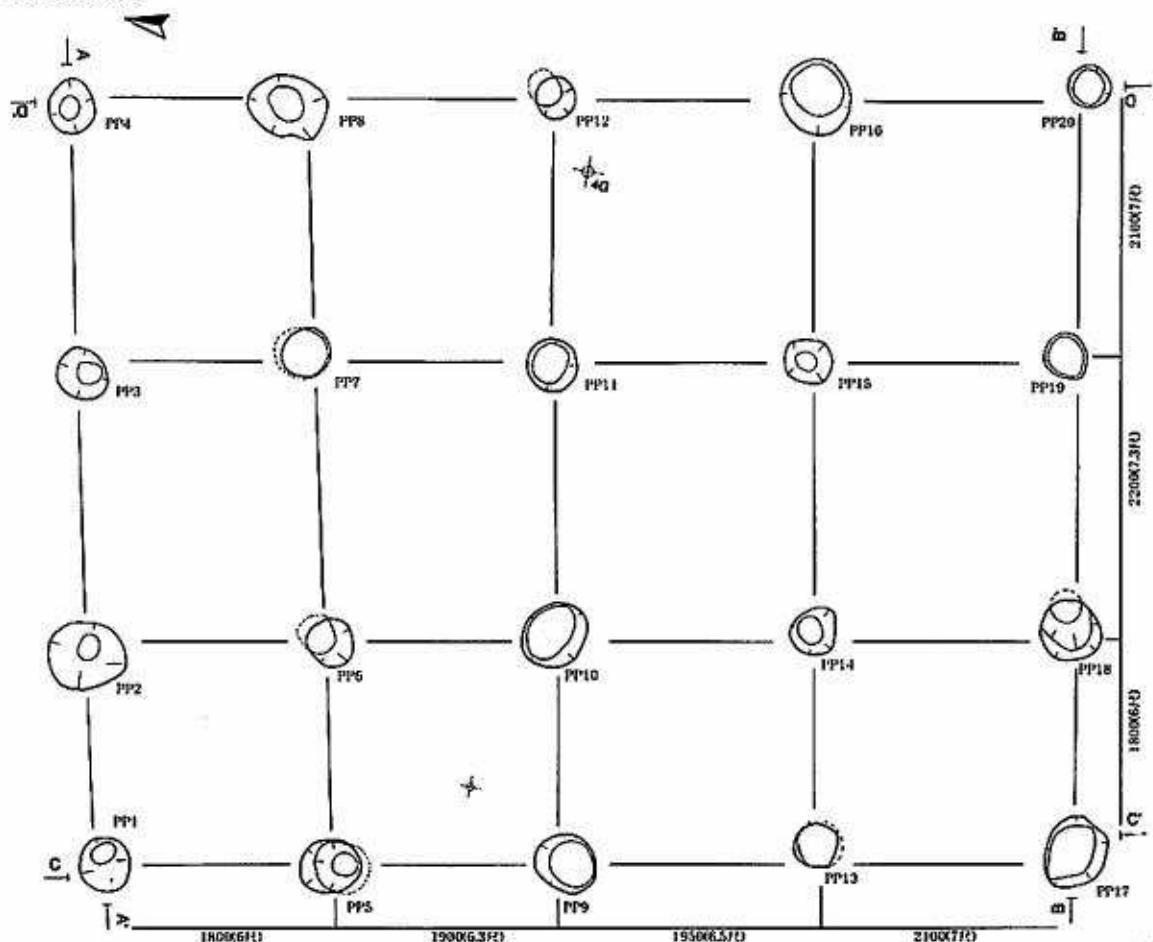
〈埋土・堆積状況〉 暗褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

〈壁・床面〉 Ⅲ層を掘り込み壁・床としている。残存する壁高は北側で30cmあり、外傾する。床面はほぼ平坦である。斜面上位にあたる北側には幅20cm、深さ6cmの周溝が廻る。南側では確認できなかった。

〈柱穴〉 PP1～17の17基を検出した。壁際にPP1～14が廻る。PP9とPP10、PP2とPP13は重複している。柱穴の規模は、径40cm、深さ60cm前後を示す。柱間は1.5～1.7mである。

〈炉〉 住居内に2基の地床が検出した。東側の1基は径45×40cmでほぼ円形を呈する。焼土の厚さは最大8cmである。西側の1基は径74×50cmでほぼ円形を呈する。焼土の厚さは最大で8cmである。このふたつの

1号掘立柱建物跡



1号掘立柱建物跡

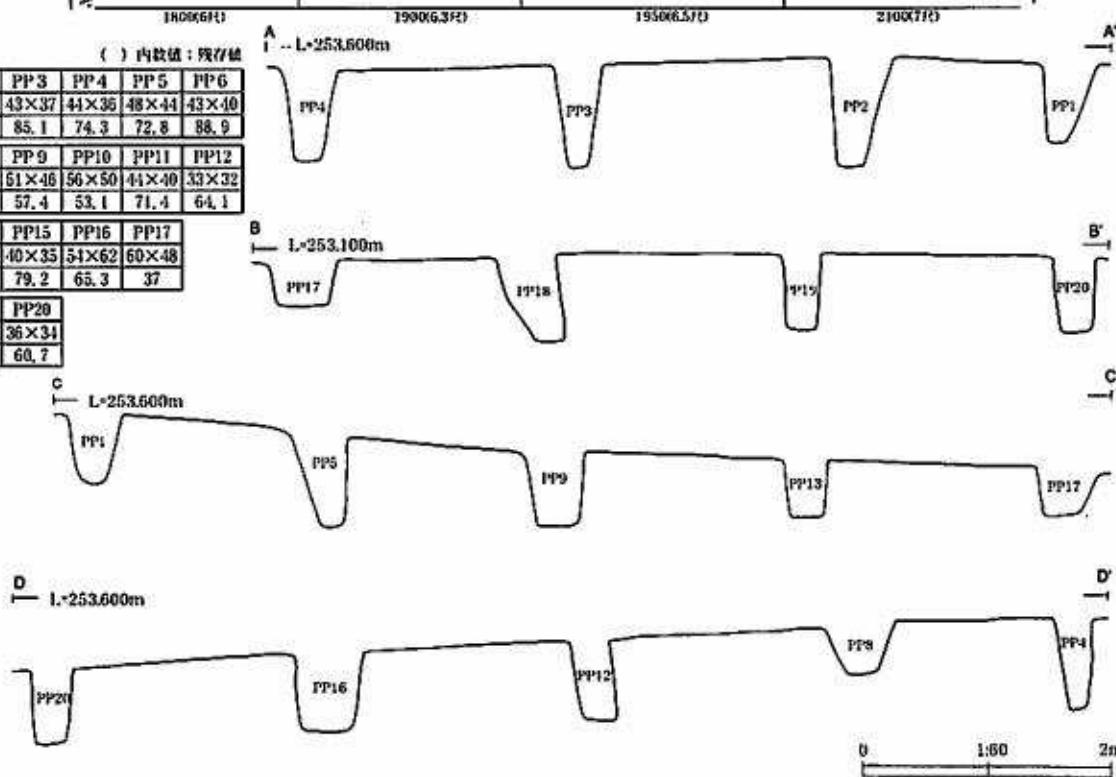
() 内数値：既存壁

No.	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6
幅(cm)	45×44	65×54	43×37	41×36	48×44	43×46
深さ(cm)	63.4	90.1	85.1	74.3	72.8	88.9

No.	PP 7	PP 8	PP 9	PP10	PP11	PP12
幅(cm)	40×36	63×48	51×46	56×50	44×40	33×32
深さ(cm)	77.5	42.2	57.4	53.1	71.4	64.1

No.	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17
幅(cm)	35×32	40×35	40×35	51×62	60×48
深さ(cm)	40.0	57.5	79.2	65.3	37

No.	PP18	PP19	PP20
幅(cm)	52×50	40×36	36×34
深さ(cm)	70.8	63.1	60.7



第32図 1号掘立柱建物跡

焼土の火床面には、10cmの高低差があり、二つの炉の使用には時間差があった可能性がある。その場合、建物の建替や拡張等が行われた可能性があるが、その痕跡を明確に確認することはできなかった。

（その他の施設）斜面下位の南側に柱穴 P P 15～17が張り出している。入り口状施設の可能性がある。

遺物（第57・59・62図、写真図版31・34）

（出土状況）埋土から陶磁器片1点と錢貨2枚が出土している。

（陶磁器）染付（22）。

（錢貨）皇宋通寶（72）、洪（武通寶）？（73）。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

2号竪穴建物跡

遺構（第34図、写真図版16）

（位置・検出状況）3Fグリッドに位置する。II層上面で暗色土の広がりとして検出した。曲輪3の西側に位置する。

（重複関係）なし。

（規模・平面形）径3.5×3.35m。平面形は方形を呈する。

（埋土・堆積状況）暗褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

（壁・床面）III層を掘り込んでいる。北側に残存する壁高は約20cmで、ほぼ直立する。床面はIII層を掘り込んで造られている。部分的に黄色土ロームで固く締まった部分があり、一部貼床が施されていたようである。貼床の下位から遺構は確認できていない。

（柱穴）P P 1～P P 9の9基を検出した。建物跡中央にP P 1が位置し、P P 2～P P 9が壁際に位置する。P P 1が径48×38cm、深さ54.1cmで、壁際の柱穴よりひと回り大きい。壁際の柱穴の規模は、径20～40cm、深さ30～50cmで、柱間の距離は約1.5mである。

（炉）住居のほぼ中央から西寄りのP P 1とP P 8の間に地床炉がある。径63×48cm、焼土の厚さは最大6cmである。

（その他の施設）なし。

遺物（第57・60・62図、写真図版32・34）

（出土状況）埋土から金属製品1点・錢貨2枚が出土している。

（金属製品）釘？（41）。

（錢貨）治平通寶（74）、無文銭（75）。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

3号竪穴建物跡

遺構（第35図、写真図版17）

（位置・検出状況）3Fグリッドに位置する。曲輪3の北側に位置する。III層で焼土を検出し、焼土遺構として精査したが、その後、周囲で柱穴を確認できたことから竪穴建物跡として再精査したものである。

（重複関係）攪乱を受けているが、旧い遺構との重複関係はない。

（規模・平面形）推定で径3.5×3.8m以上。平面形は方形基調と推定されるが、やや歪みがある。

（埋土・堆積状況）不明である。

（壁・床面）壁は立ち上がりが確認できず、不明である。床はIII層を掘り込んで平坦につくられている。

（柱穴）P P 1～P P 11の11基を検出した。建物跡中央にP P 11が位置し、P P 1～P P 10が壁際に位置する。P P 11が壁際の柱穴よりひと回り大きい。壁際の柱穴の規模は、径25～35cm、深さ40～70cmで、柱間の

距離は約1.5～2mである。

〈炉〉住居のほぼ中央で、PP4とPP11の間、PP9とPP11の間に2基の地床炉が確認された。規模は、径40～30cm、焼土の厚さは最大5～10cmと近似する。

〈その他の施設〉なし。

遺物（第57・62図、写真図版34）

（出土状況）住居跡付近から錢貨2枚が出土している。

（錢貨）天禧通寶（76）、洪武通寶（77）。

時期 中世後期16世紀代と思われる。

4号竪穴建物跡

遺構

〈位置・検出状況〉3Gグリッドに位置する。曲輪3の中央やや南側に位置する。Ⅲ層で焼土を検出し、焼土遺構として精査したが、再精査を行った結果、周囲に柱穴状土坑が検出されたことから、竪穴建物跡と認識した。

〈重複関係〉6号竪穴建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模・平面形〉推定で3m以上。平面形は不明だが、やや歪みがある。

〈埋土・堆積状況〉不明である。

〈壁・床面〉壁は不明である。床面はⅢ層を掘り込んでほぼ平坦に造られている。

〈柱穴〉炉の周囲にPP1～7を検出した。径20～30cm、深さ30～60cmとばらつきがある。

〈炉〉地床炉が2基検出された。規模は径50～35cm、焼土の厚さは最大5cmほどである。

〈その他の施設〉なし。

遺物 出土していない。

時期 時期を決定できる遺物がないが、中世後期と思われる。

5号竪穴建物跡

遺構（第37図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉4Fグリッドに位置する。曲輪3の西側に位置する。Ⅱb層で焼土を確認した。当初、焼土遺構として処理していたが、再精査を行い、周囲に柱穴を確認できたことから竪穴建物跡と確認した。

〈重複関係〉なし。

〈規模・平面形〉推定で径3.3m以上。平面形は不明である。

〈埋土・堆積状況〉不明である。

〈壁・床面〉壁は不明である。床はⅡb層の黒色土中に設けられて、ほぼ平坦である。

〈柱穴〉PP1～6が検出された。PP2・3・4・5が主柱穴を構成するものと思われが、大きさにはばらつきがある。柱間は2～2.5mとやや広い。

〈炉〉地床炉が1基確認された。規模は、径50～43cm、焼土の厚さは最大6cmである。

〈その他の施設〉なし。

遺物 出土していない。

時期 時期を決定できる遺物はないが、中世後期と思われる。

6号竪穴建物跡

遺構（第36図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉4Gグリッドに位置する。曲輪3の南側に位置する。Ⅲ層で焼土を検出し、焼土遺構と

して精査したが、再精査を行った結果、周囲に柱穴を確認できることから竪穴建物跡と認識した。

（重複関係）4号竪穴建物跡と重複する。新旧関係は不明である。また、炉跡2が1号掘立柱建物跡・PP16と重複する。炉跡の方が新しい。1号掘立柱建物跡→6号竪穴建物跡の関係がある。

（規模・平面形）推定で3.0m以上。平面形は不明である。

（埋土・堆積状況）不明である。

（壁・床面）壁は不明である。床はⅢ層を掘り込んでつくられているようである。

（柱穴）炉の周囲にPP8～17を検出された。径20～25cm前後、深さ20cm前後のものが多い。

（か）地床炉が2基検出された。規模は径25～35cm、厚さ5cmほどである。

（その他の施設）なし。

遺物 出土していない。

時期 時期を決定できる遺物がないが、中世後期と思われる。

7号竪穴建物跡

遺構（第38図、写真図版19）

（位置・検出状況）7Dグリッドに位置する。調査区西側で、堀外部地区に位置する。

（重複関係）なし。

（規模・平面形）径4.8×5.8m以上。方形基調である。

（埋土・堆積状況）暗褐色土を主体とする。

（壁・床面）壁はⅢ層を掘り込んでつくられており、残存する北壁で高さ50cmである。床面はⅢ層を掘り込んでつくられており、やや凸凹があり、礫が露出している。

（柱穴）10基を検出した。西壁際に壁柱穴があるが、東側は判然としない。

（炉）検出された住居内のはぼ中央に3基の地床炉を検出した。円形基調であるが不整形で、径25～40cm、燒土の厚さは2～7cmである。

（その他の施設）竪穴内に土坑を2基確認した。土坑1は、不整形で規模は径110×80cm、深さ30cm、土坑2は、不整な楕円形で規模は、径180×90cm、深さ75cmである。

遺物（第62図、写真図版34）

（出土状況）埋土から不明鉄片（付鉤轍）・銭貨が出土している。

（銭貨）寛永通寶（78・79）。

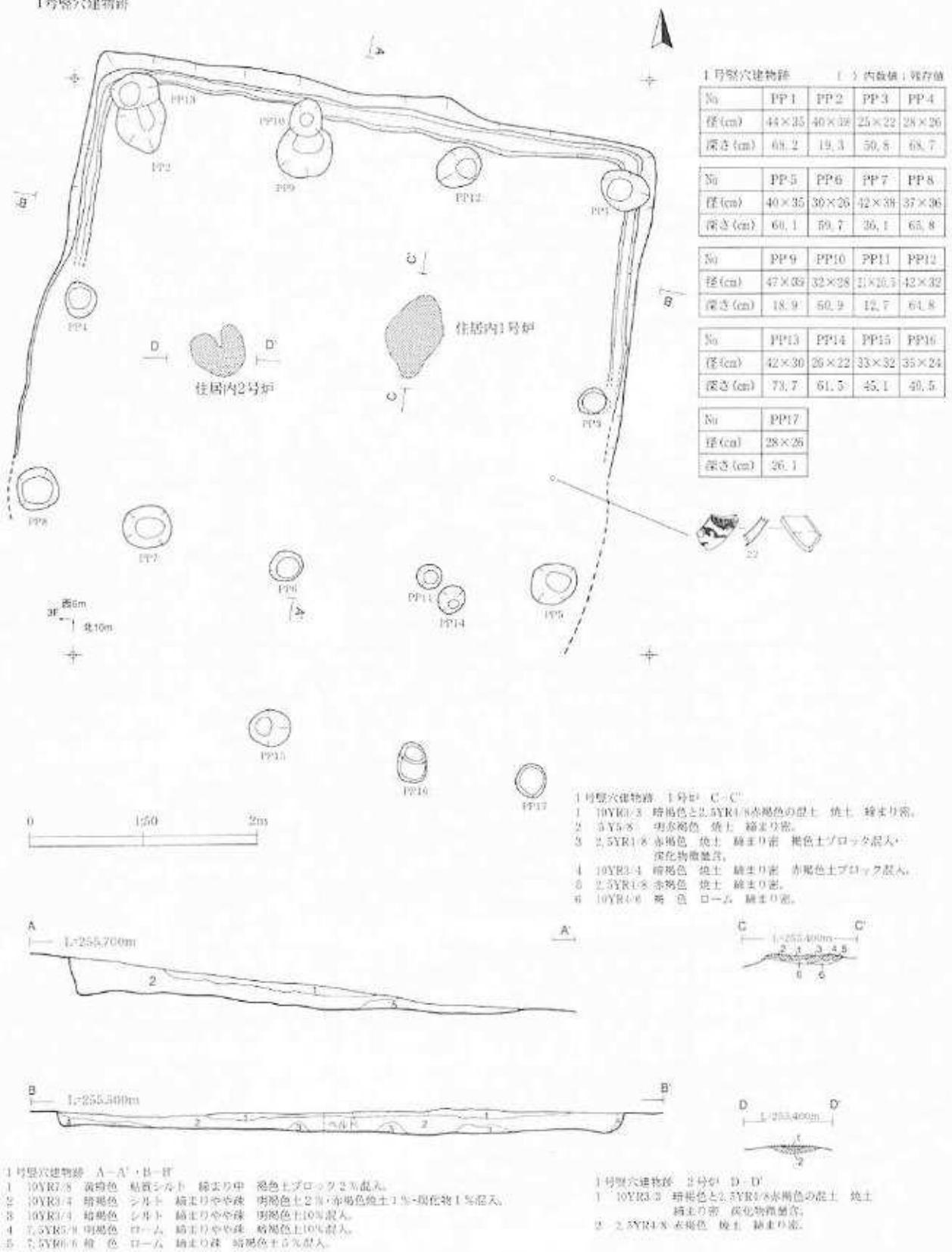
時期 出土遺物から判断すると近世以降の可能性がある。

第6表 竪穴建物跡観察表

（）数値：残存値

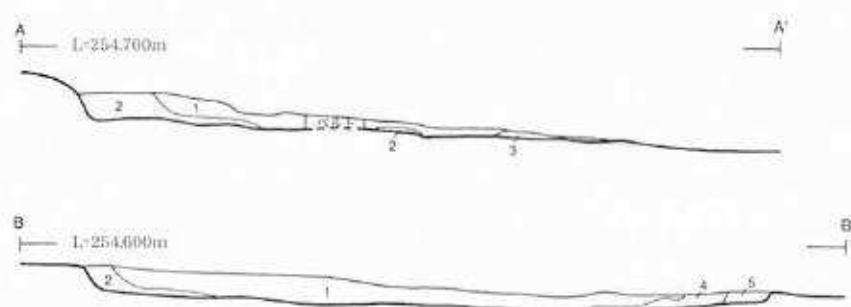
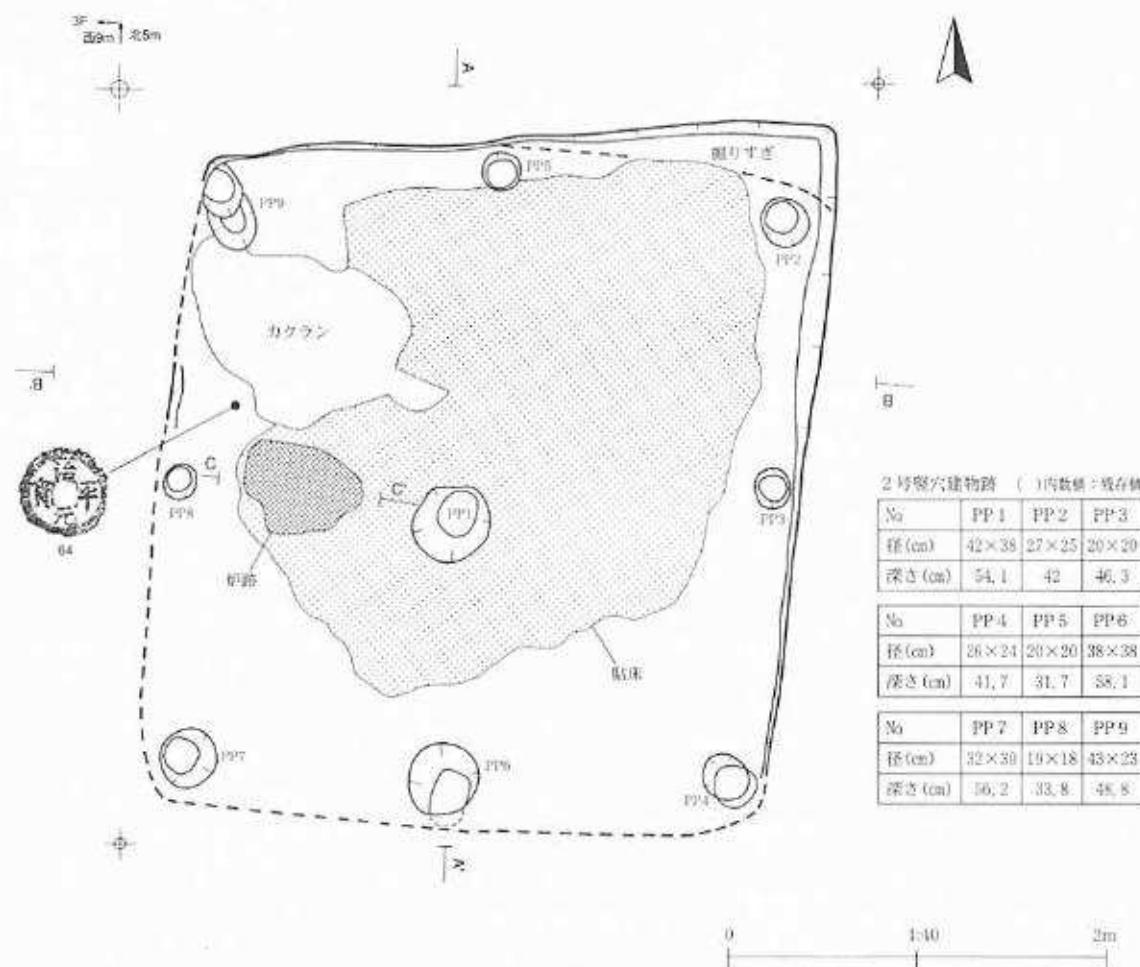
No	遺構名 (グリッド)	検出面 (層位)	床面 (層位)	平面形	規 模 (m)	炉の 形態	炉の規模 (cm)	地盤の厚さ (cm)	柱穴・ 柱配置	付属施設	重複関係 (旧→新)	備 考	遺物 (掲載No)	時代
1	1号竪穴 (3F)曲輪3	II	III	方形	(5.15) ×4.5	地床炉 2	45×40(C) 74×50(D)	8(C) 8(D)	17・ 壁際	南側に出入り口? 周溝幅20cm、深6cm	2・3号竪穴 →1号竪穴	地床炉 D→C	22(磁器) 72・73(銭貨)	中世
2	2号竪穴 (3F)曲輪3	II	III	方形	(3.5) ×3.35	地床炉 1	63×48	6	9・ 壁際	なし	なし	地床	41(鉄釘) 74・75(銭貨)	中世
3	3号竪穴 (3F)曲輪3	III	III	方形?	(3.8) ×(3.5)	地床炉 2	40×32 40×30	10(D) 5(E)	11・ 壁際	なし	なし	なし	76・77 (銭貨)	中世
4	4号竪穴 (3G)曲輪3	III	III	方形?	(3.3)	地床炉 2	55×35 50×45	6 5	7?・ 不明	なし	なし	なし		中世
5	5号竪穴 (4F)曲輪3	II	II	方形?	(3.0)	地床炉 1	50×43	6	6・ 不明	なし	なし	なし		中世
6	6号竪穴 (4G)曲輪3	II	III	方形?	(3.0)	地床炉 2	35×30 27×17	5(B) 4(C)	10?・ 不明	なし	1号竪穴PP16 →6号竪穴炉2	なし		中世
7	7号竪穴 (7D)	III	III	方形?	(4.8) ×(5.0)	地床炉 4	35×43 25×25 21×20	7(E) 3(F) 2(G)	10?・ 壁際	上坑2	なし	なし	78・79 (銭貨)	近世?

1号堅穴建物跡

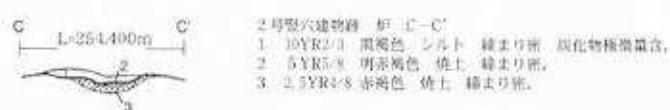


第33図 1号堅穴建物跡

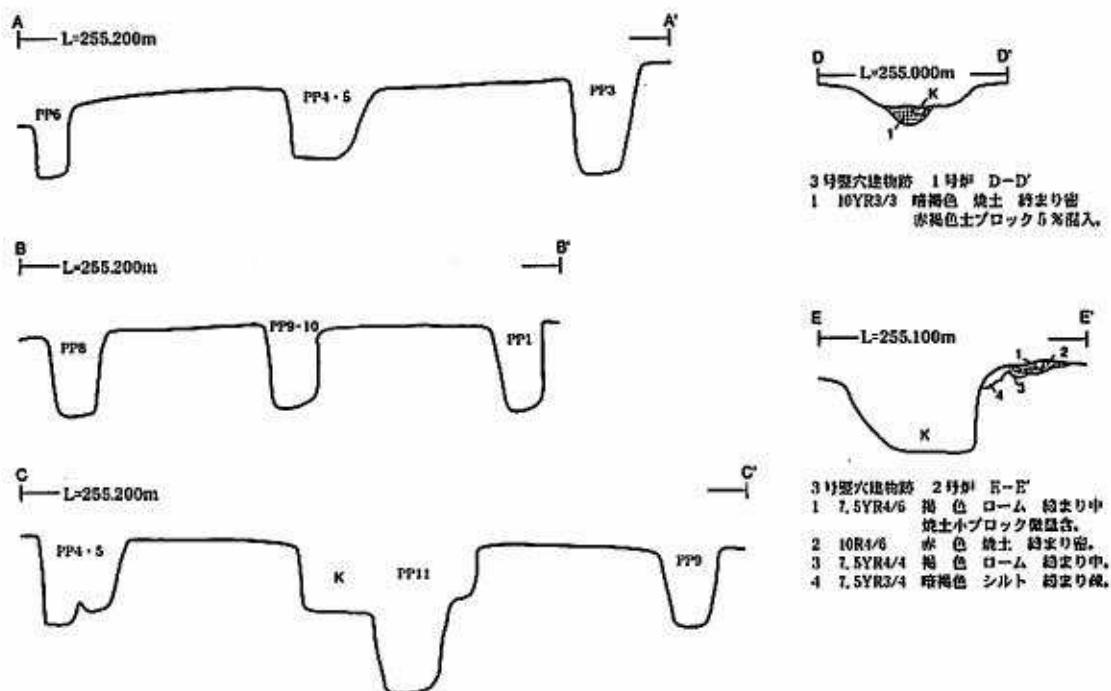
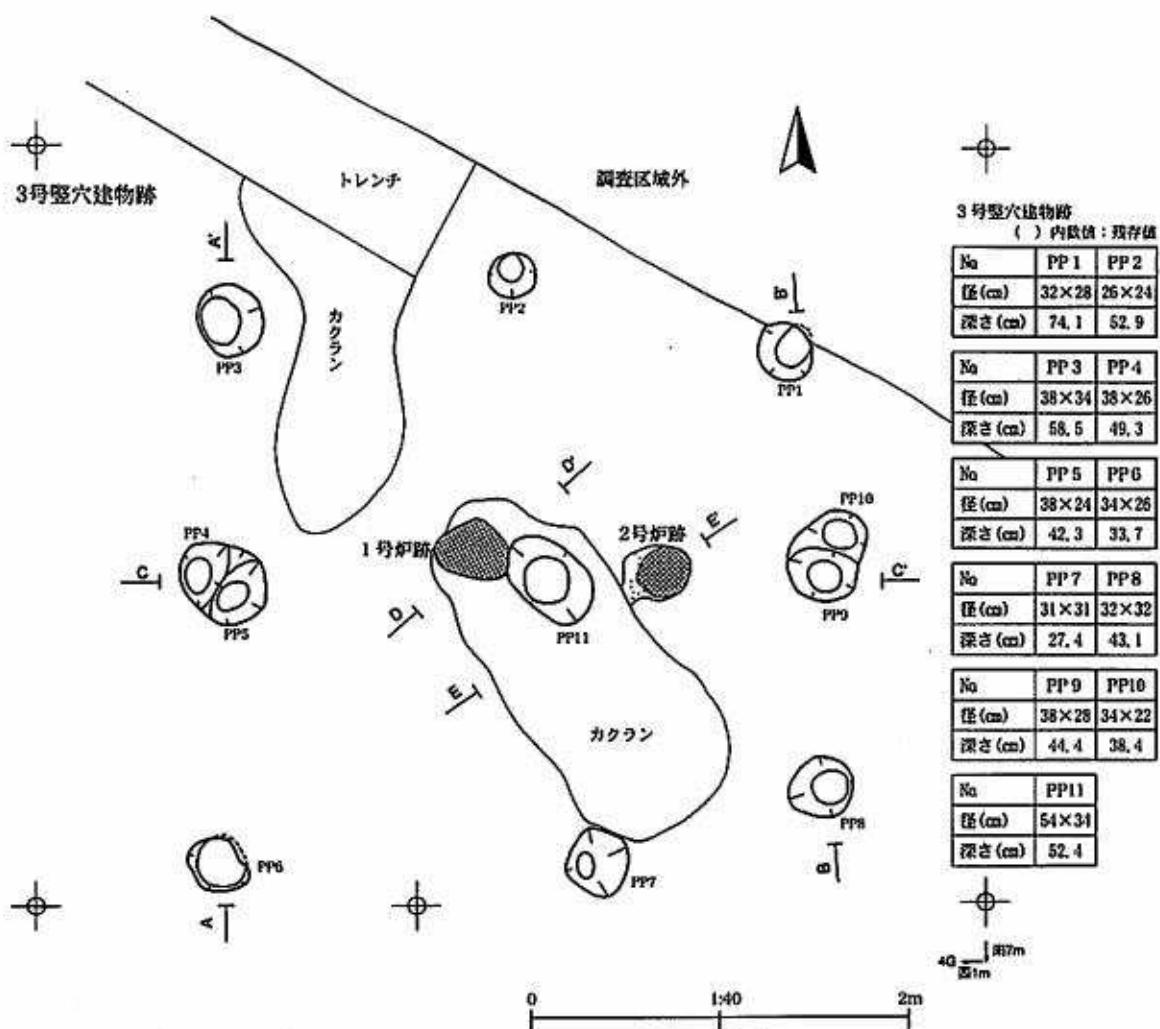
2号竪穴建物跡



2号竪穴建物跡 A-A'・B-B'
 1 10YR3/4 單褐色 シルト 細より中 明褐色土小粒3%・炭化物1%混入。
 2 10YR3/4 單褐色 シルト 細より中 明褐色土ブロック10%・炭化物1%混入。
 3 10YR3/4 單褐色 シルト 細よりやや疊 明褐色土5%混入。
 4 10YR3/4 單褐色 シルト 細よりやや疊 明褐色土ブロック20%混入。
 5 2.5YR5/8 明褐色 ローム 細よりやや疊 明褐色土10%混入。

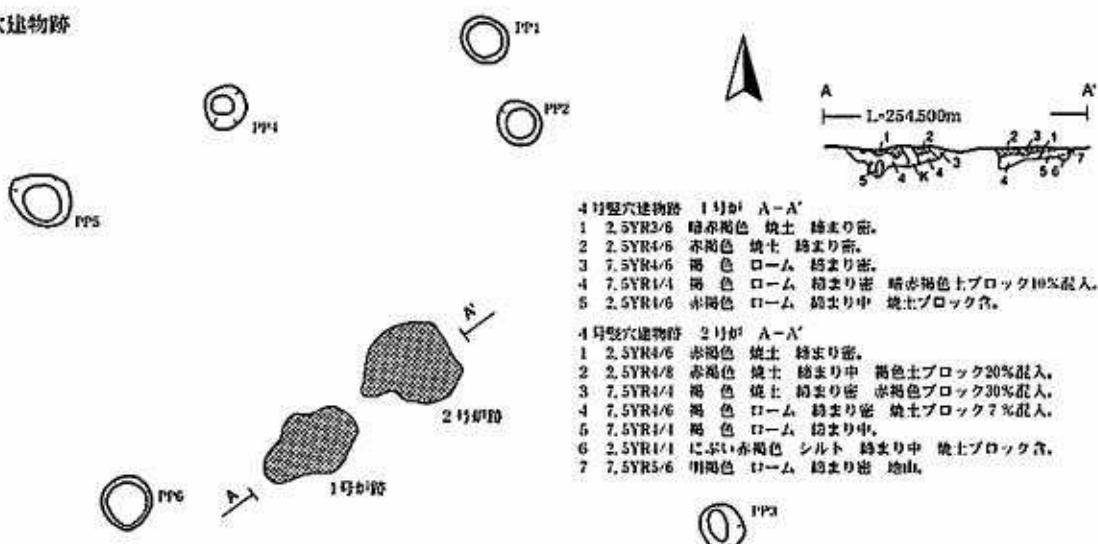


第34図 2号竪穴建物跡

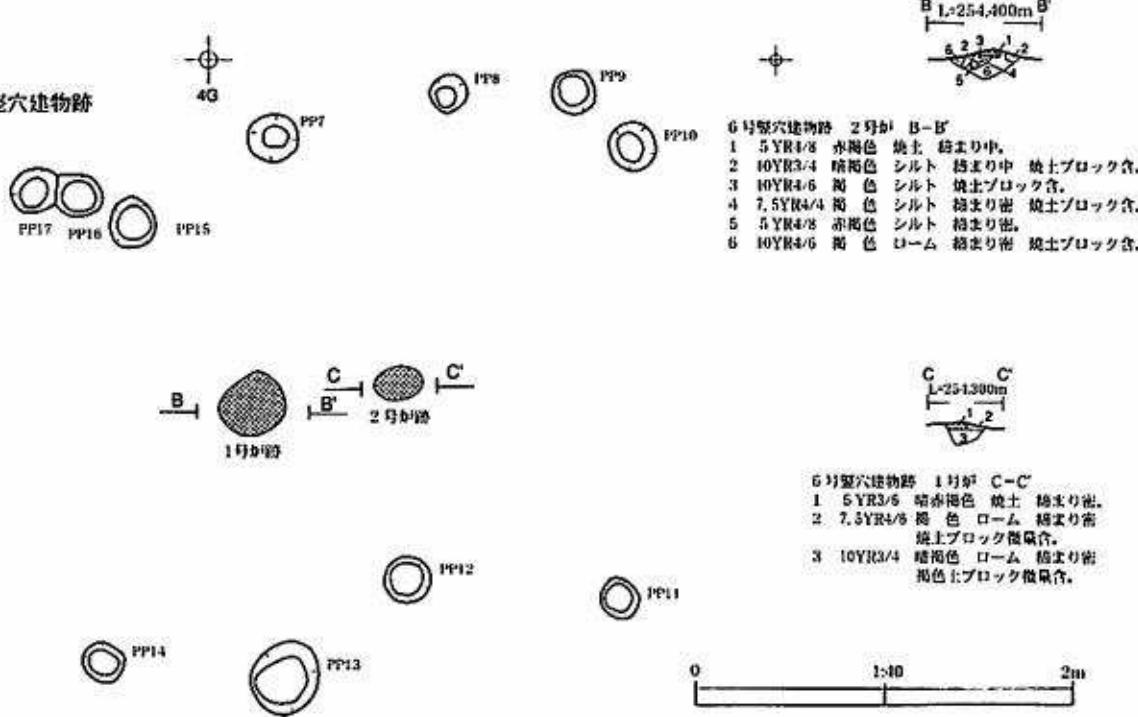


第35図 3号竖穴建物跡

4号堅穴建物跡



6号堅穴建物跡



4号堅穴建物跡

No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7
径(cm)	27×23	24×22	25×22	24×22	28×24	28×26	28×26
深さ(cm)	31.7	66.8	38.9	32.4	62.0	28.2	33

() 内数値：現存値

6号堅穴建物跡

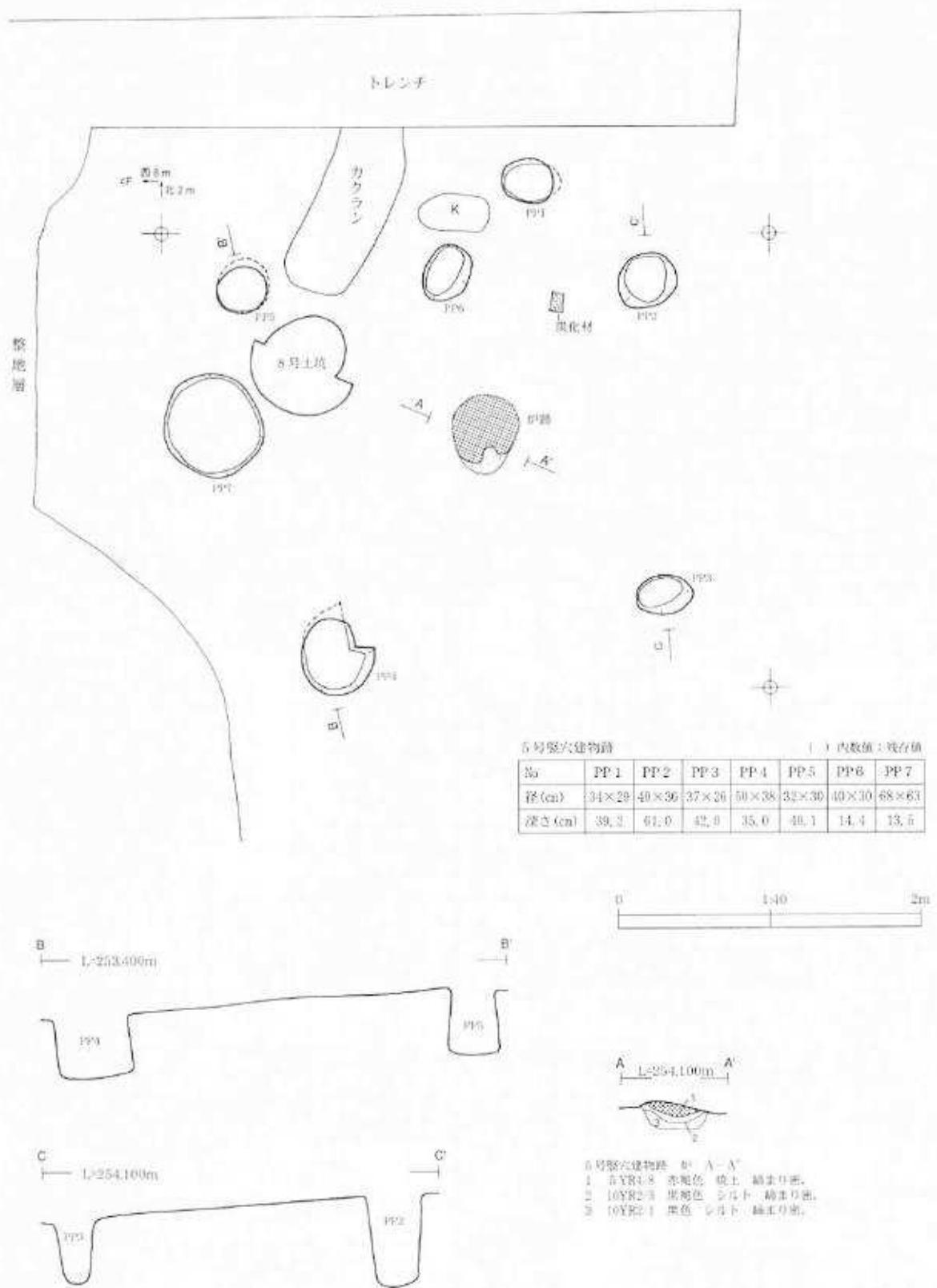
No	PP8	PP9	PP10	PP11	PP12	PP13	PP14
径(cm)	20×18	24×24	26×24	22×20	24×24	40×34	22×20
深さ(cm)	24.3	17.6	13.7	23.7	23.4	45.3	21.4

() 内数値：現存値

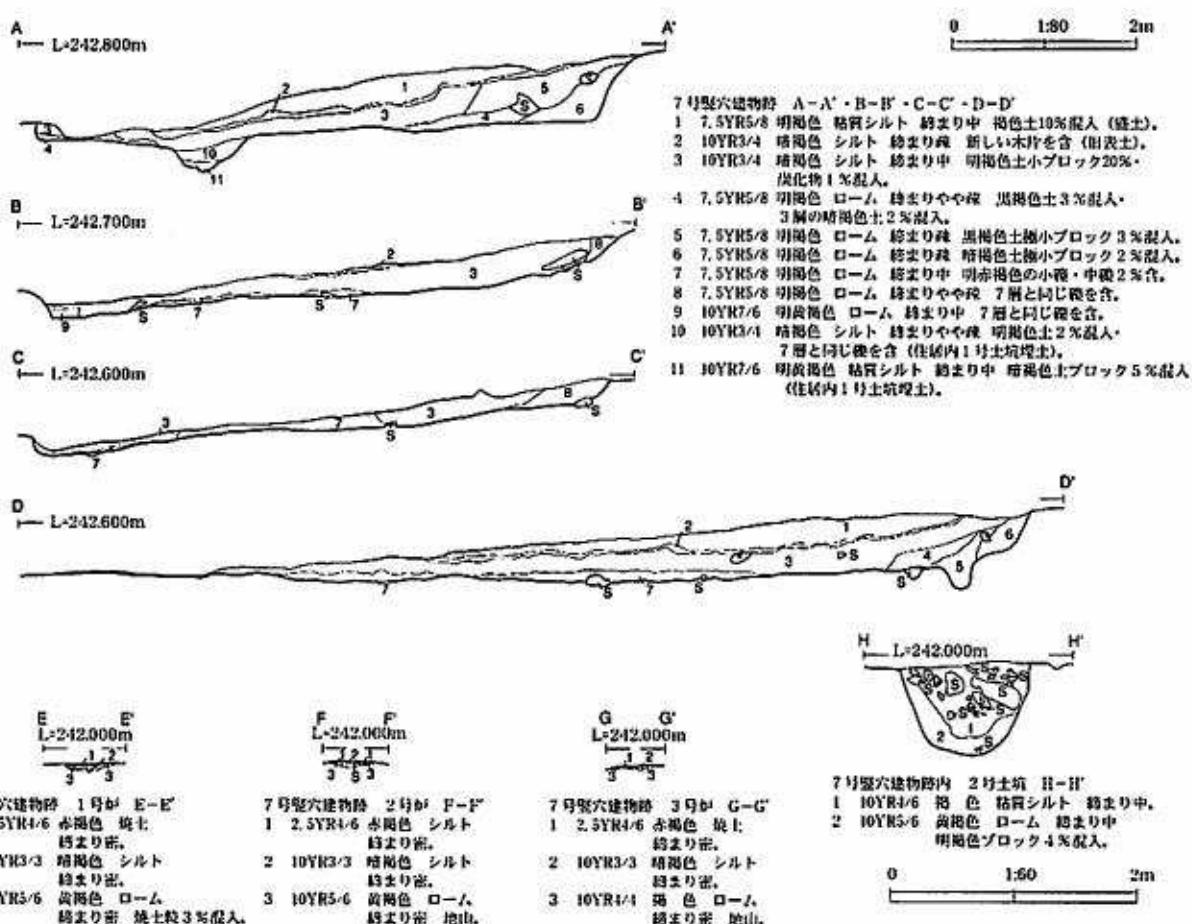
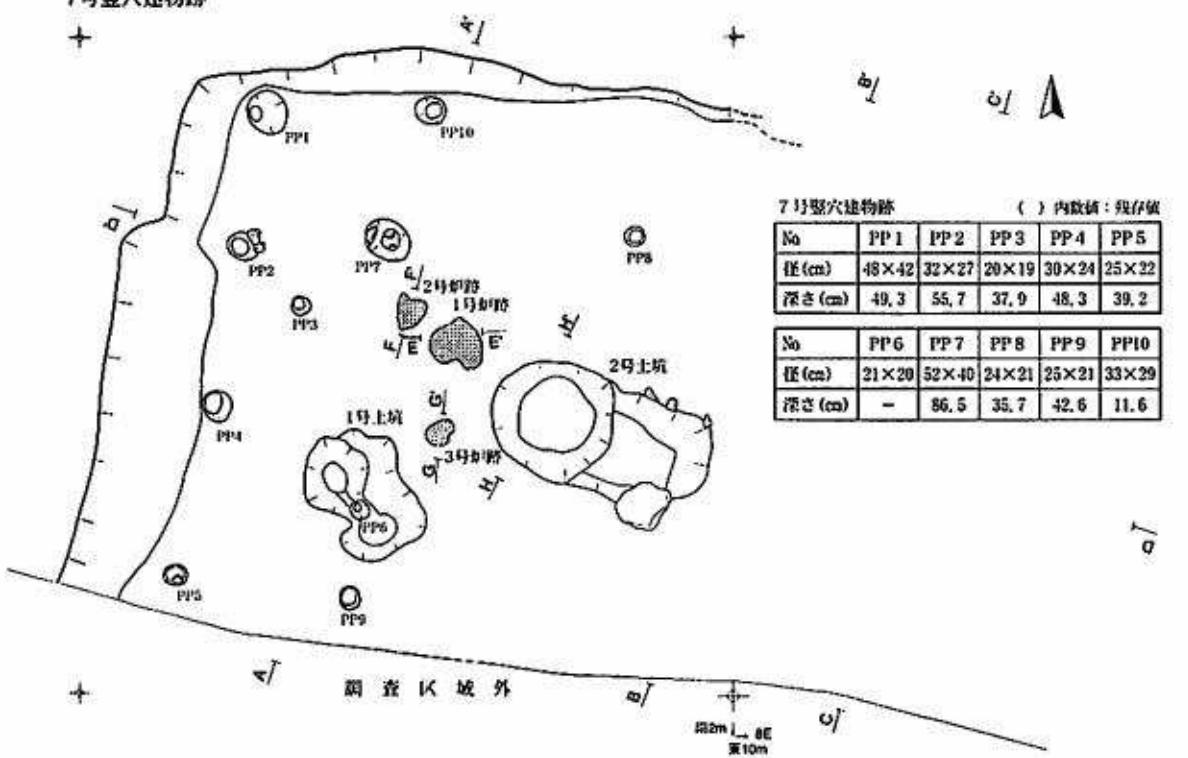
No	PP15	PP16	PP17
径(cm)	25×25	25×23	24×24
深さ(cm)	34	19.5	26

第36図 4号・6号堅穴建物跡

5号竪穴建物跡



7号竖穴建物跡



第38図 7号竖穴建物跡

7. 焼土遺構（第39図、写真図版20・21）

7基検出した。検出された地点にとくにまとまりは見出せない。検出面はいずれもⅢ層ないしⅣ層の上面である。形状は円形を基調とするものの不整なものが多い。規模は、最大径85×74cm、最小径18×12cm、厚さは最大15cm、最小4cmである。焼土の色調は、明赤褐色と赤褐色のものがある。遺物が出土していないので、時期を明確に特定するに至らなかった。なお、現場で当初焼土遺構としていたものを再精査して、竪穴住居跡の炉跡に変更したものもあり、その意味で、曲輪3で検出された焼土遺構も中世の竪穴建物跡における炉跡（地床炉）に規模・形状が近似する。これらの焼土遺構の時期は、中世あるいはそれ以降の可能性があると思われる。

また、焼土遺構から直接出土したものではないが、7号焼土遺構の周囲から金属製品（49）鐵錠が出土している。鍛冶遺構に関連する焼土遺構の可能性がある。

各焼土遺構の規模・形状などの特徴については、第4表 焼土遺構観察表に示した。

8. 土坑（第40～44図、写真図版22～24）

20基検出した。配置にとくにまとまりは見出せない。形状は円形4基、円形を基調とするもの、円形と推定されるもの7基、楕円形2基、小判形1基、溝状2基、不整形4基である。規模は開口部の径最大380×270cm、最小70×70cm、深さは最深155cm、最浅10cmである。断面形は、椀形・皿形・ビーカー形がある。

出土遺物は少なく、遺物が出土した土坑は2基で、いずれも動物遺存体である。内訳は4号土坑からヒツジ？、12号土坑からはウシで、これらの獣骨は遺存状態から極めて新しい可能性が高く、現代のものと推定される。したがって土坑も現代のものである。他の土坑については、中世に属する可能性もあるが、近世以降の可能性もあり、断言はできない。なお、6号土坑については、土壌の除去後に検出されたもので、土壌構築時に削平を受けている。時期は、館跡の築城以前に遡るものである。

9. 溝状遺構（第45～47図、写真図版25）

7条検出した。検出された地点にとくにまとまりは見出せないが、曲輪3のなかで4条、曲輪2の南側で1条、曲輪3西側の虎口で2条が検出されている。個々の溝跡で性格は異なるものと思われるが、いずれの溝跡も館跡に関連するもの、もしくは古いものと考えられる。

1号溝状遺構

遺構（第45図、写真図版-）

（位置・検出状況）2E～3Eグリッド。曲輪2の南側切岸で、Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。
（重複関係）なし。

（規模・平面形）ほぼ南北方向に走る。長さ11.8m、上端幅1.2～1.9m、深さ0.4～0.6m。溝の斜面上位と下位の高低差は2.0mである。断面形は、緩く湾曲する椀型である。

（埋土・堆積状況）黒褐色、暗褐色が主体である。

（壁・底面）壁はⅢ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。南側に位置する6号堀跡の北側延長上にあることから、本来、堀跡であった可能性もある。

第7表 焼土遺構観察表

() 数値：残存値

遺構名		1号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	20	遺物	—	
位置		4 E			
検出状況		Ⅱ層			
重複関係		1号堀跡—焼土			
平面形		不整な楕円形			
規	平面	47×30cm			
模	厚さ	8 cm			
状況		赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			

遺構名		2号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	20	遺物	—	
位置		4 G			
検出状況		IV層			
重複関係		なし			
平面形		不整な楕円形			
規	平面	40×35cm			
模	厚さ	4 cm			
状況		暗赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			

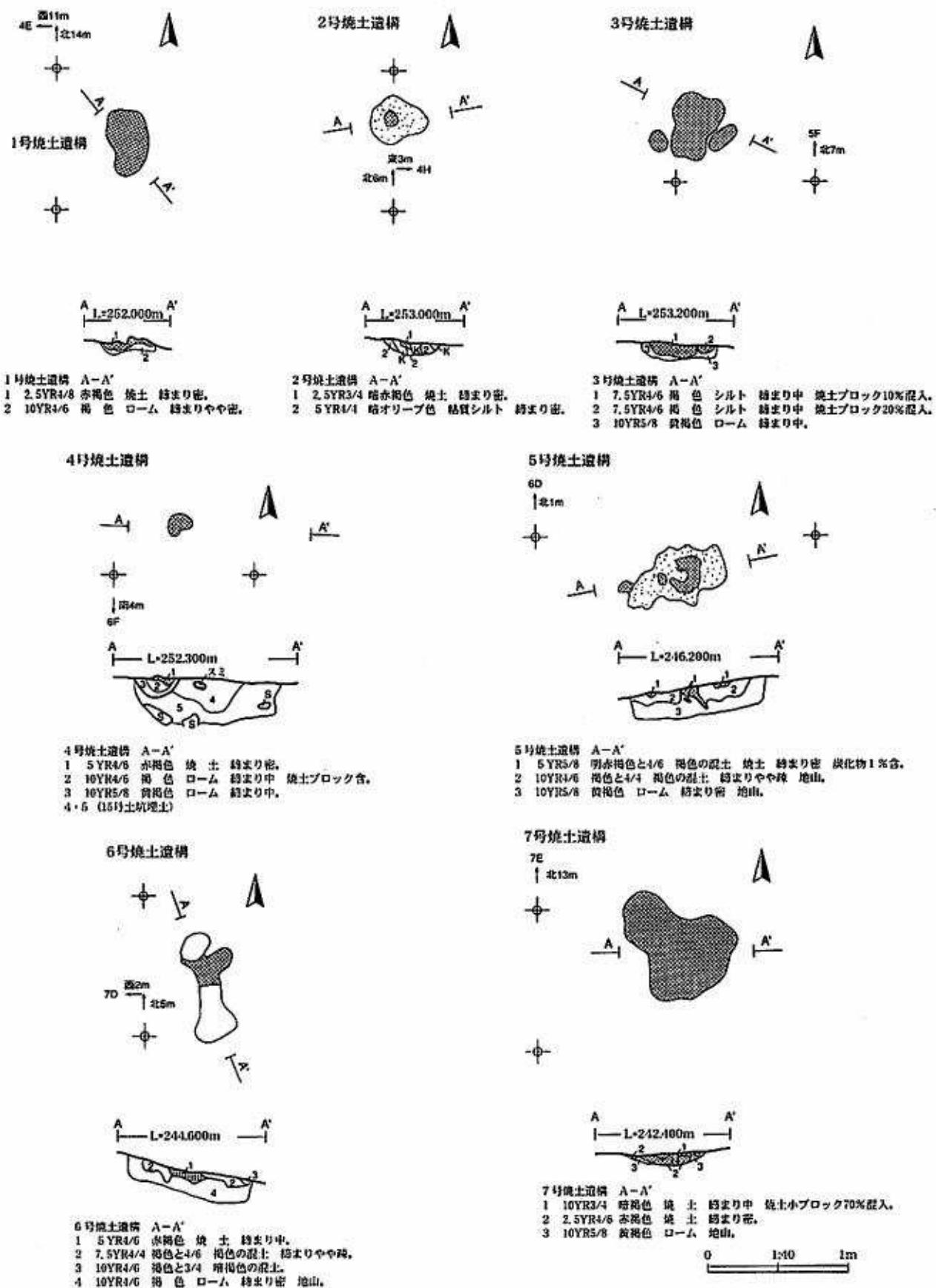
遺構名		3号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	20	遺物	—	
位置		5 E			
検出状況		IV層			
重複関係		なし			
平面形		不整形			
規	平面	45×35cm			
模	厚さ	8 cm			
状況		褐色に焼土ブロックが混入			
出土遺物		なし			
時期		不明			

遺構名		4号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	20	遺物	—	
位置		5 F			
検出状況		暗褐色土(5F-1号土坑)中で検出			
重複関係		5 F - 1号土坑より新しい			
平面形		不整な円形			
規	平面	18×12cm			
模	厚さ	4 cm			
状況		赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			

遺構名		5号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	21	遺物	—	
位置		6 D			
検出状況		田畠			
重複関係		なし			
平面形		不整形			
規	平面	75×45cm			
模	厚さ	15cm			
状況		明赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			

遺構名		6号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	21	遺物	—	
位置		7 D			
検出状況		Ⅲ層			
重複関係		なし			
平面形		不整形			
規	平面	30×20cm			
模	厚さ	10cm			
状況		赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			

遺構名		7号焼土遺構			
図版	遺構	39	遺物	—	
写真図版	遺構	21	遺物	—	
位置		7 E			
検出状況		畠			
重複関係		なし			
平面形		不整形			
規	平面	85×74cm			
模	厚さ	7 cm			
状況		暗褐色に焼土ブロックが混入 赤褐色の焼土			
出土遺物		なし			
時期		不明			



第39図 焼土遺構

第8表 土坑観察表

() 数値：残存値

遺構名		1号土坑		
図版	遺構	40	遺物	-
写真図版	遺構	22	遺物	-
位置		2E		
検出状況		Ⅲ層		
重複関係		なし		
形状・規模	平面	溝状		
	断面	皿状		
	開口部	305×100cm		
	底部	265×65cm		
	深さ	30cm		
埋土		暗褐色土が主体		
底面		東から西に傾斜		
壁		不明		
出土遺物		なし		
時期		中世？		

遺構名		2号土坑		
図版	遺構	40	遺物	-
写真図版	遺構	22	遺物	-
位置		3F		
検出状況		Ⅱ層		
重複関係		4号陥入穴状遺構を切る		
形状・規模	平面	不整形		
	断面	椀型		
	開口部	190×145cm		
	底部	165×125cm		
	深さ	45cm		
埋土		暗褐色土と褐色土が主体		
底面		緩く湾曲する。		
壁		ほぼ直立		
出土遺物		なし		
時期		中世？		

遺構名		3号土坑		
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	22	遺物	-
位置		3G		
検出状況		Ⅳ層		
重複関係		なし		
形状・規模	平面	円形		
	断面	箱形		
	開口部	80×93cm		
	底部	80×75cm		
	深さ	35cm		
埋土		黒褐色土が主体		
底面		ほぼ平坦		
壁		ほぼ直立		
出土遺物		なし		
時期		現代		

遺構名		4号土坑		
図版	遺構	40	遺物	-
写真図版	遺構	22	遺物	-
位置		4B		
検出状況		1号採掘坑内		
重複関係		1号採掘坑を切る		
形状・規模	平面	円形？		
	断面	箱形		
	開口部	(40)×30cm		
	底部	(30)×20cm		
	深さ	30cm		
埋土		暗褐色土が主体		
底面		湾曲する		
壁		ほぼ直立		
出土遺物		獸骨(ヒツジ?)		
時期		現代		

遺構名		5号土坑		
図版	遺構	40	遺物	-
写真図版	遺構	22	遺物	-
位置		4B		
検出状況		1号採掘坑内		
重複関係		1号採掘坑を切る		
形状・規模	平面	円形？		
	断面	椀形？		
	開口部	70×(65)cm		
	底部	(50)×30cm		
	深さ	35cm		
埋土		黒褐色土が主体		
底面		湾曲する		
壁		外傾して立ち上がる		
出土遺物		なし		
時期		現代		

遺構名		6号土坑		
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	23	遺物	-
位置		4E		
検出状況		Ⅳ層		
重複関係		2号土壙に切られる。		
形状・規模	平面	円形		
	断面	椀形		
	開口部	110×115cm		
	底部	105×100cm		
	深さ	33cm		
埋土		暗褐色土が主体		
底面		ほぼ平坦		
壁		直立		
出土遺物		なし		
時期		縄文時代？		

() 数値：残存値

遺構名 7号土坑				
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	23	遺物	-
位置	4 F			
検出状況	Ⅱ層			
重複関係	なし			
形状	平面	隅丸方形？		
・規模	断面	楕形		
	開口部	100×(60)cm		
	底部	70×(40)cm		
	深さ	25cm		
	埋土	暗褐色土が主体		
	底面	ほぼ平坦		
	壁	外傾する		
	出土遺物	なし		
時期	中世			

遺構名 8号土坑				
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	23	遺物	-
位置	4 F			
検出状況	Ⅱ層			
重複関係	5号堅穴遺物跡と重複			
形状	平面	円形？		
・規模	断面	楕形		
	開口部	65×50cm		
	底部	60×35cm		
	深さ	20cm		
	埋土	暗褐色土が主体		
	底面	湾曲する		
	壁	外傾する		
	出土遺物	なし		
時期	現代？			

遺構名 9号土坑				
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	-	遺物	-
位置	4 G			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状	平面	円形		
・規模	断面	楕形		
	開口部	90×85cm		
	底部	80×75cm		
	深さ	20cm		
	埋土	明褐色土が主体		
	底面	ほぼ平坦		
	壁	外傾する		
	出土遺物	なし		
時期	中世			

遺構名 10号土坑				
図版	遺構	42	遺物	-
写真図版	遺構	-	遺物	-
位置	4 G			
検出状況	Ⅲ層			
重複関係	なし			
形状	平面	円形		
・規模	断面	箱形		
	開口部	70×70cm		
	底部	80×75cm		
	深さ	23cm		
	埋土	暗褐色土が主体		
	底面	西から東へ緩く傾斜		
	壁	外傾する		
	出土遺物	なし		
時期	中世			

遺構名 11号土坑				
図版	遺構	41	遺物	-
写真図版	遺構	23	遺物	-
位置	4 G			
検出状況	Ⅳ層			
重複関係	なし			
形状	平面	不整な稍円形		
・規模	断面	箱形		
	開口部	200×155cm		
	底部	175×125cm		
	深さ	155cm		
	埋土	上位：暗褐色土 中位：黒褐色土 下位：褐色土		
	底面	ほぼ平坦		
	壁	ほぼ直立		
	出土遺物	なし		
時期	中世			

遺構名 12号土坑				
図版	遺構	42	遺物	-
写真図版	遺構	-	遺物	-
位置	4 G			
検出状況	Ⅳ層			
重複関係	なし			
形状	平面	小判形		
・規模	断面	楕形		
	開口部	100×50cm		
	底部	90×35cm		
	深さ	25cm		
	埋土	暗褐色土が主体		
	底面	緩く湾曲する		
	壁	ほぼ直立する。		
	出土遺物	獸骨（ウシ）		
時期	現代			

() 数値：残存値

遺構名	13号土坑						
図版	遺構	42	遺物	-			
写真図版	遺構	-	遺物	-			
位置	5 C						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	円形基調？					
	断面	箱形					
	開口部	100×70cm					
	底部	90×65cm					
	深さ	10cm					
埋土	炭化物層						
底面	東から西へ傾斜する						
壁	直立ぎみ						
出土遺物	なし						
時期	現代						

遺構名	14号土坑						
図版	遺構	42	遺物	-			
写真図版	遺構	24	遺物	-			
位置	5 C						
検出状況	Ⅲ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	梢円形					
	断面	楕形					
	開口部	90×65cm					
	底部	65×45cm					
	深さ	70cm					
埋土	黄褐色土と暗褐色土の互層						
底面	緩く湾曲する						
壁	外傾する						
出土遺物	なし						
時期	現代						

遺構名	15号土坑						
図版	遺構	42	遺物	-			
写真図版	遺構	24	遺物	-			
位置	5 F						
検出状況	Ⅳ層						
重複関係	4号焼土遺構に切られる						
形状・規模	平面	円形？					
	断面	楕形					
	開口部	85×(60)cm					
	底部	75×(50)cm					
	深さ	32cm					
埋土	暗褐色土と褐色土が主体						
底面	凹凸あり						
壁	ほぼ直立						
出土遺物	なし						
時期	中世？						

遺構名	16号土坑						
図版	遺構	43	遺物	-			
写真図版	遺構	24	遺物	-			
位置	5 F						
検出状況	Ⅲ～Ⅳ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	不整形					
	断面	鉢形					
	開口部	165×80cm					
	底部	110×50cm					
	深さ	90cm					
埋土	暗褐色土・褐色土が主体						
底面	北から南へ緩く傾斜						
壁	外傾する						
出土遺物	なし						
時期	中世？						

遺構名	17号土坑						
図版	遺構	43	遺物	-			
写真図版	遺構	24	遺物	-			
位置	5 F						
検出状況	Ⅲ～Ⅳ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	不整な方形					
	断面	いびつな楕形					
	開口部	380×270cm					
	底部	335×240cm					
	深さ	45cm					
埋土	黒色土とにぶい黄褐色土が主体						
底面	北から南へ緩く傾斜						
壁	外傾する						
出土遺物	なし						
時期	中世？						

遺構名	18号土坑						
図版	遺構	44	遺物	-			
写真図版	遺構	-	遺物	-			
位置	6 C						
検出状況	Ⅳ層						
重複関係	なし						
形状・規模	平面	円形					
	断面	皿形					
	開口部	70×70cm					
	底部	45×40cm					
	深さ	30cm					
埋土	黒褐色・黒色土が主体 火山灰？混入						
底面	ほぼ平坦						
壁	外傾する						
出土遺物	なし						
時期	古代？						

() 数値：残存値

遺構名		19号土坑				遺構名		20号土坑				
圖版	遺構	44	遺物	—	—	圖版	遺構	44	遺物	—	—	
写真図版	遺構	—	遺物	—	—	写真図版	遺構	24	遺物	—	—	
位置	7 D	—	—	—	—	位置	7 D	—	—	—	—	
検出状況	Ⅲ層	—	—	—	—	検出状況	Ⅲ層	—	—	—	—	
重複関係	なし	—	—	—	—	重複関係	なし	—	—	—	—	
形状・規模	平面	滑状				形状・規模	平面	不整形な圓丸方形				
	断面	橢形					断面	橢形				
	開口部	450×110cm					開口部	125×90cm				
	底部	435×115cm					底部	170×110cm				
	深さ	35cm					深さ	30cm				
埋土・堆積状況	埋土	暗褐色土が主体 複数土坑の重複？				底面	埋土	上位に暗褐色土 下位に炭化物屑				
	底面	ほぼ平坦					底面	緩く湾曲する				
	壁	直立ぎみ					壁	外傾する				
	出土遺物	なし					出土遺物	なし				
	時期	近現代？					時期	近代？				

2号溝状遺構

遺構（第27図、写真図版9）

〈位置・検出状況〉 3 E グリッド。曲輪3西側の虎口内にあり、Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 ほぼ南北方向に走る。長さ13.0m、上端幅2.5~1.8m、深さ0.5~0.6m。断面形は、緩く湾曲する皿型である。

〈埋土・堆積状況〉 黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主体である。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んで、緩く外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物 なし。

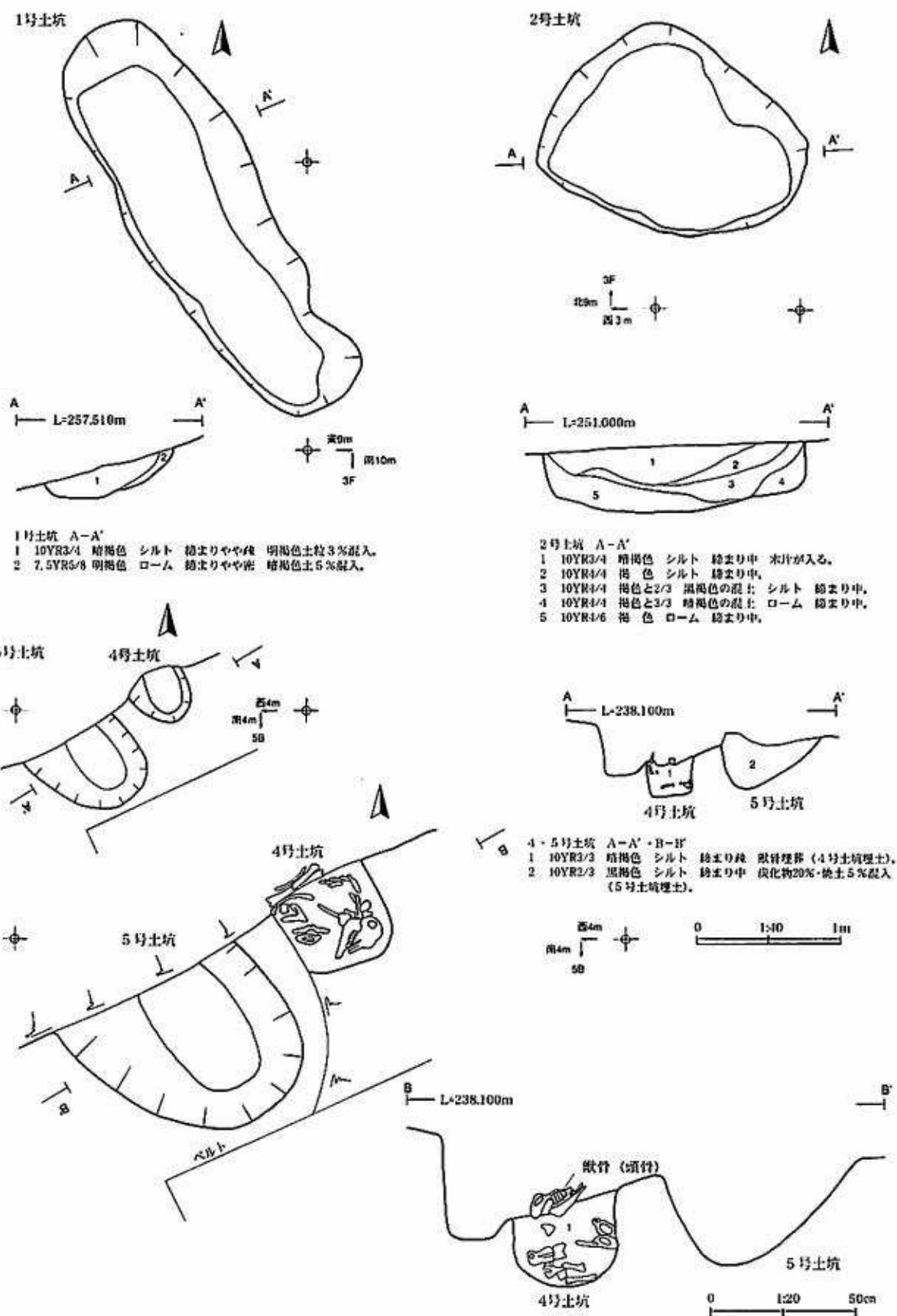
時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。虎口内にあることから、付属施設の可能性が高い。武者溜または通路状の施設の跡の可能性がある。

3号溝状遺構

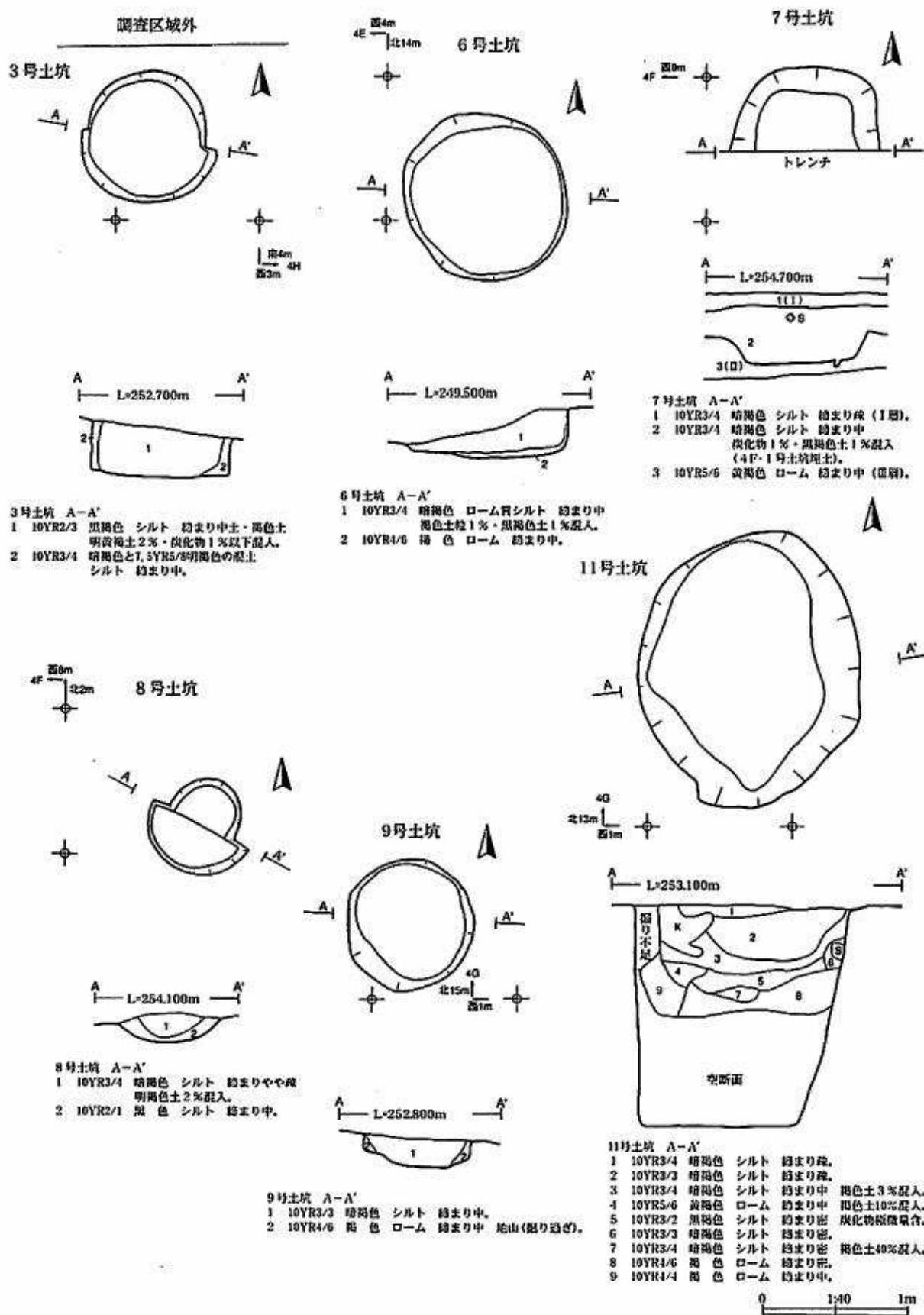
遺構（第29図、写真図版一）

〈位置・検出状況〉 3 E グリッド。曲輪3西側の虎口内にあり、Ⅲ層で穀の混入した暗褐色土の広がりとして検出された。

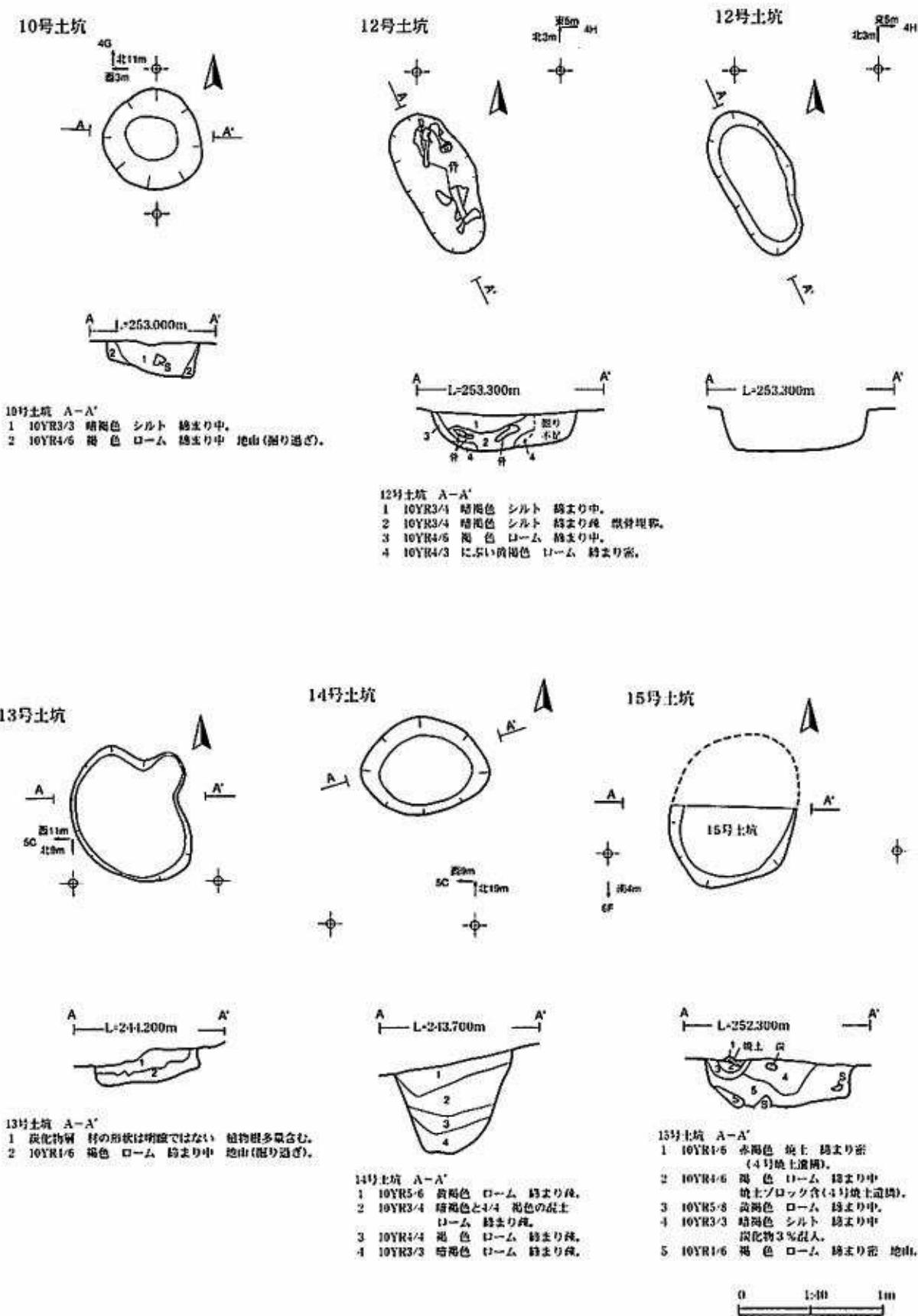
〈重複関係〉 6号堀跡と重複する。3号溝状遺構が切られている。



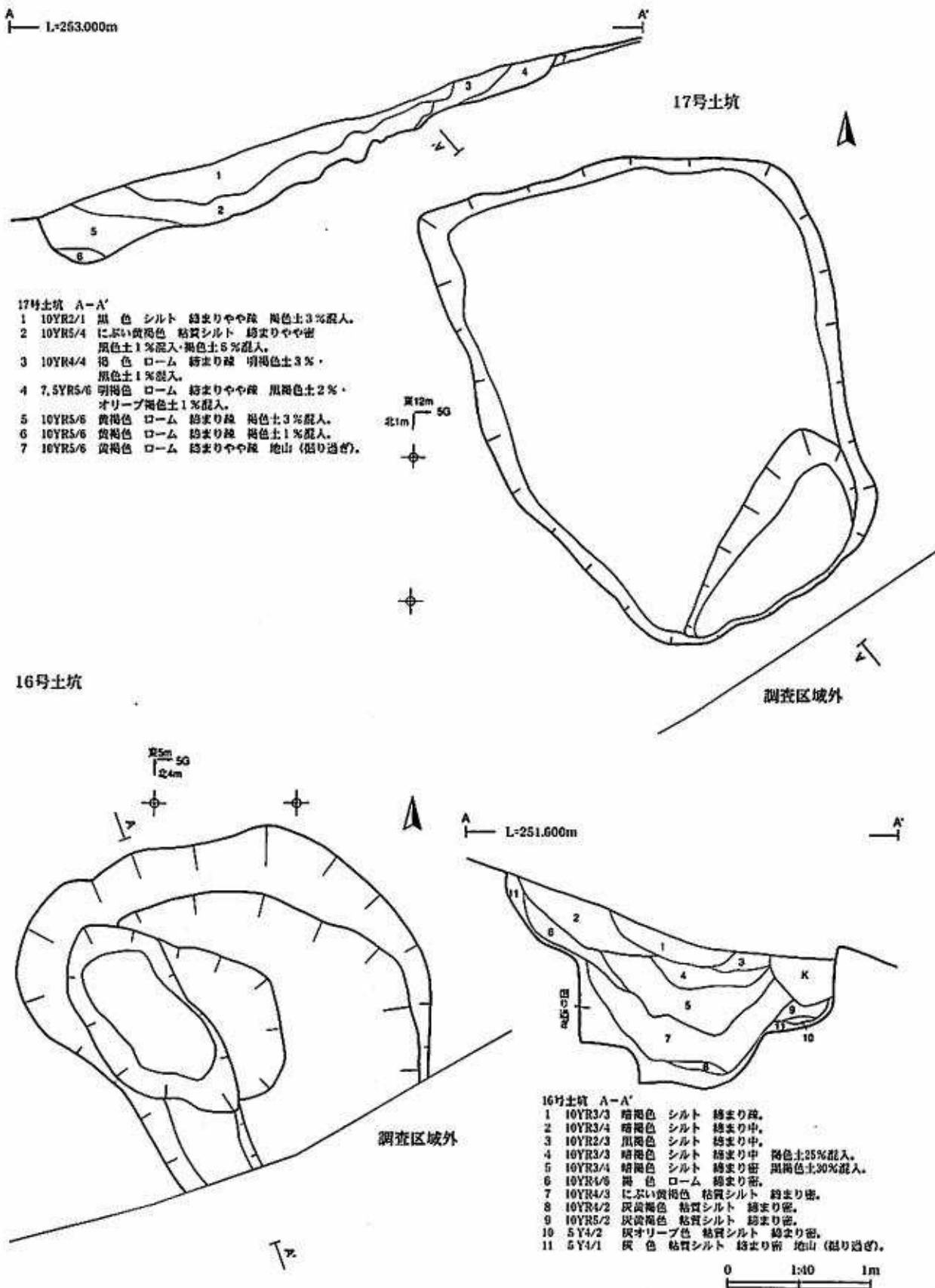
第40図 土坑(1)



第41図 土坑(2)

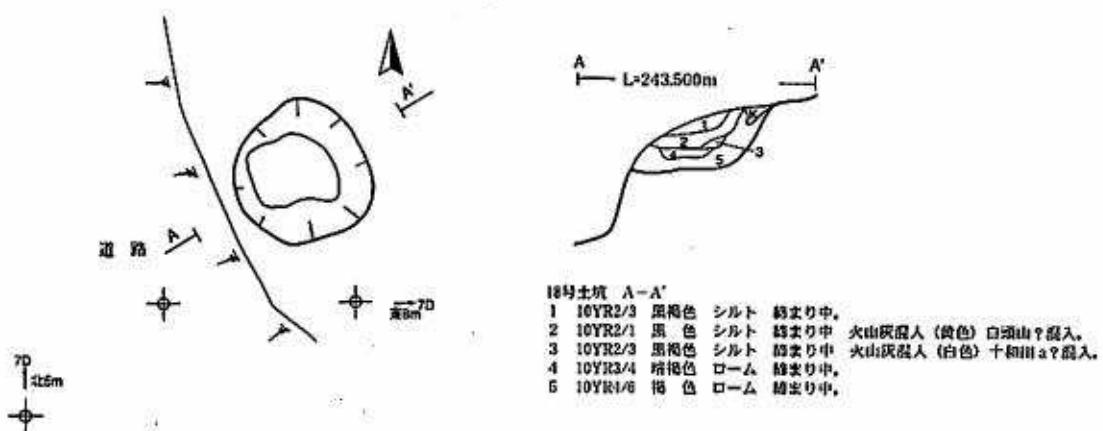


第42図 土坑(3)

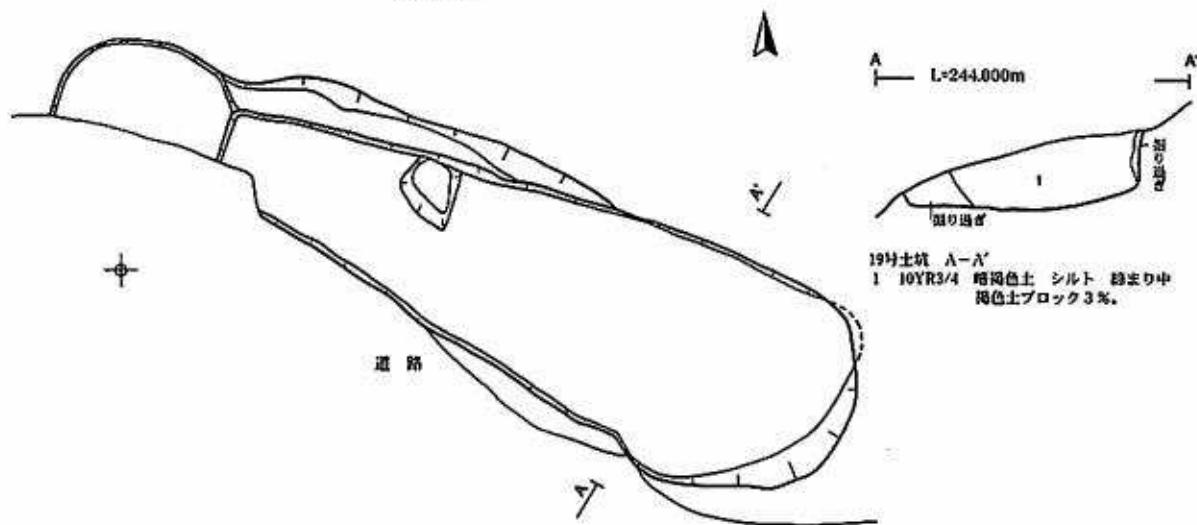


第43図 土坑(4)

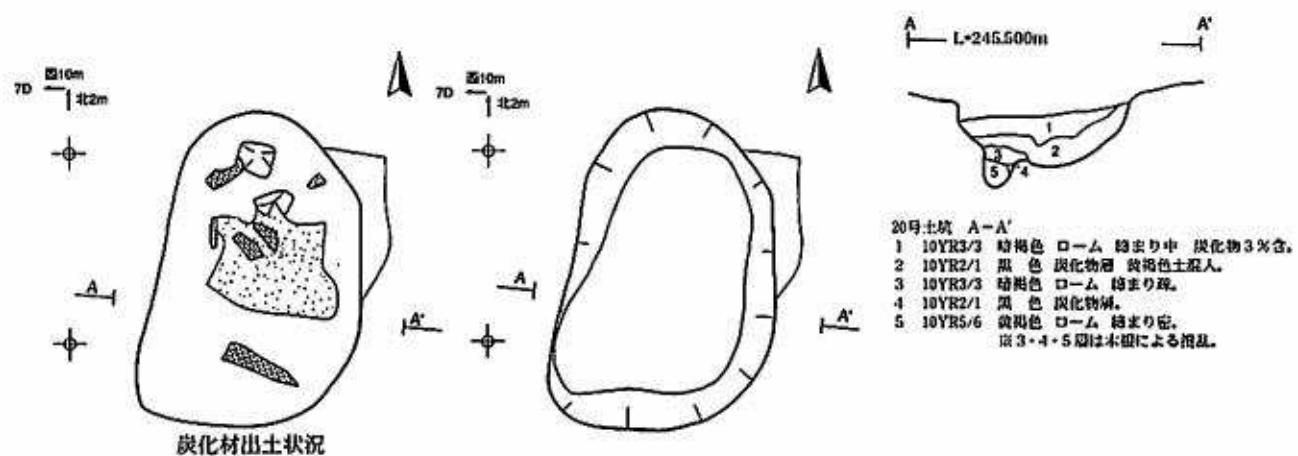
18号土坑



19号土坑



20号土坑



第44図 土坑(5)

〈規模・平面形〉 北東一南西方向に走る。長さ5.2m、上端幅0.8m、深さ0.2m。埋土中に径10~20cmの大亞円礫が入る。断面形は、やや凹凸をもって湾曲する。

〈埋土・堆積状況〉 暗褐色が主体で、礫が混入する。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。3号堀跡の西側延長上にあり、東側には5号堀跡がある。本来、この両堀跡は1本の堀跡であった可能性があり、その場合、3号溝状遺構は堀跡底部の痕跡と考えられる。

4号溝状遺構

遺構 (第46図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 3Fグリッド。曲輪3のほぼ中央で、Ⅲ層で黒褐色~褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 2号竪穴建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模・平面形〉 ほぼ東西方向に走る。長さ7.5m、上端幅0.7~0.6mで両端が狭くなる。深さ0.1~0.2mで、断面形は皿状を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 暗褐色が主体で、上位に褐色土が入る。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。1号櫛立柱建物跡の北側にあり、付属する施設の可能性もある。

5号溝状遺構

遺構 (第46図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 3Fグリッド。曲輪3西側で、Ⅲ層で黒褐色~暗褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 2号竪穴建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

〈規模・平面形〉 ほぼ東西方向に走る。長さ5.0m、上端幅0.6~0.4mで両端が狭くなる。深さ0.1~0.15mで、断面形は皿状を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 黒褐色土と暗褐色が主体である。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。

6号溝状遺構

遺構 (第45図、写真図版25)

〈位置・検出状況〉 3Hグリッド。曲輪3東側で、Ⅲ~Ⅳ層で暗褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 北西一南東方向に走る。検出した範囲で、長さ5.5m、上端幅1.5~1.2mで、斜面下位では狭まる。深さ0.15mで、断面形は浅い皿状を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 暗褐色が主体で、基盤の青灰色の礫が入る。

〈壁・底面〉 壁はⅢ～Ⅳ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物（第57・60図、写真図版32）

〈金属製品〉 鉤（45・46）、刀子（47）。

時期 出土遺物から、中世後期に属するものと思われる。性格等は不明である。

7号溝状遺構

遺構（第47図、写真図版25）

〈位置・検出状況〉 4Fグリッド。曲輪3東側で、Ⅲ～Ⅳ層で黒褐色土から暗褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 曲輪3の西側に広がる整理層に切られており、整地層より旧い。

〈規模・平面形〉 南西・北東方向から屈曲して南東方向に走る。長さ22.0m。上端幅1.2～0.5mで、東端では狭まる。深さ0.15～0.3mで、断面形は浅い皿状を呈する。

〈埋土・堆積状況〉 暗褐色が主体である。西側では整地層の暗褐色土が溝跡埋土の上に載る。

〈壁・底面〉 壁はⅢ～Ⅳ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込み、緩く湾曲する。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期以前に属する可能性がある。性格等は不明である。

10. 柱穴群

遺構（第49～51図、写真図版一）

〈位置・検出状況〉 3F～4Hグリッドを中心に柱穴群81基が確認された。個々の柱穴はⅢ層～Ⅳ層上面で黒褐色土から暗褐色土の広がりとして検出された。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 径40～50cm前後、深さ15～30cm、深さ69～81mで、平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈するものが多い。削平を受けているためと考えられる。

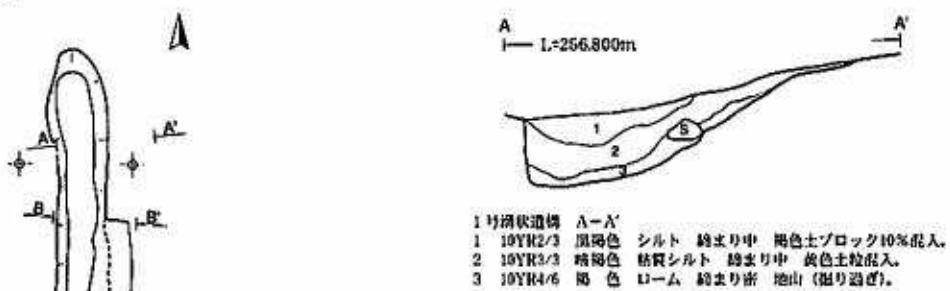
〈埋土・堆積状況〉 黒褐色土や暗褐色が主体で単層である。

〈壁・底面〉 壁はⅢ～Ⅳ層を掘り込んで、外傾して立ちあがる。底面はⅢ～Ⅳ層を掘り込み、緩く湾曲する。

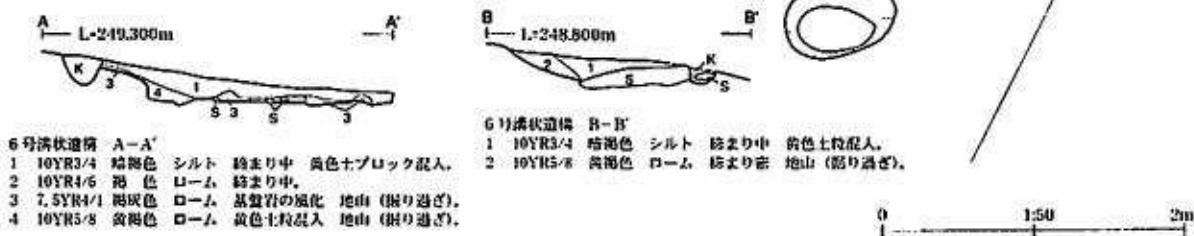
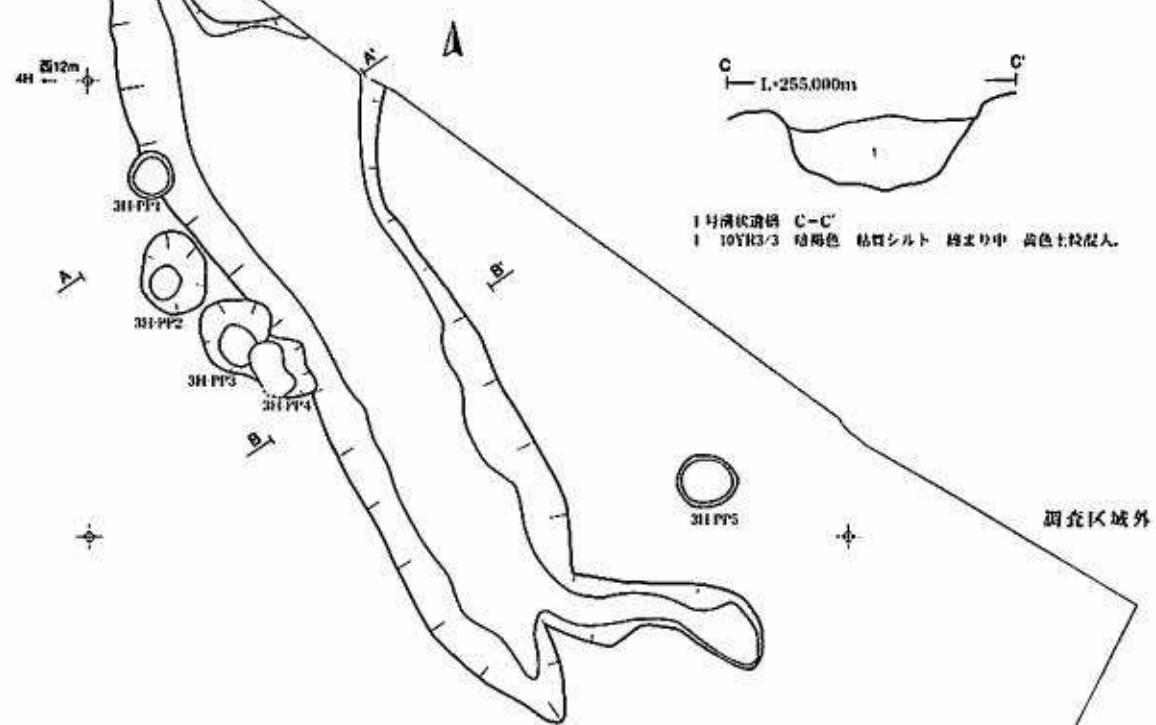
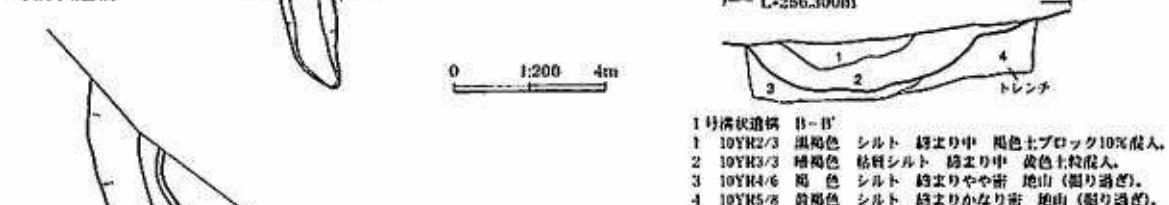
遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明だが、中世後期に属するものと思われる。性格等は不明である。

1号溝状遺構

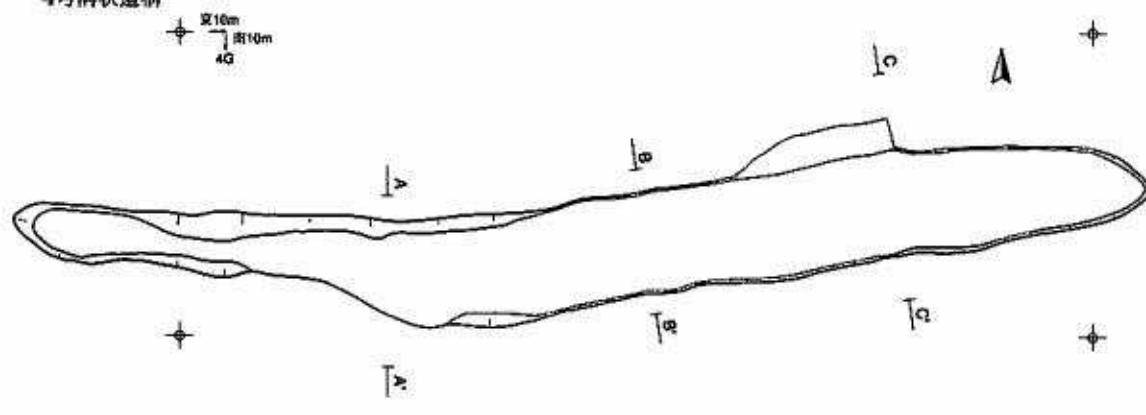


6号溝状遺構



第45図 溝状遺構(1)

4号溝状造構



A—A' L=254.700m

4号溝状造構 A-A'
1 2.5YR3/2 黒褐色 シルト 細まり密。
2 10YR2/3 黒褐色 シルト 細まり密
褐色土30%混入。

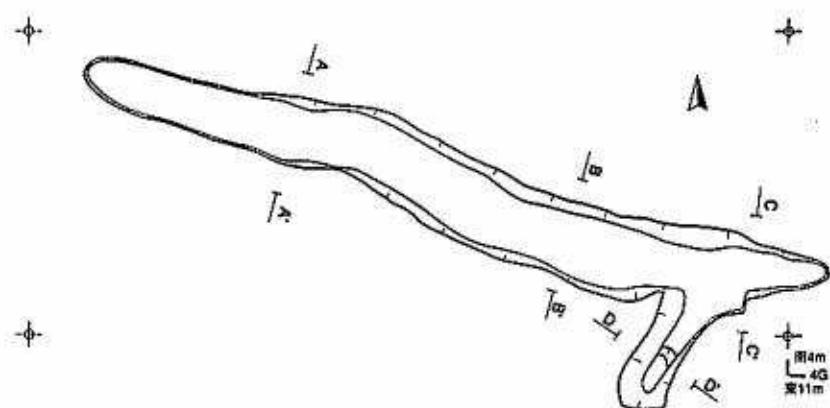
B—B' L=254.800m

4号溝状造構 B-B'
1 10YR4/6 黒褐色 シルト 細まり中
炭化物極微量含。
2 10YR3/1 黒褐色 シルト 細まり中
褐色土ブロック30%混入。
3 10YR4/6 黒褐色 ローム 細まり密
地山(掘り過ぎ)。

C—C' L=254.800m

4号溝状造構 C-C'
1 10YR4/6 黒褐色 シルト 細まり中
炭化物極微量含。
2 10YR3/4 黒褐色 シルト 細まり中
褐色土小ブロック25%混入。
3 10YR4/6 黒褐色 ローム 細まり密
地山(掘り過ぎ)。

5号溝状造構



A—A' L=254.600m

5号溝状造構 A-A'
1 10YR2/2 黒褐色 シルト 細まりやや密。
2 10YR2/3 黒褐色 シルト 細まり密
褐色土ブロック10%混入。
3 10YR4/6 黒褐色 ローム 細まり密
地山(掘り過ぎ)。

B—B' L=254.600m

5号溝状造構 B-B'
1 10YR2/2 黒褐色 シルト 細まり密
炭化物極微量含。
2 10YR3/3 増褐色 シルト 細まり密。
3 10YR4/6 黒褐色 シルト 細まり密
地山(掘り過ぎ)。

C—C' L=254.500m

5号溝状造構 C-C'
1 10YR3/4 増褐色 シルト 細まり中
褐色土ブロック15%混入。
2 10YR4/6 黑褐色 ローム 細まり中
地山(掘り過ぎ)。

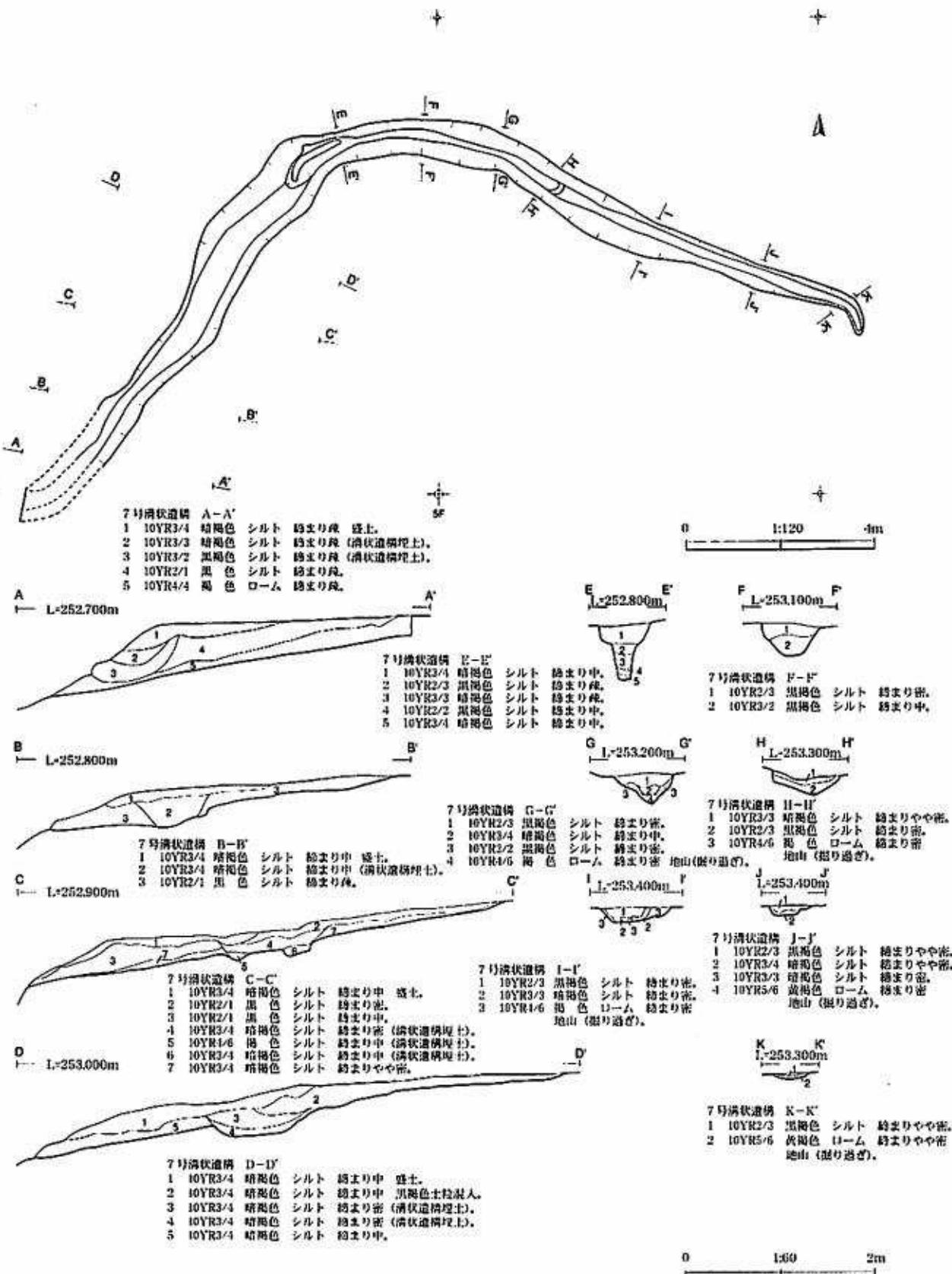
D—D' L=254.600m

5号溝状造構 D-D'
1 10YR3/2 黒褐色 シルト 細まりやや密。
2 10YR4/6 黑褐色 ローム 細まり密
地山(掘り過ぎ)。

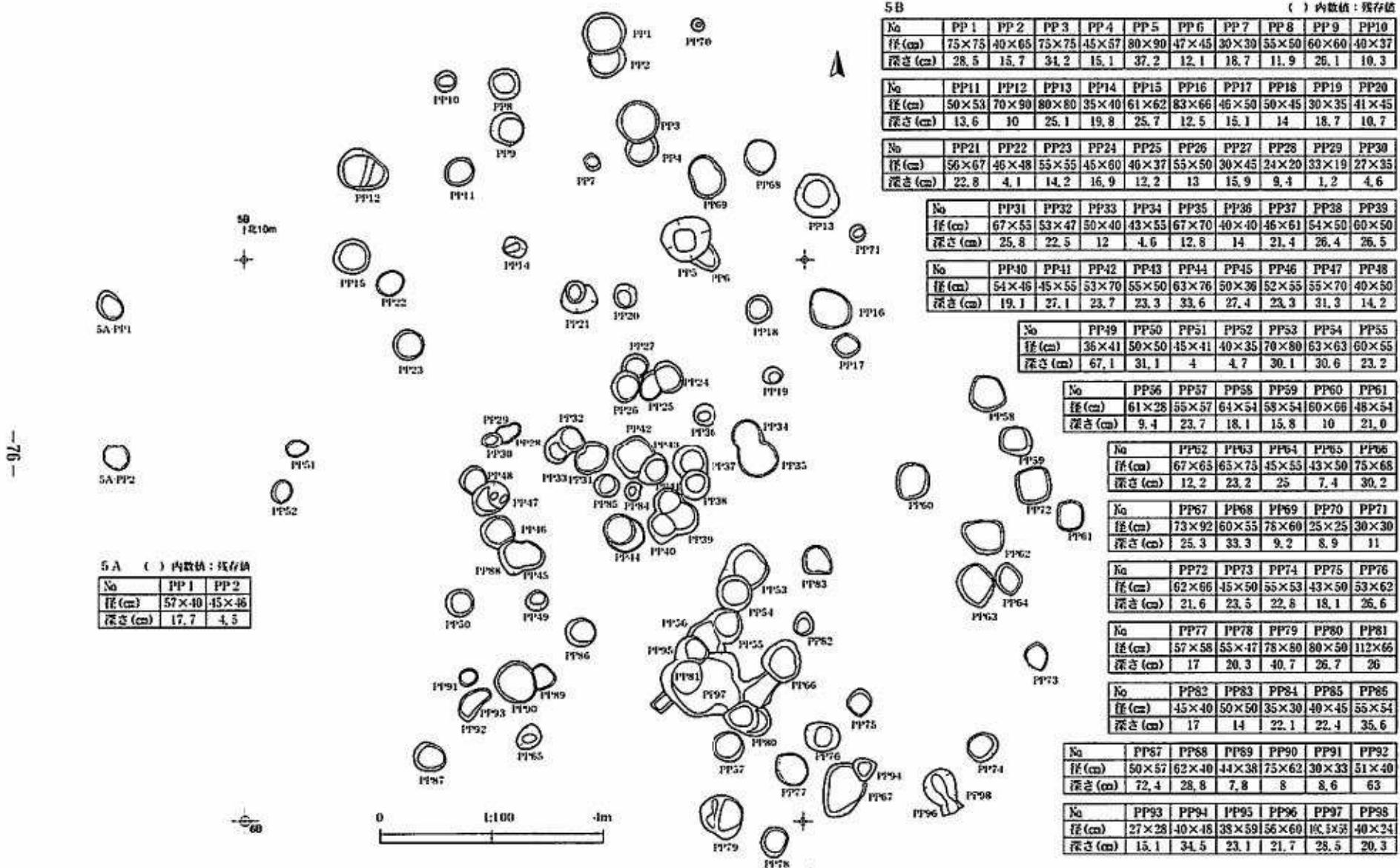
0 1:50 2m

第46図 溝状造構(2)

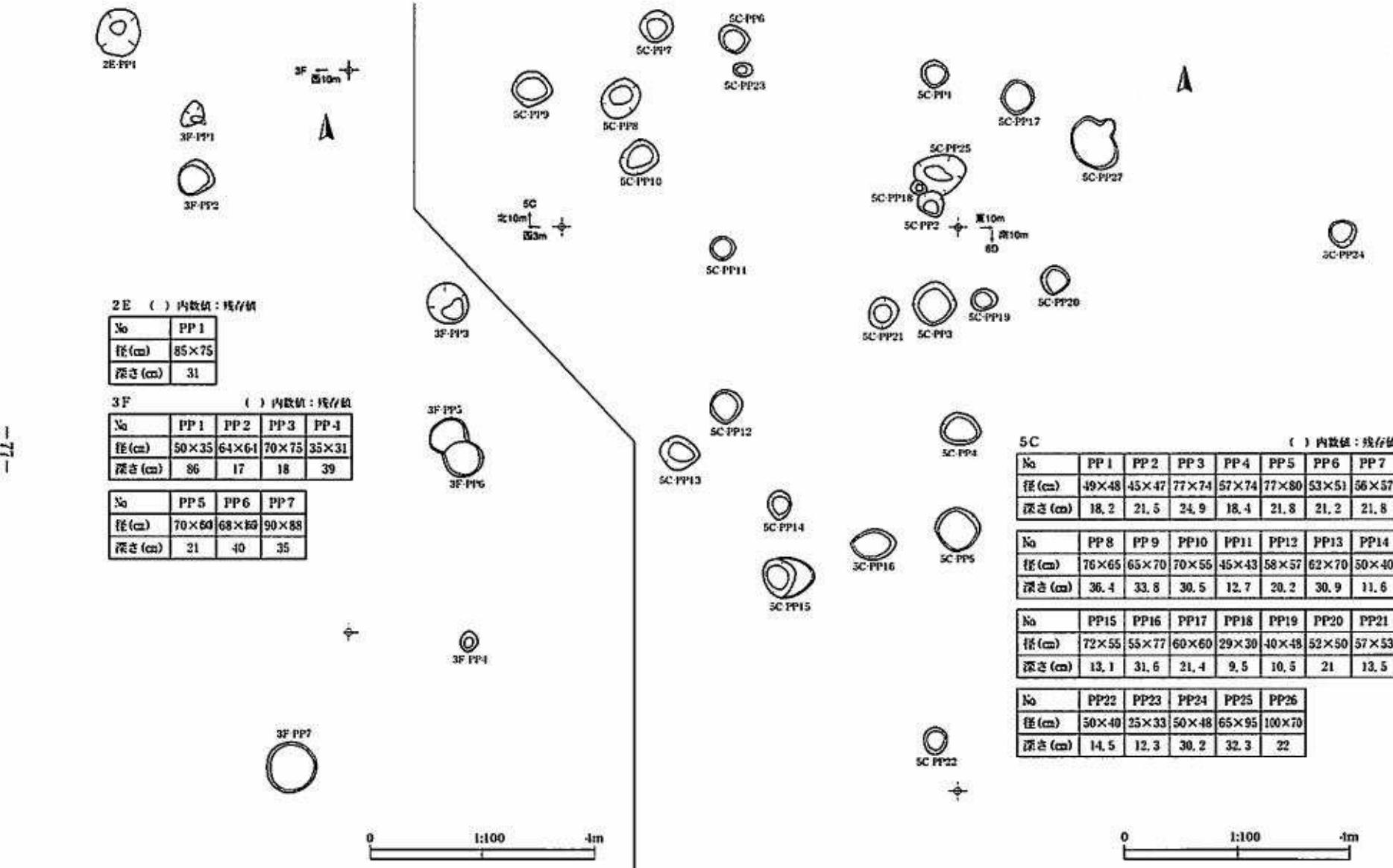
7号溝状造構



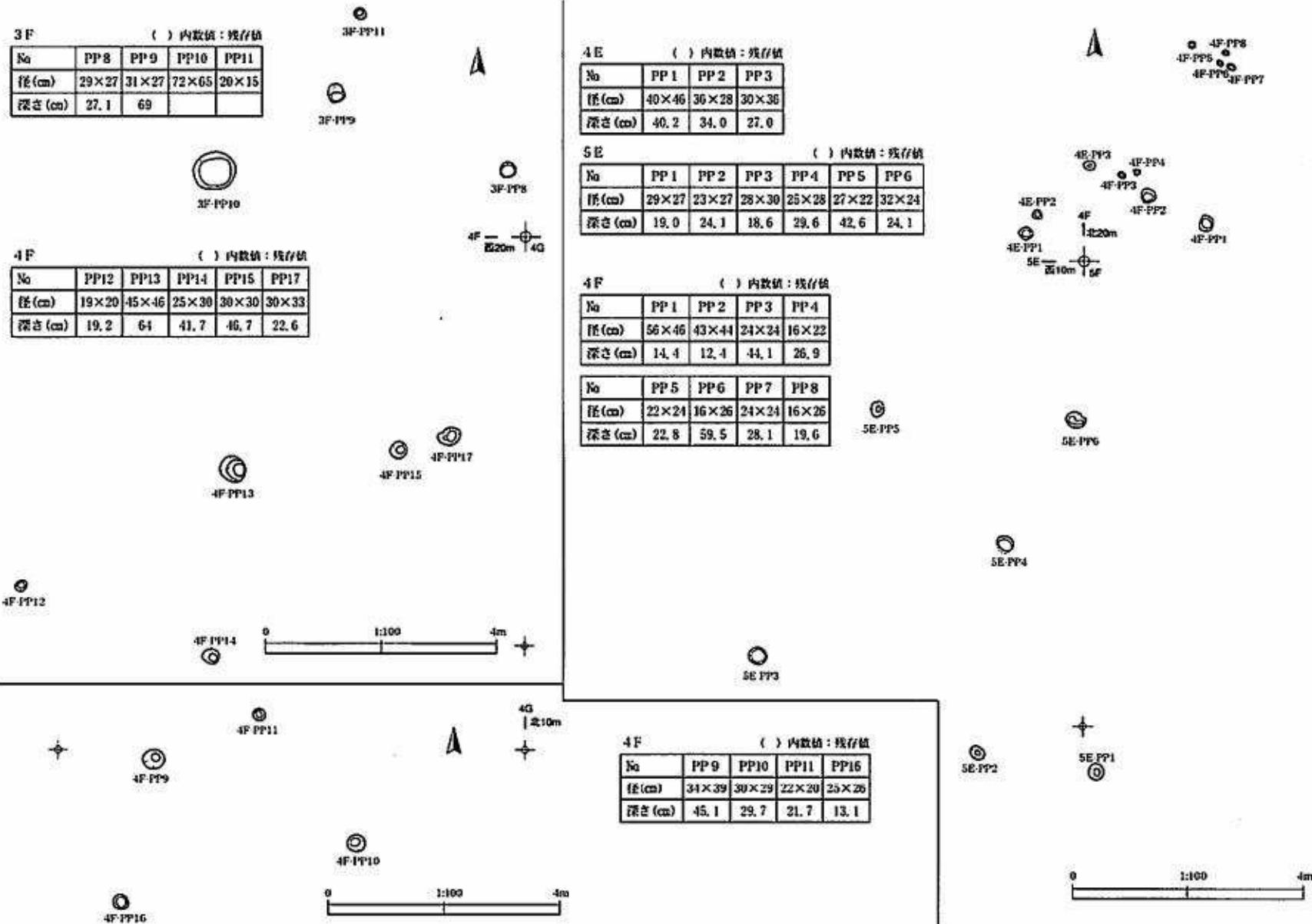
第47図 溝状造構(3)



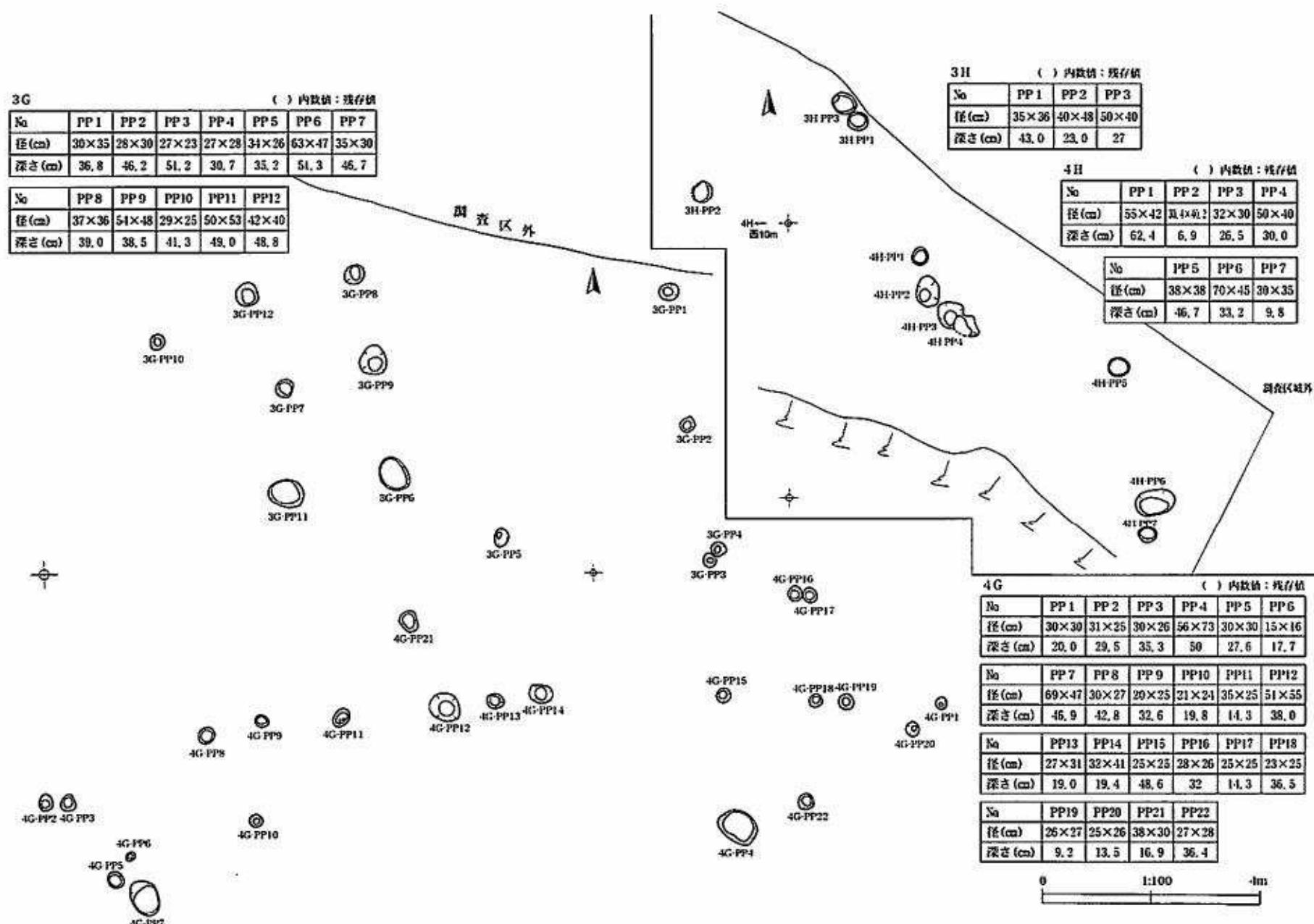
第48図 柱穴群(1)



第49図 柱穴群(2)



第50図 柱穴群(3)



第51図 柱穴群(4)

VI. 近現代の検出遺構

検出された遺構について（第52～56図）

今回検出された遺構は、採掘坑6基、炭窯跡2基・集石・配石遺構2基・柱穴状遺構124基である。いずれも調査区西側の堀外部地区から検出された。以下に遺構毎に詳述する。

1. 採掘坑（第52～54図、写真図版26・27）

採掘坑と考えられる土坑が検出されている。概要は以下のとおりである。なお、個々の採掘坑の規模・形状や特徴などについては第9表「採掘坑観察表」に示した。

遺構（第52～54図、写真図版26・27）

（位置・検出状況）調査区の西側斜面に沿って検出された。現況で落ち込み（凹み）として確認できたものが多い。調査したのは6基だが、他に4Aグリッドにおいて落ち込みとして2基を確認している。また調査区域外西側の斜面では同様の落ち込みを数基確認している。

（重複関係）4号採掘坑が5号採掘坑を切って構築されていた。種類の異なる遺構との重複関係はない。

（規模・平面形）大きさには、ややばらつきがある。開口部径は径2～5mの円形の掘り込みに加えて、2～7mの張り出しを伴う。平面の形状は、溝状や平状あるいは卵形を呈する。

（埋土・堆積状況）上位は黒褐色土・暗褐色土・下位は黄褐色土が主体となり、自然堆積の様相を呈する。

（壁・底面）壁はほぼ垂直に立ちあがる。深さは、約2～7mと幅がある。底面はほぼ平坦で、3・4号採掘坑を除いては青灰色の基盤層まで掘り込まれていた。底面は、径1.5m～3mの円形を呈する。

（その他の付属施設）斜面下位側に張り出し状の掘り込みが設けられ、スロープ状になっている。1号採掘坑では、張り出し部分に硬く踏み締められた階段状の痕跡が確認された。これらは採掘坑への入り口状施設になるものと思われる。その他、上屋等を想定できる柱穴状土坑などは周囲には確認されていない。

また、4号採掘坑には斜面上位に四角柱状の張り出しを伴っている。推測の域を出ないが、4号採掘坑については、炭窯の掘り方の可能性がある。その場合、張り出しは煙道部分に相当する。加えて、4号採掘坑は他の採掘坑のような斜面下位に張り出し状の施設を持たない。参考までに、4号採掘坑の床面積は8.18m²であり、山根館跡で検出された2基の炭窯跡の平面形・規模と近似値を示している。

遺物（第58・59図、写真図版30・31）

（出土状況）1・2号採掘坑の埋土上位・中位から出土しているが、時期決定となりうる遺物はないようである。他の採掘坑において遺物は出土していない。

（土器）縄文土器（1・2）が2号採掘坑の埋土中位から出土している。

（土製品）円盤状土製品（10）が2号採掘坑の埋土中位から出土している。

（陶磁器）小久慈焼（28）が1号採掘坑の埋土上位から出土している。大正から昭和初期のものである。

（銭貨）10円銅貨（昭和22年）が2号採掘坑の埋土上位から出土している。

（時期）岩盤までの掘り込みと深い穴の斜面下位に設けられた入り口状の施設、西側斜面にまとまってあることから、採掘跡の可能性が考えられる。しかし、何を目的としたものかは不明である。時期は、近世以前の遺物が確認されないこと、戦後の遺物が出土しているものの地元の聞き取りでも不明であったことから、現代の可能性は低い。4号採掘坑が炭窯の掘り方だとすれば、炭窯が作られた時期（戦後：昭和20～30年前後）よりも古い可能性がある。以上のことから、これらの採掘坑の時期は、近代と推定される。

第9表 採掘坑観察表

() 数値: 残存値

遺構名		1号採掘跡			
図版	遺構	52	遺物	59	
写真図版	遺構	26	遺物	31	
位置		4B			
検出状況		1層			
重複関係		4・5号土坑に切られる			
形状 ・規模	平面	卵型			
	断面	柄杓形			
	開口部	770×500cm			
	底部	200×65cm			
	深さ	700cm			
埋土		暗褐色土・黒褐色土が主体			
底面		ほぼ平坦、V層を掘り込む			
壁		ほぼ直立			
特長		斜面下位に張り出し・階段			
出土遺物		陶器(28)			
時期		近代?			

遺構名		2号採掘跡			
図版	遺構	53	遺物	58	
写真図版	遺構	26	遺物	30	
位置		5A			
検出状況		1層			
重複関係		なし			
形状 ・規模	平面	半円			
	断面	柄杓形			
	開口部	1125×750cm			
	底部	300×250cm			
	深さ	300cm			
埋土		暗褐色土と褐色土が主体			
底面		緩く湾曲する、V層を掘り込む			
壁		ほぼ直立			
特長		斜面下位に張り出し			
出土遺物		土器(1・2)・剝片(15) 円盤状土製品(10)			
時期		近代?			

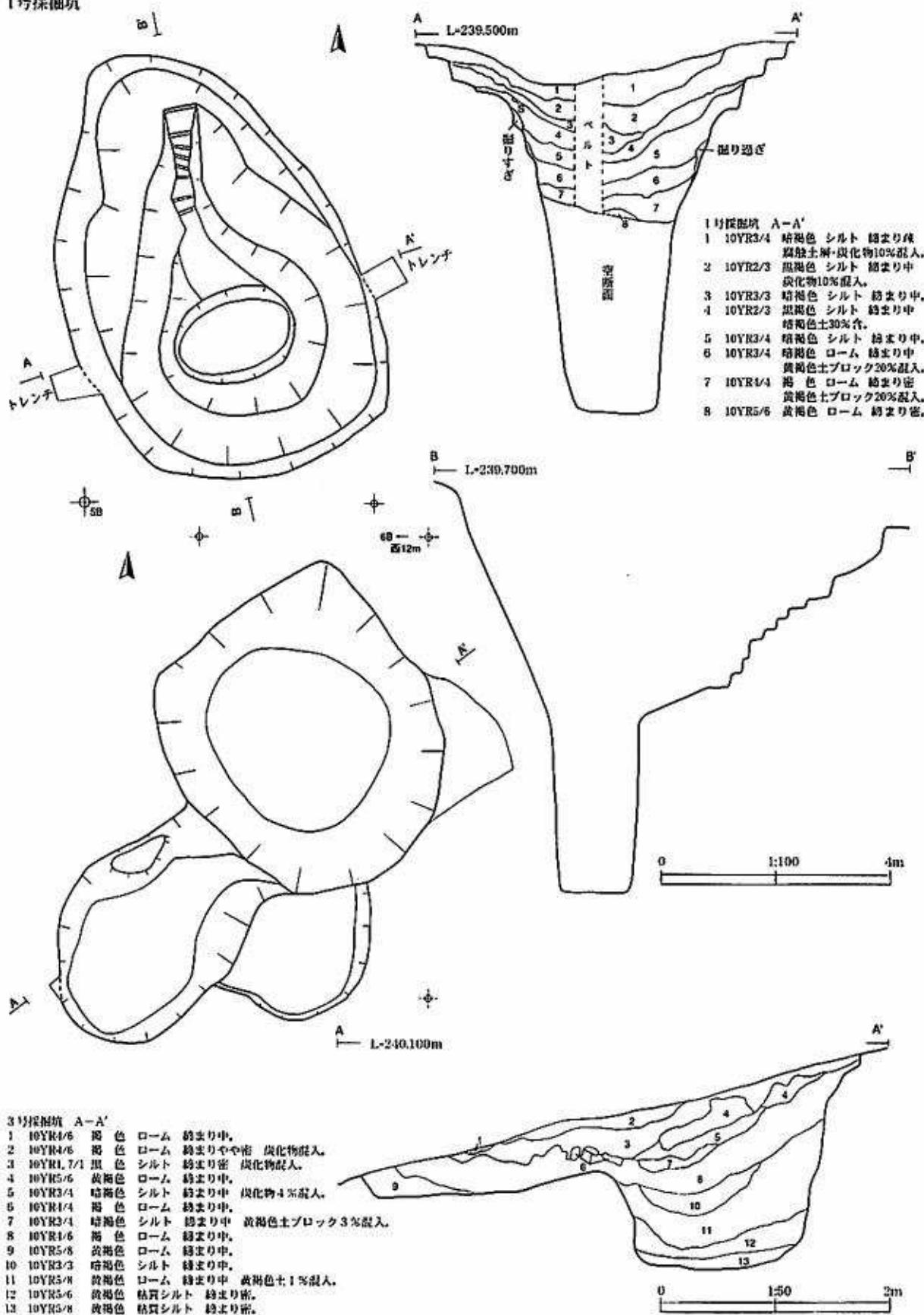
遺構名		3号採掘跡			
図版	遺構	52	遺物	-	
写真図版	遺構	27	遺物	-	
位置		6B			
検出状況		1層			
重複関係		なし			
形状 ・規模	平面	不整な卵型			
	断面	柄杓形			
	開口部	450×250cm			
	底部	160×140cm			
	深さ	190cm			
埋土		上位に黑色土と褐色土 下位に黄褐色土			
底面		ほぼ平坦			
壁		ほぼ直立			
特長		斜面下位に張り出し			
出土遺物		なし			
時期		近代?			

遺構名		4号採掘坑			
図版	遺構	54	遺物	-	
写真図版	遺構	27	遺物	-	
位置		6B			
検出状況		1層			
重複関係		5号採掘坑を切る			
形状 ・規模	平面	楕円形			
	断面	箱形			
	開口部	360×330cm			
	底部	330×290cm			
	深さ	180cm			
埋土		暗褐色土が主体			
底面		弱い凹凸あり			
壁		ほぼ直立			
特長		斜面上位に張り出し・煙道?			
出土遺物		なし			
時期		現代?炭窯の掘り方?			

遺構名		5号採掘坑			
図版	遺構	54	遺物	-	
写真図版	遺構	27	遺物	-	
位置		6B			
検出状況		4号採掘坑の下位で検出			
重複関係		4号採掘坑に切られる。			
形状 ・規模	平面	半円			
	断面	柄杓形			
	開口部	600×385cm			
	底部	270×170cm			
	深さ	250cm			
埋土		黒褐色土・暗褐色土が主体			
底面		ほぼ平坦、V層を掘り込む			
壁		外傾して立ち上がる			
特長		斜面下位に張り出し			
出土遺物		なし			
時期		近代?			

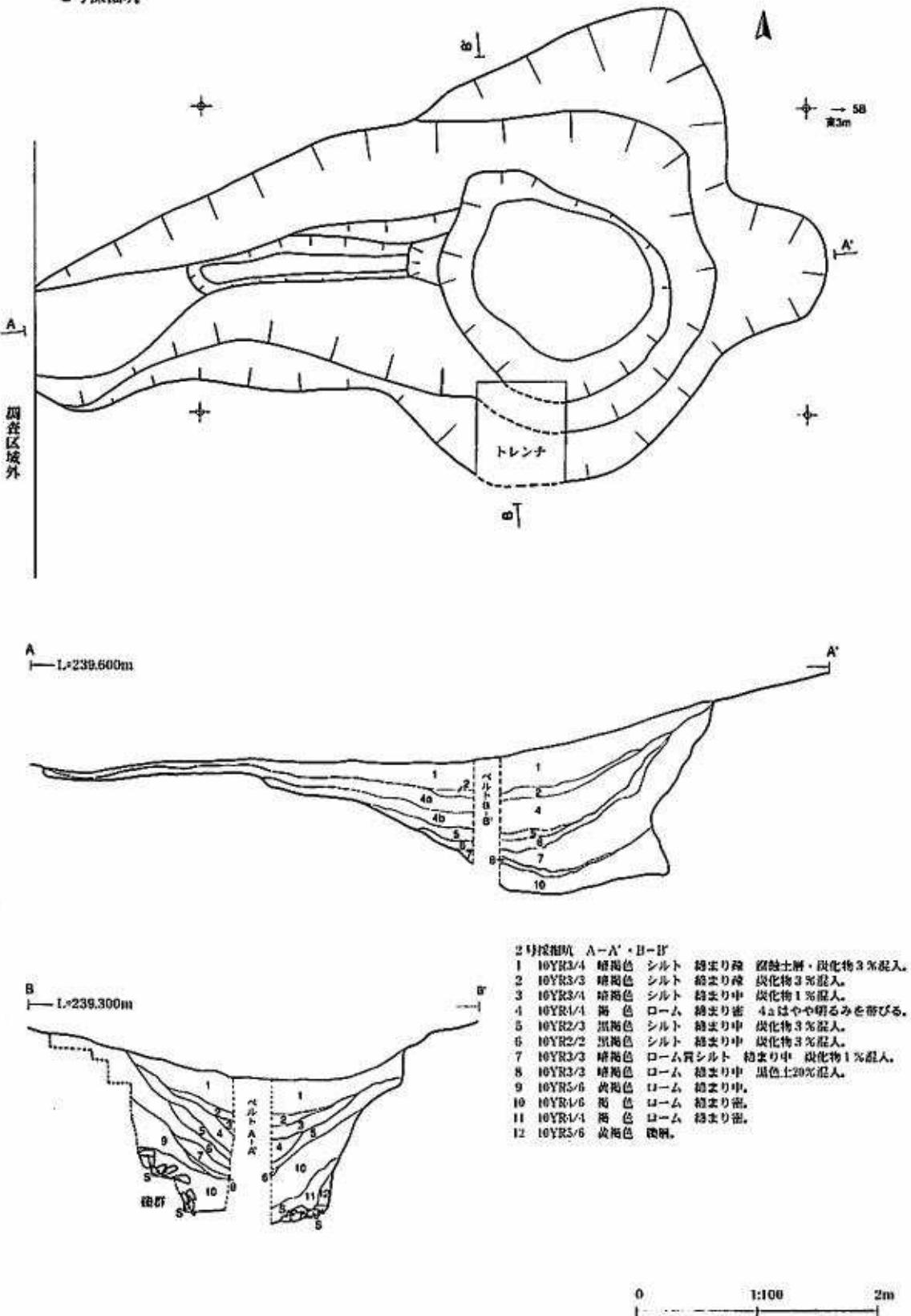
遺構名		6号採掘坑			
図版	遺構	54	遺物	-	
写真図版	遺構	27	遺物	-	
位置		6C			
検出状況		1層			
重複関係		なし			
形状 ・規模	平面	溝状			
	断面	柄杓形			
	開口部	870×270cm			
	底部	170×70cm			
	深さ	420cm			
埋土		不明			
底面		ほぼ平坦、V層を掘り込む			
壁		ほぼ直立			
特長		斜面下位に張り出し			
出土遺物		なし			
時期		近代?			

1号探査坑



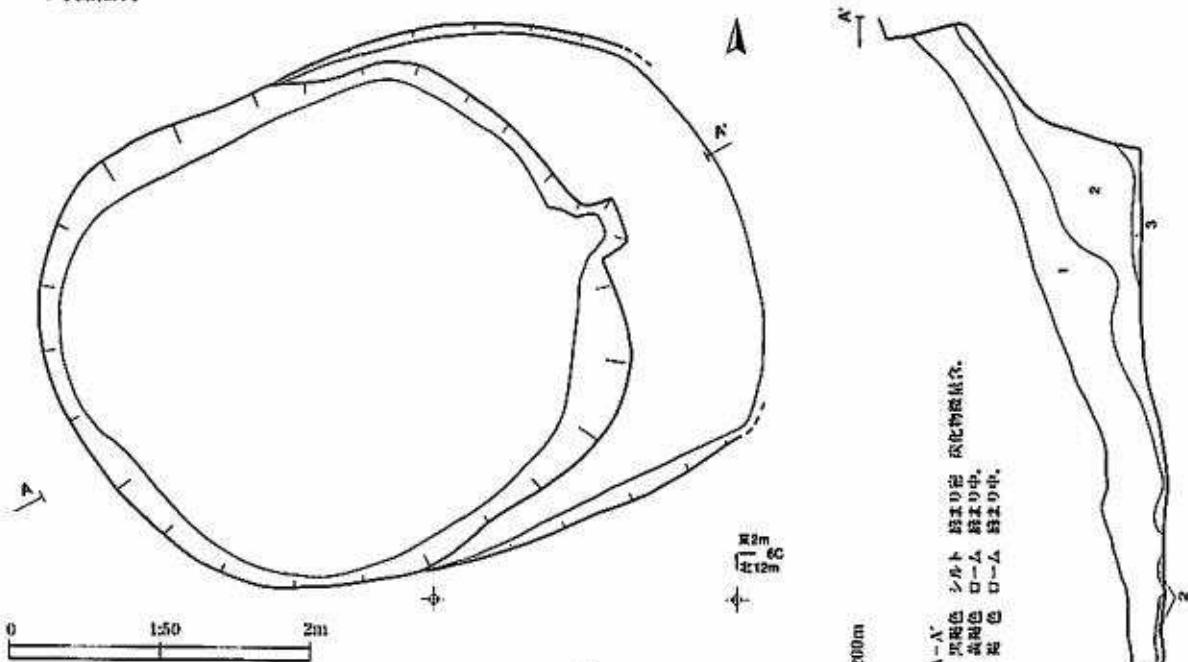
第52図 探査坑(1)

2号探査坑

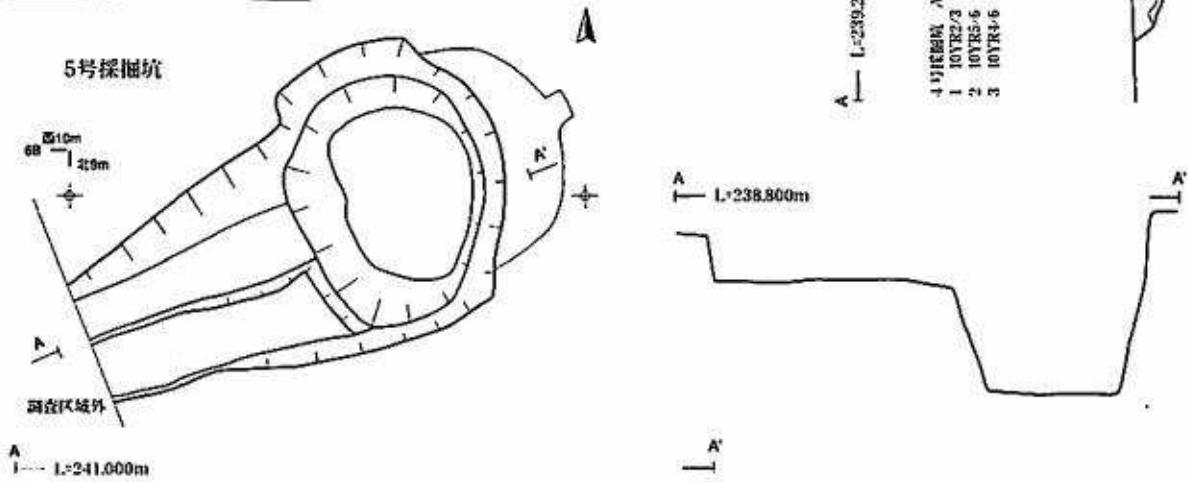


第53図 探査坑(2)

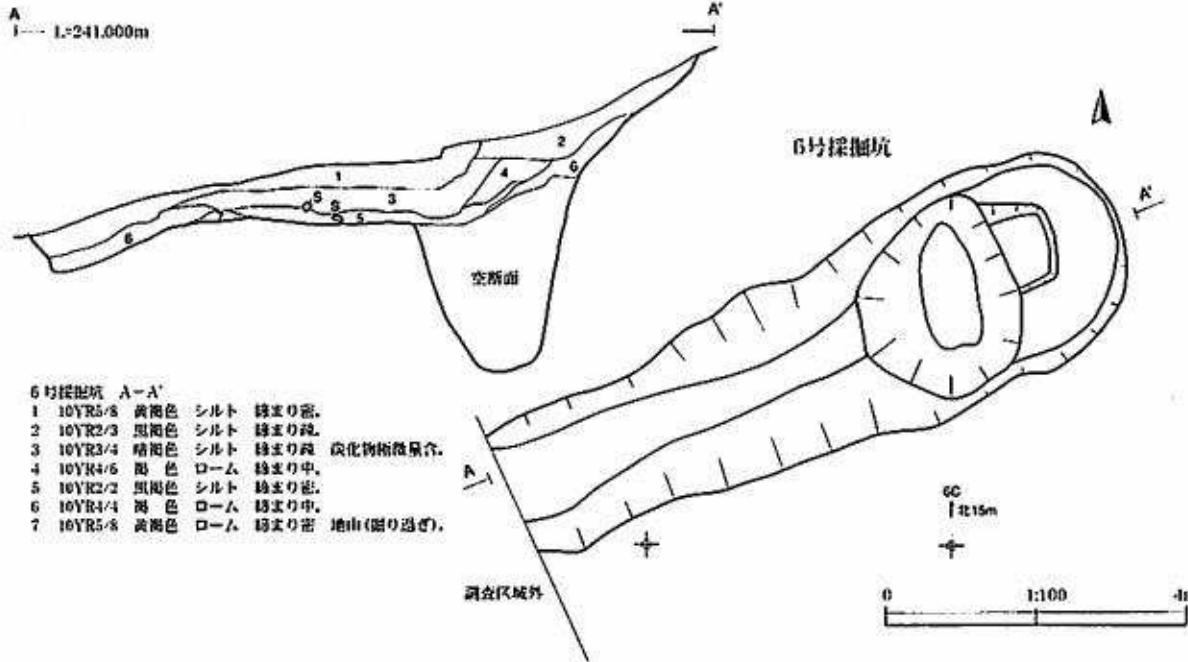
4号探査坑



5号探査坑



A — L=241.000m



第54図 探査坑(3)

2. 炭窯跡（第55図、写真図版28）

炭窯跡が2基検出された。位置は、西側斜面と2号壙跡の南端である。標高241～242m付近に構築されている。規模・形状から、時期は戦後で、昭和20～30年代に構築された炭焼窯である可能性が高い。なお、2基の炭窯跡のほかに、炭窯の掘り方と考えられる土坑（4号採掘坑）が1基確認されている。

1号炭窯跡

遺構（第55図、写真図版28）

〈位置・検出状況〉 3Bグリッド。西側斜面で、現況で落ち込み（凹地）として検出された。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 開口部径3.5×3.0m、床面3.2×2.8m、卵形である。

〈埋土・堆積状況〉 上層の崩落土からなる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んでおり、ほぼ垂直に立ちあがる。壁高70cm以上である。底面はⅢ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦だが、焚口に近接する中央寄りの部分がやや窪んでいる。全体は、黒く煤けて堅く締まっている。床面積は8.27m²である。

〈焚口・排煙口・煙道〉 焚口は斜面下の西側、排煙口は斜面上方の東側に設置される。焚口部は特に施設は残っていない。排煙口は既に崩落しており、掘り方しか確認できていない。煙道は、径50cmの方形、深さ100cmの角柱状の形状を呈する掘り方のようである。

〈その他の付属施設〉 本体の周間に上層の痕跡となる柱穴等は確認されなかった。地下施設も確認されなかつた。

遺物 なし。

時期 現代と思われる。

2号炭窯跡

遺構（第55図、写真図版28）

〈位置・検出状況〉 7Eグリッド。2号壙跡の南端で、焼土・炭混じりの広がりとして検出された。空堀の落ち込みを利用して、南向き斜面の凹地に構築されたものと思われる。

〈重複関係〉 1号壙跡を切って構築されている。

〈規模・平面形〉 開口部3.4×3.2m、床面3.0×3.2m、ほぼ円形である。

〈埋土・堆積状況〉 上層の崩落土からなる。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉 壁はⅢ層を掘り込んで、ほぼ垂直にたちあがる。残存する壁高は60cmである。底面はⅣ層を掘り込んでつくられており、ほぼ平坦で堅く締まり、黒く煤けている。床面積は8.24m²である。

〈焚口・排煙口・煙道〉 焚口は斜面下方の南側、排煙口は斜面上方の北側に設置される。焚口付近には焼土と灰の広がりが確認された。煙道は径50×35cmの方形の掘り方である。残存する深さは15cm余りで、本来の深さは不明である。

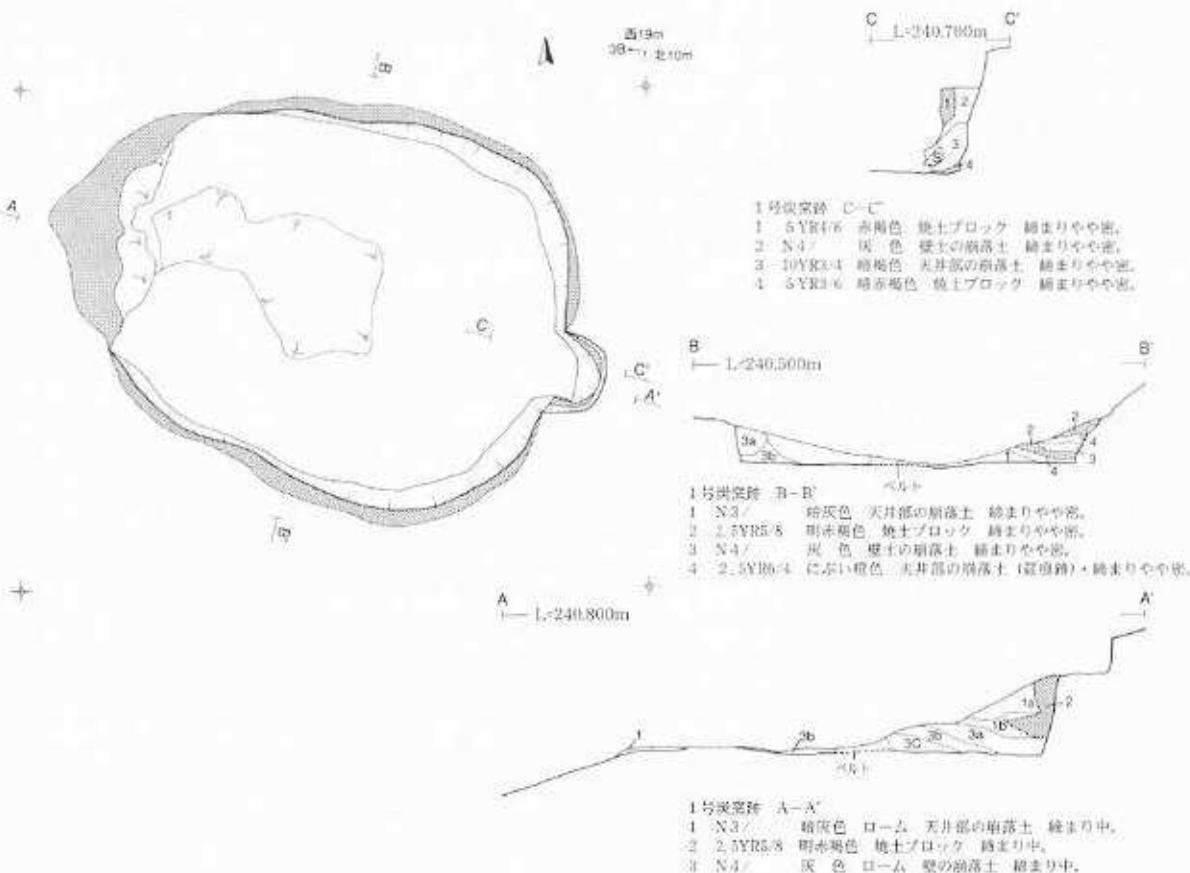
〈その他の付属施設〉 窯本体の周間に上層の痕跡となる柱穴等や地下施設は確認されなかった。なお、この炭窯の南側は、本来の地形が南向きの急斜面であり、排水・除湿の条件は満たされていたものと思われる。

遺物（第59図、写真図版30・31）

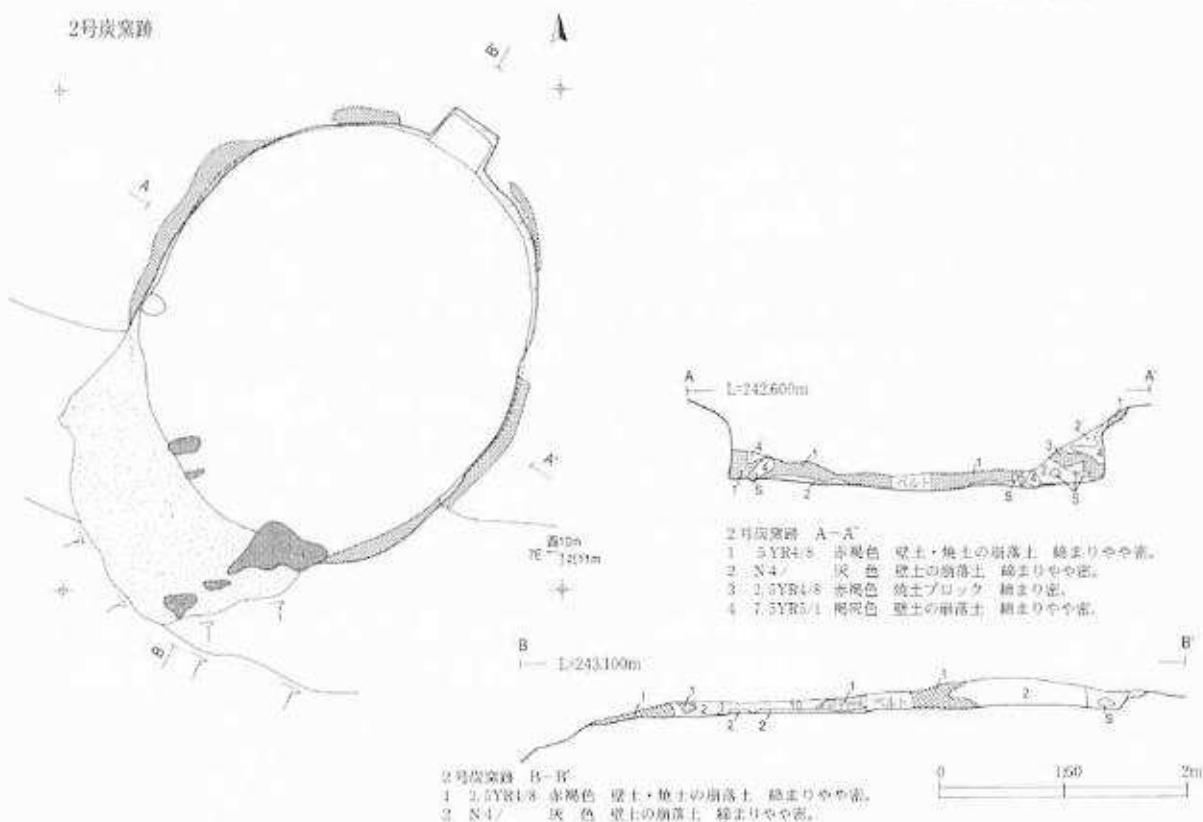
タール状の付着物がある礫が2点（18・19）、縫痕のある土壁（31・32）が出土している。

時期 現代と思われる。

1号炭窯跡



2号炭窯跡



第55図 1号炭窯跡・2号炭窯跡

3. 集石・配石遺構（第56図、写真図版29）

集石・配石遺構が2基（各1基）検出された。いずれも調査区西側で、時期は新しく、現代である。1号集石遺構は石神楽とよばれるもの、2号配石遺構は旧道沿いにあった祠の礎石のようである。

1号集石遺構

遺構（第56図、写真図版29）

〈位置・検出状況〉 5Dグリッド。現況で積み上げられている礎群として確認された。

〈重複関係〉 2号堀跡の埋没後に構築されている。2号堀跡→1号集石遺構の関係がある。

〈規模・平面形〉 4.5×2.0m、椿円形の広がりを呈する。高さ70cmほどに積み上げられていた。集石を構成する礎は、中央付近が径30~20cm大の亜角礎、周間に10~5cm大の亜角礎を配している。地下の付属施設は確認されなかった。

遺物 現代の学生服のボタンが礎中から出土しているが、古いものは出土していない。

時期 現代である。この地方では、畠を開墾するとき、出てきた礎を一箇所に積み上げて、石神楽（イシカグラ）と呼び、農神様が宿る場所として祈るという（山根六郷研究会 2001『山根風土記』註1）。類似する遺構ではないかと推定される。

2号配石遺構

遺構（第56図、写真図版29）

〈位置・検出状況〉 7Dグリッド。南側の斜面で、現在ある林道のすぐ脇の山側で、石組として検出された。

〈重複関係〉 なし。

〈規模・平面形〉 1.7×1.5mで、不整な方形を呈する。中央に0.8×0.5mの大型の礎を据えて、周間に小型の礎を配している。配石は斜面に位置しているが、中央にある大型の礎の上面は、扁平な面を上位にして水平を保った状態で据えられている。石組は1層上位に配されている。地下の付属施設は確認されなかった。

遺物（第62・63図、写真図版34・35）

〈出土状況〉 配石の間や下位及び周辺から銭貨（81~91）が出土している。最古銭は寛永通寶（84~86）で、最新銭は1円アルミ銭（平成7年）である。

時期 現代と思われるが、どこまで遡り得るかは不明である。旧道脇に祠があったとの聞き取りを得ており、祠を据えた際の土台の礎石と思われる。出土した銭貨は賽銭と考えられる。

4. 柱穴群

遺構（第48・49図、写真図版29）

〈位置・検出状況〉 5B・5Cグリッドを中心に柱穴群が確認された。検出総数は124基である。個々の柱穴はⅢ層上面で黒褐色土から暗褐色土の広がりとして検出された。ほとんどの柱穴が削平を受けている。

〈重複関係〉 なし。

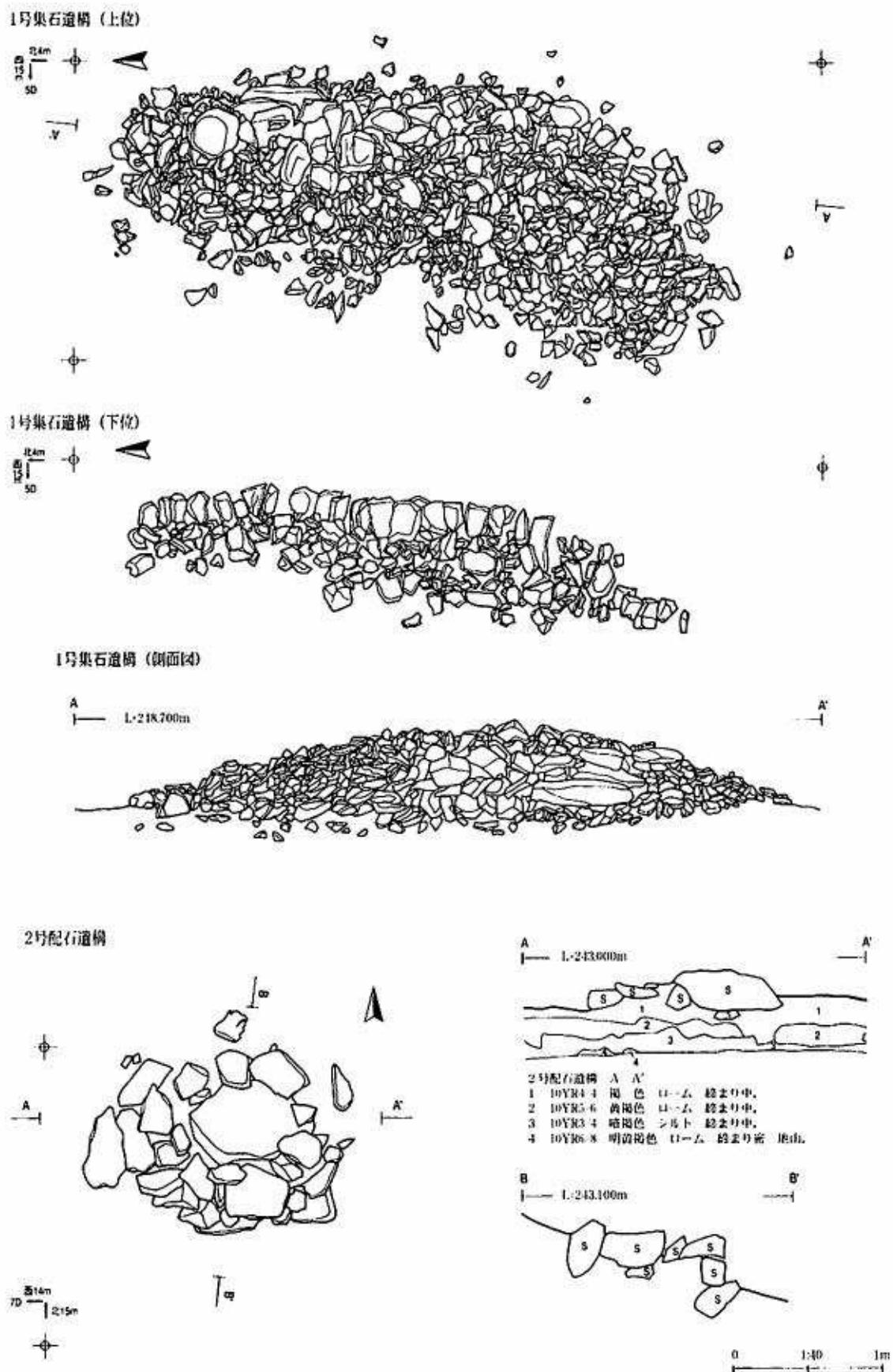
〈規模・平面形〉 径40~50cm前後、深さ15~30cmのものが多い。平面形は円形で、断面形は浅い皿状である。

〈埋土・堆積状況〉 黒色土・暗褐色土が主体で、単層のものがほとんどである。

〈壁・底面〉 壁はⅢ~Ⅳ層を掘り込み、外傾して立ちあがる。底面もⅢ層を掘り込んでいる。

遺物 ビニール・ガラス等が出土している（付掲載）。

時期 出土遺物及び遺構の状態から、近現代以降のものと考えられる。



第56図 集石・配石遺構

VII. 出土遺物

今回の調査による出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土製品・石器・陶磁器・金属製品・錢貨・動物遺存体がある。いずれも量は少なく、総量は大コンテナ（40×30×30cm）4箱分である。以下、種別ごとに概観する。

1. 土器（第58図、写真図版30：1～9）

土器には縄文土器・弥生土器がある。小コンテナ（40×30×10cm）0.5箱分、1,553.85gの量が出土しており、9点を掲載した。縄文土器は5A・4Aグリッド付近、弥生土器は5Eグリッド付近と、出土地点にまとまりがみられる。いずれも調査区西側の堀外部地区である。1～6は縄文土器で、1・5・6は文様等の特徴から中期末葉と思われる。7～9は、間隔のあいた撚糸文が縦位に施文され、弥生時代後期のものと思われる。

2. 土製品（第58図、写真図版30：10）

1点出土している。10は円盤状土製品と思われる。薄手で摩滅が著しく、地文等も不鮮明である。

3. 石器（第58図、写真図版30：11～19）

石器は、総重量1,452.53g、小コンテナ（40×30×10cm）1箱分が出土している。器種は、石鏃1点、リタッチドフレイク（RF）4点、剥片1点、砥石1点、礫2点である。

石鏃（11）は1点出土している。凹基無茎鏃で抉りは弱い。剥片類（12～16）は堀内部地区及び堀外部地区から出土しているが、縄文時代あるいは弥生時代に属するものと思われる。これら剥片石器の石材には、北上山地産の頁岩が用いられているのが特徴である。砥石（17）は、1号掘立柱建物跡PPII埋土から出土しており、中世に使用されたものと思われる。石材には奥羽山脈産？の流紋岩が用いられているのが特徴である。他に炭素跡から被熱を受け、タール状の付着物がある棒状の礫が2点出土している。炭素の使用時に用いた道具類のひとつと思われる。

4. 陶磁器（第59図、写真図版31：21～30）

陶磁器は、総重量352.47g、小コンテナ（40×30×10cm）1箱分が出土している。個体判別し、登録した破片数は23点で、中世以降近現代のものまである。ここでは、中世・近世のもの及び近代でも地元の小久慈焼と考えられるもの10点を掲載した。21・22は中国産磁器で、21は白磁・22は染付の破片で、いずれも器種は皿と思われる。時期は21は15世紀初頭、22は16世紀代と考えられる。いずれも堀内部の曲輪3からの出土である。23～30は陶器である。23は16世紀代と考えられる瀬戸美濃、24～26は19世紀代と考えられる肥前あるいは東北産と推定される陶器である。27～30は、いわゆる小久慈焼きと考えられる。時期は、大正から昭和初期と推定されるもので、27・28は鉄釉、29は灰釉である。30はいわゆる三瓶皿に類するものである。

5. 金属製品（第60図、写真図版32：41～51）

15点出土した。遺存状態の良くない4点を除く、11点を掲載した。鉄製品9点・銅製品2点である。41～49は鉄製品で、41・44・45・46は断面角形の釘である。42は鍋の可能性がある破片、43は輪状の製品である。47は刀子で、刃部と柄部の両端を欠損する。48は鎧で、一端を欠損する。49は鉄挺である。49の鉄挺以外は堀内部地区からの出土である。

6. 錢貨（第61～63図、写真図版33～35：61～97）

銭貨は106点出土している。今回の調査において、遺跡全体では、中世から現代までの時期に使用された銭貨が出土しているが、現在使用されている貨幣を除く、近代以前の銭貨37点を図化し、掲載した。中世以前の銭貨は17点出土している。いずれも堀内部地区からの出土である。61～70の10枚は、2号堀跡の中央、虎口のほぼ正面に当たる部分の堀底から一括で出土したものである。銭種の最古銭は開元通寶（621）、最新銭は永樂通寶（1408）である。取り上げ時の不手際で、詳細な記録がなく、緒の状態であったかどうかは不

明である。71は、1号掘立柱建物跡の柱穴PP16の埋土から出土している大鏡通寶。1号竪穴建物跡からは2枚、皇宋通寶と洪武？が出土している。2号竪穴建物跡からは2枚、治平通寶・無文錢、3号竪穴建物跡からは2枚、天禧通寶・洪武通寶が出土している。2号配石遺構は祠の基壇で、賽錢として用いられた銭貨が遺構及び周辺から82枚出土している。錢種の最古錢は寛永通寶で、最新錢は平成7年の1円である。

7. 動物遺存体（第一図、写真図版一）

7個体の動物遺存体（獣骨）が出土している。内訳は、シカ・ウシ・ヒツジ？・イヌ・タヌキ・キツネなど6種が確認されている。4号土坑の埋土から一括で出土している状況などから埋葬されたと考えられるものもある。時期は、骨の遺存状況や遺構の状態から、いずれも近現代以降の新しいものと考えられる。

8. 炭化材（第一図、写真図版一）

炭化材は数十点出土しているが、このうち、6遺構から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行っている。1・2号竪穴建物跡からはクリ材が出土している。時期は、15～16世紀代との鑑定結果が得られている。7号竪穴建物跡から出土した炭化材は17～18世紀代との鑑定結果が得られている。

第10表 土器観察表

図版 No.	写真 No.	掲載 No.	出土地点	層位	残存 状態	時期	器種	文様（原体）の特徴	煤の 付着	内面 調整	胎土	備考
58	30	1	2号探査坑	A-A' 10層	口縁	中期末	深鉢	口：L縁	-	N	2	
58	30	2	2号探査坑	北東埋土中段	底部	不明	深鉢	底面：網代痕→ミガキ	-	不明	3	
58	30	3	4A	II～III層	底部	不明	深鉢	底：R縁、底面：文葉痕、内面：焼はじけあり	-	不明	2	
58	30	4	4A	II～III層	底部	不明	深鉢	底面：木葉痕	-	不明	3	
58	30	5	4A	III層	頭部	中期末	深鉢	口：沈線→R L縁、朱塗り？	-	N	2	
58	30	6	4A	III層	口縁	中期末	深鉢	口：無文、底：沈線+縦帶貼付+刺突(鉤)、底：L縁	-	N	3	
58	30	7	5E	II層	口縁	弥生	深鉢	口：小波状 単輪絞条体第1類(L)斜位	●	M	2	8と同一個体
58	30	8	5E	II層	口縁	弥生	深鉢	口：平縁？ 単輪絞条体第1類(L)斜位	●	M	2	9と同一個体
58	30	9	5F～5G	I層	頭部	弥生	深鉢	口：單輪絞条体第1類(L)縦位	●	N	2	7.8とは別個体

部位の名称、11：II縁部、頭：頭部、胸：胸部、底：底部、煤の付着、●：外面上に付着、○：内面調整、M：ミガキ、N：ナデ。胎土、1：緻密である。2：細緻を含まず、砂粒を含む。3：細緻・砂粒をわずかに含む。4：細緻・砂粒を大量に含む。

第11表 土製品観察表

図版 No.	写真 No.	掲載 No.	出土地点	層位	種別	計測値(cm)			重量 (g)	内面 調整	胎土	文様（原体）の特徴・備考	時期
						長さ	幅	厚さ					
58	30	10	2号探査坑	B-B' 5層	円盤状土製品	3.80	(1.90)	0.75	(6.40)	N	2	LR縁、周縁研磨、頭部破片	中期末？

内面調整、M：ミガキ、N：ナデ、-：なし 胎土、1：緻密である。2：細緻を含まず、砂粒を含む。3：細緻・砂粒をわずかに含む。4：細緻・砂粒を大量に含む。

第12表 石器観察表

図版 No.	写真 No.	掲載 No.	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量 (g)	石材	産地	備考
						長さ	幅	厚さ				
58	30	11	4F	II層	石器	3.45	1.10	0.35	1.20	頁岩	北上山地	
-	30	12	4A	II層	R・F	5.05	2.35	0.80	8.72	頁岩	北上山地	表皮付
-	30	13	5F	II層	R・F	4.60	4.00	1.20	21.33	頁岩	不明	表皮付
-	30	14	4A	II層～III層	R・F	3.00	2.00	0.60	3.00	頁岩	北上山地	
-	30	15	2号探査坑	B-B' 2層	剥片	6.75	3.40	1.70	48.70	頁岩	北上山地	
-	30	16	5B-P9	北東埋土中段	剥片	2.50	3.05	0.70	4.90	頁岩	北上山地	表皮付
58	30	17	1号掘立柱建物跡	P11埋土	砾石	(9.70)	7.15	6.70	(708.70)	流紋岩	奥羽山脈？	
-	30	18	2号竪窓跡	埋土	砾？	13.10	2.10	1.60	52.38	不明	-	被然・ダール状の付着物。
-	30	19	2号竪窓跡	埋土	砾	12.70	3.20	2.00	109.20	チャートの変質岩	北上山地	安家石灰岩のチャート質部分

第13表 陶磁器観察表

図版 No.	写真 No.	掲載 No.	出土地点	層位	器種	法量(cm)			釉調	製作地	時代 製作年代	備考	
						口径	底径	器高					
59	31	21	3Gベルト	I層	皿	-	3.9	-	灰白色	灰白色	中國	15c 初頭	磁器:白磁
59	31	22	1号竪穴建物跡	埋土	皿	-	-	-	灰白色	明青灰色	中國	16c	磁器:染付
59	31	23	3F～5Gベルト	I層	皿	-	-	-	灰白色	黃褐色	瀬戸美濃	16c ?	陶器:瀬戸美濃?灰釉
59	31	24	5B	表採	碗	-	-	-	灰白色	暗青灰色	肥前?	19c ~	陶器:染付
59	31	25	7D	II層上	碗	-	-	-	灰白色	暗青灰色	肥前?	19c ~	陶器:染付
59	31	26	4H東西ベルト	I層～II層	壺	-	-	-	灰白色	青色	東北產?	19c ~	陶器:染付
59	31	27	4G	検出面	壺	5.2	4.0	4.0	黃褐色	赤黒色	久慈	大正～昭和初期	陶器:小久慈燒、鐵輪・旋きが付い
59	31	28	1号探査坑	北東埋土中段	鉢	(16.4)	-	(6.0)	灰黄色	赤黒色	久慈	大正～昭和初期	陶器:小久慈燒、鐵輪
59	31	29	4F～4G	ベルト2箇所 I pit	碗	-	-	-	浅黄色	オリーブ黄	久慈	大正～昭和初期	陶器:小久慈燒、灰釉
59	31	30	1号塙跡南側	I層	皿	(12.4)	-	(3.8)	黄褐色	灰白色	久慈	大正～昭和初期	陶器:小久慈燒、三五目・和菴・燒きあわせ

第14表 金属製品観察表

() 数値: 残存値

図版 No	写真 No	掲載 No	出土地点	層位	器種	計測値(cm)			重量 (g)	材質	備考
						長さ	幅	厚さ			
60	32	41	2号墳穴遺物跡	南西区埋土Q 3	釘?	(2.15)	0.35	0.45	(1.12)	鉄	角釘: 欠損
60	32	42	3F・PP20	南半埋土	釘?	(4.20)	(4.60)	10.60	(32.90)	鉄	欠損
60	32	43	3H・PP4	東半埋土	輪?	2.75	3.10	0.50	5.60	鉄	
60	32	44	4G・PP6	埋土	釘?	(1.80)	0.35	0.45	(0.75)	鉄	角釘: 欠損
60	32	45	6号溝状遺構	東側末端埋土	釘?	(2.35)	0.40	0.30	(1.14)	鉄	角釘: 欠損
60	32	46	6号溝状遺構	末端下	釘	4.10	0.60	0.35	2.22	鉄	角釘
60	32	47	6号溝状遺構	磯の下	刀子	(12.10)	1.25	0.28	(17.50)	鉄	刀部: 柄部欠損
60	32	48	4F	II層	鏡	(15.00)	0.60	0.60	(41.15)	鉄	一端欠損
60	32	49	7D	III層	鉄鍵	19.80	2.00	0.50	113.57	鉄	
60	32	50	3E	III層と曲輪の間	燈管	(7.05)	1.10	1.00	(8.93)	銅	雁首
60	32	51	3G・PP2	北半埋土	金具?	4.55	1.90	0.10	5.72	銅	

第15表 銭貨観察表

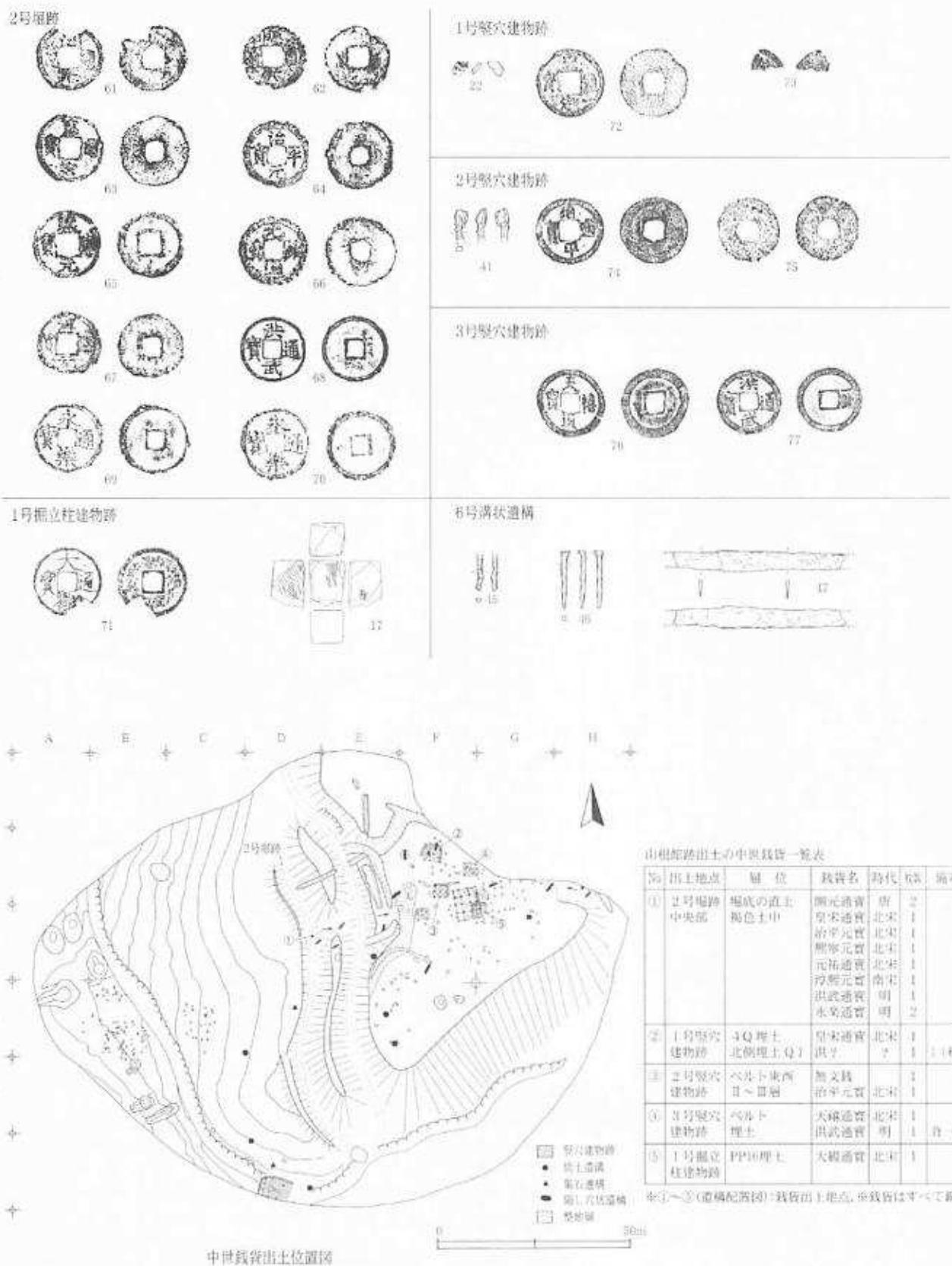
() 数値: 残存値

図版 No	写真 No	掲載 No	出土地点	層位	計測値(cm)			重錠 (g)	表面状況 (完形一部)	材質	銭名	初鑄 年	表裏 内外外	備考	
					直径(×)	厚さ	穿孔								
61	33	61	2号墳跡	一括泥底直上	2.37	(2.20)	0.12	0.70	(2.40)	○	銅錢	元通寶	621年	×	開の字部分欠
61	33	62	2号墳跡	一括泥底直上	(2.24)	(2.25)	0.11	0.70	(1.63)	○	銅錢	元通寶	621年	△△△△	欠損あり
61	33	63	2号墳跡	一括泥底直上	2.40	(2.36)	0.16	0.68	(3.00)	○	銅錢	皇宋通寶	1038年	○△△△	鄭に対して子が曲がる
61	33	64	2号墳跡	一括泥底直上	2.37	2.36	0.16	0.57	2.95	○	銅錢	治平元寶	1061年	○△△△	外郭一部凹凸あり
61	33	65	2号墳跡	一括泥底直上	2.40	2.42	0.14	0.72	2.79	○	銅錢	熙寧元寶	1068年	○○○○	
61	33	66	2号墳跡	一括泥底直上	2.43	2.47	0.14	0.62	3.50	○	銅錢	元祐通寶	1095年	○○×△	
61	33	67	2号墳跡	一括泥底直上	(2.20)	2.35	0.13	0.59	(1.58)	○	銅錢	淳熙元寶	1174年	○○○○	輪郭凸凹あり
61	33	68	2号墳跡	一括泥底直上	2.30	2.30	0.145	0.54	2.69	○	銅錢	洪武通寶	1363年	○○○○	
61	33	69	2号墳跡	一括泥底直上	2.44	2.47	0.14	0.51	2.03	○	銅錢	永樂通寶	1403年	○○○○	外郭一部凹凸あり
61	33	70	2号墳跡	一括泥底直上	2.44	2.47	0.13	0.53	2.26	○	銅錢	永樂通寶	1408年	○○○○	單あり(6ヶ所)
61	33	71	1号掘立柱建物跡	PP16埋土上	2.45	(2.44)	0.15	0.60	(2.16)	○	銅錢	大觀通寶	1107年	○○○○	欠損あり
62	34	72	1号墳穴建物跡	4Q埋土上	2.43	(2.42)	0.09	0.68	(1.76)	○	銅錢	皇宋通寶	1038年	△△××	外郭一部欠損
62	34	73	1号墳穴建物跡	北衛埋土Q1	計衡不能	計衡不能	0.10	—	0.27	○	銅錢	洪?	—	—○—×	14未満
62	34	74	2号墳穴建物跡	境近Ⅱ～Ⅲ層	2.40	2.43	0.15	0.58	2.71	○	銅錢	治平通寶	1064年	○△△△	内部やゆがむ
62	34	75	2号墳穴建物跡	ベルト東西	(2.24)	(2.24)	0.08	0.69	(1.74)	○	銅錢	無文銭	—	××××	内側丸に近い位置 外郭欠あり 古河
62	34	76	3号墳穴建物跡	ベルト除去	2.50	2.40	0.14	0.58	2.80	○	銅錢	天禧通寶	1017年	○○○○	銭全体にゆがんでいる
62	34	77	3号墳穴建物跡	埋土	2.31	2.28	0.18	0.52	2.86	○	銅錢	洪武通寶	1368年	○○○○	単穴あり1、外郭にでっぱりあり
62	34	78	7号墳穴建物跡	木の根 備乱	4.34	4.35	0.09	0.67	1.75	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	単穴あり2
62	34	79	7号墳穴建物跡	2ベルト2層	2.40	2.38	0.15	0.60	2.97	○	銅錢	寛永通寶(面)	1639年	○○△△	
62	34	80	2号配石遺構	配石除去中	2.43	2.43	0.10	0.60	2.63	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	
62	34	81	2号配石遺構	クリーニング	2.33	2.33	0.12	0.60	2.70	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	
62	34	82	2号配石遺構	配石除去中	2.29	2.29	0.18	0.57	3.39	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	
62	34	83	2号配石遺構	クリーニング	2.72	2.80	0.10	0.64	3.93	○	銅錢	寛永通寶(面)	1639年	○○○○	背日波(明和期)・四文銭
63	35	84	2号配石遺構	配石除去中	2.24	2.25	0.21	0.55	3.02	○	銅錢	寛永通寶	1639年	○○××	
63	35	85	2号配石遺構	配石除去中	2.24	2.24	0.18	0.62	2.23	○	銅錢	寛永通寶	1639年	○○△△	
63	35	86	2号配石遺構	配石除去中	2.26	2.30	0.15	0.58	2.25	○	銅錢	寛永通寶	1639年	○○××	
63	35	87	2号配石遺構	クリーニング	2.68	2.68	0.14	0.68	4.09	○	銅錢	文久永寶	1863年	○○×△	踏宝
63	35	88	2号配石遺構	クリーニング	2.31	2.31	0.14	—	3.67	○	銅錢	一錢	1919年	—	大正九年
63	35	89	2号配石遺構	クリーニング	2.31	2.31	0.14	—	3.53	○	銅錢	一錢	1920年	—	大正十年
63	35	90	2号配石遺構	クリーニング	2.31	2.31	0.14	—	2.69	○	銅錢	一錢	1935年	—	昭和十年
63	35	91	2号配石遺構	クリーニング	1.90	1.90	0.15	—	3.58	○	銅錢	50銭	1947年	—	昭和二十二年 緑刻
63	35	92	4F	II層	2.45	2.46	0.12	0.64	2.62	○	銅錢	寛永通寶(古)	1638年	○○△△	
63	35	93	5C	表探	2.38	(2.36)	0.12	0.54	(2.30)	○	銅錢	寛永通寶(古)	1638年	○○△△	1層 単穴あり 欠損品
63	35	94	7D	表探	2.23	2.23	0.13	0.61	2.58	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	背元
63	35	95	7D	II層	(2.20)	—	0.13	—	(0.93)	○	銅錢	寛永通寶(面)	—	△△××	
63	35	96	7D	II層	1.76	1.76	0.17	—	0.90	○	銅錢	一錢	1939年	—	昭和十四年
63	35	97	7E複合土坑	埋土	2.34	2.34	0.11	0.67	2.51	○	銅錢	寛永通寶(面)	1637年	○○○○	単穴あり

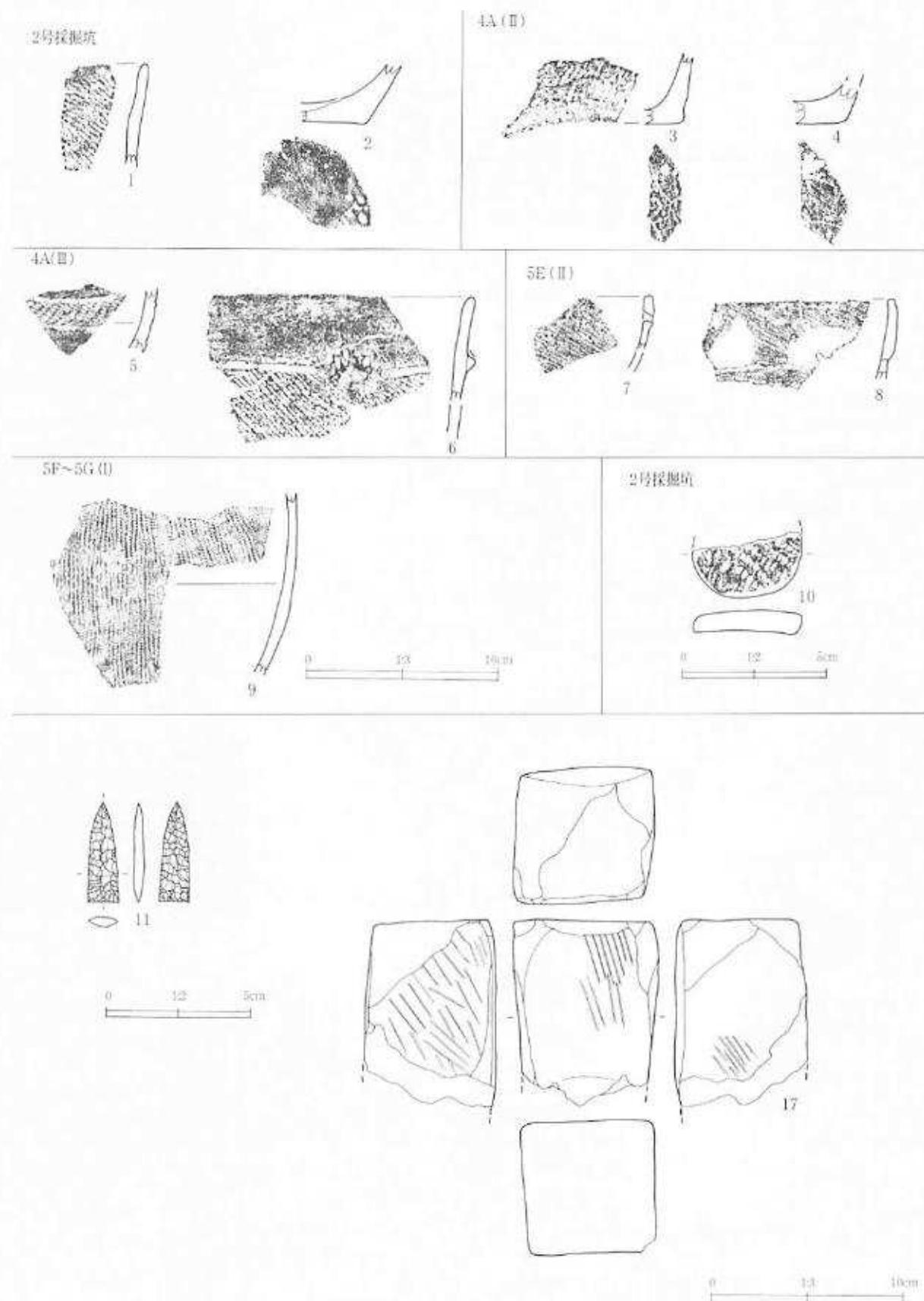
裏面の外縁・内縁の段差: ○明瞭 ○やや不明瞭 △不明瞭 ×なし

第16表 動物遺存体観察表

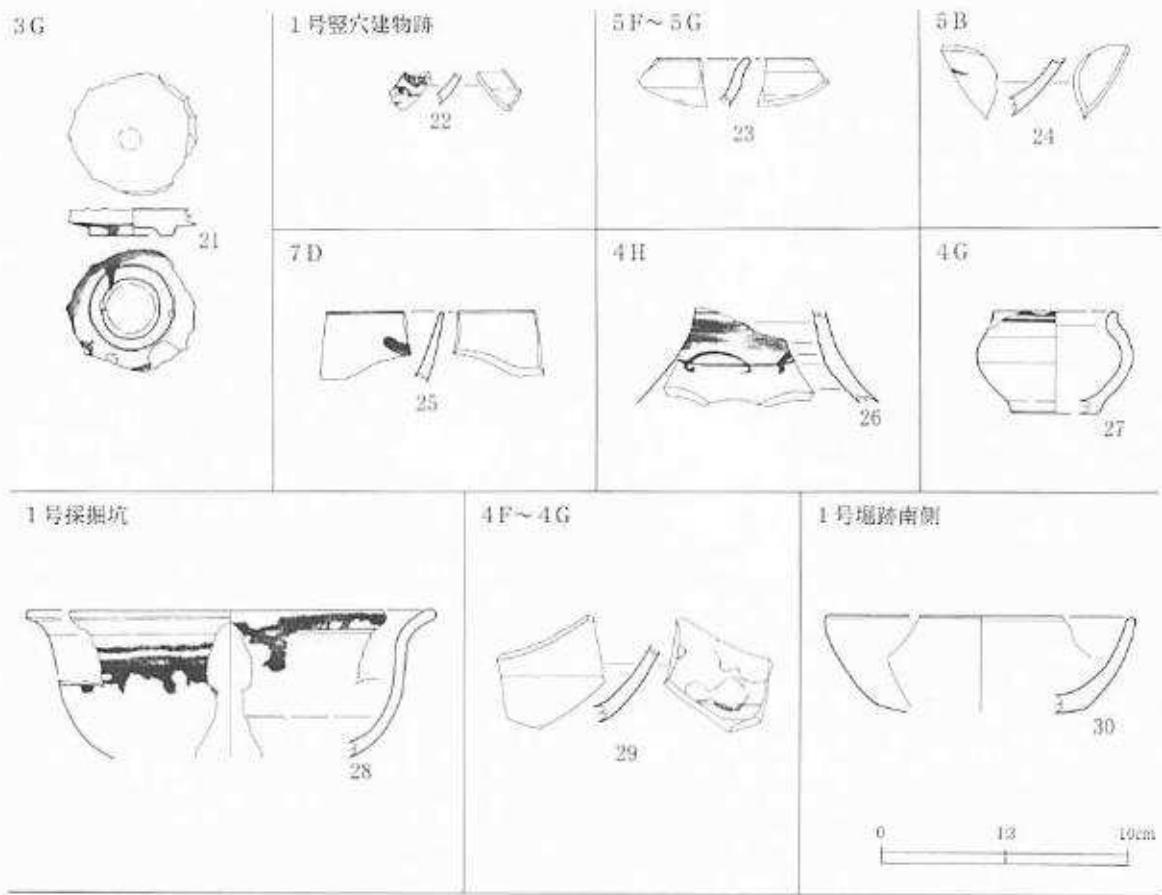
図版 No	写真 No	No	出土地点	層位	種名	残存部位	備考
—	—	1	4号土坑	埋土	ヒツジ?	1胴体	
—	—	2	12号土坑	埋土	ウシ	歯: 四肢骨	
—	—	3	6号溝状遺構	検出面	シカ?	歯: 四肢骨	若い個体
—	—	4	4G・PP21	埋土	タヌキ	1胴体	
—	—	5	4A・1号落ち込み	検出面	キツネ	頭骨	探査坑
—	—	6	4E	表探	イヌ	右上腕骨!	
—	—	7	4H	検出面(7層?)	シカ	右頭頂骨!	角の切断痕
—	—	8	1号探査坑	南東埋土中位	エゾタマガイ	貝	
—	—	9	4F~5F焼土付近	焼土下位の暗褐色土	?	貝片	



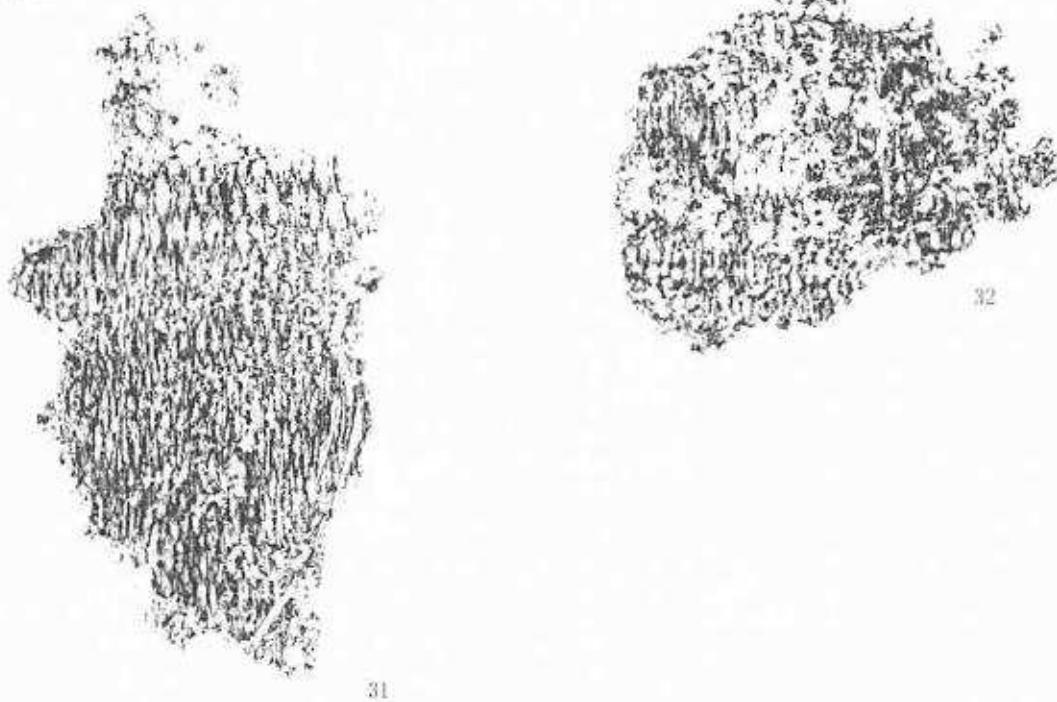
第57図 遺構内出土遺物集成図（石器1/6、陶磁器1/6、金属製品1/4、錢貨1/2）



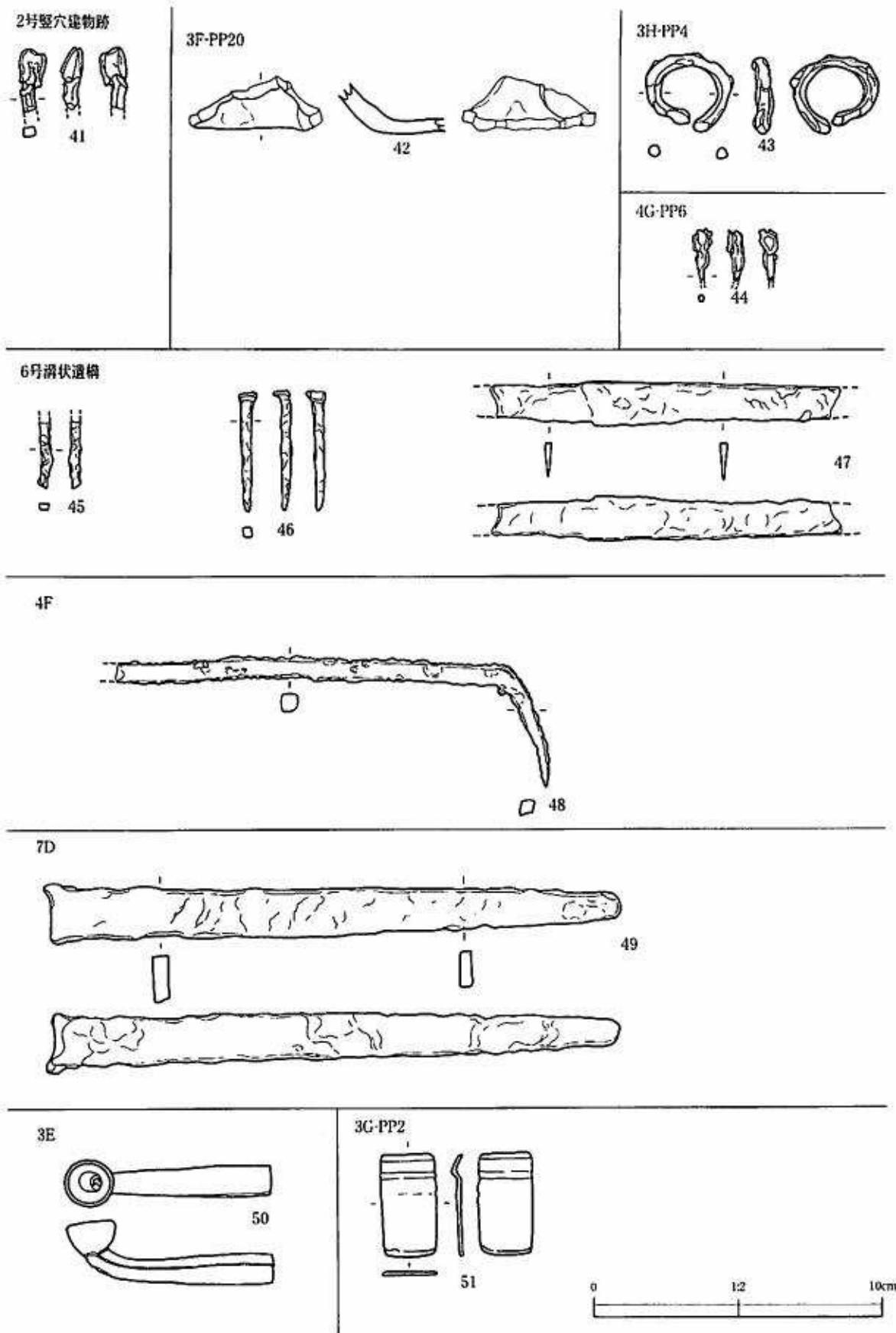
第58図 土器・土製品・石器



2号炭窯跡

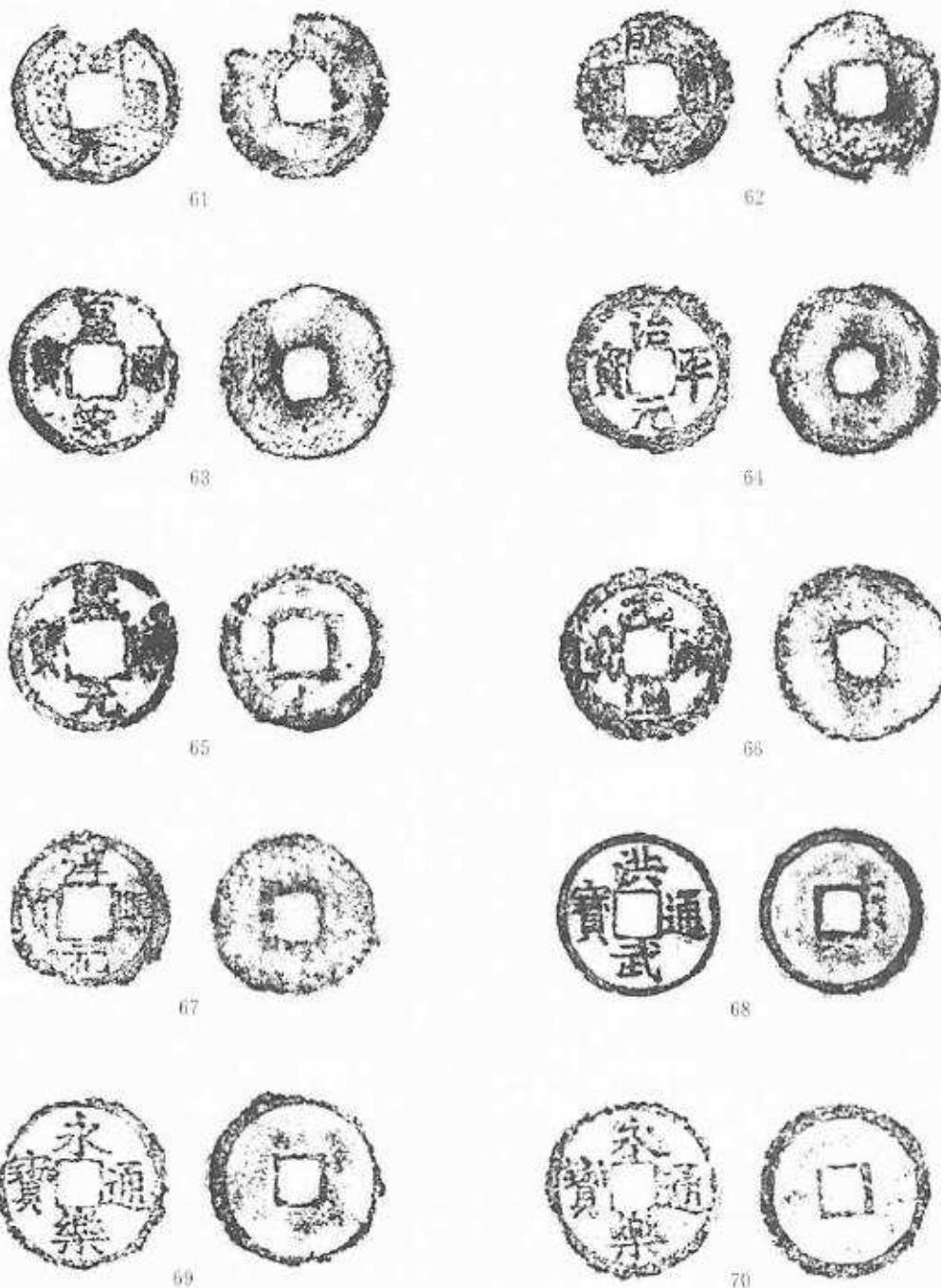


第59図 陶磁器・埴痕

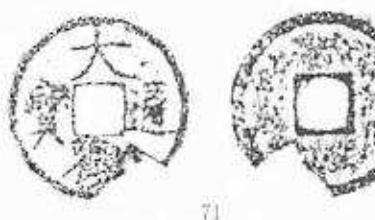


第60図 金属製品（鉄製品・銅製品）

2号掘跡

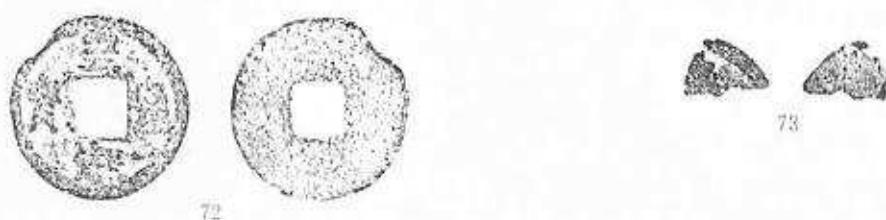


1号掘立柱建物跡—PP16



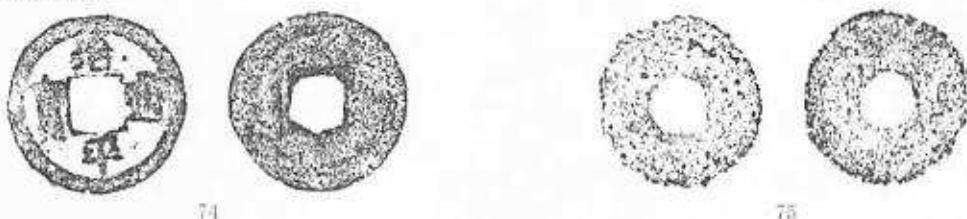
第61図 錢貨(1)

1号堅穴建物跡



73

2号堅穴建物跡



74

75

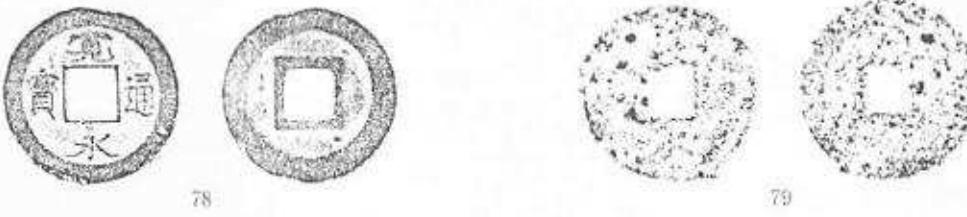
3号堅穴建物跡



76

77

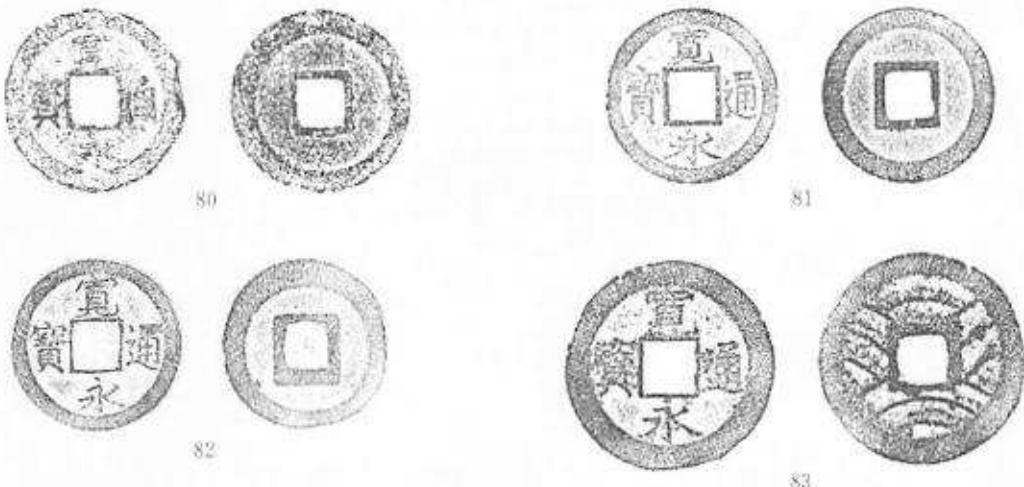
7号堅穴建物跡



78

79

2号配石造構(1)



80

81

82

83



第62図 錢貨(2)

2号配石造構(2)



84



85



86



87



88



89



90



91



4F



92



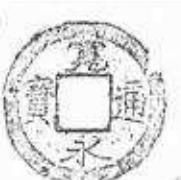
5C



93



7D



94



95



96



7E



97



第63図 錢貨(3)

VIII. まとめ

1. 遺構

(1) 館跡の縄張りと変遷

a. 縄張り

山根館跡は、蛇行しながら久慈湾に向って北流する長内川右岸の低地に、南西方向に張り出した丘陵尾根の先端に立地している。館跡の縄張りは、南側は断崖、北側は急斜面の自然地形を利用し、尾根の裾にあたる西側に二重の空堀と土塁（A）、後背となる東側に空堀と土塁（B）を廻らし、2箇所で尾根を断ち切って館跡としている。城域の面積は約30,000m²である。堀・土塁に囲まれた城域内には、北東から南西方向に緩く傾斜する尾根の自然地形を利用して造られた曲輪が確認できるが、普請の痕跡は最小限度に留まっている。曲輪は、大きく三つに分けられ、高いほうから南側に見通しの利く曲輪1・北側に見通しの利く曲輪2・西側に見通しの利く曲輪3と、周開への眺望を考慮して造られている。このうち曲輪3が平場として最も大きく、他の曲輪に比して、堅固に造られている。虎口として想定される箇所は2箇所ある。ひとつは、曲輪3の西側中央付近において周開より落ち込む箇所で、その延長上にある西側では、南北に走る土塁が途切れている。もうひとつは、曲輪3の東側で、南東方向にある下戸鎖集落に下りる道である。いずれも地元の人々に現在も使われ、山道として今に痕跡を残している。

b. 曲輪

曲輪3が調査され、整地層・掘立柱建物跡・竪穴建物跡などが確認された。整地層は曲輪3の西側、虎口から土橋を渡って曲輪に入る箇所に施される。これにより旧地形の緩斜面が比高のある平坦面に造成されている。なお、整地層を切る柱穴が数基確認されており、門跡等の可能性を考えられたが、明確に確認することができなかった。建物跡は曲輪3のほぼ中央に位置し、竪穴建物跡はその周辺に配されている。これらはすべて一時期にあったものではなく、1号掘立柱建物跡（旧）→6号竪穴建物跡（新）などの重複の例から、時期差をもつて存在していたようである。

c. 堀跡

堀跡6条が確認された。すべて空堀である。他に堀跡の痕跡の可能性をもつ溝状遺構を含めると堀跡の数はさらに増える可能性もある。これらは一時期にすべてが構築されたのではなく、時間差を持って構築され、最終的な痕跡が縄張り図に示した状態であると考えられる。1・2号堀跡が最も新しく、3号堀跡・5号堀跡を切っている。もともと曲輪3とその周辺を核として、造られた館跡であった可能性がある（註1）。

d. 虎口

虎口は曲輪3の西側で周開より落ち込む箇所で確認された。周開は浅い空堀で開まれており、土橋を渡つて曲輪3に入る。虎口の西側正面の土塁は途切れているが、二重の堀跡には、土橋は無く、橋脚等も確認できなかった。虎口内の進入路は、1号土塁の北側に向って斜めに設けられていること、正面に位置する目隠し塀を想定させる柱穴、6号堀跡と平行する溝状遺構などから、虎口内における進入路としては北側から迂回する道順（第24図→）が想定される。

(2) 館跡の時期と性格

地元では、館跡のある地点を通称「館平（たてびら）」といい、別称「伊藤館」とも言われているが、築城主について詳細は不明である。調査成果から、1、大規模な普請を施しながら、本来の地形の改変は最小限度に留まっており、粗さが目立つこと。2、作事の跡及び出土遺物から長期にわたり日常生活を営んでいた

とは考え難いこと、が指摘できる。館跡の築城及び使用された時期は、普請された堀跡の規模と、15世紀初頭の白磁・16世紀代の染付などの出土遺物から、15~16世紀（約1401~1600年）を中心として機能した館跡の可能性が高い。

下戸鎮は、近世においては塙の道と呼ばれる野田街道中にあり、現在においても久慈岩泉線（南北道）と野田山形線（東西道）が交差する交通要衝である（註2）。このような当地の地理的な位置は中世以前に遡るものと推定される。久慈・野田周辺において、他の比較的開けた低地部に築城された館跡と異なり、山間に立地する館跡の築城された理由は、この地が交通の要衝であったことに関わるものと思われる。

以上のことから、山根館跡は、日常生活を営んだ「常の居城」よりは、戦乱時に交通の要衝に築城された極めて軍事的性格の強い「詰めの城」としての機能が想定される。

2. 遺物

ここでは、出土遺物のうち銭貨についてみてみる。

(1) 銭種と出土状況

中世の銭貨としては17点（枚）が確認された。銭種は、開元通寶2枚・大觀通寶1枚・天祐通寶1枚・皇宋通寶2枚・治平通寶2枚・熙寧元寶1枚・元祐通寶1枚・淳熙元寶1枚・洪武通寶3枚？・永樂通寶2枚・無文銭1枚である。これらの銭貨の出土状況は、2号堀跡から10枚、1号竪穴建物跡から2枚、2号竪穴建物跡から2枚、3号竪穴建物跡から2枚、1号掘立柱建物跡から1枚で、すべて館跡に関連する遺構から出土している。建物跡から出土した銭貨は埋上出土で、2号堀跡では底部から一括で出土している。

(2) 形態的特長と成分分析

形態的な特長には、銭名が歪んでいるもの、巣穴があるものがあり、銭そのものが歪んでいるものもある。成分分析の結果、これらの銭貨は、公鑄銭・国内模鑄銭・私鑄銭もしくは模鑄銭に分類され、混在することが判った。なお、洪武通寶2点が公鑄銭・永樂通寶2点が模鑄銭であるとの結果を得ている。

(3) まとめ

今回の調査では、銭の鋳造を示唆する遺構は確認されなかったが、中世の館跡に係る貴重な資料を得ることができた。曲輪内出土の銭種に洪武通寶が含まれ、永樂通寶が含まれないこと。2号堀跡からの一括出土銭に洪武通寶とともに永樂通寶が含まれることは、館跡の変遷（時期差）を示すものと考えられる（註3）。

3. 総括

(1) 遺跡の位置と立地

山根館跡は、久慈市の南西方向にある山根町字下戸鎮に位置し、蛇行しながら久慈市内を北流する長内川流域に形成された低地に張り出した丘陵尾根の先端に立地する。標高240~270mで、下を流れる長内川と比高は約40~70mある。遺跡の現況は山林である。遺跡の面積は約30,000m²である。

(2) 検出された遺構

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構、中世の館跡に関連して、曲輪・堀跡・土塁・虎口・掘立柱建物跡・竪穴住居跡・焼上遺構・土坑・溝状遺構・柱穴群。近現代の炭窯跡・採掘坑・集石遺構・柱穴群である。

(3) 遺構の占地

遺構の占地は、縄文時代の陥し穴は、調査区の高位面で山の頂部、中世の館跡もほぼ二重の空堀の内側に限定される。近現代の採掘坑は調査区西側の斜面部、炭窯跡は調査区西側及び南側の斜面部に造られている。

(4) 出土遺物

縄文土器・弥生土器・土製品・石器・陶磁器・金属製品・鉄貨・動物遺存体などが出土している。総量は大コンテナ(30×40×30cm)で4箱である。各種遺物の内容は以下のようであった。

- a. 縄文土器は中期末葉頃のもの、弥生土器は後期のものが出土している。
- b. 石器は、剥片石器では石鏃・その他剥片類、砥石が出土している。
- c. 陶磁器は、23点出土しており、15世紀初頭の白磁の皿、16世紀代の染付の破片がある。他に近世以降の染付や近現代の小久慈焼等も出土している。
- d. 金属製品は、鉄製品(刀子・釘・鍔・鍋破片?)と銅製品(煙管・金具?)がある。
- e. 動物遺存体は、シカ・ウシ・ヒツジ?・イヌ・タヌキ・キツネなど6種7個体がある。
- f. 鉄貨は、計106枚出土しており、中世以前の鉄貨17枚、近世(寛永通寶など)の鉄貨15枚、近現代の鉄貨が74枚ある。

おわりに

今回の調査で、山根館跡は、縄文時代・弥生時代、中世・近世以降近現代の複合遺跡であることが判った。詳しくは縄文時代においては狩猟の場であり、中世後期においては館跡として使われていた。そして近世以降、近現代に至るまで採掘や炭焼など、長内川流域にある下戸鉢とその周辺に住む人々の生活の場として使用されていたことが明らかとなった。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、多くの諸先生、職場の先輩、同僚に多くの貴重なご指導をいただいた。また、拙い指示にもかかわらず的確・迅速に作業を進めていただいた野外・室内の作業員の方々、ご協力いただいた地元山根町の地権者の方々、久慈市教育委員会・山形村教育委員会・久慈地方振興局にお礼申し上げたい。

註

- (1) 確認された曲輪1~3で、平坦地としてもっと整備された空間は曲輪3で、曲輪1・2は平面こそ確認できるものの、平坦地が十分に整備されているとはいい難い。堀跡の変遷も考慮すると、拡張り図で意図された最終的な「詰めの城」に変貌する以前には、地元に密着したより小規模な「村の城」としての姿があった可能性がある。
- (2) 「戸鉢」の地名は岩手県においては安代田山と久慈山根がある。その語源については、①「廻鎖」で、道や河川の繁がる土地、②「祇草蟹」の略で、祇草の生えた河岸の開墾地、の意がある(芳門申龍1997)。①は「鉢」の地が交通の要衝であることを示唆するもので、安代田山・久慈山根ともに共通する。
- (3) 洪武通寶と水楽通寶は、岩手県においては、流通の経路に係って分布域が異なることが指摘されている(阿部勝則2001)。併せて、両鉄貨は時間差をもって存在している可能性もある。今後の課題である。

参考文献

- 水井久美男 1996『日本の出土鉄總覧』1996年版、兵庫県埋蔵文化財研究会。
阿部勝則 2001『岩手県北地方の出土鉄』『中世の出土模範鉄』東北中世考古学会編、高志書院。
小田野哲志 1987『岩手の弥生式土器編年試論』『岩手県立博物館研究報告』第5号 岩手県立博物館。
熊谷常正・小田野哲志・高橋信雄 1982『岩手の土器』岩手県立博物館。
JR岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『松本館跡発掘調査報告書』岩文埋第256集。
JR岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『上尾田の館跡発掘調査報告書』岩文埋第300集。
JR岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000『篠館跡発掘調査報告書』岩文埋第353集。
岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集。
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城一目で見る築城と攻略の全貌ー(上)関東編』学習研究社。
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城一目で見る築城と攻略の全貌ー(下)中部・東北編』学習研究社。
西ヶ谷恭弘 1994『戦国の城一目で見る築城と攻略の全貌ー總説編』学習研究社。
千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社。
芳門申龍 1997『岩手の地名百科-語源・方言・索引付大事典-』岩手日報社。

IX. 分析・鑑定

1. 放射性炭素年代測定

山根館跡から出土した炭化材の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県久慈市に所在する山根館跡は、蛇行して北流する長内川右岸の低地に張り出した丘陵尾根に立地する。標高は240~270mで、長内川との比高は約40mある。発掘調査により、縄文時代の陥し穴状遺構、中世の曲輪・空堀・土塁・虎口・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・焼土遺構・柱穴・土坑、近現代の採掘坑・炭窯跡・集石遺構などが検出されており、時期不明の土坑や柱穴も多数検出されている。

今回の分析調査では、これらの遺跡から出土した炭化材や炭化種子の放射性炭素年代測定を行い、年代資料を得るとともに、炭化材については樹種同定を実施し、各時代・時期に関する資料を得る。

(1) 資料

試料は、1号竪穴建物跡の埋土・2号竪穴建物跡の埋土・3号竪穴建物跡の4ベルト2層・20号土坑の埋土・5号土坑の埋土・13号土坑の埋土から出土した炭化材各1点である。各遺構の出土遺物等による年代所見は、試料の詳細を表1に示す。

(2) 方法

① 放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室の協力を得た。なお、計算には、放射性炭素の半減期として、LIBBYの半減期5,570年を使用した。また、付記した誤差は β 線の計測値の標準偏差 σ に基づいて算出した年代で、標準偏差に相当する年代（真の値が66.7%の割合でこの範囲内にあるということ）である。

同位体比は標準値からのずれを、パーミルで表した年代である。 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて算出した値である。今回の炭化物試料の測定年代は、この年代に基づいて補正した年代である。

② 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

結果を表1に示す。測定年代値は、1号竪穴建物跡埋土出土炭化材が約500年前、2号竪穴建物跡床面出土炭化材が約400年前、7号竪穴建物跡4ベルト2層出土の炭化材が約300年前、20号土坑埋土出土炭化材が約200年前、5号土坑埋土出土炭化材・13号土坑埋土出土炭化材が現代の値を示した。

炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亞属）と広葉樹2種類（クリ・サクラ属）に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

① マツ属複維管束亞属 (*Pinus Subgen. Diploxylon*) マツ科

試料は保存状態が悪い。軸方向組織は仮道管を主とする。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分

野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。

② クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔間部は1～4列、孔圈外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は巣穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性・単列・1～15細胞高。

③ サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った梢円形、単独または2～8個が複合、晚材部へ向かって管径を漸させながら散在する。道管は巣穿孔を有し、壁孔は交互に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

表1 山根館跡の放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構名	層位	年代 所見	資料の質	樹種	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Code No
1号竪穴建物跡	埋土 (Q1)	中世	炭化材	クリ、マツ属複雜管束亞属	510±90	-27.7	Gak-20750
2号竪穴建物跡	床土 (Q1)	中世	炭化材	クリ	400±90	-27.1	Gak-20751
7号竪穴建物跡	4ベルト2層	中世	炭化材	散孔材	280±90	-29.1	Gak-20752
20号土坑	埋土	近世?	炭化材	クリ	200±80	-26.5	Gak-20753
5号土坑	埋土	不明?	炭化材	サクラ属	Modern	-	Gak-20754
13号土坑	北半埋土	不明?	炭化材	クリ	Modern	-	Gak-20755

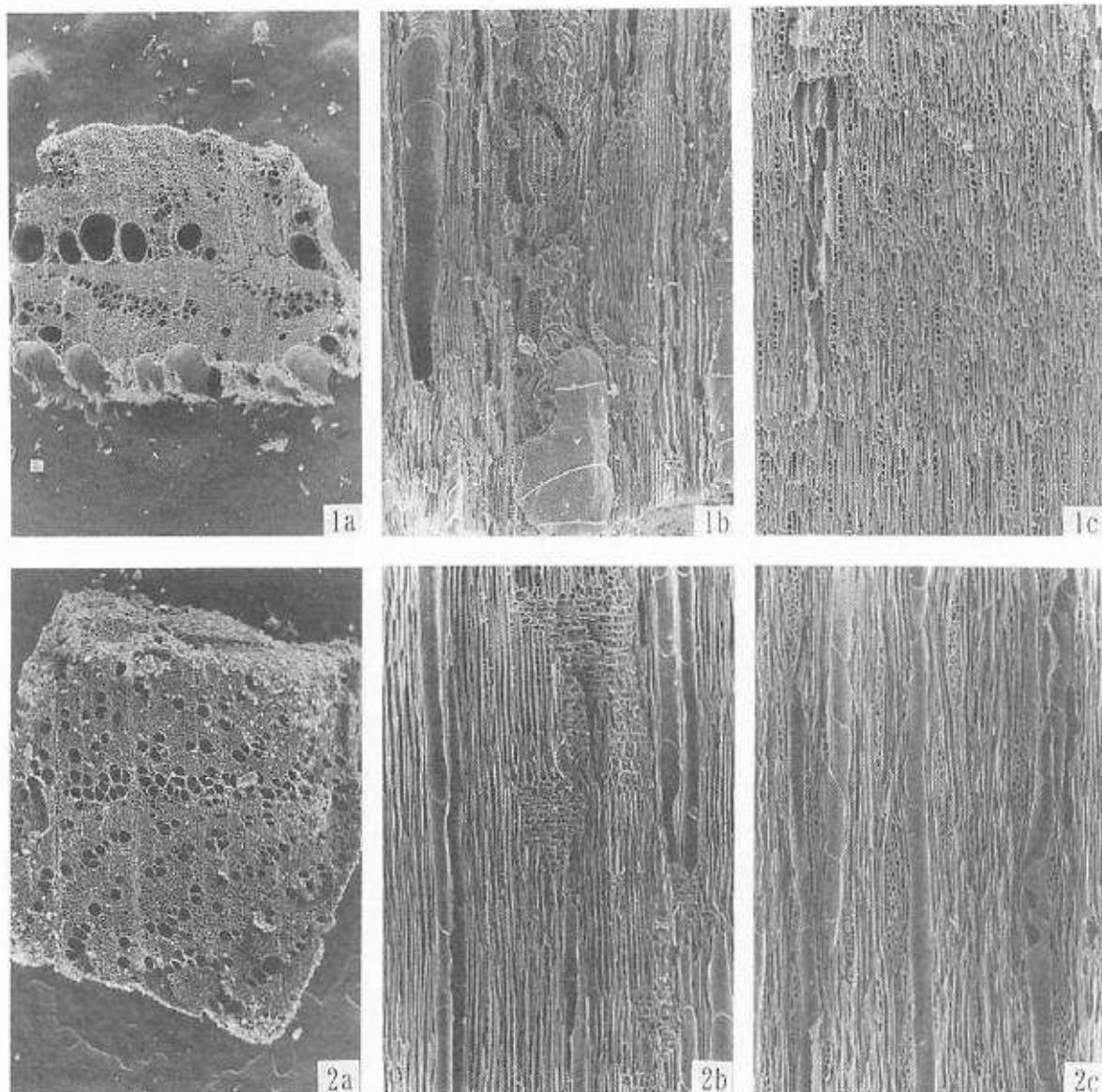
(4) 考察

年代観は、1号竪穴建物跡埋土出土炭化材が約500年前、2号竪穴建物跡床面出土炭化材が約400年前、7号竪穴建物跡4ベルト2層出土炭化材が約300年前、20号土坑埋土出土炭化材が約200年前、5号土坑埋土出土炭化材と13号土坑埋土出土炭化材が現代の値を示した。

放射性炭素年代測定においては、測定自体が持つ誤差や、時代による大気中の ^{14}C 濃度の違いなどにより、年代測定の値が曆年代とは一致しない。特に、放射性炭素年代と曆年代のずれは、古くなるほど大きくなることがいくつかの分析例で出されているが、例えば数千年前では500～800年ほど放射性炭素年代の方が若い傾向を示し（中村、2000）、同文献に掲載されている Stuiver and Reimer の校正曲線では2000～1700年前の間で最大100年程古い方へずれている。さらに、今回測定された年代の頃では、東村（1990）にある放射性炭素年代・年輪年代校正値のデータでは年輪年代とは、最大約100年程度新しい方へずれている。これらのこと考慮すると、測定年代値は前後それぞれ最大100年間程の幅で考えられ、1号竪穴建物跡埋土出土炭化材、2号竪穴建物跡床面出土炭化材、7号竪穴建物跡4ベルト2層出土炭化材、20号土坑埋土出土炭化材は概ね同時期と思われる。測定試料は、大部分が遺構埋土から出土した炭化材であるため、堆積時に古材が混入することも考えられる。しかし、2号竪穴建物跡出土炭化材は床面から出土しており、遺構と関連性が高いと思われる。これらの床面付近の炭化材の年代値が揃うことから、炭化材試料の年代値は遺構の構築年代を示唆する可能性がある。よって、1号竪穴建物跡・2号竪穴建物跡・7号竪穴建物跡・20号土坑は、15世紀中頃～18世紀中頃の中世後半～近世のものと思われる。また、5号土坑埋土出土炭化材と13号土坑埋土出土炭化材は現代の値を示すことから、近現代の炭化材が遺構埋土に混入したと思われる。

引用文献

- 東村武信（1990）改訂 考古学と物理化学、212P., 学生社。
中村俊夫（2000） ^{14}C から曆年代への校正、日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」、p. 21-40



1. クリ（1号竪穴建物跡 墓土（Q1））
2. サクラ属（5号土坑 墓土）
a : 木口, b : 桟目, c : 板目

— 200μm : a
— 200μm : b, c

図版1 山根館跡の炭化材

2. 錢貨

山根館跡出土銭貨の化学成分分析結果

岩手県立博物館 咲山まどか 赤沼英男

(1) はじめに

平成12年に行われた岩手県久慈市山根館跡の発掘調査によって、中世に比定可能な同一造構から出土した銭貨について、化学成分分析を行った。その結果、山根館跡出土の銭貨には公鋳銭、国内模鋳銭、私鋳銭もしくは模鋳銭が混在する事がわかった。以下にその結果を報告する。

(2) 分析資料

分析した資料は永楽通寶をはじめとする17点の銭貨である。9点はほぼ完形品であるが、7点は1部欠損しており、1点は破片である。銭貨の一覧を表1に、拓本を図1に示す。

(3) 分析試料の調整ならびに分析方法

銭貨表面に付着している錆を、ダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルで除去し、約0.02~0.03gの試料片を削り取った。試料片をアルコールで超音波洗浄後に十分に自然乾燥した後、まず蛍光X線分析法(XAF法)で主成分元素を分析した。次に試料片をテフロン分解容器に直接秤量し、16N硝酸を加え一昼夜放置し溶解した後、硝酸・塩酸がいずれも1モル溶液となるように希釀して試料溶液を作成した¹⁾。このようにして準備した溶液中に含まれる銅(Cu)、鉛(Pb)、錫(Sn)、鉄(Fe)、砒素(As)、アンチモン(Sb)の6成分を高周波誘導プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により定量した。

(4) 分析結果ならびに考察

XAF法によるとNo75以外はCu、Sn、Pbの三元系合金、No75は主としてCuからなる銭貨であることがわかった。

表2はICP-AES法による定量分析結果である。No65・67・72・73については、6成分の合計が90%未満である。錆化の進行による合金成分の酸化と溶損に起因すると思われる。上記4点については、含有される成分比の検討は困難であると判断されたため、考察の対象から除外した。

6成分の合計が90%以上にある12点に含有されるCu、Sn、Pb 3成分を100%に規格化し、三角ダイヤグラムにプロットしたものが図2である。一方、As、Sb、Feの微量元素については[(Cu+Sn+Pb)、(As+Sb)、Fe]、[(Cu+Sn+Pb)、As、Sb]、[(Cu+Sn+Pb)、As、Fe]、[(Cu+Sn+Pb)、Sb、Fe]を100%に規格化した後、同様に三角ダイヤグラムに表した(図3~6)。図2~6の組成分類結果を整理すると、表3のとおり以下の4点が指摘できる。

- ① No75は銅単体の地金で製作されており、他の12点はCu-Sn-Pb三元系合金である。No75は佐々木の分類¹⁾に従えば模鋳銭である。
- ② No61・68・76・77はCu:Sn:Pbが(66~76):(7~11):(13~22)にあり、佐々木による分類に従えば、中国の公鋳銭の組成と合致する。ただし、As、Sb、Fe微量元素組成比は4個とも異なる。
- ③ Cu-Sn-Pb三元系合金のうちNo62は②に比べCu含有量が10%強高いレベルにある。
一方No71は②に比べPb含有量が10%程度高く、No62、No71の2点は合金組成が異なる。No62、No71は、それぞれ公鋳銭に粗銅、粗鉛を添加した私鋳銭または模鋳銭の可能性がある。

④ No70・69・66・64・63・74は②に比べPbが数%高いレベルにある。微量元素の組成に着目するとAsが0.1%以上含有されるNo70・69、0.1%未満のNo66・64・63・74に分けられる。③同様公鋳銭に精銅を加えた私鋳銭または模鋳銭の可能性がある。

(5) おわりに

上記の結果、山根館跡から出土した銭貨は、公鋳銭、国内模鋳銭、私鋳銭もしくは模鋳銭に分類されることがわかった。私鋳銭もしくは模鋳銭は更にCuの多いグループとPbの多いグループの2つに分けられ、それぞれ公鋳銭に精銅、精鉛が添加された銭貨の可能性がある。公鋳銭と推定された銭貨については微量元素組成には差異がみられ4つに細分された。ほぼ同じ造構から出土したこれらは鋳造された時代、鋳造場所、または鋳造方法に違いがあったと思われる。今後出土銭貨の組成分析の蓄積を待って、形態学的分類と併せて検討したい。

註

- 1) 内田哲男、平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」『保存科学』29、1990、43~49
- 2) 佐々木稔「出土銭貨の自然科学的解析法」『出土銭貨』7、1997、93~105

表1 資料一覧

No.	資料名	初鋳年	径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
70	永樂通寶	1408(明)	24.4	1.3	2.26	
61	開元通寶	621(唐)	23.7	1.2	2.40	1部欠損
69	永樂通寶	1408(明)	24.4	1.4	2.03	
66	元祐通寶	1086(北宋)	24.3	1.4	3.50	
64	治平元寶	1064(北宋)	23.7	1.6	2.95	
63	皇宋通寶	1038(北宋)	24.0	1.6	3.00	1部欠損
68	洪武通寶	1368(明)	23.0	1.45	2.69	
65	熙寧元寶	1068(北宋)	24.0	1.4	2.79	
67	淳熙元寶	1174(南宋)	22.0	1.3	1.58	1部欠損
62	開元通寶	621(唐)	22.4	1.1	1.63	1部欠損
74	治平通寶	1064(北宋)	24.0	1.5	2.71	
76	天禧通寶	1017(北宋)	25.0	1.4	2.80	
77	洪武通寶	1368(明)	23.1	1.8	2.86	
71	大觀通寶	1107(北宋)	24.5	1.5	2.16	1部欠損
72	皇宋通寶	1038(北宋)	24.3	0.9	1.76	1部欠損
75	不明	-	22.4	0.8	1.74	1部欠損
73	不明	-	-	1.0	0.27	破片

表2 錢貨の定量分析結果

No.	資料名	化 学 分 析 成 分 (%)						合計
		C u	S n	P b	S b	F e	A s	
70	永樂通寶	65.0	7.39	23.9	0.057	0.07	0.22	96.6
61	開元通寶	69.8	10.4	19.5	0.15	0.31	<0.005	100.2
69	永樂通寶	66.4	6.80	22.4	<0.005	0.10	0.20	95.9
66	元祐通寶	60.9	10.7	24.7	0.068	0.03	<0.005	96.4
64	治平元寶	62.6	6.99	27.2	<0.005	0.02	0.02	96.8
63	皇宋通寶	59.5	8.06	30.4	<0.005	0.02	0.02	98.0
68	洪武通寶	68.9	10.4	17.1	0.070	0.30	0.25	97.0
65	熙寧元寶	64.0	7.38	17.1	<0.005	0.18	<0.005	88.7
67	淳熙元寶	60.6	2.45	21.6	<0.005	2.16	0.35	87.2
62	開元通寶	82.8	10.9	2.3	<0.005	0.06	<0.005	96.1
74	治平元寶	71.5	5.57	22.3	<0.005	0.05	0.062	99.5
76	天禧通寶	71.2	11.2	15.5	<0.005	0.02	<0.005	97.9
77	洪武通寶	73.7	10.6	13.3	0.060	0.15	0.24	98.1
71	大觀通寶	51.5	9.25	34.4	<0.005	0.33	0.07	95.6
72	皇宋通寶	57.9	8.76	16.0	<0.005	0.34	0.87	83.9
75	不明	94.1	0.02	<0.005	<0.005	1.28	0.07	95.5
73	不明	63.2	2.82	18.4	1.85	0.14	0.02	86.4

注1) 分析は I C P - A E S 法による。

注2) 合計に <0.005 は加算していない。

表3 組織による分類

合金組成による分類	三成分比 (C u : S n : P b) (%)	微量成分 (A s, S b, F e)	資料 No.	記号
C u - S n - P b 三元系	1 82 : 11 : 2	いずれも 0.1% 未満	62	×
		いずれも 0.5% 未満	76	○
		A s が 0.1% 以上	77	□
	2 (66~76) : (7~11) : (13~22)	S b が 0.1% 以上	61	△
		F e が 0.3% 以上	68	△
		A s が 0.1% 以上	68	△
	3 (63~72) : (5~12) : (22~28)	F e が 0.3% 以上	66, 64, 63, 74	●
		A s が 0.1% 以上	70, 64	■
	4 54 : 9.7 : 36	いずれも 0.1% 未満	71	▲
C u 単体	99.9 : 0.02 : 0.01	F e が 1% 以上	75	*

注1) 三成分比の数字は C u : S n : P b を表す。

注2) 微量成分はグレーブの範囲を数値で表した。

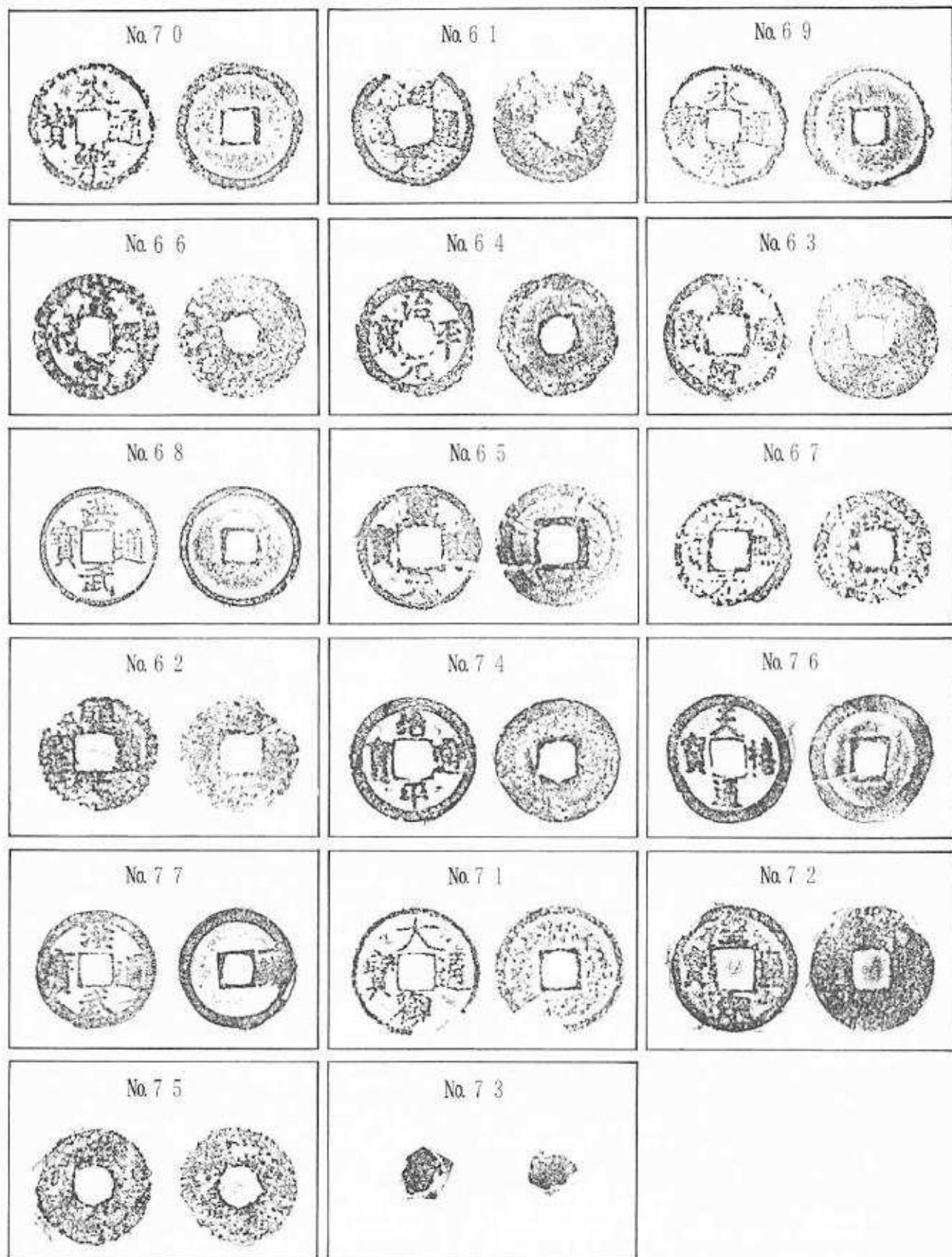


図1 資料の拓本

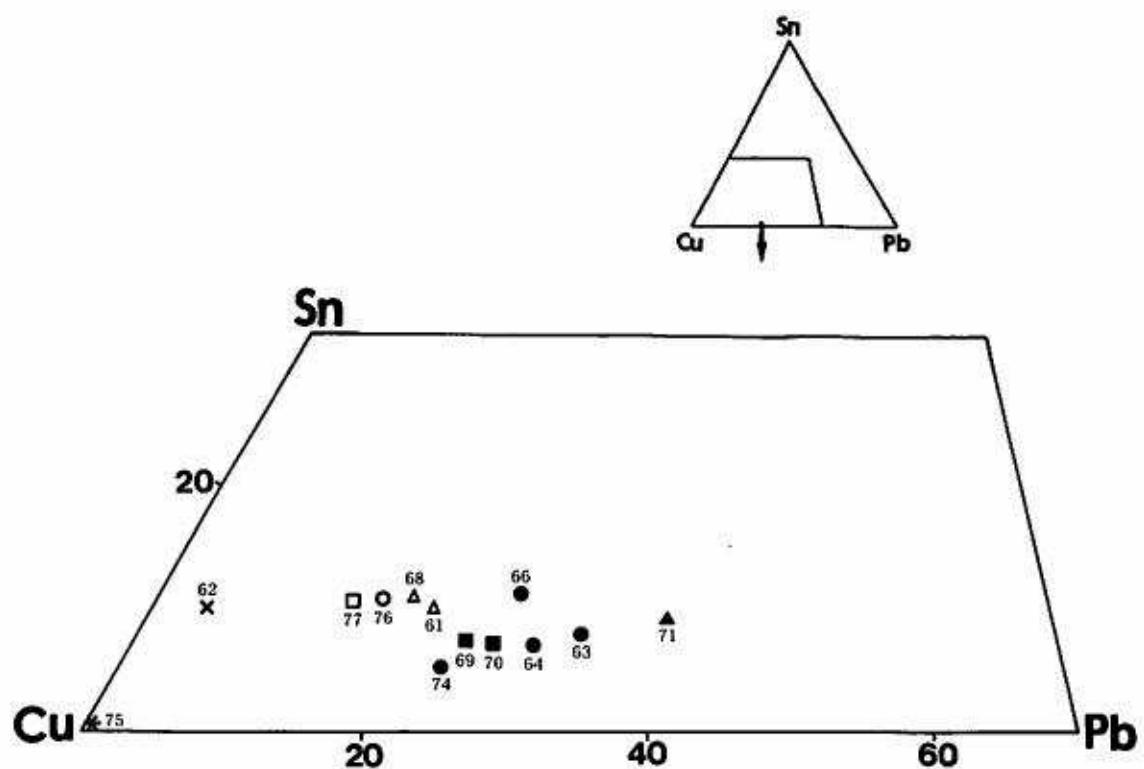


図2 Cu・Sn・Pbの3成分比

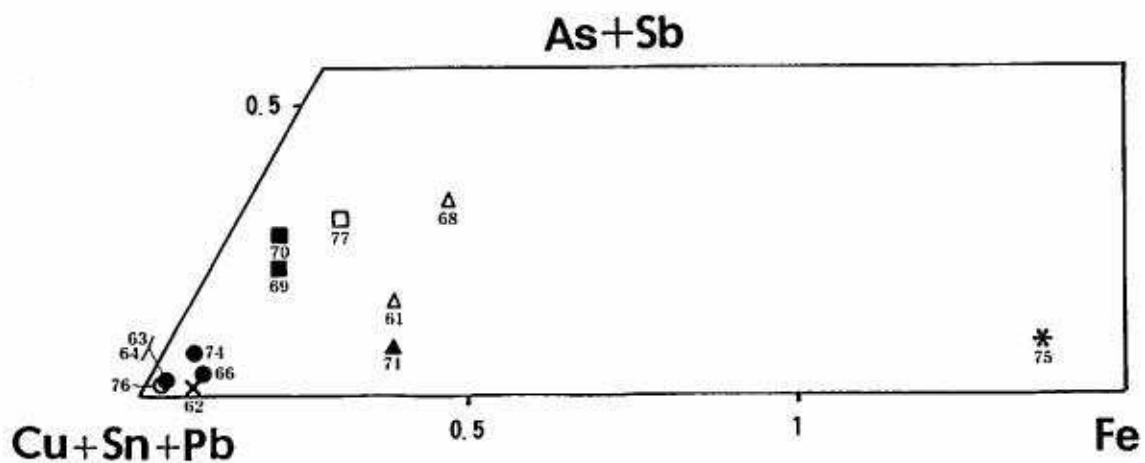


図3 [Cu-Sn-Pb]・[As-Sb]・Feの成分比

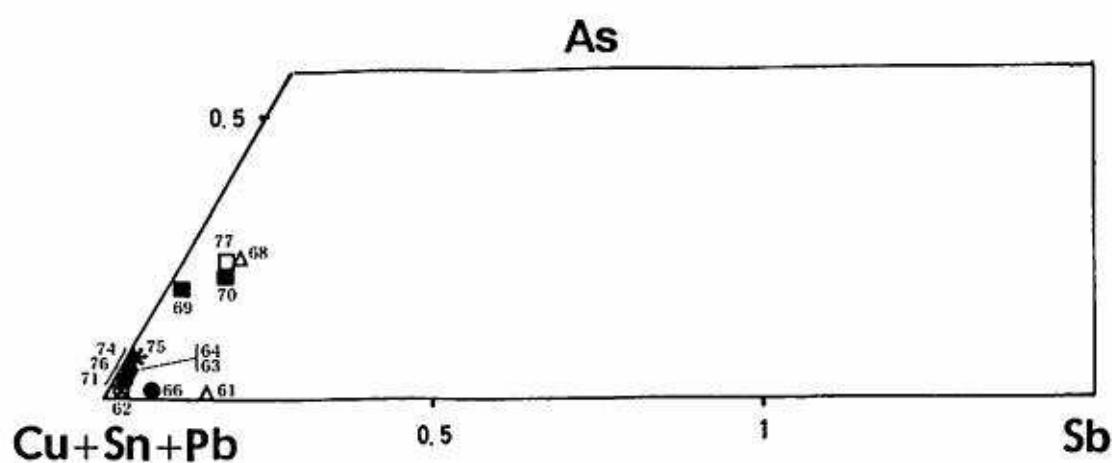


図4 [Cu-Sn-Pb] · As · Sb の成分比

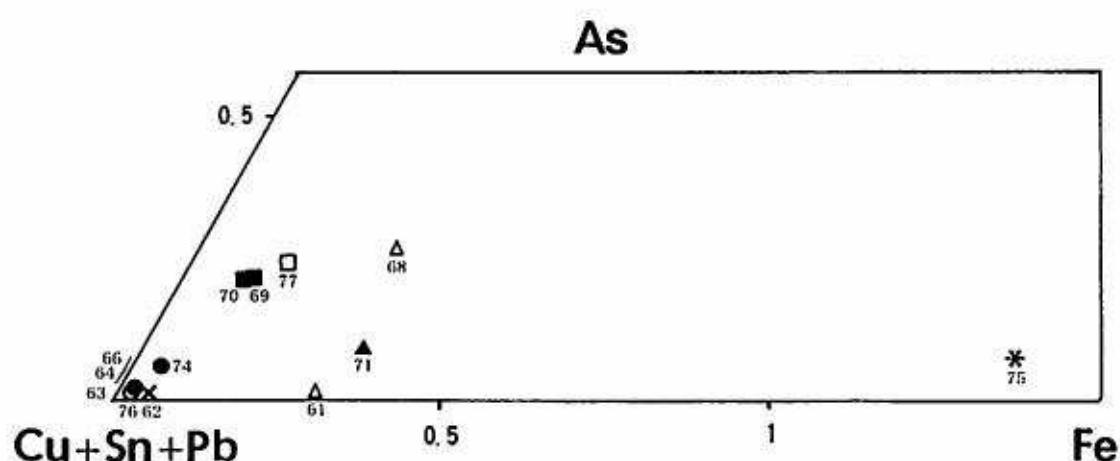


図5 [Cu-Sn-Pb] · As · Fe の成分比

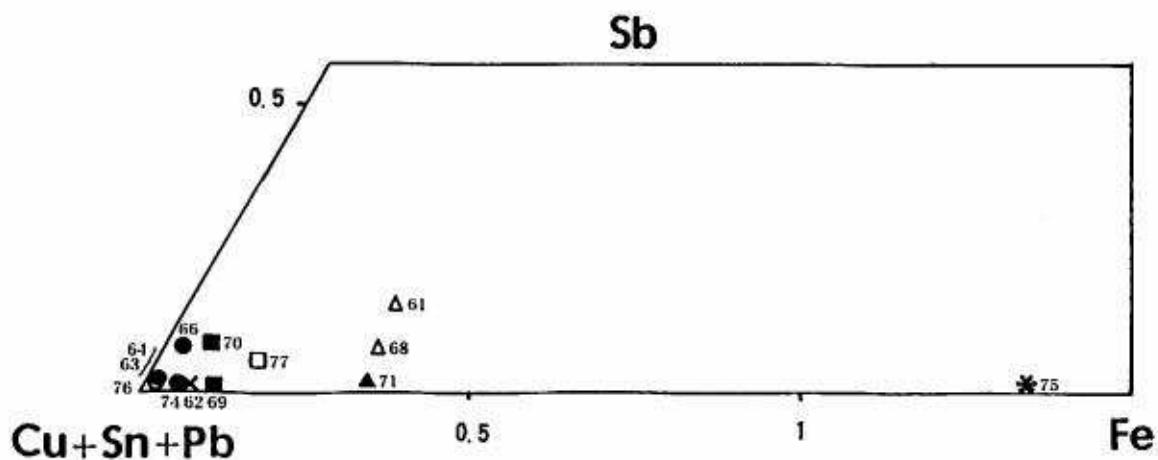


図6 [Cu-Sn-Pb] · Sb · Fe の成分比

3. 鉄鋤

山根館跡出土鉄鋤状鉄器の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

(1) はじめに

中世の列島内の日常生活に鉄・鉄器が普及した要因の一つに、鉄器製作の素材として使用された原料鉄の流通の増大があったとする見方が、文献資料の調査結果に基づき示されている^{①②}。

古代に比べ、考古学的に製鍊が跡とみることのできる鉄生産関連遺構の検出例が激減するという事実^③や、青森県浪岡町浪岡城、岩手県盛岡市盛岡城跡、および広島県豊平町吉川元治館跡をはじめとする城館跡から、ほぼ同じ形状をした銅素材と推定される鉄鋤状鉄器が出土するという事実は^④、文献史学の研究結果とよく整合する。

平成12年に行われた岩手県久慈市山根館跡の発掘調査によって、中世の遺構から浪岡城跡出土のものとほぼ同形状をした資料が検出された。保存処理の過程で摘出した試料片を金属考古学的に調査した結果、東北地方における中世の遺構から出土した鉄鋤状鉄器とほぼ同じ組成をとることが確かめられた。鉄鋤状鉄器の供給地域を検討するうえで重要な情報である。鉄鋤状鉄器を型式学的に調査し、その結果と金属考古学的調査結果を学際的に研究することによって、中世の原料鉄の生産と流通の実態に迫ることができるものと期待される。以下に、山根館跡出土鉄鋤状鉄器の金属考古学的調査結果を報告する。

(2) 調査資料

金属考古学的調査を行った資料を図1に示す。金属考古学的調査にはダイヤモンドホイールを装着したハンドドリルを使って図1のA、Bから摘出した微量試料片を用いた。

(3) 調査方法

摘出した試料を2分し一方は組織観察に、他方は化学成分分析に供した。組織観察用試料はエボキシ樹脂に埋め込み研磨した後、エメリー紙、つぎにダイヤモンドペーストを用いて研磨した。研磨面をナイタール（硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの混合溶液）でエッティングした後、金属顕微鏡で組織観察し、残存する非金属介在物をエレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。

化学成分分析用試料は表面に付着する土砂、鏽をハンドドリルで除去した後、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄し、130℃で2時間以上乾燥した。乾燥した試料をさらに2分し、大きい方をテフロン分解容器に直接秤量し酸を使って溶解した。蒸留水で定溶とし、試料中の全鉄(T.Fe)、銅(Cu)、マンガン(Mn)、リン(P)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、チタン(Ti)、ケイ素(Si)、カルシウム(Ca)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)、バナジウム(V)を誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)で分析した。小さい方の試料については、含有される炭素(C)、いおう(S)を燃焼-赤外線吸収法で定量した。

(4) 調査結果

4-1 組織観察結果

試料Aのナイタールによる腐食組織にはところどころに黒色領域がみられ、試料Bはその全域が金属光沢を呈するメタルによって構成されている。試料Aの枠で囲んだ内部のミクロ組織は、黒色領域がバーライト[フェライト(α Fe)とセメンタイト(Fe₃C)の共析組織]であることを示しており、その分布状況から

炭素量0.1~0.2%の鋼とみることができる。試料Bのミクロ組織にはフェライトの粒界だけが観察される。炭素量0.1%未満の鋼と推定される⁵⁾(図2)。

試料Aにはいたるところに灰色の角状化合物(XT), 暗灰色の化合物(H)が残存した非金属介在物が、試料Bには灰色の角状化合物(XT), やや暗灰色をした化合物(F)が残存した非金属介在物が観察され、EPMAによる分析によって、化合物XTは $\text{FeO}-\text{TiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{V}_2\text{O}_5$ 系、化合物は $\text{FeO}-\text{Al}_2\text{O}_3$ 系、化合物Fは $\text{FeO}-\text{SiO}_2$ 系(鉄かんらん石: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ と推定される)であることがわかった。また、それぞれの非金属介在物の基質は微細な化合物を内包するガラス質けい酸塩である(図3)。

4-2 化学組成

表1に摘出した試料片の化学成分分析値を示す。試料AのT. Feは95.51%、試料BのT. Feは98.00%で、いずれもほぼ健全なメタルからなる試料である。試料Aからは0.19%、試料Bからは0.062%のCが検出されている。亜共析鋼が配されているとした4-1の組織観察結果とよく整合する。試料A、Bにはそれぞれ0.051%、0.043%のCoが含有されており、試料A、試料BのCu、Mn、Niは0.02%未満である。

(5) 考察

4-1の組織観察結果によって、調査した試料には炭素量0.2%以下の亜共析鋼が配されていることがわかった。調査試料量が微量なため、鉄錠状鉄器の全てがほぼ同程度の炭素量の鋼で構成されているかどうかは不明である。残存する非金属介在物には $\text{FeO}-\text{TiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{V}_2\text{O}_5$ 系の鉄チタン酸化物が見いだされた。鋼の製造過程で鉄チタン酸化物を含むスラグと鉄とが接触する状況があったことは確実であり、このことから以下の3点を指摘できる。

- ① 地金の製鉄原料に、鉄チタン酸化物を含む鉄鉱石[塊鉱または粉鉱(たとえば砂鉄)]が使用された
- ② 鋼製造過程において、鉄チタン酸化物を含む物質が造済材として使用された
- ③ 鋼製造過程で使用された生産施設を構築する際の材料、または道具を製作する際の材料として、鉄チタン酸化物を含む物質が使用され、操作の過程でその一部が溶融し鉄済中に混入した

中世における鋼製造施設や操作に使用された道具が不明なため、鋼中に見いだされた非金属介在物の成因を特定することは難しい。最近の中世における原料鉄、とりわけ原料銑鉄の流通に関する研究結果⁶⁾、ならびに鉄鉱物が混在したと推定される鉄塊に酸化チタンを含む鉄済が混在した資料の検出⁶⁾を考え合わせると、筆者は②に加え③の可能性を追求する必要があると考える。

鋼中に含有される微量元素のうち、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)の三成分比は鉄よりも錯にくい金属なので、一度金属鉄中に取り込まれた後はそのほとんどがメタル中にとどまる。従って、鋼の製造過程で合金添加処理が行われなかったとすれば、その組成比は製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図4a・bはそれぞれ15~17世紀に比定される東北地方の中世の遺構から検出された鉄錠状鉄器、12世紀後半と推定される滋賀県能登川町斗西遺跡から出土した7本の鉄錠状鉄器に含有される銅、ニッケル、およびコバルトの組成比を示したものである⁷⁾。図4aではニッケルを0.01% (100ppm)以上、図4bではコバルトを0.01% (100ppm)以上含有する資料をプロットしてある。

東北地方の青森県浪岡町浪岡城跡、岩手県盛岡市盛岡城跡、および福島県いわき市レンゴウB遺跡⁸⁾から出土した鉄錠状鉄器は、岩手県久慈市山根館跡出土の鉄錠状鉄器とともに、図4aでは右下、図4bでは左下領域Iに分布する。これに対し、滋賀県能登川町斗西遺跡出土資料は図4aでは左下、図4bでは右下領

域Ⅱにまとまって分布する。また、福島県福島市飯坂出土資料は領域Ⅰと領域Ⅱのほぼ中間に位置する。

図4から中世の原料鉄の一つである銅素材については、時代の経過とともに生産地域が変わった、あるいは同時代に複数の生産地域があり、そこで製作された鉄錠状鉄器が市場に供給されたとする見方をとることが可能。ここで鉄錠状鉄器の用途が問題となるが、現時点でのこの点について言及することは難しい。一定の形状に規格化されていること、列島内に広域的に流通していることを考え合わせると、小刀や農具といった日常生活に使用された道具の他に、建造物建設に用いられた工具の可能性もある。鉄錠状鉄器を加工した、あるいは加工途中有る資料の検出を待つて明らかにすることとした。

終わりに臨み、本調査を実施する機会を与えて下さった財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの方々に厚くお礼申し上げる。

註

- 1) 桑野善彦「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史 第5巻 採鉱と冶金』日本評論社 1983 pp.30-68.
- 2) 福田豊彦「鉄を中心とした北方世界—海を渡った鉄」『中世の風景を読む 第一巻 蝶虫の世界と北方交易』新人物往来社 1995 pp.154-198.
- 3) 「たたら研究会創立40周年記念シンポジウム討論」『たたら研究』39 たたら研究会 1999 pp.47-86.
- 4) 赤沼英男・佐々木稔・伊藤薰「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会 2000 pp.553-576.
- 5) 「鉄鋼の顕微鏡写真と解説」丸善株式会社 1968.
- 6) 『史跡 上之国勝山館跡XV』上ノ国町教育委員会 1994.
- 7) 文献4) および文献7) の分析値を基に作図。
- 8) 『連郷B遺跡』いわき市教育委員会 2000.

表1 摘出した試料片の分析結果

試料	化 学 成 分 (mass%)														
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	Ni	Co	P	Ti	Si	Al	Ca	Mg	V	n.m.i
A	95.51	0.19	0.017	0.009	0.001	0.015	0.051	0.119	0.011	(0.01	(0.01	(0.01	(0.01	(0.01	XT,H,M
B	98.00	0.062	0.010	0.011	0.001	0.015	0.043	0.092	0.009	(0.01	(0.01	(0.01	(0.01	(0.01	XT,F,M

注1) C, Sは燃焼-赤外線吸収法、他はICP-AES法による。

注2) n.m.iは非金属介在物組成、XTはFe-Ti-Al-V-O系化合物、HはFe-Al-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO₂系化合物、Mはマトリックス。

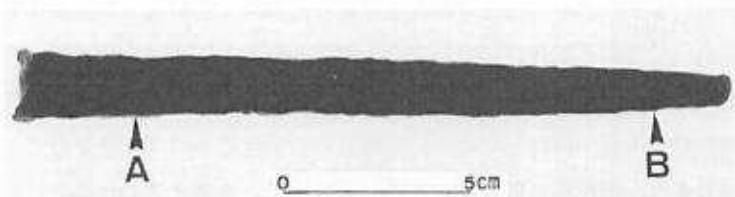


図1 鉄鋤状鉄器の外観と試料摘出位置
矢印は試料摘出位置。

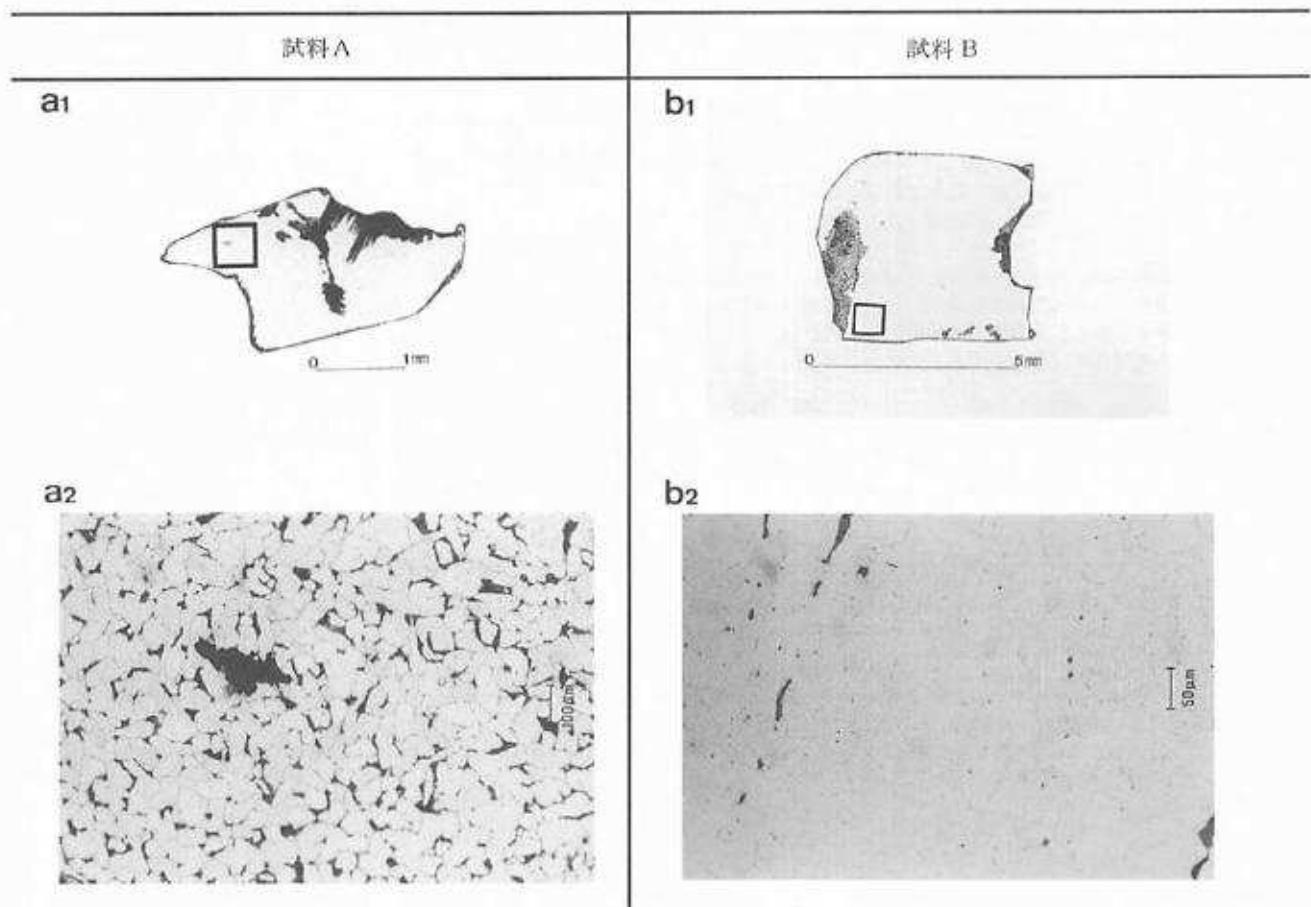


図2 摘出した試料の組織観察結果
a₁・b₁: ナイタールによるマクロエッティング組織。
a₂・b₂: a₁・b₁の枠で囲んだ内部のミクロエッティング組織。

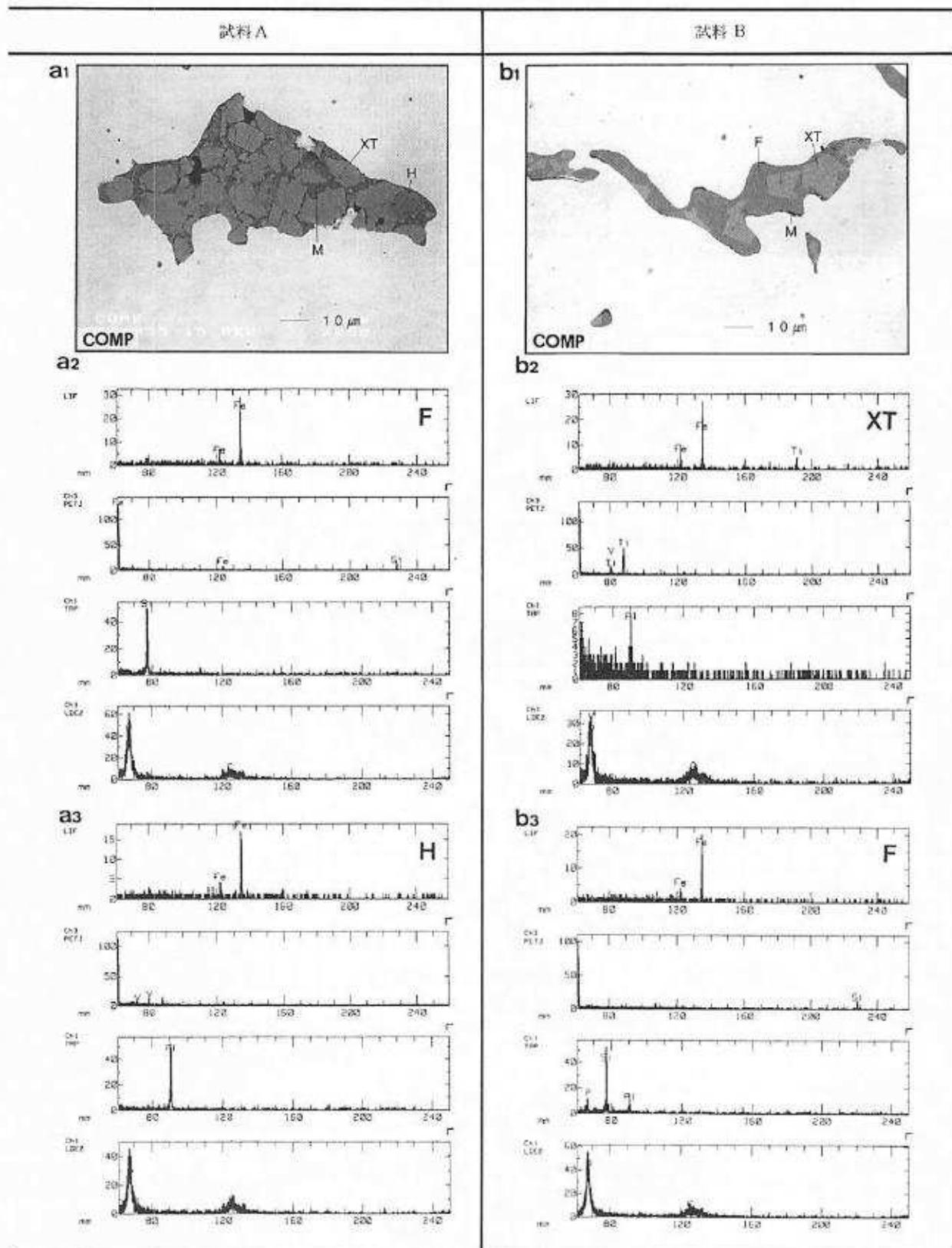


図3 試料A・Bに見出された非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果
 a₁・b₁: EPMAによる組成像。a₂・b₂、a₃・b₃: a₁・b₁に指示した化合物相のEPMAによる定性チャート。XTはFe-Ti-Al-V-O系化合物、HはFe-Al-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO₂系化合物、Mはマトリックス。

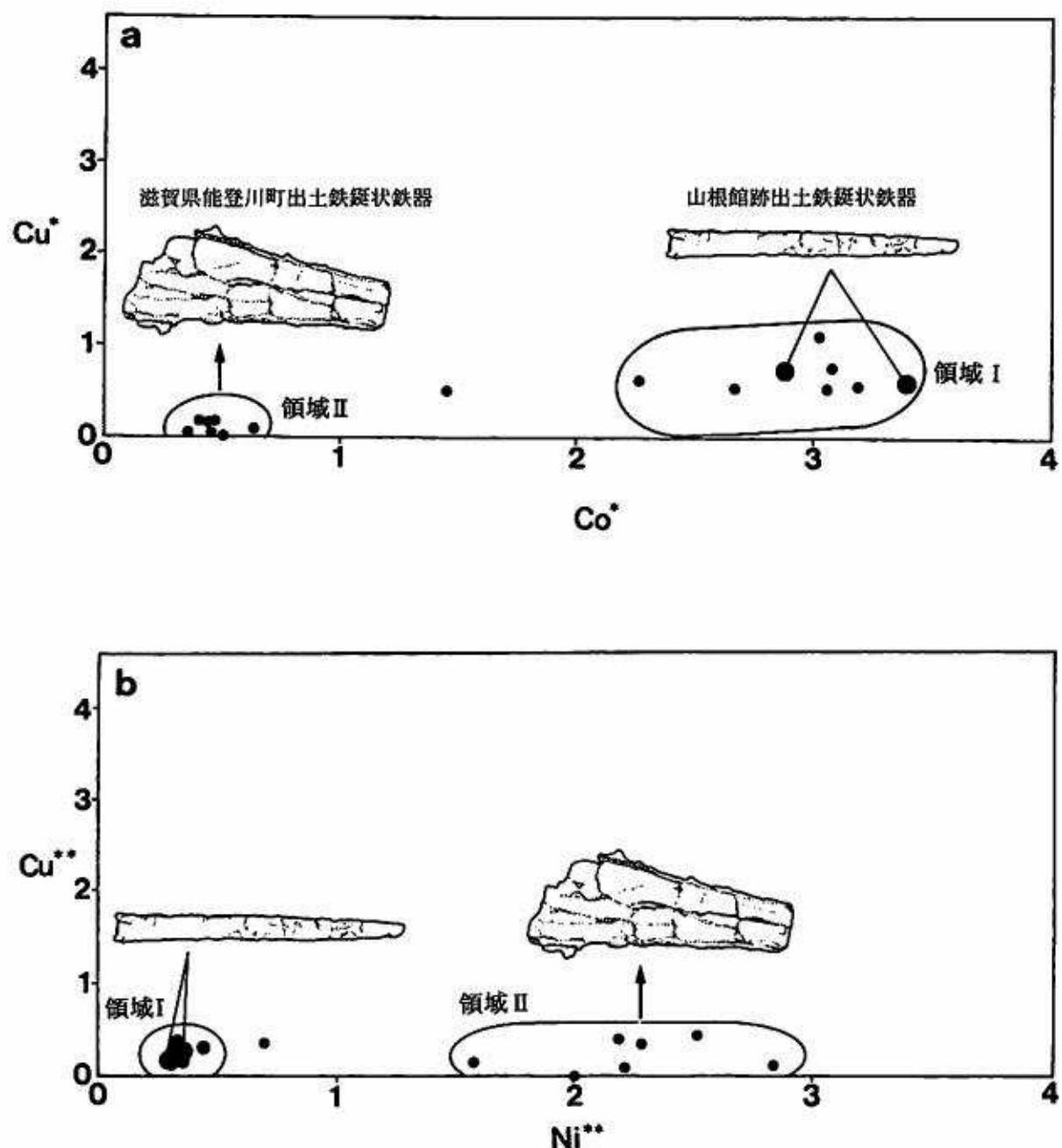


図4 試料A・Bに含有されるCu、Ni、Co三成分比の関係
a: Co^* (Co/Ni)と Cu^* (Cu/Ni)の関係。b: Ni^{**} (Ni/Co)と Cu^{**} (Cu/Co)の関係。

写 真 図 版

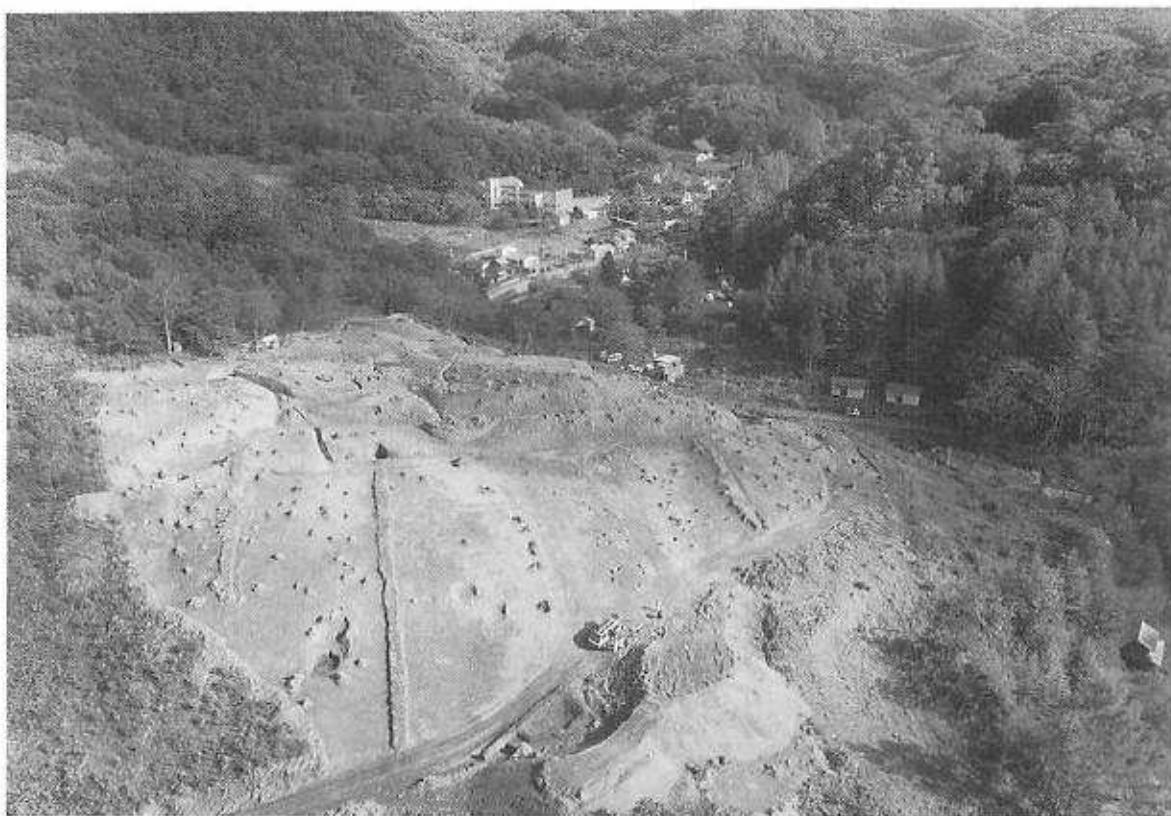


調査前全景（南から）



調査後全景（南から）

写真図版1 調査区全景



調査区近景（西から）

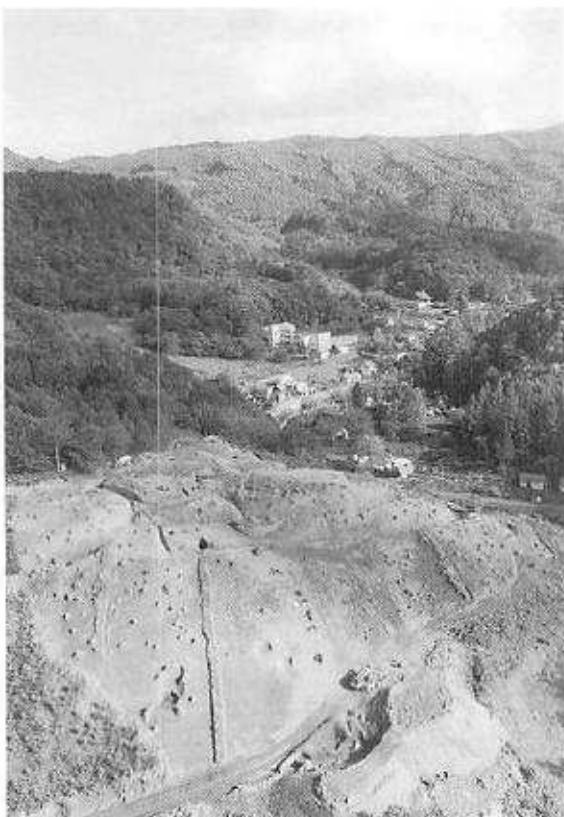


調査区近景（上から）

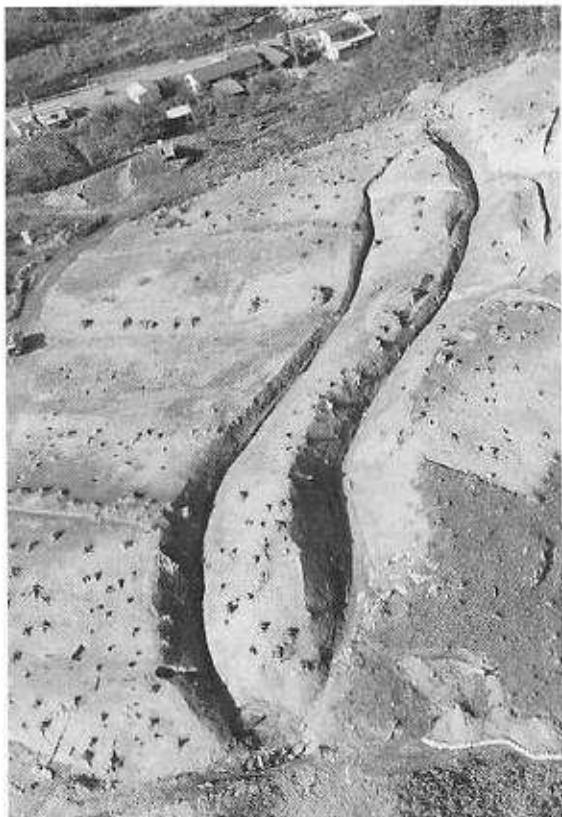
写真図版2 調査区近景



遺跡遠景（S23年5月頃） ← 山根館跡



館跡から望む下戸鎖集落（西から）



西側の二重の空堀・土塁（南から）

写真図版3 館跡と周辺地域



西側斜面 調査前風景（西から）



西側斜面 雜物撤去後（西から）



曲輪3南側の虎口（西から）



東側の土壘・空堀 現況（南から）



東側の土壘・空堀 現況（南から）



東側の土壘・空堀 現況（北から）



曲輪1から望む下戸鎖集落（北から）



南側斜面 雜物撤去作業

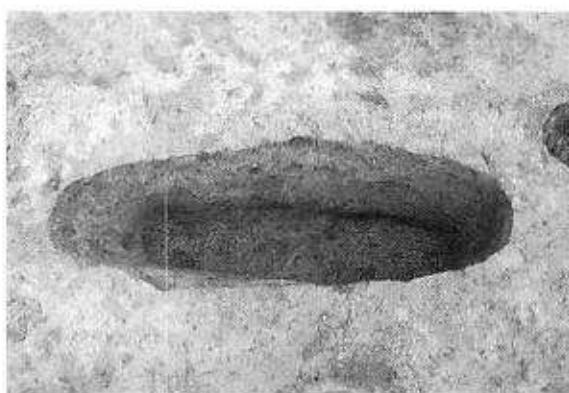
写真図版4 調査前現況



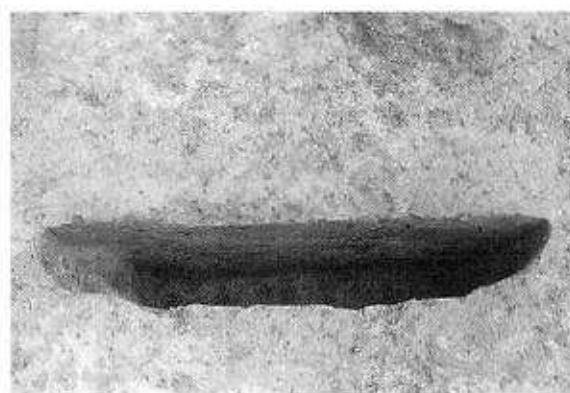
1号陥し穴状遺構 平面



1号陥し穴状遺構 断面



2号陥し穴状遺構 平面



2号陥し穴状遺構 断面



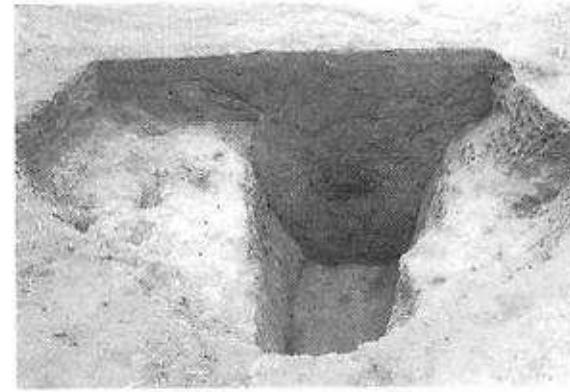
3号陥し穴状遺構 平面



3号陥し穴状遺構 断面



4号陥し穴状遺構 平面



4号陥し穴状遺構 断面

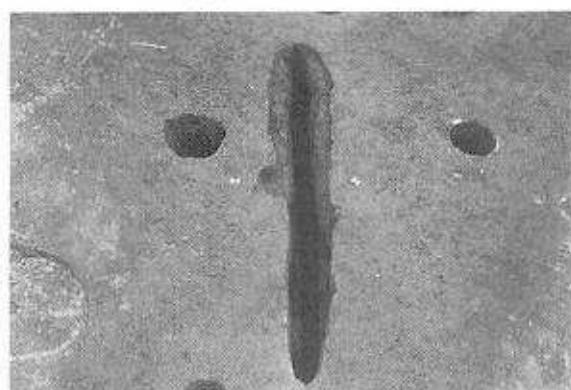
写真図版5 陥し穴状遺構(1)



5号陷し穴状遺構 平面



5号陷し穴状遺構 断面



6号陷し穴状遺構 平面



6号陷し穴状遺構 断面



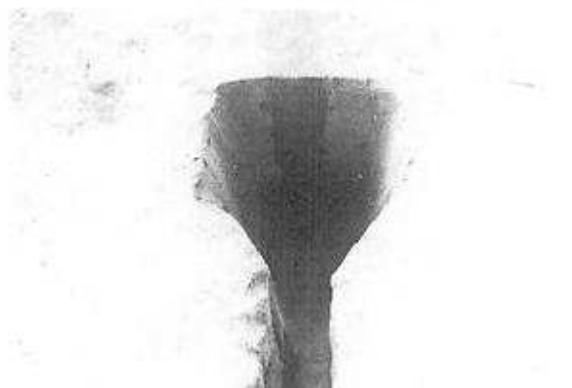
7号・8号陷し穴状遺構 平面



7号陷し穴状遺構 断面



9号陷し穴状遺構 平面



9号陷し穴状遺構 断面

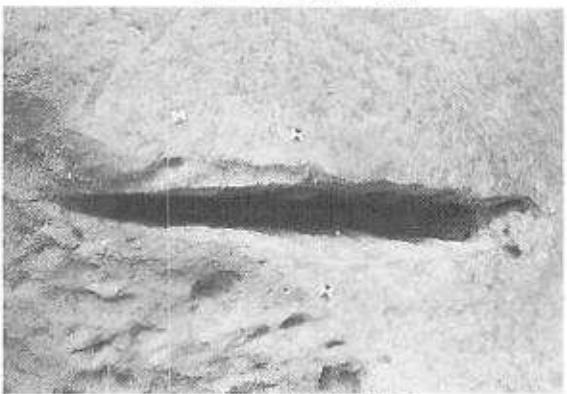
写真図版 6 陷し穴状遺構(?)



10号陥し穴状遺構 平面



10号陥し穴状遺構 断面



11号陥し穴状遺構 平面



11号陥し穴状遺構 断面



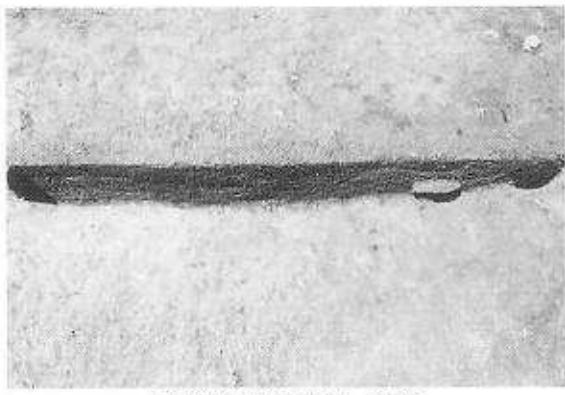
12号陥し穴状遺構 平面



12号陥し穴状遺構 断面



13号陥し穴状遺構 平面



13号陥し穴状遺構 断面

写真図版7 陥し穴状遺構(3)



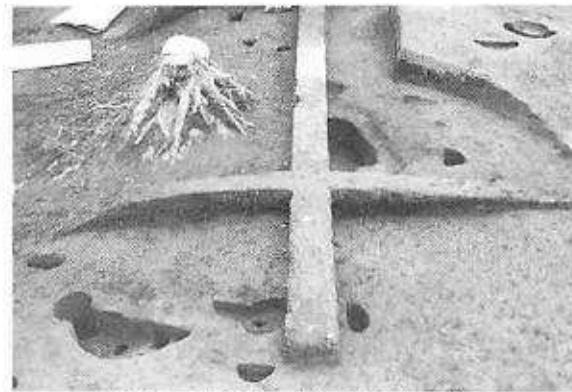
曲輪 3 (西から)



曲輪 3 (北から)



曲輪 3 の整地層 断面 (A-A')



曲輪 3 の整地層 断面 (D-D')



土壘 断面 (D-D')



土壘 断面 (A-A')



土壘 断面 (B-B')



土壘 断面 (C-C')

写真図版 8 曲輪・土壘



虎口 平面（西から）



虎口 平面（南から）



虎口 平面（北から）



虎口 平面（南から）



西侧城外から虎口を望む 平面（西から）



曲輪3から虎口を望む 平面（東から）



2号溝状遺構 断面（F-F'）



2号溝状遺構 断面（G-G'）

写真図版9 虎 口



空堀・土塁 現況（北から）



1・2号堀跡 平面（北から）



1号堀跡 現況（北から）



1号堀跡 平面（北から）



1号堀跡 現況（南から）



1号堀跡 平面（南から）



2号堀跡 平面（南から）



2号堀跡 平面（北から）

写真図版10 堀跡(1)



1号堀跡 断面 (B-B')



1号堀跡 断面 (C-C')



2号堀跡 断面 (F-F')



2号堀跡 断面 (G-G')



2号堀跡 断面 (I-I')



2号堀跡 断面 (J-J')



1号堀跡の南側斜面上位のトレンチ 断面



1号堀跡の南側斜面下位のトレンチ 断面

写真図版11 堀跡(2)



3号堀跡 検出状況（南から）



3号堀跡 断面（E-E'）



3号堀跡 断面（D-D'）



3号堀跡 断面（B-B'）



3号堀跡 断面（A-A'）



3号堀跡 平面（西から）



3号堀跡 平面（北東から）



3号堀跡 平面（南東から）

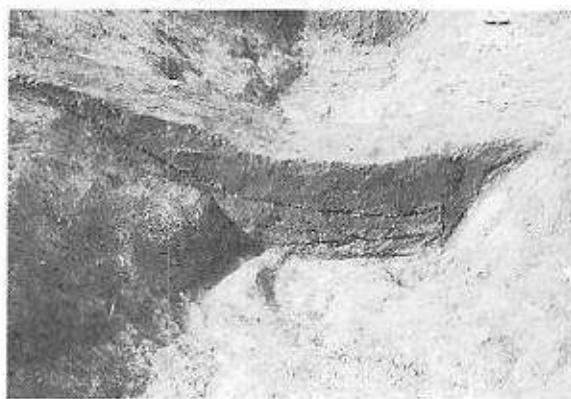
写真図版12 堀跡(3)



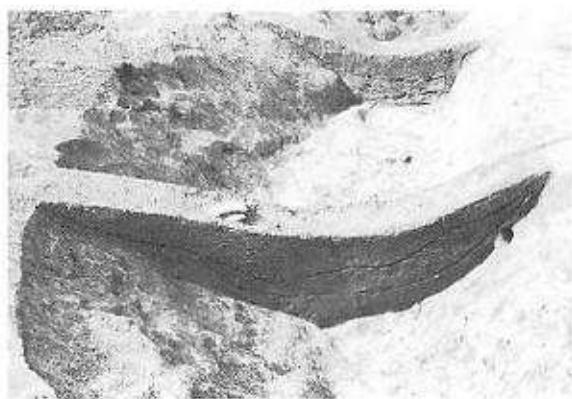
6号堀跡 断面 (C-C')



6号堀跡 断面 (D-D')



4号堀跡 断面 (B-B')



4号堀跡 断面 (A-A')



4号堀跡 平面 (西から)



5号堀跡 平面 (東から)



5号堀跡 断面 (A-A')



5号堀跡 断面 (B-B')

写真図版13 堀跡(4)



1号掘立柱建物跡



2号竪穴建物跡 錢貨出土状況



2号堀跡 錢貨出土状況



4Fグリッド 錐出土状況



7Dグリッド 鉄錠出土状況

写真図版14 1号掘立柱建物跡・遺物出土状況



1号竖穴建物跡 平面



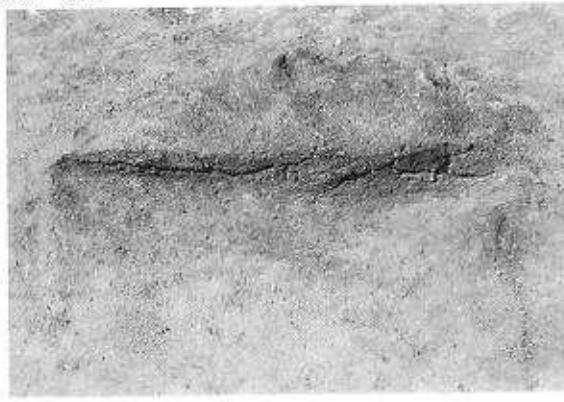
1号竖穴建物跡 断面



1号竖穴建物跡 断面

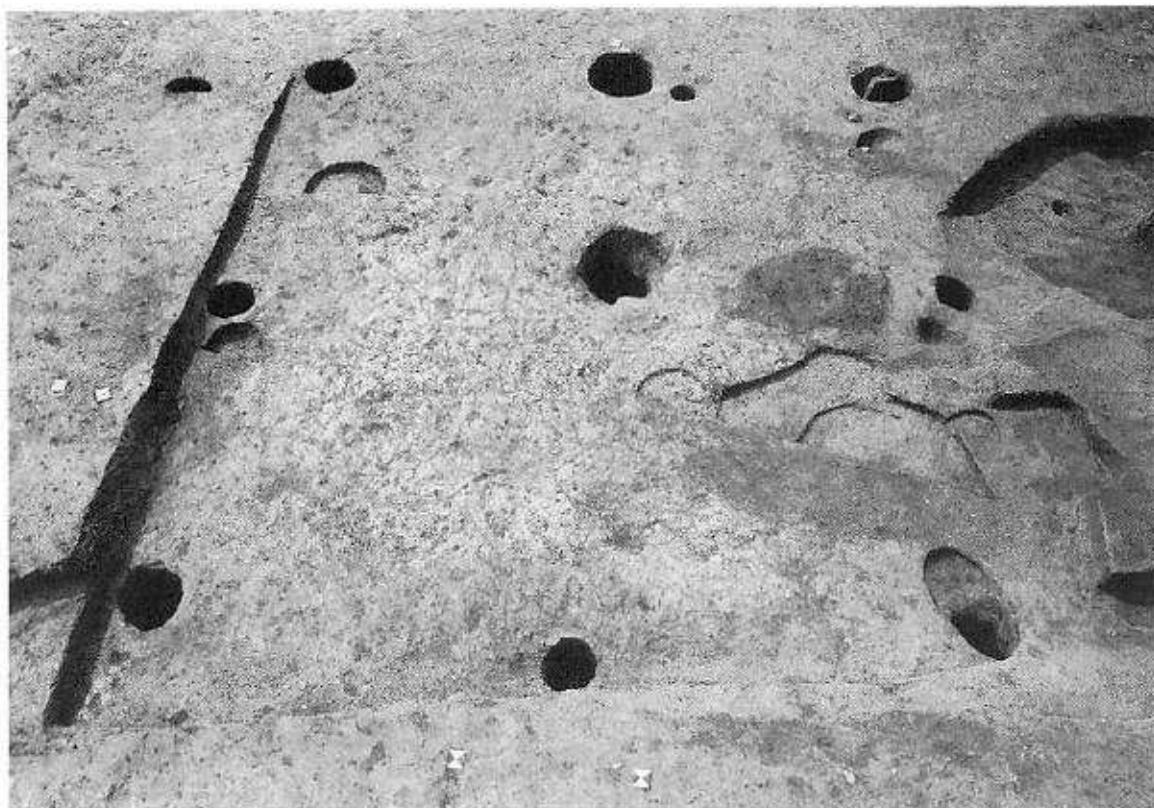


1号炉跡 平面



1号炉跡 断面

写真図版15 1号竖穴建物跡



2号竖穴建物跡 平面



2号竖穴建物跡 断面



2号竖穴建物跡 断面



2号竖穴建物跡 · 炉跡 平面



2号竖穴建物跡 · 炉跡 断面

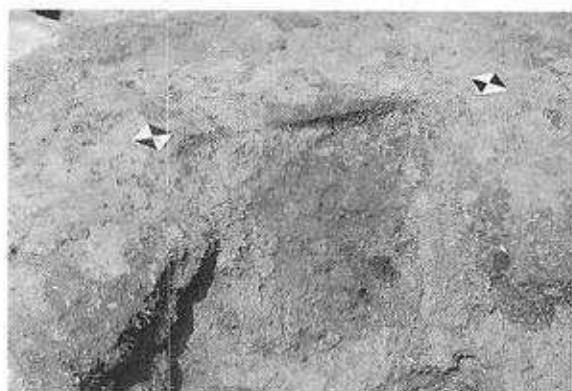
写真図版16 2号竖穴建物跡



3号竖穴建物跡 平面



3号竖穴建物跡・炉跡 断面



3号竖穴建物跡・炉跡 平面



3号竖穴建物跡・炉跡 断面



5号竖穴建物跡 平面



5号竖穴建物跡・炉跡 断面



作業風景



作業風景

写真図版17 3号・5号竖穴建物跡



4号竖穴建物跡 平面



4号竖穴建物跡・1号炉跡 平面



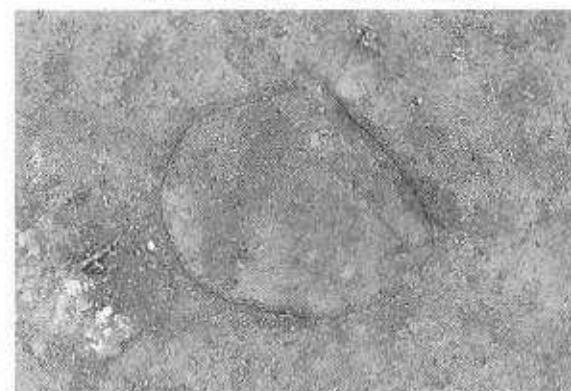
4号竖穴建物跡・1号炉跡 断面



4号竖穴建物跡・2号炉跡 断面



6号竖穴建物跡 平面



6号竖穴建物跡・1号炉跡 平面



6号竖穴建物跡・1号炉跡 断面



6号竖穴建物跡・2号炉跡 断面

写真図版18 4号・6号竖穴建物跡



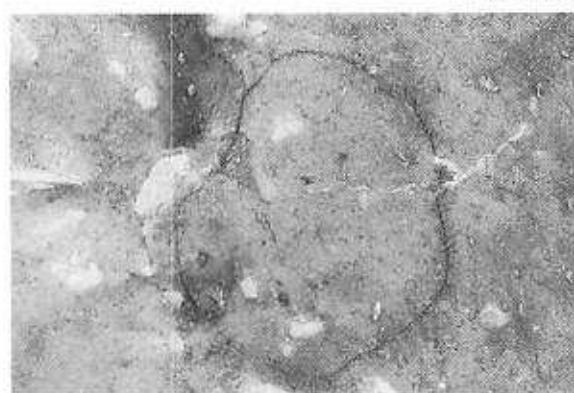
7号竪穴建物跡 平面



7号竪穴建物跡 断面



7号竪穴建物跡 断面



7号竪穴建物跡・1号炉跡 平面



7号竪穴建物跡・1号炉跡 断面

写真図版19 7号竪穴建物跡



1号焼土遺構 平面



1号焼土遺構 断面



2号焼土遺構 平面



2号焼土遺構 断面



3号焼土遺構 平面



3号焼土遺構 断面



4号焼土遺構 平面

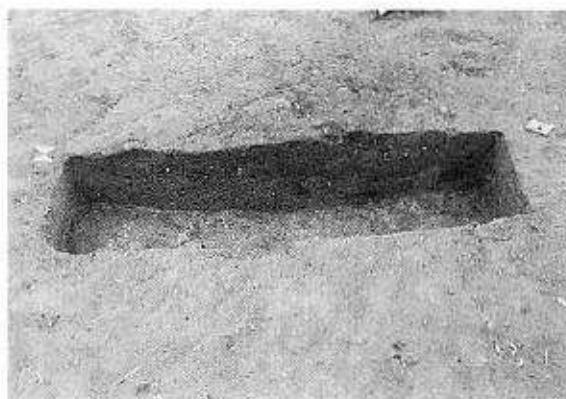


4号焼土遺構 断面

写真図版20 焼土遺構[1]



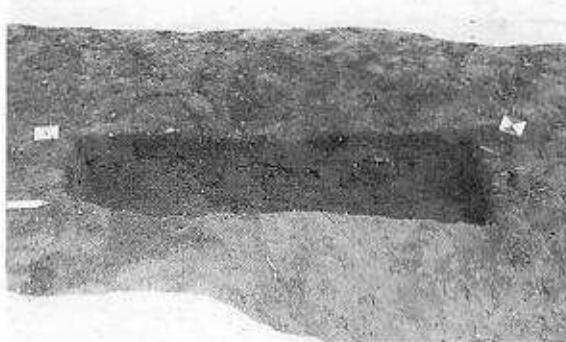
5号焼土遺構 平面



5号焼土遺構 断面



6号焼土遺構 平面



6号焼土遺構 断面



7号焼土遺構 平面



7号焼土遺構 断面



現地説明会の様子



現地説明会の様子

写真図版21 焼土遺構(2)



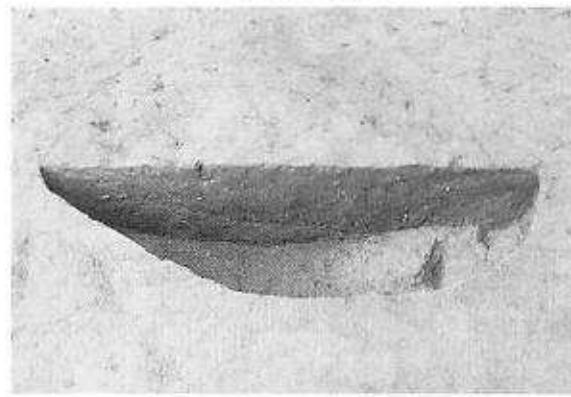
1号土坑 平面



1号土坑 断面



2号土坑 平面



2号土坑 断面



3号土坑 平面



3号土坑 断面



4号·5号土坑 平面

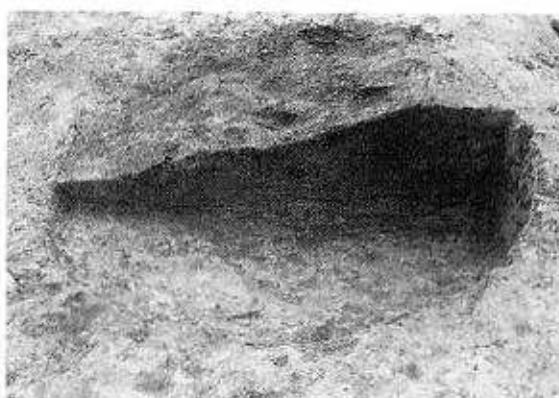


4号土坑 獣骨出土状况

写真图版22 土坑(1)



6号土坑 平面



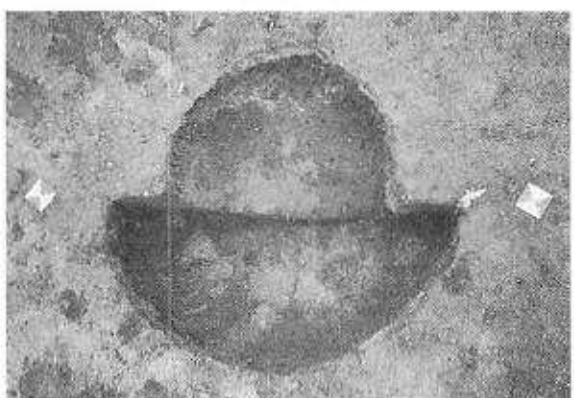
6号土坑 断面



7号土坑 平面



7号土坑 断面



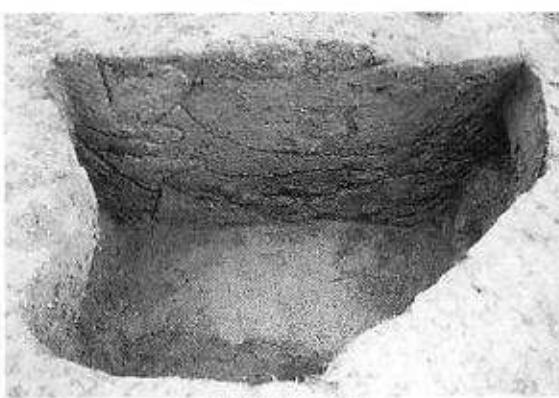
8号土坑 平面



8号土坑 断面



11号土坑 平面



11号土坑 断面

写真図版23 土坑(2)



14号土坑 平面



14号土坑 断面



15号土坑 平面



17号土坑 断面



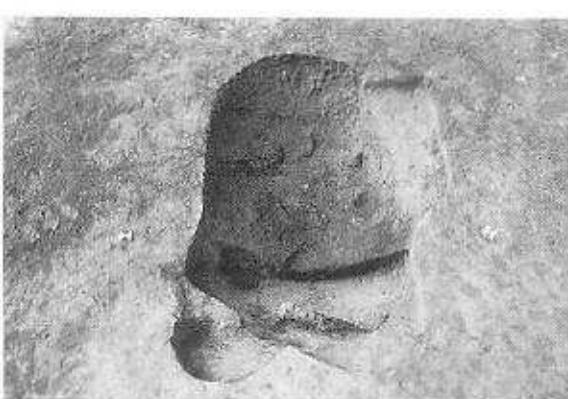
16号土坑 平面



16号土坑 断面



20号土坑 平面



20号土坑 炭化材出土状况

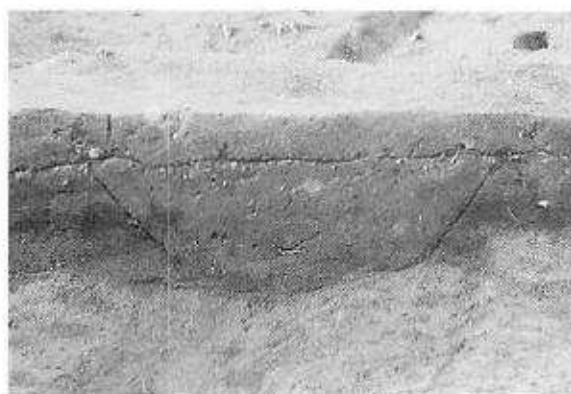
写真図版24 土坑(3)



4号溝状遺構 平面



5号溝状遺構 平面



7号溝状遺構 断面



7号溝状遺構 断面



7号溝状遺構 平面



6号溝状遺構 断面



6号溝状遺構 平面



6号溝状遺構 平面

写真図版25 溝状遺構



1号探掘坑 検出状況



1号探掘坑 平面



1号探掘坑 断面



1号探掘坑 断面



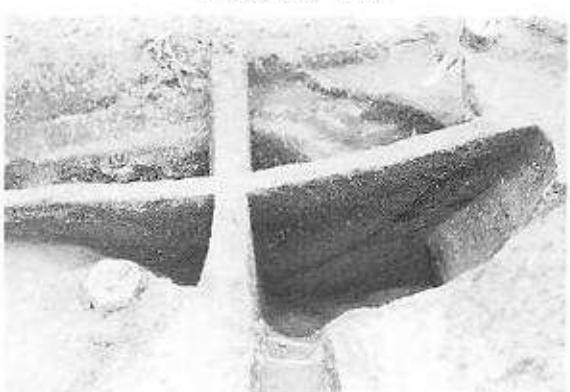
2号探掘坑 検出状況



2号探掘坑 平面

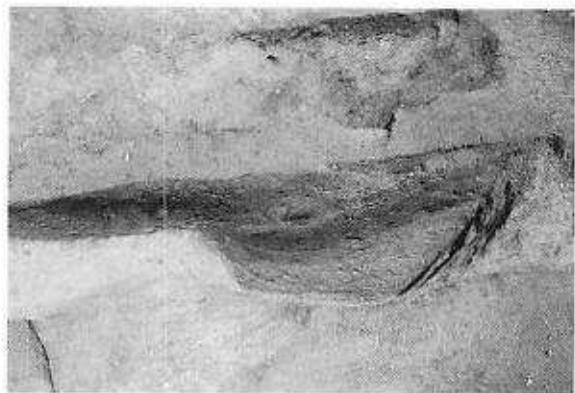


2号探掘坑 断面



2号探掘坑 断面

写真図版26 掘削坑(1)



3号探掘坑 断面



3号探掘坑 平面



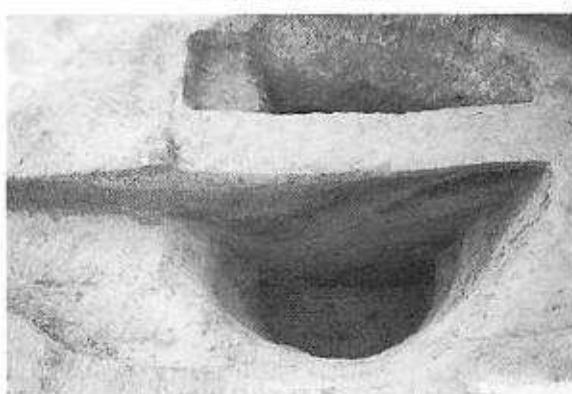
4号探掘坑 平面



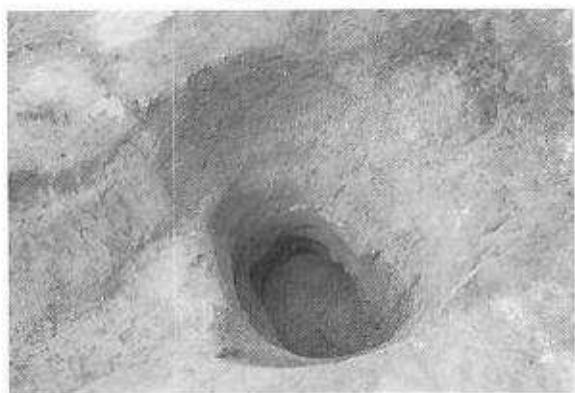
4号探掘坑 断面



5号探掘坑 平面



5号探掘坑 断面



6号探掘坑 平面



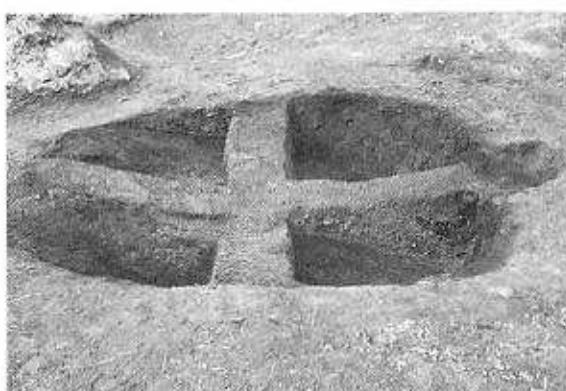
6号探掘坑 断面



1号炭窯跡 平面



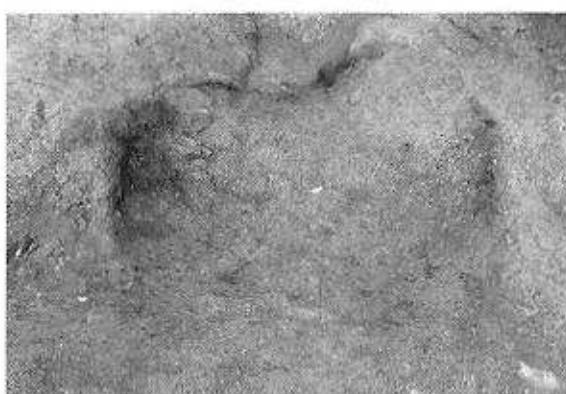
1号炭窯跡 断面



1号炭窯跡 断面



1号炭窯跡 断面



2号炭窯跡 検出状況



2号炭窯跡 平面



2号炭窯跡 断面



2号炭窯跡 断面

写真図版28 炭窯跡



1号集石遺構 平面



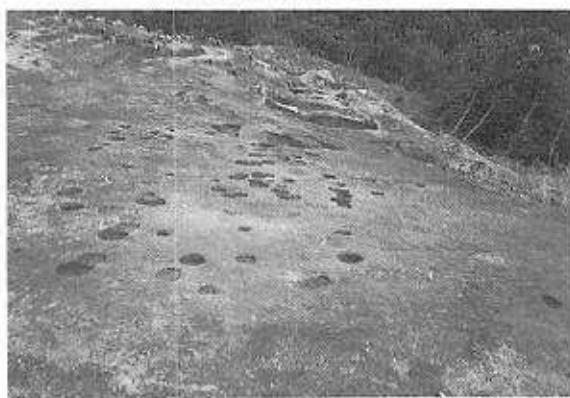
1号集石遺構 断面



2号配石遺構 平面



2号配石遺構 断面



5Bグリッド柱穴群 平面



山根中学校体験学習

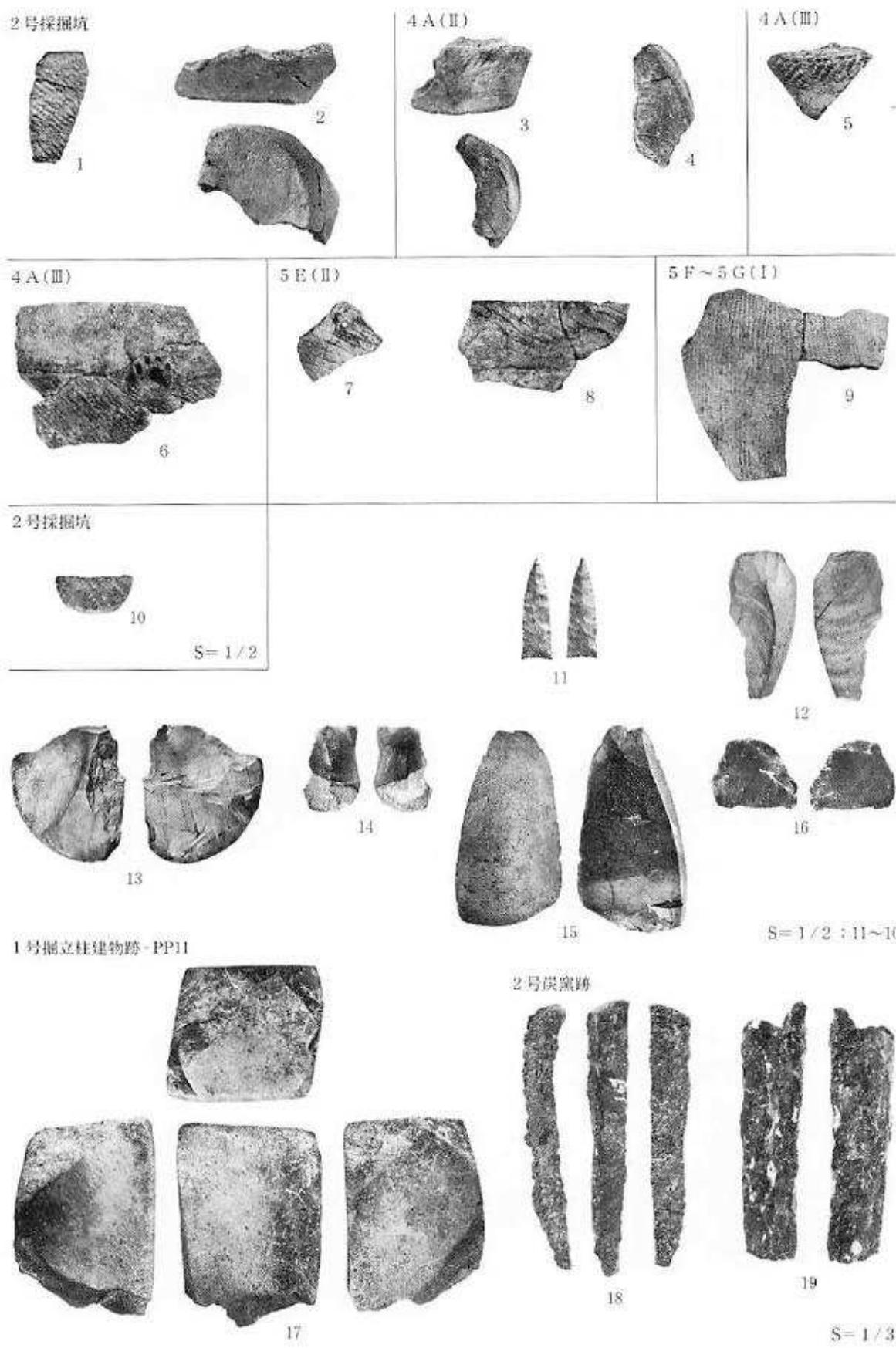


山根中学校体験学習

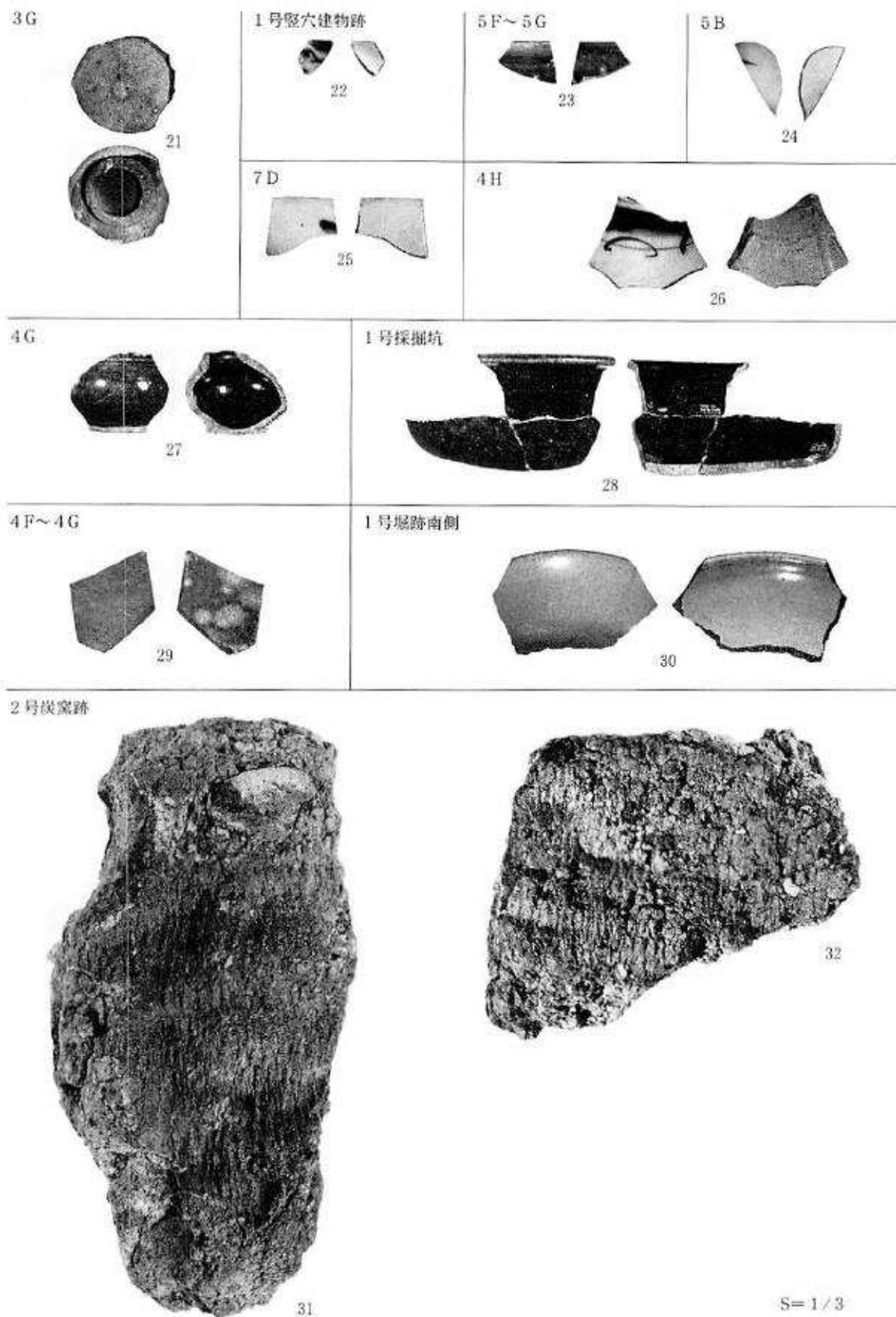


山根中学校体験学習

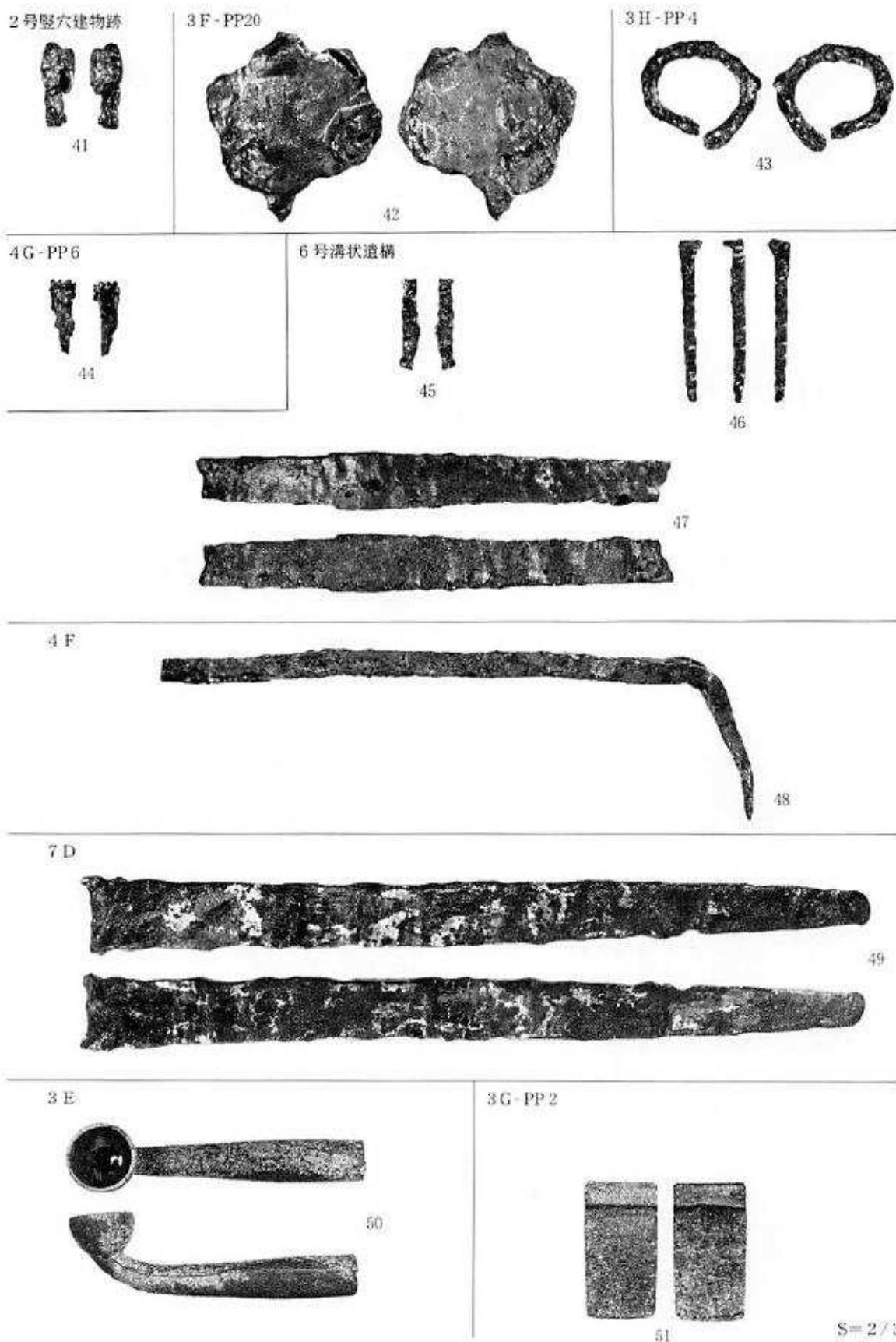
写真図版29 集石・配石遺構・柱穴群



写真図版30 土器・土製品・石器

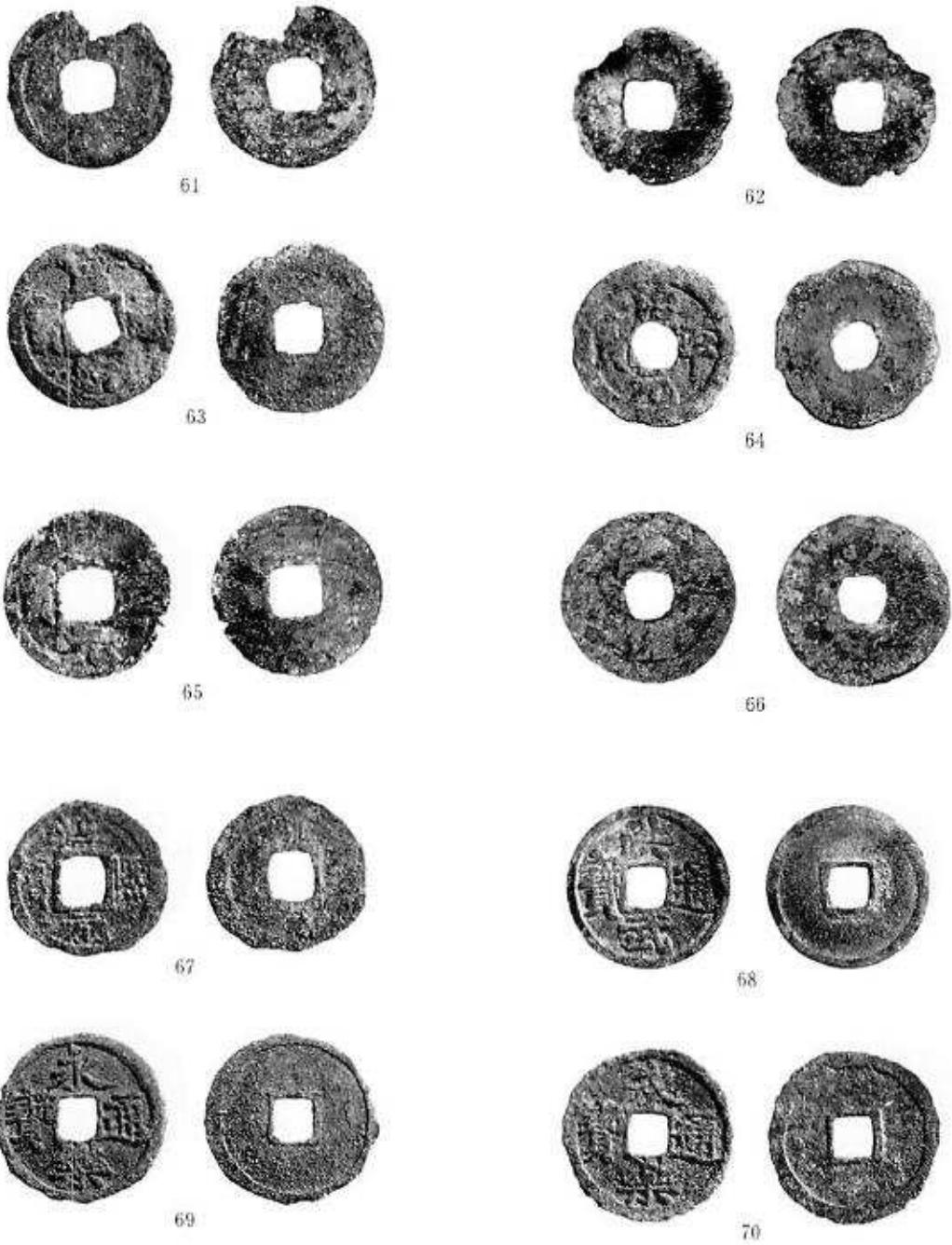


写真図版31 陶磁器・窯痕

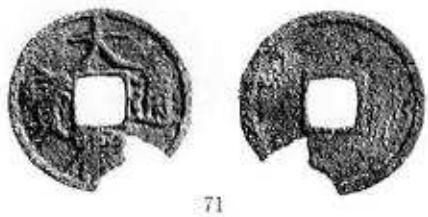


写真図版32 金属製品（鉄製品・銅製品）

2号掘跡



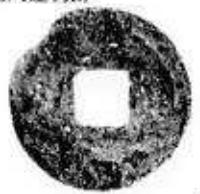
1号掘立柱建物跡 - PP16



S = 1 / 1

写真図版33 錢貨(1)

1号竪穴建物跡



73

72

2号竪穴建物跡



75

74

3号竪穴建物跡



77

76

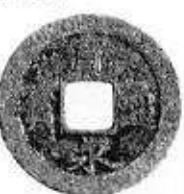
7号竪穴建物跡



79

78

2号配石遺構(1)



81

80



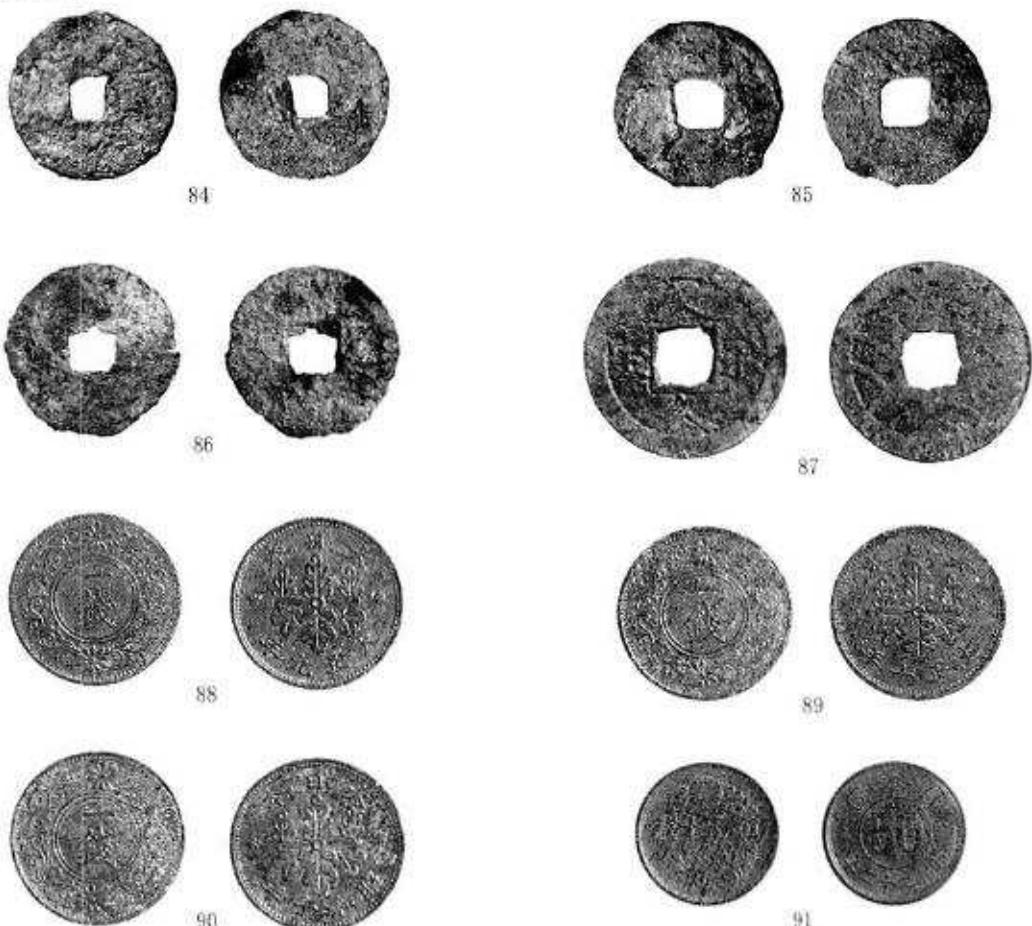
83

82

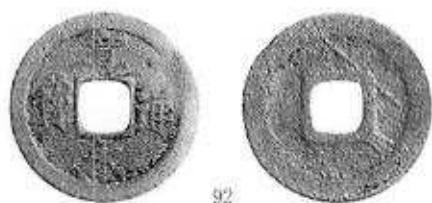
S=1/1

写真図版34 錢貨(2)

2号配石遺構(2)



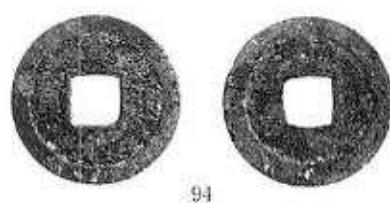
4 F



5 C



7 D



94

95



96



97

S=1/1

写真図版35 錢貨(3)

報告書抄録

ふりがな	やまねだてあとはくつちょうさほうこくしょ						
書名	山根館跡発掘調査報告書						
副書名	主要地方道久慈岩泉線改良工事関連遺跡発掘調査						
卷次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第390集						
編著者名	阿部勝則						
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001・9002						
発行年月日	西暦 2002年2月28日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまねだてあとはくつちょうさほうこくしょ 山根館跡	いわてけんくじし 岩手県久慈市 山根町字下戸頬第 ちわらほんぢ 6地割97番地11 ほか	JF68 -2228	40度 05分 3秒	141度 42分 41秒	20000417～ 2001102	9,000m ²	主要地方道 久慈岩泉線 改良工事関連 遺跡発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山根館跡	城館	縄文時代 中世	陥し穴状遺構	13基	土器(縄文・弥生)	9点	中世後半(15～16世紀) に築城され、機能した 館跡。 二重の空堀と土塁に象 徴される大規模な普請 の痕跡が残る。軍事的 性格の強い館跡(詰め の城)。
			堀跡	6条	土製品	1点	
			土塁	2基	陶磁器	10点	
			曲輪	1箇所	石器	9点	
			虎口	1箇所	金属製品	11点	
			掘立柱建物跡	1棟	錢貨	37点	
			竪穴建物跡	7棟	動物遺存体	6種	
			焼土造構	7基	※掲載点数		
			土坑	20基			
			溝状遺構	6条			
		柱穴状土坑	81基				
		採掘坑	6基				
		炭窯跡	2基				
集石・配石遺構	2基						
柱穴状土坑	124基						

平成13年度 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職 員】

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀
〔管理課〕			
管理課長	並沢正吾	嘱託	高橋照雄
管理課長補佐	山崎善光	"	佐々木光重
管理課長補佐	山岸直美	"	加藤美代子
主査	立花多加志	"	湯沢邦子
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	
調査第一課長	佐々木勝文	調査第二課長	高橋與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木清義	調査第二課長補佐	中川重紀
調査第一課長補佐	高橋透	文化財専門員	佐知子澄
文化財専門員	小山内文介	文化財調査員	眞一徹
文化財調査員	中田森登	"	宏
"	飯赤充	"	夫晃
"	吉田義一	"	一之彦
"	石田大二郎	"	太郎
"	原真信	"	昭浩
"	佐々木健	"	直正
"	笠原一郎	"	勝勝
"	金則	"	(阿)
"	野松進	"	部
"	瀬居也	"	澤木
"	居正	"	中西
"	千代	"	八
"	星幸	"	阿
"	佐佐	"	澤木
"	星村	"	部
"	佐菊	"	澤木
"	星本	"	中西
"	佐高	"	八
"	星島	"	阿
期限付調査員	佐瀬拓郎	期限付調査員	川田徹
"	瀬敏治	"	里和
"	瀬征美	"	美津子
"	瀬卓敦	"	麻紀子
"	瀬賢介	"	智寛
"	瀬晋	"	
"	瀬由美	"	
"	瀬惠造	"	
"	瀬ひかり	"	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第390集

山根館跡発掘調査報告書

主要地方道久慈岩泉線改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成14年2月21日

発行 平成14年2月28日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

電話 (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印刷 永代印刷株式会社

〒020-0811 盛岡市川町23-10 盛岡中央工業団地

電話 (019) 623-0111

FAX (019) 625-5454

附図 山根館跡現況地形図

